

姬路市

豆腐町遺跡Ⅱ

- JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書 V -



2011 (平成 23) 年 3 月 兵 庫 県 教 育 委 員 会

姬路市

豆腐町遺跡Ⅱ

- JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書 V -

2011 (平成 23) 年 3 月 兵 庫 県 教 育 委 員 会

空中写真 巻頭図版 1



南上空から



東上空から

巻頭図版 2 空中写真



南西上空から



西上空から

空中写真 巻頭図版 3



北東上空から



I区(北西から)

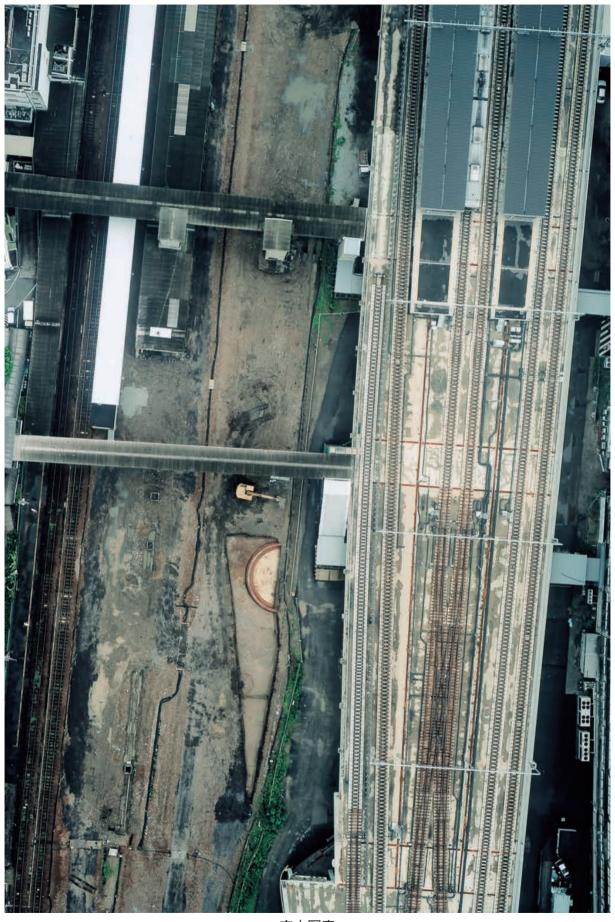
巻頭図版 4 空中写真



I区 (西から)



Ⅱ区 (北東から)



空中写真

巻頭図版6 ΙX





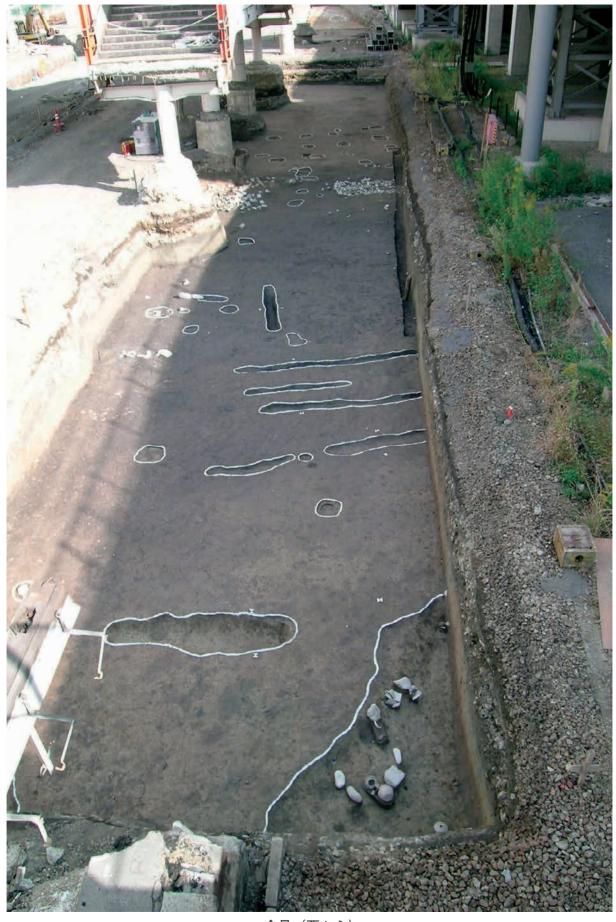


転車台坑全景

転車台坑の煉瓦積



転車台坑



全景 (西から)

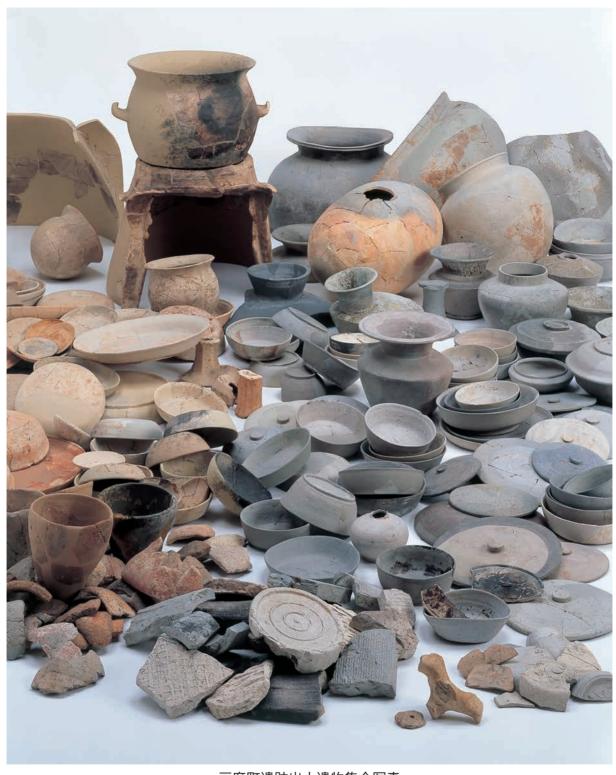
Ⅱ-1区 巻頭図版 9



南壁と南側石敷



SE01 全景(南から)



豆腐町遺跡出土遺物集合写真



SE01 出土遺物



SK02 出土遺物



石敷出土遺物



製塩土器



煮沸土器



土師器皿(灯明芯痕跡)



墨書土器



漆付着土器

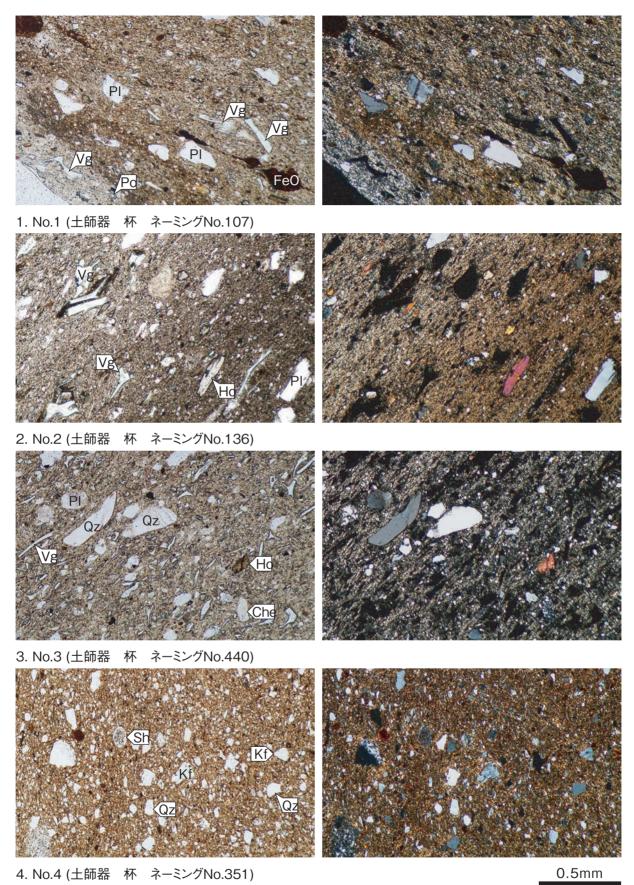


豆腐町遺跡出土遺物集合写真



豆腐町遺跡出土須恵器集合写真

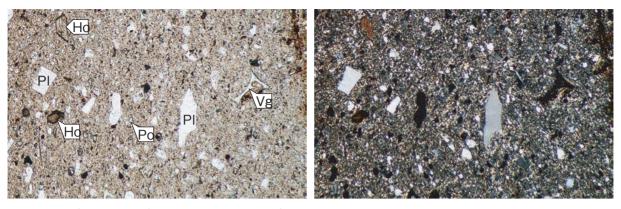
巻頭図版 16 胎土薄片(1)



Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Ho:角閃石.Che:チャート.Sh:頁岩.

Vg:火山ガラス.FeO:酸化鉄.Po:植物珪酸体.

巻頭図版 17 胎土薄片(2)



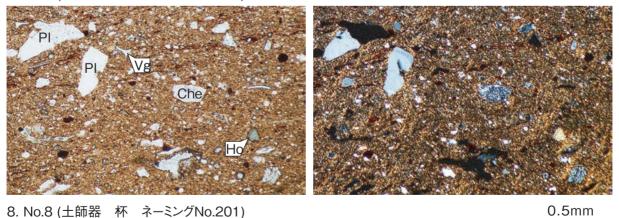
杯 実測No.116 ネーミングNo.435) 5. No.5 (土師器



6. No.6 (土師器 杯 実測No.155 ネーミングNo.32)



7. No.7 (土師器 ネーミングNo.442)

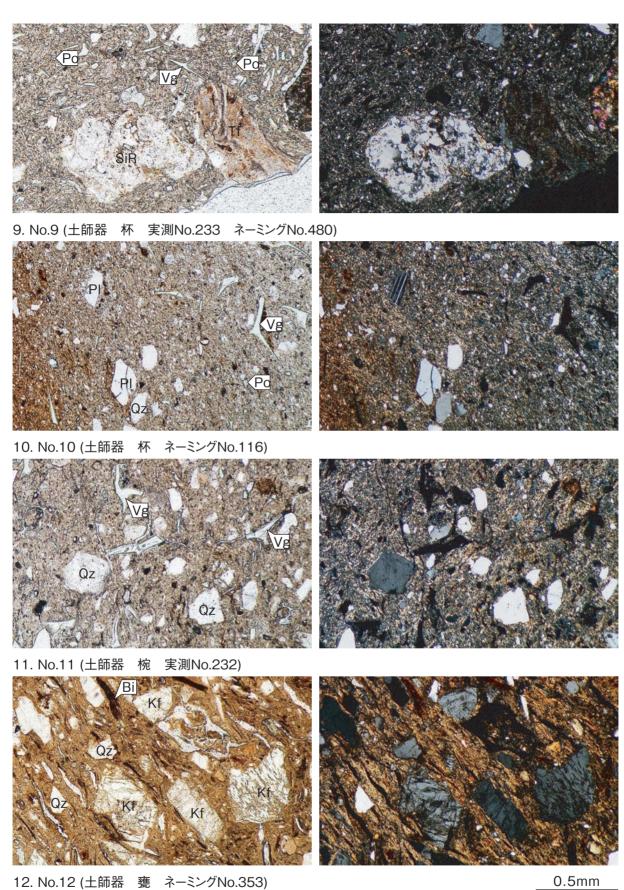


8. No.8 (土師器 杯 ネーミングNo.201)

Qz:石英.Kf:カリ長石.PI:斜長石.Ho:角閃石.Che:チャート.Tf:凝灰岩.

P-Qz:多結晶石英.Vg:火山ガラス.Po:植物珪酸体.

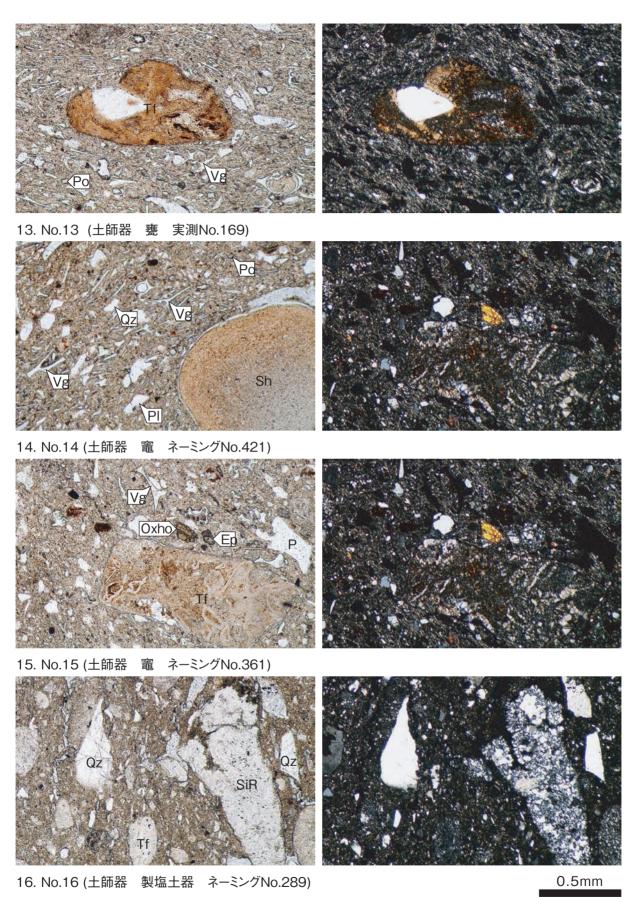
巻頭図版 18 胎土薄片(3)



Qz:石英.Kf:カリ長石.PI:斜長石.Bi:黒雲母.Tf:凝灰岩.SiR:珪化岩.Vg:火山ガラス.

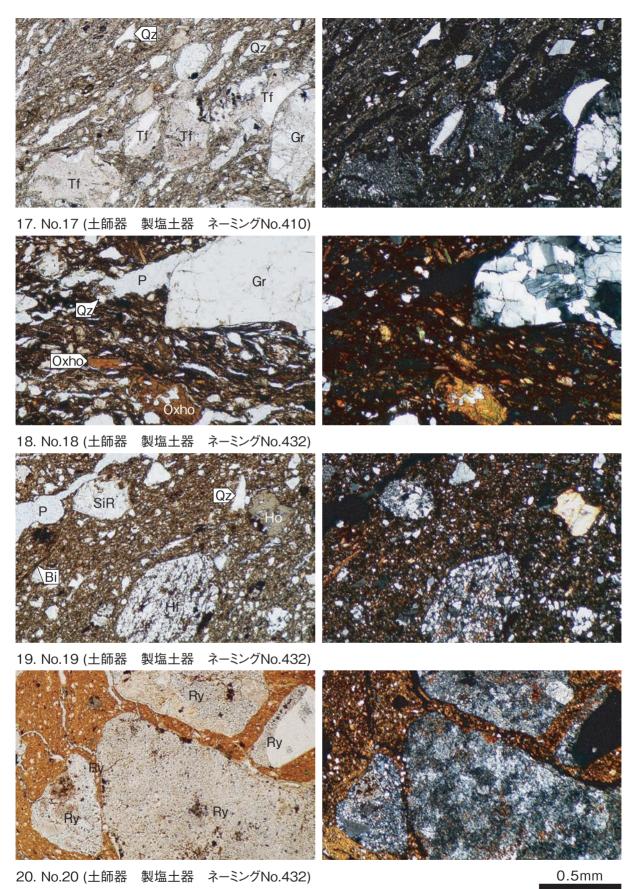
Po:植物珪酸体.

胎土薄片(4) 巻頭図版 19



Qz:石英.PI:斜長石.Oxho:酸化角閃石.Ep:緑レン石.Sh:頁岩.Tf:凝灰岩.SiR:珪化岩. Vg:火山ガラス.Po:植物珪酸体.P:孔隙.

巻頭図版 20 胎土薄片(5)



Qz:石英.Ho:角閃石.Oxho:酸化角閃石.Bi:黒雲母.Tf:凝灰岩.Ry:流紋岩.Gr:花崗岩. Hf:ホルンフェルス.SiR:珪化岩.P:孔隙.

例 言

- 1. 本書は兵庫県姫路市豆腐町・南畝町(現駅前町)に所在する豆腐町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 豆腐町遺跡の調査は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所が計画・施工するJR山陽本線等連続立体交差 事業に伴うものである。事業の進捗に伴って平成10年度から継続的に実施しているもので、今回の調査以前につい ては2007年3月に「豆腐町遺跡 I 」として兵庫県教育委員会から刊行している。本報告は書名を「豆腐町遺跡 II 」と した。
- 3. 調査は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県立考古博物館が行った。
- 4. 確認調査は平成18年度に山田清朝・鈴木啓二が担当した。本発掘調査も平成18年度に渡辺 昇・長濱誠司が担当した。
- 5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用し、水準は兵庫県姫路土木事務所設定の3級基準点を使用した。
- 6. 全体図・I 区転車台ならびに基準点測量は㈱かんこうに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。
- 7. 遺構写真は調査員が撮影した。空中写真は㈱かんこうに依頼して撮影したものを使用した。
- 8. 整理作業は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、平成20 ~ 22年度に兵庫県立考古博物館で行った。
- 9. 執筆は本文目次の通りで、編集は前山三枝子の協力を得て渡辺が行った。
- 10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館(加古郡播磨町大中1-1-1)ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館(明石市魚住町清水立合池の下630-1)に保管している。ご活用ください。
- 11. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。 (敬称略・順不同)

姫路市教育委員会・兵庫県立歴史博物館・小西伸彦・秋枝 芳・大谷輝彦・小柴治子・中川 猛



本文目次

例言

第Ⅰ章	はじめに	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 既往調査の結果	1
	第3節 本発掘調査の経過	6
	第4節 整理作業の経過	7
第Ⅱ章	位置と環境	8
	第1節 地理的環境	8
	第2節 歴史的環境 (渡辺)	8
	第3節 姫路駅の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12
第Ⅲ章	I 区の調査結果	14
	第1節 概要	14
	第2節 遺構	14
	第3節 転車台坑の調査	14
	第4節 煉瓦	20
	第5節 転車台についての検討	26
	第6節 姫路機関庫の変遷と背景	31
第Ⅳ章	Ⅱ区の調査結果	37
		36
	第2節 Ⅱ-1区の遺構	36
	第3節 Ⅱ-2区の遺構	40
	第4節 遺物	41
第Ⅴ章	科学分析	70
	第1節 豆腐町遺跡Ⅱ出土遺物の自然科学分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	70
	第2節 豆腐町遺跡における放射性炭素年代 (株式会社加速器分析研究所)	86
第Ⅵ章	おわりに	86

挿 図 目 次

図1	兵庫県・姫路市・豆腐町遺跡の位置3	図13	側壁掘方内杭痕検出状況	17
図2	姫路駅周辺の主な遺跡と豆腐町遺跡調査地点 … 4	図14	煉瓦敷床面の枕木痕	18
図3	豆腐町遺跡調査位置図 … 5	図15	転車台坑使用煉瓦の刻印	23
図4	調査風景 6	図16	転車台周辺採集煉瓦の刻印	25
図5	調査風景 6	図17	中央支承台設置推定復原図	29
図6	整理作業風景 7	図18	円形軌条枕木推定復元図	30
図7	豆腐町遺跡の位置と周辺の遺跡 9	図19	石器·鉄器実測図 ······	43
図8	壇場山古墳・山之越古墳11	図20	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 … 77~8	30
図9	播磨国分寺12	図21	胎土中の砂の粒径組成 77~8	30
図10	明治40年頃の姫路駅と調査区の位置13	図22	砕屑物・基質・孔隙の割合	31
図11	I 区の遺構 15	図23	暦年較正年代グラフ	38
図12	I 区空中写真 ······16			
	*			
	衣	目次		
表1	豆腐町遺跡調査一覧表 2	表8	豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 … 44~6	36
表2	豆腐町遺跡周辺の遺跡10	表9	樹種同定結果	70
表3	転車台坑使用煉瓦観察表22	表10	胎土分析試料一覧および胎土分類"	71
表4	県内所在山陽鉄道の構造物26	表11	薄片観察結果······ 73~7	76
表5	発掘された転車台坑27	表12	試料一覧	37
表6	40呎転車台の定規28	表13	曆年較正年代 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	37
表 7	出土木器計測表			

図版目次

図版 1	調査区配置図	図版29	Ⅱ-1区遺構出土遺物実測図(4)
図版2	I 区平面図	図版30	Ⅱ-1区遺構出土遺物実測図(5)
図版3	I 区南壁断面図	図版31	Ⅱ-1区遺構出土遺物実測図(6)
図版4	I 区転車台坑実測図	図版32	Ⅱ-1区遺構出土遺物実測図(7)
図版5	I 区転車台模式図	図版33	Ⅱ-1区遺構出土遺物実測図(8)
図版6	I 区転車台坑中央支承台・集水枡実測図	図版34	Ⅱ-2区遺構出土遺物実測図(9)
図版7	Ⅱ-1区平面図・西壁土層断面図	図版35	Ⅱ-1区流路出土遺物実測図(1)
図版8	Ⅱ - 1 区上層水田実測図・中央部平面図	図版36	Ⅱ-1区流路出土遺物実測図(2)
図版9	Ⅱ-1区南壁土層断面図	図版37	Ⅱ-1区流路出土遺物実測図(3)
図版10	Ⅱ - 1 区SB01実測図	図版38	Ⅱ - 1 区流路出土遺物実測図(4)・包含層出土遺物実測図(1)
図版11	Ⅱ – 1 区SB02·SA01·SA02実測図	図版39	包含層出土遺物実測図(2)
図版12	Ⅱ – 1 区北側石敷・SE01・SE03実測図	図版40	包含層出土遺物実測図(3)
図版13	Ⅱ - 1 区南側石敷・SE02実測図	図版41	包含層出土遺物実測図(4)
図版14	Ⅱ - 1 区南側石敷南壁土層断面図・SE02実測図	図版42	包含層出土遺物実測図(5)
図版15	$II - 1 \boxtimes SK01 \cdot SK02$	図版43	包含層出土遺物実測図(6)
図版16	Ⅱ - 1 区SD01 ~ SD05実測図	図版44	包含層出土遺物実測図(7)
図版17	Ⅱ - 2 区平面図・遺構実測図(1)	図版45	包含層出土遺物実測図(8)
図版18	Ⅱ-2区北壁土層断面図	図版46	包含層出土遺物実測図(9)
図版19	Ⅱ - 2 区SX06実測図	図版47	包含層出土遺物実測図(10)
図版20	I 区出土煉瓦(1)	図版48	包含層出土遺物実測図(11)
図版21	I 区出土煉瓦(2)	図版49	包含層出土遺物実測図(12)
図版22	I 区出土煉瓦(3)	図版50	包含層出土製塩土器実測図
図版23	I 区出土煉瓦(4)	図版51	包含層出土瓦実測図(1)
図版24	I 区出土煉瓦(5)	図版52	包含層出土瓦実測図(2)
図版25	I 区出土土管・鉄器実測図	図版53	包含層出土木器実測図(1)
図版26	Ⅱ - 1 区遺構出土遺物実測図(1)	図版54	包含層出土木器実測図(2)
図版27	Ⅱ - 1 区遺構出土遺物実測図(2)	図版55	包含層出土木器実測図(3)
図版28	Ⅱ-1区遺構出土遺物実測図(3)	図版56	包含層出土木器実測図(4)

写真図版目次

巻頭図版 1	上	空中写真(南上空から)	写真図版 5	上左	I区 転車台坑 駅構内盛土と掘方断面(北から)		
	下	空中写真(東上空から)	V MINIO	上右	I区 転車台坑 側壁掘方断面(南半部)(東から)		
巻頭図版 2	上	空中写真(南西上空から)		中上	I区 転車台坑 側壁掘方断面(北半部)(東から)		
	下	空中写真(西上空から)		中下左	I区 転車台坑 側壁掘方断面(東半部)(南から)		
巻頭図版3	上	空中写真(北東上空から)		中下右	I区 転車台坑 側壁掘方断面(西半部)(北から)		
	下	I 区空中写真(北西から)		下左	I区 転車台坑 側壁基礎の杭痕(1)		
巻頭図版 4	上	I 区空中写真(西から)		下右	I 区 転車台坑 側壁基礎の杭痕(2)		
	下	Ⅱ区空中写真(北東から)	写真図版 6	上左	I区 転車台坑 側壁内面(西から)		
巻頭図版5		I 区空中写真		上右	I区 転車台坑 側壁組積の状況(北から)		
巻頭図版 6		I 区全景		中上左	I区 転車台坑 側壁内面の煉瓦組積(南から)		
巻頭図版7	上左	I 区転車台坑全景		中上右	I区 転車台坑 側壁外面の煉瓦組積 (東から)		
	上右	I 区転車台坑の煉瓦積		中下左	I区 転車台坑 側壁最下段の煉瓦積(1)		
	下	I区転車台坑		中下右	I区 転車台坑 側壁外面の加工された煉瓦		
巻頭図版8		Ⅱ-1区全景(西から)		下左	I区 転車台坑 側壁最下段の煉瓦積(2)		
巻頭図版 9	上	Ⅱ-1区南壁と南側石敷		下右	I 区 転車台坑 煉瓦平面加工の状況		
	下	Ⅱ-1区SE01全景(南から)	写真図版7	上左	I区 転車台坑 東側床面ボルト検出状況(北から)		
巻頭図版10		豆腐町遺跡出土遺物集合写真		上右	I区 転車台坑 西側床面ボルト検出状況 (東から)		
巻頭図版11	上	SE01出土遺物		中上左	I区 転車台坑 北東部床面ボルト検出状況 (南から)		
	下	SK02出土遺物		中上右	I区 転車台坑 ボルト1設置状況		
巻頭図版12	上	石敷出土遺物		中下左	I区 転車台坑 ボルト1固定状況(1)		
	下	製塩土器		中下右	I区 転車台坑 ボルト1固定状況(2)		
巻頭図版13	上	煮沸土器		下左	I 区 転車台坑 東側ボルト2設置状況(1)		
	下	土師器皿(灯明芯痕跡)		下右	I 区 転車台坑 東側ボルト2設置状況(2)		
巻頭図版14	上	墨書土器	写真図版8	上左	I区 転車台坑 床面北西部枕木の痕跡(南から)		
	下	漆付着土器		上右	I区 転車台坑 床面南東部枕木の痕跡(南から)		
巻頭図版15	上	豆腐町遺跡出土遺物集合写真		下	I区 転車台坑 枕木の痕跡とボルト1 (東から)		
	下	豆腐町遺跡出土須恵器集合写真	写真図版 9	上左	I区 転車台坑 中央支承台 検出状況(1)(東から)		
巻頭図版16		胎土薄片(1)		上右上	I区 転車台坑 中央支承台 検出状況(2)		
巻頭図版17		胎土薄片 (2)		上右下	I 区 転車台坑 中央支承台上面(東から)		
巻頭図版18		胎土薄片(3)		中左	I区 転車台坑 中央支承台基礎検出状況(北から)		
巻頭図版19		胎土薄片(4)		中右	I区 転車台坑 中央支承台西側掘方断面(北から)		
巻頭図版20		胎土薄片(5)		下左	I区 転車台坑 中央支承台上面加工の状況		
写真図版1		I 区 姫路駅と調査区		下右	I区 転車台坑 中央支承台基礎(台石除去後)		
写真図版2	上	I 区 全景 (西から)	写真図版10	上左	I区 転車台坑 溜枡の位置 (東から)		
	下左	I区 南壁断面(北西から)		上右	I区 転車台坑 溜枡全景(北東から)		
	下右	I区 SD02 (西から)		中上左	I区 転車台坑 溜枡排水口(北東から)		
写真図版3	上	I区 転車台坑 北半部(1)(東から)		中上右	I区 転車台坑 側壁部土管設置状況(北東から)		
	下	I区 転車台坑 北半部(2)(西から)		中下	I区 転車台坑 床面断割断面(北半部)(西から)		
写真図版4	上	I区 転車台坑 北半部(3)(北から)		下	I区 転車台坑 床面断割断面(西半部)(北から)		
	下	I区 転車台坑 完掘状況(東から)					

```
写真図版11 上
            I区 転車台坑 刻印煉瓦(刻印1類)
                                   写真図版24 上
                                               Ⅱ-1区 SE01検出状況(南から)
            I区 転車台坑 刻印煉瓦(刻印3類)
                                           下
                                               Ⅱ-1区 SE01全景とSE03検出状況(南から)
       中上
       中下
            I区 転車台坑 櫛描煉瓦
                                               Ⅱ-1区 SE01 (南から)
                                   写真図版25
                                          上
                                               II-1区 SE01 (北から)
       下
            I 区 転車台坑 調查風景
                                           中
写真図版12 上
            Ⅱ-1区 全景(西から)
                                           下
                                               Ⅱ-1区 SE01土器出土状態
       下
            Ⅱ-1区 全景 (東から)
                                   写真図版26
                                          上
                                               Ⅱ-1区 SE01断ち割り
写真図版13 上
            Ⅱ-1区 西半全景(東から)
                                           中
                                               Ⅱ-1区 SE01断ち割り
       下左上 Ⅱ-1区 第1面水田(西から)
                                           下
                                               Ⅱ-1区 SE01調査風景
       下右上 Ⅱ-1区 第1面水田(西から)
                                          F.
                                               Ⅱ-1区 SE03 (南から)
                                   写真図版27
       下左下 Ⅱ-1区 調査風景
                                           下左上 II-1区 SE03 (南から)
       下右下 Ⅱ-1区 調査風景
                                          下左下 Ⅱ-1区 調査風景
            Ⅱ-1区 中央部全景(南東から)
写真図版14 上
                                          下右上 Ⅱ-1区 SE03断ち割り
       下
            Ⅱ-1区 SB01 (南東から)
                                          下右下 Ⅱ-1区 調査風景
写真図版15
            Ⅱ-1区 中央部(SB01·02、SA01·北から)
                                   写真図版28 上
                                               II-1区 SD01~SD04(北から)
            Ⅱ-1区 SB01 (南から)
                                           下左上 II-1区 SD02アゼ (北から)
写真図版16 上
       下
            Ⅱ-1区 SB01·SB02 (北から)
                                          下左下 Ⅱ-1区 SD05アゼ (東から)
写真図版17 上左上 Ⅱ-1区 P6
                                           下右上 II-1区 SD03アゼ (北から)
                                           下右下 Ⅱ-1区 SD03土器出土状態(東から)
       上右上 Ⅱ-1区 P7
       上左下 Ⅱ-1区 P8
                                   写真図版29 上左上 II-1区 SD04アゼ (北から)
       上右下 Ⅱ-1区 P30
                                          上右上 Ⅱ-1区 SD04土器出土状態(北から)
       下左上 II-1区 P32
                                          上右下 Ⅱ-1区 SD05土器出土状態(西から)
       下右上 II-1区 P35
                                          下左上 II-1区 SK01 (北から)
       下左下 Ⅱ-1区 調查風景
                                           下左下 Ⅱ-1区 SK01アゼ (北から)
写真図版18 上左上 II-1区 P5 (南から)
                                           下右上 Ⅱ-1区 SK01上層土器出土状態
       上左下 Ⅱ-1区 P5 (南から)
                                          下右下 Ⅱ-1区 SK01土器出土状態(南から)
       上右上 Ⅱ-1区 P15 (南から)
                                   写真図版30 上
                                               Ⅱ-1区 SK01·02 (北から)
       上右下 Ⅱ-1区 P36 (南から)
                                          下左上 II-1区 SK02 (北から)
       下
            Ⅱ-1区 南壁と南側石敷
                                          下左下 Ⅱ-1区 SK02 (北西から)
写真図版19 上
            Ⅱ-1区 南側石敷と北側石敷·SA02(北から)
                                          下右上 Ⅱ-1区 SK02土器出土状態
       下
            Ⅱ - 1 区 南側石敷と北側石敷・SA02 (南から)
                                           下右下 Ⅱ-1区 SK02断面(東から)
            Ⅱ-1区 南壁と南側石敷
                                   写真図版31 上左上 II-1区 SK03・04 (北から)
写真図版20
      上
       中
            Ⅱ-1区 南側石敷(南から)
                                          上左下 Ⅱ-1区 SK03断面 (東から)
       下
            Ⅱ-1区 南側石敷(北から)
                                          上右上 Ⅱ-1区 調査風景
写真図版21
       上
            Ⅱ-1区 南側石敷(東から)
                                          上右下 Ⅱ-1区 調査風景
       由
            Ⅱ-1区 南側石敷(北から)
                                          下左上 Ⅱ-1区 包含層土器出土状態
       下
            Ⅱ-1区 SE02上面
                                          下右上 Ⅱ-1区 包含層土器出土状態
写真図版22
       上
            Ⅱ-1区 SE02 (東から)
                                           下右下 Ⅱ-1区 包含層土器出土状態
       中
            II-1区 SE02 (北から)
                                   写真図版32
                                               Ⅱ-2区 全景 (東から)
       下
            II-1区 SE02 (北から)
                                   写真図版33 上
                                               Ⅱ-2区 全景(東から)
写真図版23 上左上 Ⅱ-1区 SE02下層集石
                                          下
                                               Ⅱ-2区 全景(西から)
       上右上 Ⅱ-1区 SE02噴砂
       下
            Ⅱ-1区 北側石敷(北から)
```

写真図版34	上	Ⅱ-2区 北壁 (南東から)	写真図版46	SK01·02出土遺物
	下左上	Ⅱ-2区 調査区から北東方向	写真図版47	SE01出土遺物
	下左下	Ⅱ-2区 調査区から北東方向	写真図版48	SE01 ~ 03・北側石敷出土遺物
	下右上	Ⅱ-2区 調査区から東方向	写真図版49	北側石敷出土遺物
	下右下	Ⅱ-2区 調査風景	写真図版50	北側石敷出土遺物
写真図版35	上	Ⅱ-2区 東端遺構(南西から)	写真図版51	北側石敷・南側石敷出土遺物
	下左上	II-2区 SD01 (南から)	写真図版52	SX01 ~ 03出土遺物
	下左下	II-2区 SK03 (東から)	写真図版53	流路出土遺物(1)
	下右上	II-2区 SK01 (南から)	写真図版54	流路出土遺物(2)
	下右下	Ⅱ-2区 SK03·SX06 (南から)	写真図版55	流路出土遺物(3)·包含層出土遺物(1)
写真図版36	上	Ⅱ-2区 調査区西半 (南東から)	写真図版56	包含層出土遺物 (2)
	下左上	II-2区 SX01 (南から)	写真図版57	包含層出土遺物(3)
	下左下	II-2区 SX01 (南から)	写真図版58	包含層出土遺物(4)
	下右上	II-2区 SX02 (南から)	写真図版59	包含層出土遺物(5)
	下右下	II-2区 SX02 (南から)	写真図版60	包含層出土遺物(6)
写真図版37	上左	II-2区 SX03 (南から)	写真図版61	包含層出土遺物(7)
	上右	II-2区 SX05 (南から)	写真図版62	包含層出土遺物(8)
	中	II - 2区 SX06 (北から)	写真図版63	包含層出土遺物(9)
	下左	II - 2区 SX06 (北から)	写真図版64	包含層出土遺物(10)
	下右	II-2区 SX06 (南から)	写真図版65	包含層出土遺物(11)
写真図版38		I区 転車台 煉瓦 (刻印1類)	写真図版66	包含層出土製塩土器
写真図版39		I区 転車台 煉瓦(刻印2類·櫛描1類)	写真図版67	出土瓦 (1)
写真図版40		I 区 転車台 煉瓦(櫛描1·2類)	写真図版68	出土瓦 (2)
写真図版41		I区 転車台 煉瓦 (櫛描2類)	写真図版69	出土瓦 (3)
写真図版42		I区 転車台 煉瓦(刻印3類·その他)	写真図版70	出土木器(1)
写真図版43		I区 刻印1類 刻印2類	写真図版71	出土木器(2)
		転車台周辺採集煉瓦 刻印	写真図版72	出土木器(3)
写真図版44		SA·SP·SD01~04·SX06出土遺物	写真図版73	出土石器・鉄器・土管
写真図版45		SD04·05、SK01·02出土遺物	写真図版74	木材

第 I 章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

特別史跡姫路城跡は播磨国を治める居城として構築されたもので、姫山を中心に城郭が並ぶ平山城である。その南側一帯に城下町が広がっている。現在の姫路駅北側に外堀が存在し、そこまで城下町が広がり、その南側には町屋があった。江戸時代には当然姫路城を中心とした町割り・都市計画がなされていたが、近代になって外堀が埋められ、鉄道・自動車道整備が進められることになり、鉄道敷設と道路整備が行われる。

鉄道は兵庫から姫路まで開通し、さらに西に延び山陽本線となり、さらに播但線・姫新線や現在の山陽電鉄も敷設される。当然平面交差しており、姫路市街地の南側に大きな南北方向の障壁となっている。南北方向には旭橋と大将軍橋によって、線路と道路が立体交差して通っていたが慢性的な交通渋滞になっていた。それを解消するために高架事業が計画された。

調査は、すべて兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所から調査依頼があり、平成7年度から継続的に調査を行っている。調査は兵庫県教育委員会が調査主体となり、埋蔵文化財調査事務所(組織の改編により平成19年度から兵庫県立考古博物館)が担当した。調査年度や調査地区・担当者は表1の通りである。

第1期工事として山陽本線の高架工事部分の調査を終了し、整理作業も平成18年度に「豆腐町遺跡 I」を刊行して作業を終了している。引き続き姫新線高架部分について調査を平成18年度に実施した。 その成果が本書であり、「豆腐町遺跡 II」とする。

第2節 既往調査の結果

調査は埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、5カ年にわたって9570㎡の調査を行った。その結果、弥生時代から平安時代にかけての官衙的な遺跡と中世の集落跡、近世城下町と近代鉄道の遺構が検出された。東からA~E区に分けている。近代になると鉄道が敷設され、その関連の遺構が全域で見られる。鉄道前は全体に水田であったようである。

A区は東端の調査区で、今回調査区のⅡ区に接している。旧河道SR01も今回調査したSR01と同一遺構である。弥生時代後期までにある程度埋没し窪み状となっており、古墳時代にさらに埋まり、奈良時代に廃棄場として大量の遺物が入れられたと思われる。周辺部文は奈良時代に官衙遺構が築かれ、掘立柱建物・井戸・土坑が検出されている。中世にも小規模集落があったようだが明瞭ではない。近世になると水田として利用されていたが、掘立柱建物が1棟確認され、農作業に伴う小屋と考えられている。

B区では弥生時代と奈良時代の溝が確認されている。紡錘車や縄文土器も出土している。中世の集落が確認されており、掘立柱建物や焼土坑・溝が検出されている。近代では生野の銀を姫路港に運ぶ馬車道の付帯施設の可能性が高い。

C区では弥生時代前期の溝と土坑が検出され、SD02は中期の溝で、窪み状になっていたところに奈良・平安時代の遺物が多数混じって埋められている。奈良・平安時代にはピット・土坑はあるものの明確でない。C区では近代の遺構がメインである。今回調査した次代の機関車転車台と扇形機関車庫が調査されている。絵葉書などにも残っているもので、良好な資料である。隣接地が今回の調査区I区であ

る。

D区は飾磨街道に面した部分である。弥生時代は後期を中心とする土坑が数基調査されている。奈良時代は井戸と溝・埋甕・土坑が検出されている。中世の遺構は西端に限られ、掘立柱建物・池跡・土坑が調査されている。池跡は石組などが見られないが、土師器皿を大量に投棄する点は共通している。

E区は既存建物があったことから遺構の残存状況は悪い。奈良時代の井戸・土坑・溝が検出されているが、建物は確認されていない。井戸からは古代銭貨が出土している。

F区はE区の北側に位置している。西半は残存状態が悪い。弥生時代の遺構は土坑・ピットだけである。奈良時代は掘立柱建物・土坑・溝が検出されている。掘立柱建物では建て替えが確認されている。中世の遺構が最も多く検出されている。やはり掘立柱建物・土坑・溝が検出されている。

出土遺物は多く、主に旧河道から大量に出土している。墨書土器・漆付着土器が多いのが特徴である。二彩や瓦・稜椀・古代銭貨なども特徴的な遺物である。また、姫路市教育委員会の調査では漆紙文書が出土していることは特記されよう。

表 1 豆腐町遺跡調査一覧表

年度	遺跡調査番号	所在地(姫路市)	調査種別	担当者	期間	面積(m²)	調査個所
Н7	950276	豆腐町322 他	確認	種定淳介	平成7年10月25日~10月27日、 11月13日~11月14日	60	7a - 1G~15G
	950389	豆腐町322 他	確認	種定淳介	平成8年2月5日~2月7日	48	7b - 1G∼12G
H10	980050	豆腐町322 他	本発掘	岡田章一・井本有二 松岡千寿	平成10年5月22日~8月12日	2,300	B区
	980131	豆腐町	確認	多賀茂治	平成10年9月7日~9月11日	180	10 - 1T~7T
	980177	豆腐町	確認	多賀茂治	平成10年11月10日~11月13日	310	10 - 8T~15T
	980200	豆腐町	確認	多賀茂治	平成10年12月14日~ 12月16日	240	10 - 16T~21T
	980210	豆腐町	本発掘	水口富夫・佐々木俊彦 多賀茂治	平成11年1月5日~3月8日	3,556	A区
	980241	豆腐町	確認	多賀茂治	平成11年2月8日~2月9日	88	10 - 22T~24T
	980242 南畝町		確認	多賀茂治	平成11年3月4日~3月5日	28	10 - 4G~6G
H11	990010	豆腐町	本発掘	水口富夫・松岡千寿	平成11年5月10日~8月16日	2,211	C区
	990247	南畝町	確認	多賀茂治	平成11年11月8日~11月10日	32	11 - 8G
	990319	南畝町 他	確認	多賀茂治	平成12年3月1日~3月2日	46	11 - 1T∼6G
H12	南畝町1丁目 86·100· 110~112		本発掘	中川 渉・松岡千寿	平成12年5月22日~8月11日	539	D - 南区・E区
	2000295	900295 南畝町1丁目 87·89		中川 渉・松岡千寿	平成12年10月17日 ~平成13年3月16日	389	D - 中区
	2000344	南畝町1丁目109	本発掘	多賀茂治	平成13年1月22日~3月16日	477	F区
	2000371	南畝町1丁目95	確認	中川 渉	平成13年2月27日	8	12 - 1G~2G
H13	2001047	南畝町	確認	多賀茂治	平成13年4月24日	8	13 - 1G~2G
	2001090	南畝町1丁目92	本発掘	森内秀造・久保弘幸	平成13年7月9日~8月10日	98	D - 北区
H18	2006064	駅前町	確認	山田清朝・鈴木敬二	平成18年5月26日~5月30日	60	18 - 1T~4T
	2006103	駅前町	本発掘	渡辺 昇・長濱誠司	平成18年8月28日~11月17日	1,063	18年度 Ⅰ・Ⅱ区

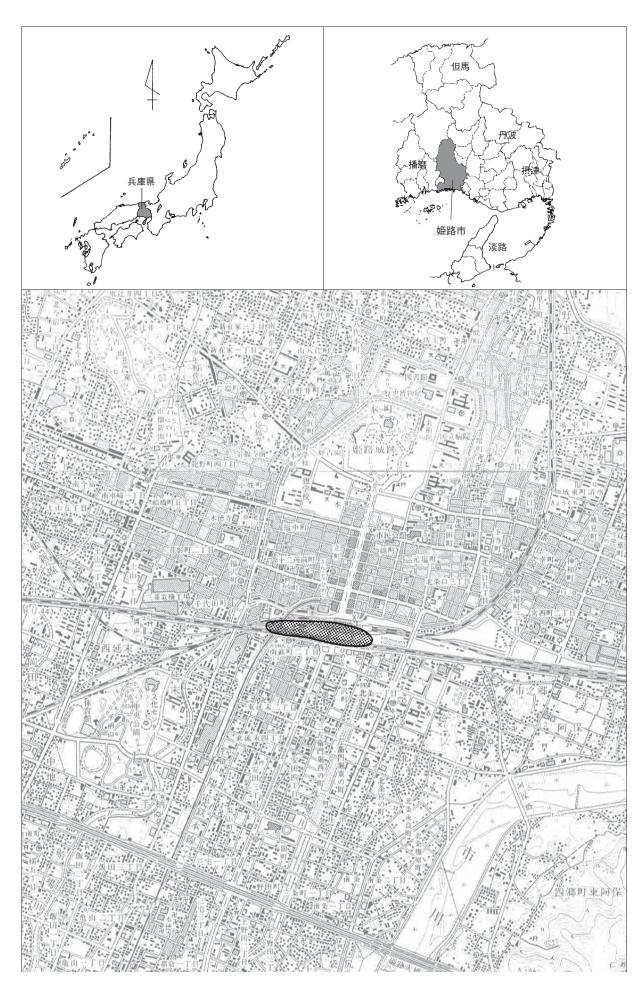


図1 兵庫県・姫路市・豆腐町遺跡の位置

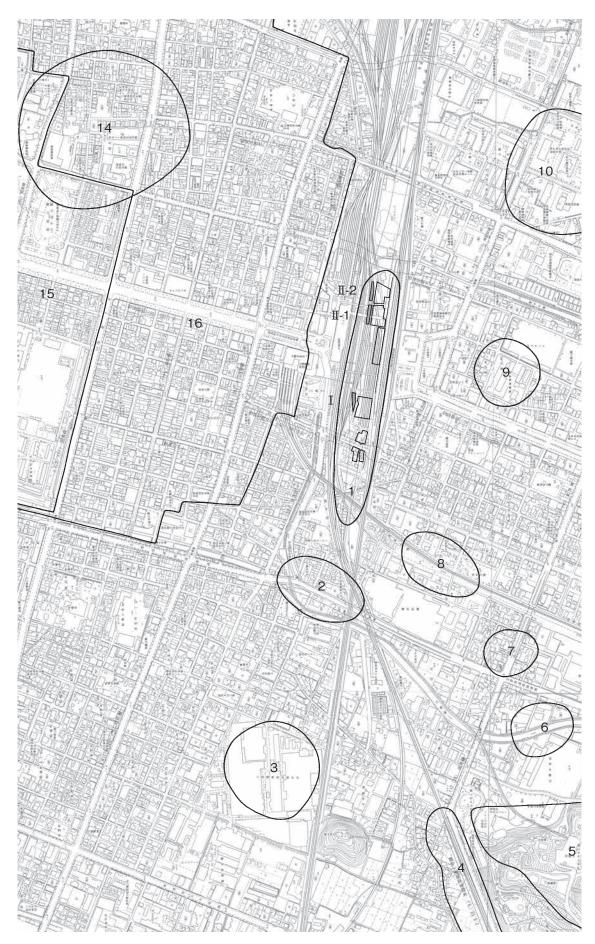


図2 姫路駅周辺の主な遺跡と豆腐町遺跡調査地点

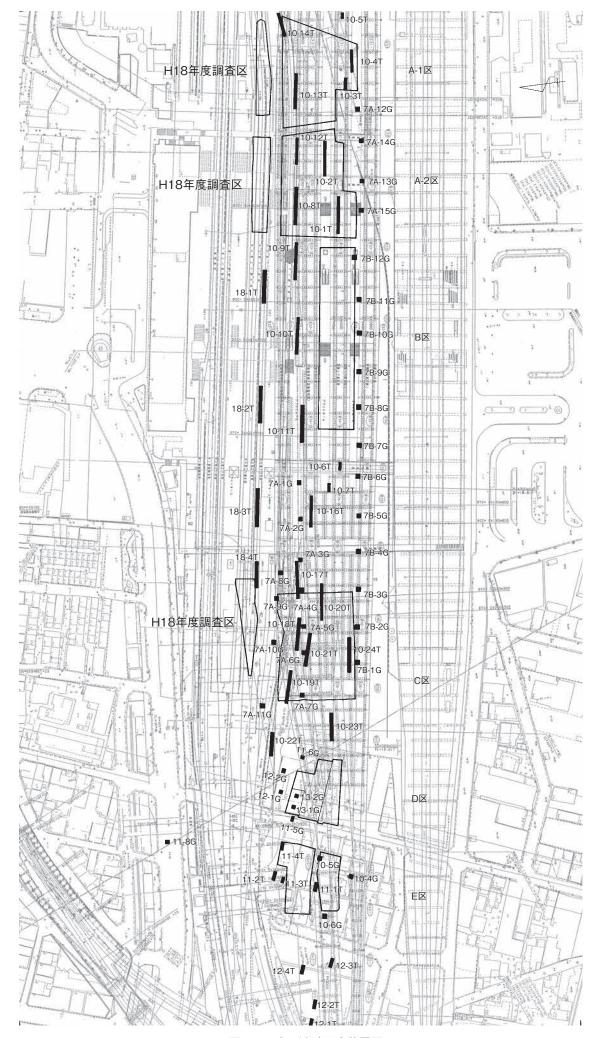


図3 豆腐町遺跡調査位置図

第3節 本発掘調査の経過

8月11日現地打ち合わせを行ったのち、地下埋設物の有無を確認するためのトレンチ調査を翌週の18日に実施した。人力掘削でI区の調査を行い、すでに確認されている電線ケーブル以外は認められなかった。そのことから、機械掘削を21日から開始し、断面清掃や監督員詰所設置などと平行して人力掘削は2日遅れて開始した。確認調査で検出した機関車転車台以外は明瞭な遺構は検出されなかった。姫路駅初代転車台で保存協議を経て、未調査部分の調査も10月末から行った。空中写真と転車台の写真測量を(株かんこうに委託して行った。同様の方法でII-2区は9月14日に確認調査を行い、17日から調査を開始した。II-1区は10月7日にトレンチ調査を行い、2地区合わせて10月24日に空中写真を撮影した。中間検査は11月10日に行い、17日に引き上げた。





図4 調査風景

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調查事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所 長 平岡憲昭

主幹兼総務課長 若生晃彦

主 幹 池田正男

総務課 事務職員 丸野真衣

企画調整班 主 查 柏原正民

調査第1班 調査専門員 吉田 昇

調查担当 調查第1班 担当課長補佐 渡辺 昇

主 査 長濱誠司



図5 調査風景

調査参加者 森本文子・赤壁千恵子・前田陽子・藤田 泉

第4節 整理作業の経過

整理作業は発掘調査段階から順次行っていた。埋蔵文化財事務所は組織の改編で兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となる。現場事務所では一部の土器洗浄と台帳作成を実施した。それ以降の作業は平成21年度から平成22年度の2カ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。平成21年度は水洗い作業から実測作業までを、平成22年度は写真撮影・復原作業・トレース作業・保存処理と原稿執筆・レイアウトを行い、報告書を刊行した。保存処理は整理保存課主査岡本一秀が担当した。

調査主体 兵庫県教育委員会

調查事務 兵庫県立考古博物館

館長 石野博信

埋蔵文化財調査部長 若生晃彦

主幹 吉田 昇 (平成22年度)

総務課 課長 前川浩子

主查 大西晃彦 (平成21年度)

事務職員 川原聡介(平成22年度)

整理保存班 調査専門員 森内修造 (平成21年度)・村上泰樹 (平成22年度)

(課) 担当課長補佐 岡田章一

主査 菱田淳子 (平成21年度)・篠宮 正・山本 誠 (平成22年度)

調査担当 担当課長補佐 渡辺 昇

主査 長濱誠司

嘱託員 前山三枝子・吉田優子・佐伯純子・加藤裕美・又江立子

保存処理 主査 岡本一秀

嘱託員 長濱重美・前田恵梨子・浜脇多規子・桂 昭子



図 6 整理作業風景

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

豆腐町遺跡は姫路市豆腐町に所在する遺跡である。調査着手段階ではJR姫路駅構内に位置していた。姫路平野の中心にあたり、市川によって開析された平野である。東西9.8km、南北7.5kmの兵庫県で最も広い平野である。市川及び船場川の氾濫原であり、平地であるものの地下は旧河道と微高地が複雑に存在している。姫路城跡の東外堀である三左右衛門堀(川)は一時期(豆腐町遺跡盛行期)の市川本流と考えられる。現在の市川は姫路城下町設立時になってからである。船場川も現在は砥堀で市川から分かれているが、ある時期の氾濫でつながったものと思われる。本来は大野川から流れてきた河川と考えられる。小河川であるが、周辺の微高地に多数の遺跡を営んだ重要な河川である。肥沃な可耕地を提供していた証拠であろう。「播磨国風土記」の記載では市川は小川とあり、西側に大川があるとされている。大川は船場川に比定されている。船場川は手柄山に当たり、その付近から遺跡は増加し蛇行して南流する。

第2節 歷史的環境

旧石器時代の良好な調査例は、姫路市ではほとんどない。溜池を中心とする表面採集が多く、丘陵上からも採集されている程度である。近隣ではたつの市御津町碇山南山遺跡で調査例がある。豆腐町遺跡近くでは手柄山北丘遺跡で黒曜石とサヌカイト製の尖頭器が出土している。縄文時代早創期に下る石器である。

縄文時代になっても遺跡数は余り知られていない。辻井遺跡で戦前に人骨が調査されたことが著名である。中期の墓域であり、土壙墓・袋状ピットなども調査されている。人骨以外に犬の骨も出土している。中期の遺跡は八代深田遺跡など少なく、後期になると今宿丁田遺跡でまとまって出土している。波状口縁や磨消縄文など装飾に富んだ土器群である。それ以外に本町遺跡などでも土器は出土しているが、依然遺跡数は数える程度である。飛躍的に遺跡数が増加するのは晩期になってからである。標高5m以下の低地で晩期の遺跡が増え、弥生時代に受け継がれる。姫路平野ではこのような状況であるが、西側に行くと遺跡はやや顕著である。菅生川沿いの六角遺跡では晩期の住居跡が調査されている。大津茂川沿いには中期から晩期まで継続する丁柳ケ瀬遺跡があり、さらに西の林田川沿いには前期の住居跡を調査した片吹遺跡がある。

弥生時代になると遺跡数は増大する。縄文晩期土器を出土した姫路平野低地の遺跡の多くから弥生前期の土器が出土している。姫路駅周辺の千代田遺跡・本町遺跡・市之郷遺跡・小山遺跡などで古くから前期の調査例がある。「日本農耕文化の生成」に記載されていることもあって、全国的にも知られている。辻井遺跡も弥生時代を通しての集落で中心集落である。今宿丁田遺跡・名古山遺跡では銅鐸鋳型が出土しており、銅鐸生産の可能性があり注目されている。銅鐸や同じく祭器とされる石剣は平野部からは出土しておらず、山間部から出ていることは注目される。飾西東山遺跡など高地性集落も広がっている。中期後半より後期の遺跡数の方が多いのも播磨の特徴であろう。

姫路平野の遺跡は比較的全期間を通して継続している遺跡が多い。市之郷遺跡は母集落で全期を通して遺構が検出されている。居住域と墓域が調査されていることも重要で、古墳時代から古代へと続いている一大集落である。宮山古墳の初期須恵器との関連から古墳時代中期後半の市川下流域の中心集落と



図7 豆腐町遺跡の位置と周辺の遺跡

表2 豆腐町遺跡周辺の遺跡

_							
No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代	No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代
1	豆腐町遺跡	姫路市豆腐町	弥生~平安	29	手柄山南丘古墳群	姫路市西延末	古墳
2	南畝町遺跡	姫路市南畝町	弥生	30	小山遺跡	姫路市延末	弥生~古墳
3	千代田遺跡	姫路市町	縄文~弥生	31	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生~古墳
4	西延末遺跡	姫路市西延末	弥生	32	古屋敷遺跡	姫路市手柄1丁目	弥生~古墳
5	手柄山北丘遺跡	姫路市西延末	弥生~古墳	33	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生
6	橋詰遺跡	姫路市延末	縄文~古墳	34	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生~古墳
7	村淵遺跡	姫路市延末1丁目	弥生	35	三宅遺跡	姫路市飾磨区三宅	奈良
8	君田遺跡	姫路市東延末	弥生	36	ヒジ倉遺跡	姫路市飾磨区阿成	古墳~中世
9	豊沢遺跡	姫路市豊沢町	弥生	37	船場川東区整遺跡第6地点	姫路市飯田	縄文~中世
10	北条遺跡	姫路市北条	弥生~古墳	38	長越遺跡	姫路市飯田	弥生~中世
11	阿保遺跡第1地点	姫路市阿保	平安~中世	39	邨東遺跡	姫路市中地	弥生
12	阿保遺跡第2地点	姫路市阿保	弥生~中世	40	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生
13	市之郷遺跡	姫路市市之郷	弥生~中世	41	大町遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生
14	本町遺跡	姫路市本町	縄文~近世	42	大塚遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	古墳
15	姫路城跡	姫路市本町	近世	43	真福寺遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	縄文~弥生
16	姫路城城下町跡	姫路市本町	近世	44	丁田遺跡	姫路市町坪・中地	弥生~古墳
17	野里門下層遺跡	姫路市鍵町	縄文~弥生	45	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生
18	富士才遺跡	姫路市八代	弥生	46	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生
19	御茶屋町遺跡	姫路市八代	弥生	47	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生~中世
20	東山焼窯跡	姫路市山野井町	近世	48	権現遺跡	姫路市中地南町	縄文~弥生
21	八代深田遺跡	姫路市南八代町	弥生	49	カスカエ遺跡	姫路市飯田	弥生~中世
22	岩端町遺跡	姫路市岩端町	弥生	50	構遺跡	姫路市飾磨区構3丁目	縄文~弥生
23	名古山遺跡	姫路市名古山町	弥生	51	船場川東区整遺跡第2地点	姫路市飯田	縄文~古墳
24	辻井遺跡	姫路市辻井1~7丁目	縄文~奈良	52	船場川東区整遺跡第5地点	姫路市飯田	弥生~古墳
25	今宿遺跡	姫路市西今宿5丁目	奈良~中世	53	船場川東区整遺跡第4地点	姫路市飯田	平安
26	今宿丁田遺跡	姫路市東今宿1~4丁目	縄文~奈良	54	大鳥遺跡	姫路市飯田	縄文
27	八反長遺跡	姫路市岡田	弥生	55	石ケ坪遺跡	姫路市亀山	縄文~弥生
28	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文~弥生				

考えられている。周辺部では中期からの遺跡が多く見られる。縄文晩期の住居を検出した六角遺跡も前期はなく断続して集落を再開し、古墳時代まで継続する。国分寺台地遺跡・和久遺跡も中期からの集落である。国分寺台地遺跡は石器製作も行った可能性があり、北側の八幡遺跡は方形周溝墓群を早い時期に調査されている。大津茂川流域の中心集落だった丁柳ケ瀬遺跡は中期後半で断絶し、和久遺跡に引き継いだのではないかと思われる。和久遺跡は兵庫県で最も多くの竪穴住居跡を検出した遺跡で、古墳時代まで継続する。建て替えが多く竪穴住居跡の密集度は際立っている。庄内期に遺跡の中心があり、他地域からの搬入品も多い。姫路平野南側の長越遺跡・船場川東遺跡群も庄内期を中心とする遺跡である。長越遺跡はこの時期の開発集落と思われ、庄内甕を作り、周辺に配布したと思われる。庄内期だけの単純遺跡である。それに比べて対岸の船場川東遺跡群は前期から生活をはじめ、後期に集落を拡大する。環濠を掘り柵を伴う大型居館を築いている。大形の周溝墓も調査されており、古墳に引き継がれる要素がある。手柄山北丘遺跡では石棺など後期の墓が存在する。船場川流域には弥生前期から庄内期まで多数の遺跡が確認されている。

庄内期になると、播磨産庄内甕を生産しており、長越遺跡・船場川東遺跡群を中心に拡散し、和久遺



図8 壇場山古墳・山之越古墳

跡から太子町域の鵤石田遺跡・鵤遺跡・上構遺跡に広がっていく。古墳時代はじめの古墳は横山7号墳と丁瓢塚古墳がある。ともに前方後円墳である。横山7号墳は全長30mであるが、丁瓢塚古墳は98mと大型である。

バチ型前方後円墳で箸墓古墳との関連が窺われる。中期になると国分寺台地の壇場山古墳が市川流域の首長墓として築かれる。全長142mを測り陪塚を持ち、3段築成で盾型周濠を有する。隣接する次代の首長墓である方墳の山之越古墳とともに竜山石製の長持形石棺を所有していた。市川左岸の国分寺台地から南に築かれた宮山古墳があり3基の竪穴石室を埋葬主体とし、豊富な副葬品を保有していた。装飾太刀や鍍金した垂飾付き耳飾り・指輪・玉類と初期須恵器と他に例がない内容であった。加耶との関連が想定される古墳で、市川西側の市之郷遺跡の韓式土器との関係が興味深い。

後期古墳は平野周辺部の山塊・山麓に築かれる。近くでは手柄山や姫路城跡がある鷺山に古墳が構築されている。北側山麓には山崎山・名古山などに横穴式石室が認められる。大型の横穴式石室も北側に見られる。北平野の御輿塚古墳は家形石棺を内包した典型的な横穴式石室である。以前、ゴーランドも調査した良く知られた古墳である。全長11.7mの両袖式で竜山石製の組み合わせ石棺である。北西方向の市川沿いに近い砥堀に権現山古墳がある。全長14mの大型石室である。群集墳は大市の西脇古墳群が最大数で、その他阿保古墳群が群集墳である。姫路平野周辺ではなく、離れた丘陵部に群集墳は築かれている。

奈良時代になると本町遺跡一帯に播磨国府が置かれ、市川東側に播磨国分寺・播磨国分尼寺が建立される。豆腐町遺跡も国府の雑舎の1つではないかと思われる。山陽道は現在の西側は県道姫路上郡線、東側は県道神戸加古川姫路線と考えられており、北側を東西に走っている。



図9 播磨国分寺

第3節 姫路駅の歴史

姫路駅周辺鉄道高架事業の進捗により、山陽本線に引き続いて播但・姫新線が高架化され、2008(平成20)年12月23日に新しい姫路駅が完成した。姫路駅の歴史はその120年前の1888(明治21)年12月23日、兵庫県最初の私設鉄道である山陽鉄道の駅として始まった。

鉄道は幕藩体制から近代国家へ生まれ変わった明治政府にとって国内統治に不可欠なツールであった。播磨・摂津・但馬・丹波・淡路の旧5ヶ国を統合して1876 (明治9)年に誕生した兵庫県にとって、神戸の県庁から全県を掌握するには移動時間を縮めることが最適であり、その手段として鉄道敷設が提唱された。これが山陽鉄道の始祖となる。姫路は大国であった播磨国の中心であり、各地域を結ぶ街道が放射状に延びていた。また姫路を通過する瀬戸内航路や山陽道は物流の大動脈でもある。姫路では兵庫県に統合された飾磨県の再置の声も大きい。そのためにも神戸との距離感を縮める必要があった。

再び鉄道敷設の機運が高まったのは1885 (明治18年)である。兵庫・姫路間の鉄道として政府に申請したが、政府としても山陽路に幹線鉄道を敷設する重要性は認識しており、下関までの敷設を条件に認可した。つまり、山陽鉄道は兵庫県内の地方鉄道と、西日本の幹線鉄道との2面を併せ持つことになったのである。

1888(明治21)年1月に山陽鉄道会社が設立された。6月に起工した敷設工事は急ピッチで進められ、11月には兵庫・明石間、翌12月に明石・姫路間が開業した。姫路駅は本屋および附属建物の他に、機関車庫、客車庫を備える二等駅に位置づけられていた。ただし駅本屋やホームは仮設で開業し、盛大な開業式典は行われなかったようである。施設は順次整備された。神戸・姫路間の開業は当初の目標であったものの、山陽鉄道会社にとっては1891(明治24)年までに岡山まで開通させることが第1の目標であ

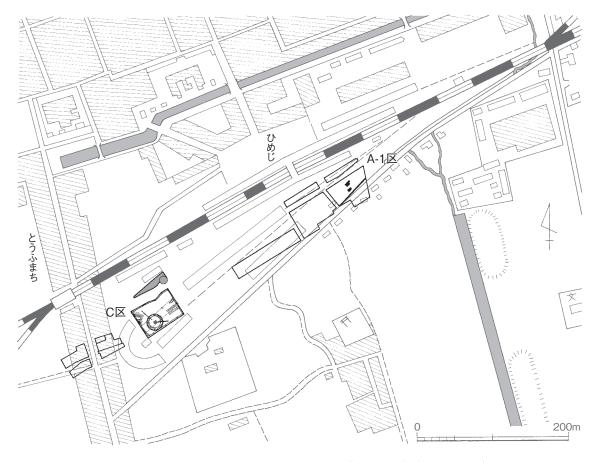


図 10 明治 40 年頃の姫路駅と調査区の位置(姫路市史第十二巻 19 図)

り、多額の建設費や採算性など多くの問題を抱えていた。姫路はあくまで通過点だったのである。

翌1889 (明治22)年には官設鉄道の新橋・神戸間が開業、山陽鉄道兵庫・神戸間も開業し、幹線鉄道の骨格がほぼできあがる。この年、姫路は市制が施行され、県立尋常中学校が設置される。その後、1901 (明治34)年に高等師範学校、1898 (明治31)年に第10師団が設置される。1903 (明治36)年陸軍大演習の明治天皇の行幸に合わせて姫路城内の師団司令部まで駅前が整備される。学校や師団が県庁所在地以外の都市に置かれる例は少なく、姫路が城下町から近代都市に脱皮するのに鉄道の果たした役割は大きかったことがわかる。

1895 (明治28)年には生野鉱山と飾磨港とを結ぶ播但鉄道(後の播但線)が開業し、姫路の東西南北に 鉄道が敷設される。山陽鉄道は1901(明治34)年下関まで開業を果たした後、1903 (明治36)年播但鉄道 の買収を経て、1906 (明治39)年鉄道国有法公布により国有化され、会社は解散となった。

1923 (大正12) 年私設の電気鉄道である神戸姫路電鉄(後の山陽電気鉄道)が明石・姫路間を開業、姫路駅前に駅を設置し、その後瀬戸内沿岸部を経て明石・神戸地域とを結ぶ鉄道に発展する。

昭和に入ると駅の機能が東側へ拡大し、機関庫や貨物操車場が水田を埋立て設置される。1936 (昭和11年) 姫津線(後の姫新線) が全線開通し、播磨北西部を経て津山とを結ぶ。鉄道の電化も進み、1958 (昭和33) 年西明石・姫路間、翌年には岡山まで電化される。これと時を同じくして姫路駅の駅舎は「民衆駅」として整備され、私鉄、バスターミナルを統合した新たな玄関口となる。

1972 (昭和47)年には山陽新幹線が岡山まで開通し新幹線姫路駅が開業する。その後旅客の長距離大量輸送は新幹線に移行し、山陽本線は貨物と近距離旅客輸送を担うこととなる。それでも姫路駅は新幹線「のぞみ」の一部や特急の停車駅であり、兵庫県西部のターミナルとしての地位は今日でも不動である。

第Ⅲ章 Ι区の調査結果

第1節 概要

調査区は平成11年度調査(遺跡調査番号:990010)のC区北側に位置する。ただし当調査区とC区は連続せず、図上で10m前後の空白が生じている。

C区の調査では弥生、奈良・平安と近代の3時期の遺構が検出されている。弥生時代は微高地上で土坑、微高地と自然流路状のくぼみとの境界付近で前期の溝を検出している。奈良・平安時代の遺構は、柱穴群、土坑を検出した。近代の遺構はJR山陽本線の前身である山陽鉄道から国鉄に至る機関庫(区)関連の遺構である(註1)。

調査区の基本層序は、表土以下、1888 (明治21)年の姫路停車場開業以降の鉄道建設による盛土、それ以前の旧水田面、自然流路状のくぼみの堆積土、基盤層となる。遺構検出面は基盤層直上である。

鉄道建設に伴う盛土は、転車台用途廃止後の石炭ガラによる盛土層と山陽鉄道敷設時と推定する盛土層に大別できる。後者の上面は標高10.4m前後を測り、煉瓦片や礫を含む層と含まない層がある。なお姫路駅の造成においては城外周の土塁を切り崩してその土を用いたとされる(註2)。

第2節 遺構

当調査区の西端付近は微高地の縁辺にあたるが、大半は攪乱により損なわれて弥生時代と推定する溝を1条検出したのみである。溝の東側では自然流路状のくぼみを検出した。奈良・平安時代の遺構は検出していない。近代の遺構として調査区東端で煉瓦積の機関車転車台坑を検出した。

溝

S D 0 1

調査区西半で検出した南北方向にのび、両端とも調査区外へ続く。幅1m、深さ0.1m、断面観察では旧耕土層直下より掘り込まれている。出土遺物はないが、検出地点や溝の方向からC区で検出された弥生時代の溝SD05・07と同一の溝と推定する。遺物は出土していない。

SD02

C区で検出された弥生時代前期から平安時代まで存続する自然流路状のくぼみSD02と同一の遺構である。南北方向にのび、北側は調査区外へ、南側はC区へ続く。旧耕土層直下で検出し、西肩付近では深さ0.6mを測る。調査区の制約から東肩部は検出していない。遺物は出土していない。

第3節 転車台坑の調査

1. 概要

調査区東南端で検出した。南半部側壁と床面の一部が損壊する他は良好に遺存していた。坑内は石炭ガラにより一気に埋め立てられている。その際に側壁の一部が崩されたと思われ、石炭ガラの最下層には煉瓦片が混じる。

2. 調査の経緯と方法

当初検出した部分は北半部分にあたる1/2弱であった。南半部については通信ケーブルや車両用通路があり、拡張して調査することが不可能な状況であった。その後これらの移設に伴い南半部、中央部の

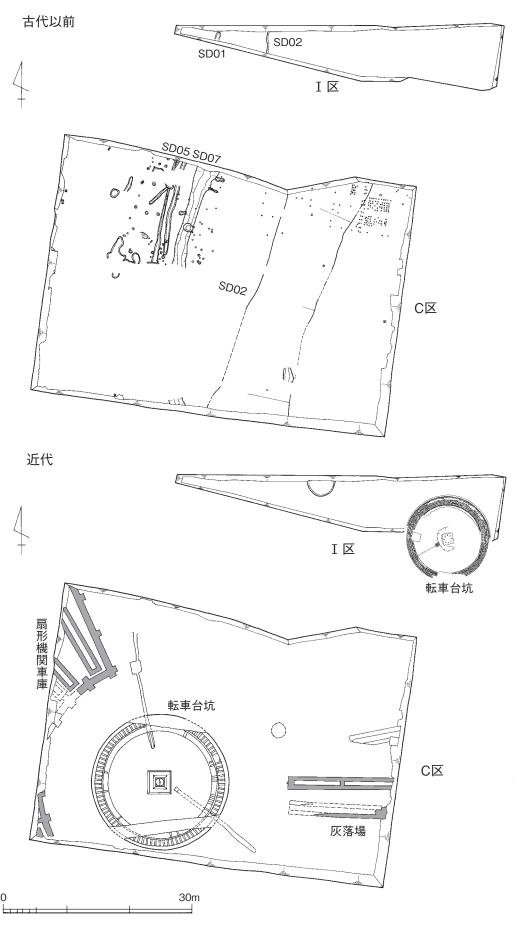


図11 Ι区の遺構



順で調査を追加して行い、結局3分割して調査することとなったが転車台坑のほぼ全体を調査することはできた。実測は、北半部は写真測量を行い、その他は手実測によった。最終的に3分割したものを結合したが、手違いから一部実測漏れの部分が生じた。また平・断面図は各調査時で実測範囲を重複させることなどにより正確に繋ぎ合わせることを心がけたが、法量には誤差が生じているおそれも捨てきれない。

北半部は本来調査対象とした遺構面まで掘削を行っていたため、側壁の外面が基礎近くまでほぼ露出することになり、掘方や側壁の内外側を基礎部まで調査した。転車台坑の表面観察以外の記述は北半部で得られた成果である。

南半部は時間的な制約があり、北半部で転車台坑の構造をほぼ明らかにしたと判断し、側壁と床面の表面調査を行うにとどめた。ただし排水施設の全容については明らかにできず、中央支承台下部についても、表面観察にとどめ工事時の解体にあわせて補足的に略測したのみである。

北半部では、側壁の円周から中軸線を復元してトレンチにより床面と側壁の断割り調査を行った。全容を検出した後にこの断割トレンチは転車台坑の中軸線にほぼ合致していることが判明した。東半部では煉瓦の組積を観察しながら解体、北半部では基礎のコンクリートも含めて断割りを行った。

側壁の北東部約1/4の部分は側壁および床面を解体し、刻印を有するなど特徴的な煉瓦を採取した。

残る3/4の部分については、表面で確認できた刻印などがある煉瓦を選択して取り上げた。なお溜枡を 構築する煉瓦と坑内に埋設された土管は全て取り上げた。

3. 調査の結果

①側壁

基礎 煉瓦積により構築される側壁および床面の基礎は、掘方の幅2mを測る。転車台坑掘方からさらに0.5m程輪状に掘り下げ、栗石を敷きコンクリートを流し込む。コンクリートの厚さは0.3mである。掘方の両肩付近のコンクリート上面では一辺3.5cmの角杭の痕跡が7箇所確認できた。角杭は掘方の内側で3箇所、外側で4箇所検出した。杭は内外が互い違いになるよう配置していたとみられる。その用途は明らかでないが型枠などの押さえとは考えがたく、煉瓦組積の水平を出すための測量に用いられたと推定する。なお基礎の底部に木杭を打ち込んだ基礎杭は認められなかった。これは転車台坑を安定した基盤層上に設置したため、構造物や機関車の重量を十分支えられると判断したためであろう。

側壁 円形を呈し、コンクリートの基礎上に煉瓦を断面の形状がL字形に組み上げる。側壁により囲まれた内径は12.3mを測る。この規模から、遺構は40呎転車台の転車台坑であることが明らかである。

表面に現れる煉瓦積みは、煉瓦積床面から最も残存する部分で0.77m(11段)を測る。側壁の幅は0.45 m (煉瓦の長手方向に2列分)である。煉瓦の組積は長手段と小口段が交互となり、「羊羹」と呼称される小口面を半折した煉瓦を用いていることから、厳密なイギリス積みに分類できる。また内側壁面の目地は断面が三角形を呈する「山目地」としており、兵庫県内の山陽本線に現存する煉瓦構造物の多くと同じ特徴をもっている(註3)。

側壁の基底部は基礎となるコンクリート上面にモルタルを塗布し煉瓦を接着している。基底部の幅は 1.45mを測る。基礎のコンクリート上面は凹凸をもつため、それに対応させて基底部の煉瓦は平面を削り厚さを調整する加工を施し、厚さを薄くしたもの、薄く加工した煉瓦を 2 段積にするなど 2 段目以降を水平に積み上げるための工夫がなされている。基礎は煉瓦を 3 段積み上げさらに、幅1.3mに控えて 1 段、さらに 2 段煉瓦を控え積みし、この上に側壁および煉瓦敷の床面が構築される。煉瓦積の最下部から側壁の最上部まで最も残存する部分の高さは1.32m (17段)である。

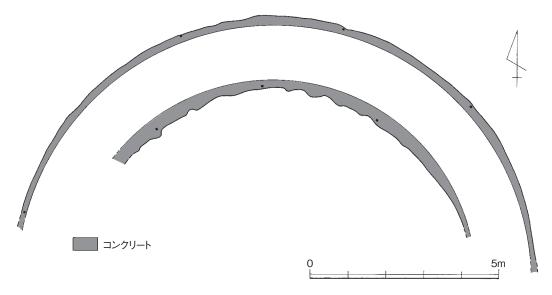
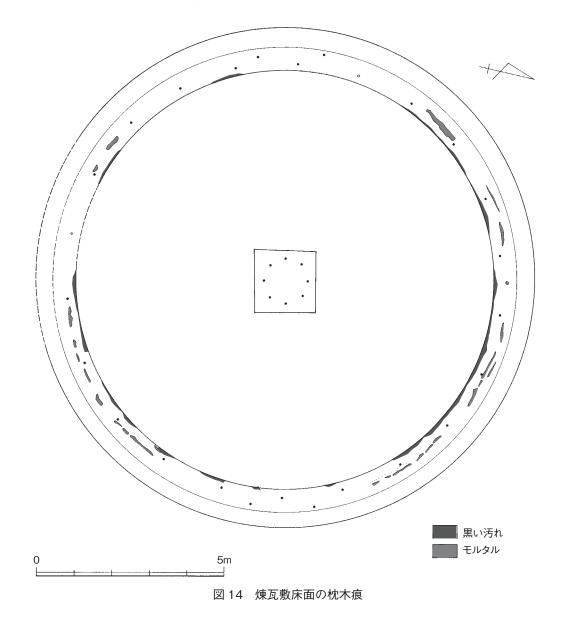


図 13 側壁掘方内杭痕検出状況

直方体のブロックである煉瓦(「おなま」と称する)を積み上げて円形構造物を構築しているため、煉瓦の組積にはひずみが生じている。しかし円形構造物を構築するのに用いる楔形煉瓦や弧状煉瓦などの異形煉瓦は用いず、このような形状に加工した煉瓦も見られない。積み上げによって生じるひずみは見えない外側に集約され、側壁外側は目地に隙間が多く、多少の出入りが見られる。また、水平を出すために下段の煉瓦積の形状に合わせて平面を細かく削り出した煉瓦も確認できた(写真図版42)。ただしこれらの部分も目地は強固であり、側壁の解体には苦労した。

煉瓦敷床面 側壁内側には幅0.65m (長手方向3列)の煉瓦敷の床面が巡る。床面上では目地部分に埋め込まれた2種計24本のボルトを検出した。

ボルト1 床面の内側から $1\cdot 2$ 列間の煉瓦の目地部分にボルトを約1.6m前後の間隔で設置する。現存するものは20本であるが本来は22本あったと推定する。その検出位置からこのボルトは転車台坑の床面に設置される円形軌条の枕木を固定するものと推定される。ボルト周辺には枕木の接着に用いられたと思われるモルタル、黒く汚れた部分と汚れの少ない部分の境界が煉瓦床面に線状に残存し、円形軌条の枕木の痕跡と思われる。ボルト (M1) は42.0cmの鉄製である。全長は48.3cmあり約430cmが床面に埋め



- 18 -

込まれていた。上端4.5cmはネジ切りが行われ、図示したものは対角3.75cm、対辺3.0cm、厚さ2.2cmの六角形の鉄製ナットが付く。また下端は六角形の鉄製ナットと、一辺4.7cm、厚さ0.5cmの四角形の鉄製ワッシャが付く。

ボルト2 ボルト1の列と側壁の間、床面の煉瓦、内側から2、3列間に設置される。東西の対になる位置に所在し、2本で1組になるが、西側の1本は損なわれている。ボルト間は約1.7mを測る。ボルト(M2)は径2.6cmの鉄製である。全長は47.8cmあり約20cmが床面に埋め込まれていた。上端7.5cmはネジ切りが行われる。また下端は対角4.8cm、対辺4.2cm、厚さ2.7cmの六角形の鉄製ナットと、一辺6.5cm、厚さ1.0cmの四角形の鉄製ワッシャが付く。ワッシャは錆によりボルトに固着し、ナットとの間は2.0cmを測る。

なお東側のボルト2の中軸にボルト1の1本があり、側壁の「羊羹」使用箇所とほぼ並ぶことから、 この部分が転車台坑の構築の起点であったと考える。

②中央支承台

基礎 掘方は完掘していないが、断割断面から復元すると径3.7mの円形を呈し、転車台坑掘方からさらに1m程掘削している。掘方内に栗石を敷きコンクリートを流し込む。コンクリートによる基礎は径約3m、厚さ約0.75mを測る。底には側壁の基礎同様木杭を打ち込んだ基礎杭は認められなかった。なお断面観察によると、基礎工事は転車台坑床面および側壁の施工に先立って行っている。コンクリート上面にモルタルを約1cmの厚さで塗布し中央支承台となる花崗岩切石を接着する。

台石 1.9m×1.75m、厚さ0.48mの花崗岩切石であり、その上部を1.6×1.7mの方形に加工する。仕上げを行ったのは三和土で仕上げた床面より上に露出する部分のみ高さ5cm程度である。基礎のコンクリート上に花崗岩剥片が層をなしていたため、加工は基礎に設置後、床面の整地前に行われたと推定する。上面には計8本のボルトが円形に配置され、外径1.38mの錆の痕跡がドーナツ状に確認できた。

ボルトを設置する穴は10cm×8cmの方形を呈し、各穴の左隅に溝状の掘り込みが確認できるが、その意図は不明である。ボルトは穴にモルタルを流し込んで固定される。ボルトは径3.5cmを測り、台石上面から10cm露出しているが、本来の長さは不明である。ボルトの上端は約7cmネジ切りを行う。

③床面

転車台坑のうち、煉瓦敷以外の床面は機関車や桁の重量がかからない部分であり三和土により仕上げる。掘方掘削により生じた土を薄く敷いて整地し、その上に砂をよく締めて敷き下地とする。砂の厚さは基礎部分の煉瓦1~2段分に相当する。床面の表面は三和土で仕上げるが、厚さは煉瓦1段分に相当し、この上に床面となる煉瓦1段が露頭する。床面は側壁側から中央へ緩い勾配をもち、中央支承台の周囲に馬蹄形に巡る幅約70cm、深さ6cm程の凹地を設けて坑内の滞水を溜枡へ導く。

④溜枡

中央支承台南西側に位置する。平面方形であるが、中央支承台とは主軸方向が異なり、排水機能を優先して設置したと思われる。側壁は一辺34cm、深さ43cm(6段)を測る。「おなま」41個を長手積するが、この他に長手方向を約1/2に切断したもの18個、厚さを約1/2にしたもの4個、いわゆる「七五」1個、小口両面を欠くもの2個、長さ、厚さを約1/2にしたもの4個、小口面のみ2個、小口面の破片1個を調整として用いる。これらは現地で切断・加工したと思われる。目地は平目地であるが、転車台坑側壁と比べると仕上げが荒く、漏水により周囲の土砂が流失し地下に空洞が生じていた。上面は長手方向に2個分を控え積みして三和土の上面と揃える。東側には床面に設けられた凹地により導かれた水を集め

る取水部がある。また南北の隅は隙間を煉瓦片で調整する。底部も煉瓦敷で平面を見せる。

西側壁には排水口があり南西方向に土管が5本延び転車台坑側壁に達する。底から排水口までの高さは25cmあり、沈砂などの用途も兼ねていたと思われる。枡から坑外へ延びる土管にうち、側壁部分は煉瓦積み上げ前に設置する。土管は無釉陶器で全長65cm、口径は10.6cmを測る。粘土板を巻き合わせて作った長さ30cmの筒部を2本と受口部を接合している。製造者印などはない。

⑤転車台坑の構築

転車台坑は、煉瓦(側壁・床)、コンクリート(基礎)、三和土(床)、石材(中央支承台)により構築され、 モルタルが目地や接着剤として用いられる。このうちコンクリートのみ埋設され、完成後は見ることは できない。調査の結果明らかとなった転車台坑の構築の順序を記す。

- 1. 坑内の測量により転車台設置位置を割り出す。
- 2. 構内の整地に先立って掘方を円形に掘削する。さらに設計に基づき側壁、中央支承台の掘方の深掘りを行う。
- 3. 側壁、中央支承台の掘方に栗石を入れ、基礎となるコンクリートを流し込む。
- 4. 中央支承台となる石材を設置し、整形する。
- 5. 側壁の煉瓦積み上げ、溜枡を設置する。
- 6. 坑内の床面を整地し、表面を三和土仕上げる。また溜枡上部も仕上げる。

註

- 1 『豆腐町遺跡 I 』 兵庫県文化財調査報告第322冊 兵庫県教育委員会 2007年
- 2 高橋秀吉『姫路の交通五十年』高橋文庫 1963年
- 3 鈴木敬二「旧山陽鉄道(兵庫〜姫路間)開通時の煉瓦構造物」『兵庫県立歴史博物館紀要 塵界』 第21号 兵庫県立歴史博物館 2010年

第4節 煉瓦

転車台坑の煉瓦は、時間的な制約から使用総数を算出するには至っていないが、刻印・櫛描が確認できたものを中心に、調整に特徴があるものなどを選択して243点採集した。うち41点は溜枡を構成する「おなま」である。採集した煉瓦はすべて計測を行ったが、このうち44点を拓本・写真撮影の対象とし、報告書に掲載した。煉瓦についての概要は以下に記し、個別の煉瓦については観察表にまとめた。記述した数量は採集した煉瓦の個数を反映したものであり、使用された煉瓦の大半は刻印や櫛描がないことを断っておく。計測は長さ(長手長)と幅(小口幅)は平面のI面を上にし、その中心部付近で、厚さは側面の中央部付近で行うことを原則とした。ただし計測条件の悪いものはその限りではない。

この他に転車台坑周辺で採集した特徴的な煉瓦4点も掲載した。

1. 転車台坑使用煉瓦

①煉瓦の製造と表面の特徴

転車台に使用された煉瓦は全て手抜成形されたものである。手抜煉瓦の製造には「撫板」と型枠である「成形用枠」が用いられる。最初に「成形用枠」に抜き砂をまぶし、粘土を押し込み、上部の盛り上がった粘土を切り「撫板」により仕上げ、「成形用枠」から抜く。「成形用枠」は口字状に4側面を囲う形状が一般的で、これで長手、小口面が形成される。平面はナデにより一方が形成され、もう一方は煉瓦の作業台である「素地抜臺」か、その上の「素地抜板」そのものが型枠になるといえる(註1)。今回報告する煉瓦は

長手・小口面には抜き砂が付着するのに対し、両平面にはこの付着が顕著でない。これは「成形用枠」にのみ抜き砂をまぶし、「素地抜臺」や「素地抜板」には抜き砂をほとんど用いなかったためと推定する。煉瓦は、平面の一方に布痕が認められるものがあり、「素地抜臺」または「素地抜板」には粘土が付着しないよう布が敷かれていたと思われる。

煉瓦は成形作業により平面は両面で顕著な差異が認められる。そこで両平面を区別するため、顕著なナデなどの調整がみられない面を「I 面」、みられる面を「I 面」として記述する。豆腐町遺跡出土煉瓦については、『豆腐町遺跡 I 』において分類がなされているが、そこでは櫛目文が施されている「平」面を裏面、櫛目文がない場合は抜き砂がない、あるいは反対の「平」面より少ない面を表面とした。今回の表記と『豆腐町遺跡 I 』の表記を対比すると、「I 面」は「表面」、「I 面」は「裏面」に該当すると思われる。

I面は、「接合面ト為ルベキー側ハ素地抜臺ノ(木板)上ニ在」(註2)る面であり、成形作業時には下面となる。ナデを施すが後述するⅡ面ほど顕著ではなく、不調整とみられるものもある。部分的に布痕が残存するものがあり、多くの煉瓦には手抜成形の煉瓦に普遍的に見られる長手に沿う1条の凹線が認められる。後述する櫛描1類は型抜き後に粗くナデを施した後に描いたものである。

Ⅱ面は、丁寧なナデが施され平滑に仕上げられた面であり、「一側ハ針金ニテ裁断シ之ヲ水ヲ付ケタル板ニテ撫デルヲ以テ、其面頗ル平滑トナル」(註3) 面であろう。成形作業時には上面となる。後述する刻印1・2類の大部分と櫛描2類はこの面に施す。

②胎土、焼成

煉瓦の原料は粘土を主成分として砂を混ぜ、『煉瓦要説』によればさらに粘性を調整する目的で通常の砂の他に微細な砂を多く含む「サク」土を混ぜるという。本報告の煉瓦には浅黄橙(10YR8/4)色の微細な砂の混和が認められ、主材である粘土とマーブル状を呈する。この微細な砂が「サク」土に該当するものであろうか。粘土、砂などの混練の具合は総体的に良好であるという(註4)。また煉瓦の色調は一般的に低温で焼かれたものはみかん色を呈するが、そのような煉瓦はみられず、総体的に焼成は良好である。側壁や床面に使用された煉瓦は高温で焼かれ黒味を帯びた「焼過煉瓦」が多く、長手面が焼過の「横黒」や小口面が焼過の「鼻黒」が目立つ。胎土や焼成の具合から、煉瓦製造には一定の仕様が存在するか、煉瓦製造技術を有する職人、組織が関わっていた可能性が高い。

③寸法

出土した煉瓦の寸法にはばらつきがあり、最大で23.3×11.3×7.4cm (B 26)、最小で21.3×10.2×6.9cm (B 32)であるが、大半の煉瓦は、長さ21.5 ~ 22.5cm、幅10.5 ~ 11.0cm、厚さ6.5 ~ 7.1cmの範囲内にある。 この寸法は大高分類の山陽形(22.73×10.76×6.97cm)(註 5)に近く、山陽形と比較すると幅、厚さは標準的で長さがやや短い傾向にある。

④いわゆる「刻印」

煉瓦平面などに煉瓦製造会社の社章などの印を施した煉瓦を「刻印煉瓦」と呼称する。この用語は定着しているためここでも用いているが、実際は押印したものが多く、本報告の煉瓦も「刻印」よりも「押印」と表現するのが妥当であろうと考える。

確認できた刻印は3種に大別できる。

表 3 転車台坑使用煉瓦観察表

報告 No.	E/)	寸		4 /1 \		調整	特徴))/ /L-	櫛目	TT/ &E	刻印	胎土	色調	備考
B1	長(cm) 21.9	幅(cm) 10.4	厚(cm) 6.9	重(kg) 3.03	I	1	凹線	単位	幅(cm)	形態	Also	6mm以下礫含む	10R5/6	長手にタタキ痕
B2	21.7	10.9	6.8	3.04	I	ナデ	凹線				製	6mm以下礫含む	I : 10R6/4	鼻黒
В3	22.0	10.7	6.8	3.04	I	ナデ	焼過 凹線				古	小礫含む	II : 2.5YR4/2 I : 2.5YR5/4	鼻黒
В4	22.2	10.5	6.6	3.08	I	ナデ	焼過 凹線 焼過				末	5mm以下礫含む	II : 10R4/2 II : 10R5/6	鼻黒
B5	21.7	10.7	7.0	3.02	I	ナデ	凹線				廣	マーブル状	小: 10R3/2 I: 2.5YR6/6	鼻黒
В6	22.1	10.1	6.9	3.10	I	ナデ	焼過 凹線				煉	6mm以下礫含む 小礫含む	小: 10R4/2 I : 10R6/4 II : 10R4/2	
В7	22.0	10.8	6.8	3.06	I I	ナデ	焼過				<u>化</u>	ややマーブル状 5mm以下礫含む	II : 2.5YR4/2	焼過ぎみ
В8	22.2	10.5	6.8	3.06	I	ナデ	凹線				賣	6㎜以下礫含む	II: 2.5YR6/6 小: 10R4/2	鼻黒
В9	21.8	10.8	6.7	3.02	I	ナデ	凹線				部	5mm以下礫含む	I: 10R5/4 小: 2.5YR4/2	鼻黒
B10	22.7	11.2	7.3	3.30	I	粗いナデ ナデ	凹線	15	3.2	1類	子	マーブル状	2.5YR6/6	
B11	23.0	11.1	7.0	3.32	I	粗いナデ ナデ	凹線	10	2.6	1類	フ	マーブル状	2.5YR6/6	
B12	22.6	11.1	7.1	3.10	I	粗いナデ ナデ	凹線	14	2.2	1類	フ	マーブル状 15mm大礫含む	2.5YR6/8	
B13	22.5	10.9	7.2	3.20	I	粗いナデ ナデ		14	3	1類	ソ	小礫含む	2.5YR6/6	
B14	22.6	10.9	6.9	3.22	I	粗いナデ ナデ		10	3	1類	ナ	マーブル状小礫含む	2.5YR6/8	
B15	22.5	11.0	7.1	3.26	I	粗いナデ ナデ		7	1.9	1類	ر د	5 mm以下の礫含	2.5YR6/8	
B16	22.8	11.2	7.1	3.24	I	ナデ	凹線				^	マーブル状 5mm大礫含む	II: 2.5YR6/8 小: 10R4/2	鼻黒
B17	22.9	11.0	7.2	3.14	I	粗いナデ ナデ	凹線	14	2	1類	フか?	小礫含む	2.5YR6/6	
B18	22.4	11.1	7.3	3.26	I	粗いナデ ナデ		10	3	1類		マーブル状 小礫含む	2.5YR6/6	
B19	22.3	10.5	7.0	3.28	I	粗いナデ ナデ		6	1.9	1類		15mm大礫含む	10R5/4	
B20	22.7	10.7	6.9	3.14	I	粗いナデ ナデ	1/3欠	7	2.7	1類		マーブル状 小礫含む	2.5YR6/6 小:10R4/2	鼻黒
B21	22.6	11.0	7.0	3.26	I	粗いナデ	-, 3, 4	8	3.3	1類		マーブル状 小礫含む	2.5YR6/3 小:10R5/3	鼻黒
B22	22.2	10.9	6.8	3.01	I	ナデ		4	1.2	2類		15mm以下礫含む	I : 10R5/2 II : 2.5YR6/3	
B23	22.1	10.6	7.0	3.04	I	ナデ	凹線	3	0.5	2類		5mm以下礫含む	2.5YR5/3	
B24	23.0	11.0	7.5	3.42	Ι		凹線	4	1.1			小礫含む	I : 2.5YR5/3	
B25	22.2	10.7	7.2	3.24	I	ナデ	やや焼過	5	1	2類		小礫含む	10R5/4	
B26	23.3	11.3	7.4	3.40	I	ナデ	凹線	9	1	2類		小礫含む	2.5YR6/6	
B27	22.2	10.7	7.0	3.03	I	ナデ	凹線	4	1	2類			2.5YR6/4	
B28	22.5	10.9	7.1	3.30	I	ナデ	凹線	8	1.5	2類		小礫含む	10R5/4	
B29	21.6	10.5	7.1	3.03	I	.179	凹線	5	1.5	2類		小礫含む	2.5YR5/3	
	22.0		7.1		I	ナデ	凹線	5	1.5			5mm以下礫含む		
B30	22.0	10.8	7.1	3.14	I	ナデ	欠損	8 4	1.1 0.5	2類				
B31	21.7	10.3	(3.4)	(1.30)	I	ナデ	八頂	4	0.9	2類		6mm以下礫含む		長手半裁
B32	21.5	10.5	6.7	3.06	I	ナデ	凹線	9	1.5	2類		小礫含む	10R5/4	
B33	21.9	10.7	6.9	3.03	I	ナデ	凹線	4	1.1	2類		小礫含む	2.5YR6/4 II : 2.5YR6/6	
B34	22.2	10.9	7.0	3.08	I	ナデ	凹線	3	0.9	2類		6mm以下礫含む 15mm以下礫含む	小:10R4/2	やや鼻黒
B35	22.3	10.8	7.1	3.05	II	ナデ	一部欠	4	1.5	2類			10R5/4	ф III W т
B36	22.0	10.8	7.1	3.02	I	ナデ	凹線	4	1.3	2類		小礫含む	10R5/3	鼻黒ぎみ
B37	21.7	10.7	7.0	3.02	I	ナデ	凹線	6	1.8	2類		6mm以下礫含む		息田 ギュ
B38	22.6	10.8	7.1	3.28	II I	ナデ		7	1.5	2類		小礫含む	10R5/3	鼻黒ぎみ
B39 B40	21.6	10.4	6.8 7.1	2.98 3.20	I	ナデ	凹線	4	1	2類		小礫含む	10R5/3 10R5/4	
Н	22.2				II I	ナデ		5	1.4	2類	3類	マーブル状		
B41		10.4	7.1	(2.30)	II	ナデ	2/3欠 凹線 大半欠					6mm以下礫含む ブロック状	10R5/6	
B42	21.5	10.3	6.9	(2.92)	II	ナデ	ヘラ描				3類	6mm以下礫含む マーブル状	10R5/8	
B43	21.3	10.6	7.1	2.62	I	ナデ	凹線 掻き取り					小礫含む	10R5/4	. \$7 A→ +E
B44	21.4	10.3	6.8	2.90	I	ナデ		0				小礫含む	2.5YR7/6	一部欠損

a)刻印 1 類(B 1~10)

四角形の枠内に漢字 1 文字が書かれる。「製」(B1)、「吉」(B2)、「末」(B3)、「廣」(B4)、「煉」(B5)、「化」(B6)、「造」(B7)、「賣」(B8)、「部」(B9)、「子」(B10)の10種が確認できたが本来何種あったかは不明である。刻印は I 面に施すが、B9 のみ I 面に施す。「部」は他に I 面に刻印したものを 1 点確認したが、意識的に I 面に施したものかは明らかでない。文字を囲む枠は一辺1.8cmであり、文字も刻印 2 類と比較すると太めである。

例外は「子」で、刻印2類と枠の寸法が同じで文字も細めであり、I面に櫛描1類があるのも共通している。本来は刻印2類に分類すべきものである。

b)刻印2類(B11~16)

四角形の枠内にカタカナ 1 文字が書かれる「フ」(B11・12)、「ソ」(B13)、「ナ」(B14)、「ム」(B15)、「へ」(B16)の 5 種が確認できた。仮名文字47字が全てあるのか、何かの名を分解したものかは明らかでない。文字を囲む枠は一辺1.5cmであり、枠・文字ともに 1 類よりも細めである。 B16を除いて I 面には横描 1 類を描く。

c)刻印3類(B41·42)

平面の小口寄りに「-」を刻む。分布は床面の南半部に集中する。長手方向に3列並ぶうち最も内側の煉瓦に刻印され、平面の外側に向く小口寄りに刻印する傾向がある。刻印の長さは1.5cm前後であり、焼成後に打刻する。Ⅰ・Ⅱ面の区別なく施し、多くは刻印の反対側にあたる平面を2/3程度打ち欠いている。したがってこの刻印は、煉瓦積みの段階で床の水平を整えるために加工した煉瓦を区別する目的で施されたものと考えられ、煉瓦積み職人が刻んだものと推定する。

⑤櫛描

a) 櫛描 1 類(B11 ~ 15、17 ~ 21)

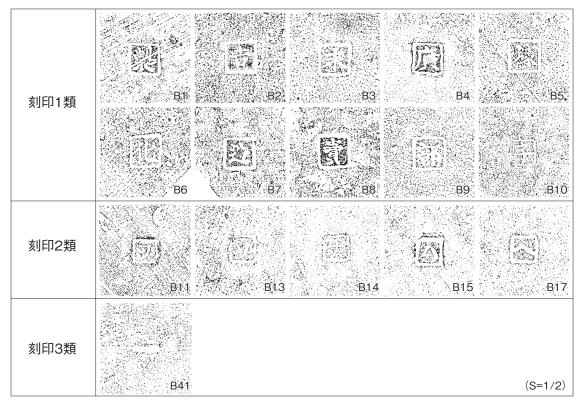


図15 転車台坑使用煉瓦の刻印

I 面の下地を粗くナデた後に櫛状工具により「×」を描く。43点採集し、11点掲載した。Ⅱ面に刻印2 類を施すものがある。

b) 櫛描 2 類 (B22 ~ 40)

櫛状工具により文字·文様状を描く。51点採集し19点掲載した。一筆書き状のもの、カタカナの文字、 数字などとみられる筆運びのものなど櫛描の形態はバラエティに富む。

⑥その他

B43はヘラ状工具により I 面に $\lceil \times \rfloor$ と線を描いたもの。B44は I 面を線状に粘土を掻き取ったものである。これらは他に確認できず、施した意図は不明である。

7検討

a)刻印

水野信太郎氏の研究では、「刻印」は製造所を示す社印、製造担当者を示す責任印があるとされる(註6)。今回確認できた刻印は同じ規格のものが複数種あることから、社印でなく責任印と考える。

1・2類は刻印煉瓦としては未周知のものであり、現状では製造元を明らかにできていないが、調査終了後に市川橋梁(姫路市)上り線の橋脚で「製」の可能性のある印(註7)、揖保川橋梁(たつの市)下り線の橋脚で「化」(註8)を確認した。これらに使用された煉瓦の寸法は転車台坑と同じ山陽形であり、この煉瓦製造所は、少なくとも明治20年代前半に山陽鉄道で用いる煉瓦を注文生産していたと推定する。ただし両地点では転車台坑では確認できなかった漢数字の刻印も認められる(註9)。また「賣」の刻印は西宮神社社頭遺跡(西宮市)出土煉瓦にある(註10)。煉瓦寸法は山陽形とは判断できないが、阪神間まで製品を流通させていた可能性を示す。

刻印の文字が意図することは明らかでない。「部」、「廣」、「吉」という姓名の一部などの可能性があるものが見られる一方で、「煉」、「化」、「製」、「造」といった工業関係とみられる文字がある。これらを並べると「煉化(石)製造部」と見ることもでき、煉瓦製造所の名称を解体し、各文字で職工またはそのグループを表している可能性もある。なお「煉化(石)」は「煉瓦」のことであり、ともに明治期に用いられ、山陽鉄道の営業報告書(註11)の中でも両者が混用されている。

b) 櫛描

櫛描を施した煉瓦は各地で確認されている。特に櫛描1類は目地のモルタルの食いつきをよくする目的で施されると考えられる。

1類を施した工具は櫛目の本数/幅から、22種程度が存在する。櫛目は $5\sim20$ 本程度を数える。工具の幅は $1.4\sim3.0$ cmであるが、櫛目の本数ごとにみると工具はそれぞれ4種程度に集約できる。

櫛描2類を施した工具は櫛目の本数/幅から17種程度が存在する。櫛目は $3\sim9$ 本を数えるが、 $3\sim6$ 本が多い。それに対応する工具の幅6.0.5、1.0、1.5、1.8cm前後の4種に集約できる。

1類に比べると2類は工具の種類が少なく幅も狭い。両者は異なる工具を用いているようである。

c) 刻印と櫛描の関係

櫛描 1 類のうち13点は II 面に刻印 2 類、 1 点は刻印 1 類を押印しており、計 6 点を掲載した。このことから刻印 2 類は櫛描 1 類を施した製造担当者あるいは班を示す責任印であると考える。作業は II 面の調整後に刻印 2 類を押印し、その後 I 面を粗くナデて櫛描 1 類を施すことになる。

次に櫛描1類の工具と刻印の関係をみたい。最も採集点数の多い「フ」はB11・12の他に5点あり4種類程度の工具を用いる。「ム」はB15の他2点あり3種、「ナ」はB14の他2点あり2種程度の工具が

確認できる。いずれの場合も1つの刻印に複数の櫛状工具が存在することになり、刻印が特定の工具とセットにはなっていない。これは複数の製造担当者が存在するか、製品の単位などで刻印を変更しているためと思われる。

櫛描2類は当初櫛描1類と同じ目的で施すもののうち製造担当者の悪戯によるものと考えていた。 しかし櫛描はⅡ面に施し、下地に粗いナデを行なわないことから、異なる工程で施していることが明 らかである。したがって施す意図も異なると考える。使用する工具も異なる。

Ⅱ面に施すことは刻印 $1 \cdot 2$ 類と同じ工程で行われるものである。また $B23 \cdot 35$ は未掲載の煉瓦に類似する文字状の櫛描が確認される。以上の点から、櫛描2類は、刻印ではないものの製造担当者を示す「責任印」と同等の性格をもっていると考える。

煉瓦の胎土を肉眼観察すると、刻印1・2類を施した煉瓦は長石などの砂粒を多く含み、「サク土」と思われる混和材が混じるのに対し、櫛描2類を施した煉瓦は砂粒が少なく、「サク土」と思われる混和材が明瞭に認められない。転車台坑使用煉瓦は、刻印により明示するグループと櫛描2類により明示する系統の異なる2つのグループが存在し、両者は製造場所も異なる可能性もある。

2. 転車台周辺採集煉瓦

B45は機械掘削中に採集したもの。同じ刻印を有する破片がもう1点出土している。長さ23.0cm、幅10.8cm、厚さ5.9cmである。この寸法は東京形(7寸5分×3寸6分×2寸:22.73×10.91×6.06cm)に近いものである。手抜成形でI面には部分的に布痕が残る。Ⅱ面に堺煉瓦株式会社の社印に類似する刻印がある。刻印の5本の端部は丸く肥厚するのが特徴であり、既知の刻印の端部が四角く終わるのとは異なる。B46は調査区東側の旧8番線ホーム付近で採集したもので、長手方向が欠損する。手抜成形でⅡ面の中央付近に岸和田煉瓦株式会社の社印に類似する刻印がある。姫路駅構内で確認された同社の刻印と比較すると大型で、同じものは出土していない。I面は全面削り加工が施され、本来の厚さは不明である。現存長14.5cm、幅10.5cm、現存する厚さ5.1cmである。

B47・48は調査区内の円形の攪乱内から出土したもの。いずれも異形煉瓦とされるものである。B47は長手が弧状を呈する。手抜成形で、I面には布の綴じ跡らしい凹線が確認できる。長さは24.5cmと21.0cm、幅12.1cm、厚さ6.8cmである。II面に「ハ」の刻印があるが、刻印は 2×1.7 cmの板状のものに刻んだ痕跡が認められる。B48は平面が楔状を呈する煉瓦である。小口は短面の幅9.0cm、長面の幅11.5cm、厚さ6.8cmを測る。手抜成形でI面には離れ砂の付着が認められる。B47・48は厚さが同じことから、セットで円形構造物を構築するのに用いられたのであろう。厚さは山陽形に近似していることから、山陽鉄道の構造物で使用されたものかもしれない。

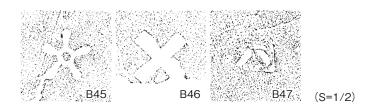


図16 転車台周辺採集煉瓦の刻印

註

- 1 名称は諸井恒平『煉瓦要説』博文館 1902年 国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる。
- 2 前掲註1
- 3 前掲註1
- 4 株式会社大平神崎 保氏、カンザキ商事有限会社神崎悠二・藤本伸和氏よりご教示を得た
- 5 大高庄右衛門「煉瓦の形状に就いて」『大日本窯業協会雑誌』第159号 大日本窯業協会 1905年
- 6 水野信太郎「国内煉瓦刻印集成」『産業遺産研究』第8号 中部産業遺産研究会 2001年
- 7 鈴木敬二「旧山陽鉄道(兵庫〜姫路間)開通時の煉瓦構造物」『兵庫県立歴史博物館紀要 塵界』第21号 兵庫県立歴史博物館 2010年
- 8 小西伸彦氏よりご教示を得た
- 9 前掲註7
- 10 『西宮神社社頭遺跡』兵庫県文化財調査報告第388冊 兵庫県教育委員会 2011年
- 11 老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1~6巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年

第5節 転車台についての検討

1. 築造時期

まず転車台坑の築造時期を使用煉瓦の寸法や組積からみてみたい。

兵庫県内に残存する山陽鉄道の構造物のうち、築造時期がある程度特定できる構造物を表4に記す。 画期として明治30年代半ばまでに構造物に用いられる煉瓦が山陽形からより薄手の山陽新形に変わる。 また目地も明治31年前後を境に平目地が採用されている。同時期に隅部処理に「羊羹」を使用した厳密な イギリス積から、「七五」煉瓦を用いるオランダ積が主流となるようである(註1)。以上の特徴から、転 車台坑は明治20年代に構築された可能性が高いと判断する。また煉瓦に施された刻印に着目すると、転 車台坑と同じか、同じ可能性のある刻印は、1890(明治23)年頃築造された市川橋梁上り線橋脚、揖保 川橋梁下り線橋脚で確認される。したがって、転車台坑も明治20年代前半に位置づけることが可能かと 考える。掘方に拡張・改築の痕跡がないことから、山陽鉄道の姫路開業時前後に築造された可能性が高 い施設と考える。

表 4 県内所在山陽鉄道の構造物

名称	所在地	煉瓦寸法	隅部処理	目地	築造年
市川橋梁橋脚(上り)	姫路市	山陽形	羊羹	山目地	1890(明23)年
揖保川橋梁橋脚(上り)	たつの市	山陽形	羊羹	山目地	1890(明23)年
梨ケ原橋梁(下り)	上郡町	山陽形	羊羹	山目地	1890(明23)年
市川橋梁橋脚(下り)	姫路市	山陽形	七五	平目地	1898(明31)年
和田旋開(回)橋	神戸市	山陽形	不明	山目地	1899(明32)年
姫路扇形機関車庫	姫路市	山陽新形又は並形	不明	不明	1903(明36)年
梨ケ原橋梁(上り)	上郡町	山陽新形	七五	平目地	1906(明39)年

(註2)

2. 転車台の構造

転車台は桁と中央支承、それを収める転車台坑よりなる。今回検出した転車台坑は転車台の下部構造 といえるもので、地表下にあるとはいえ、1つの完結した構造物である。遺構は一部破壊されていたも のの遺存状態は良好であり、上部構造となる桁の規模・構造の復元が可能かと思われる。そこで調査成 果から復元と位置づけを試みたい。

①規模・形態

明治時代の転車台については、転車台坑のみ残存するもの、現存するもの、標準設計図面がある。ここでは40呎転車台に限定して考察してみたい。

a) 転車台坑のみ残存するもの

豆腐町遺跡検出の転車台坑の他に考古学的調査が行われた明治期の転車台として新橋(註3)、七条(註4)、二条(註5)、奈良(註6)の停車場がある。これらはいずれも用途廃止により転車台は撤去され転車台坑のみが埋没して残存していた。側壁は完存するものはないため、主に平面形態を中心に対比する。なお姫路で検出されたもう1基の転車台坑の遺構は大正時代以降に構築された可能性があるため(註7)、今回の検討からは除外した。

遺構の概略

新橋(東京都)

5 I - 010

1872 (明治5)年の開業に合わせて築造されたわが国最古の転車台である。側壁は切石積み、底部はコンクリートである。中央支承台は残存しない。

3 H - 005

2基目の転車台であり、その存続時期は構内図からほぼ明らかとなっている。

七条(京都市)

1877(明治10)年開業の官設鉄道七条停車場(現京都駅)のものであるが、正確な設置時期は不明である。中央支承台の掘方は方形を呈すると思われ、厚くコンクリートを流し込んで基礎としている。

二条(京都市)

1897(明治30)年開業の京都鉄道に伴うものの可能性がある。

奈良(奈良市)

表5 発掘された転車台坑

			中央列	支承台	桁	存続期間		
	坑内径	側壁基底幅	側壁幅	床面幅	辺長	ボルト	推定長	1分
新橋5 J -010	12.2m				_	_	11.9m	明治5年~大正3年頃
新橋3H-005	12.8m	1.8m	0.38m	0.85m	1.7m	8本	12.6m	明治20年代~40年代
七条	12.4m	1.8m	0.4m	1.0m	1.73m	8本	12.2m	~大正初年?
二条	12.5m					8本	12.3m	明治30年以降
奈良	12.3m	1.38m	0.4m	0.8m	_	_	12.1m	明治20年代~ 32年
姫路	12.3m	1.4m	0.45m	0.65m	1.7m	8本	12.1m	~明治36年頃

[・]数値のうち太字は各報告書掲載図・写真から計測・判読したもの

1890(明治23)年開業の大阪鉄道あるいは1896(明治29)年開業の奈良鉄道に伴うものと推定され、1899(明治32)年の駅構内改造により移転したとされる。床面は階段状を呈し、コンクリート仕上げの部分にボルトを埋め込んでいるところから、ここに円形軌条を設置していた可能性がある。中央支承台は残存しない。

b) 現存する転車台

40呎転車台のうち転用されたものが少数現存している。そのうちJR西日本因美線の美作河井駅(岡

[・]桁の推定長は、転車台坑の径 - 0.2 mで計算したもの

山県津山市)のものが実測調査されている(註8)。製造年は美作河井駅開業をさかのぼる1923年(大正12)年とされるが、来歴は不明である。

転車台坑の内径は12.42m、深さは中央付近で約1.4m、側壁際で0.85mである。中央支承台は円形のコンクリート製で8本のボルトにより中央支承を固定する。なお主桁の長さは12.21m、高さは中央で0.935m、端部で0.57mを測る。中央支承の底部は円形を呈し、その径は1.346mである。

c) 転車台の標準設計

官設鉄道の標準設計である定規のうち、40呎転車台に関するものは、明治28年5月付の達第555号(註9)と明治42年7月付の達第660号(註10)がある。また、1893 (明治31)年発行の『鐵道工事設計参考圖面停車場之部』には達第555号と同型の転車台(註11)の他に「轉車臺之圖」甲號・乙號(註12)の2種が収録される。『鐵道工事設計参考圖面停車場之部』掲載の図は明治20年代における標準的な転車台を示すとみてよいだろう。

表6 40呎転車台の定規

		桁		転車	台坑	中央	備考	
	長さ	中央高	端高	内径	円形軌条	底径	固定	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
達第555号	41呎 3 1/4吋 12.579m	3呎 0.914m	1呎9吋 0.533m	42呎 12.801m	37呎 5 1/4吋 11.410m	4呎6吋 1.371m	4本ボルト	
達第660号	41呎3/4吋 12.515m	3呎 0.914m	1呎9吋 0.533m		37呎 5 1/2吋 11.417m			
甲號	41呎3/4吋 12.515m	3呎 0.914m	1 呎 9 吋 0.533m	41呎 5 1/4吋 12.630m	37呎 5 1/4吋 11.410m	4呎6吋 1.371m		
乙號	39呎10吋 12.141m			40呎 6 吋 12.34m	37呎 5 1/4吋 11.410m	4呎6吋 1.371m	8本ボルト	

^{・1} 时 = 0.0254 m、1 呎 = 0.3048 mで換算

②各部の比較

a) 転車台坑・桁

40呎転車台の40呎は桁の長さを示す。40呎といっても機関車の大型化に対応して41呎・42呎と長大化し、明治30年代には45呎も設置されている(註13)。転車台坑の直径は「転車台の直径より8吋位長く」(註14)余裕を持たせてある。美作河井駅の場合その差は21cm、達第555号では22cmであり、ほぼ記述に合致する。したがって転車台坑の内径-0.2mとして計算すると、転車台坑の遺構から桁の長さを復元することが可能かと考える。以下に述べる桁の長さはこの計算により復元したものである。

最も古い標準設計は明治28年5月の達第555号である。新橋3H-005は桁の長さ、転車台坑の内径ともに達第555号に近似し、達第第555号を範に築造したか、逆に3H-005と同規格のものを追認したと考えられる。達第555号の2年後を築造の上限とする二条は長さ123m(40呎4吋)とやや小型に造られる。姫路の桁の復元長は12.1m(約39呎8吋)、奈良も同規模で40呎にやや足らず、同時期の官設鉄道よりも小型の転車台を採用している。私設鉄道の転車台には官設鉄道の定規に近い甲號とともにやや小型の乙號がある。この乙號と姫路・奈良の寸法は近似することから、1つの標準的な規格として存在したものと考えられる。ただし、規模は同じでも乙號の桁は下端の屈曲が大きく、奈良の床面は階段状を呈

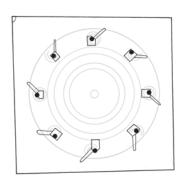
するなど、桁や転車台坑の形態は多様なようである。開業当時 山陽鉄道が保有していた機関車の全軸距(最前部の車輪から最 後部の車輪までの長さ)は四輪連結八輪車タンク機関車が5944 mm、六輪連結六輪タンク機関車が3190mm (註15)であり、桁の 長さとしてはかなり余裕をもっている。

転車台坑はその径が定規としてあるだけで、形状についての規定はない。遺構としては、新橋 5 J -010が石積みである他は全て煉瓦積みである。新橋駅建設時には煉瓦の入手が困難なため石材が用いられたといわれる(註16)ことから、官・私設を問わず煉瓦積みが主流であったとみてよいだろう。コンクリートは側壁と中央支承台の基礎にのみ用いられ、外観には現れない点も共通している。

b) 中央支承

中央支承は転車台の桁および機関車の重量を支えるもので、 鋳鉄製で円錐形を呈する(註17)。定規での中央支承の底径は全 て4呎50吋(1.371m)であり、姫路の台上に残る錆の痕跡と規模 がほぼ一致する。また、新橋 3 H - 005、七条も同規模の円形 の錆の痕跡が認められる。

達第555号では、台石に相当する部分は一辺 5 呎 4 吋(1.6256 m)の方形であり、厚さは 1 呎 6 吋(0.4572m)である。台石は現



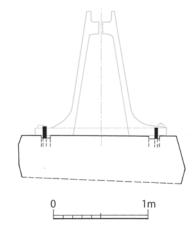


図 17 中央支承台設置推定復原図

存するもの全てが石材を用い、上面は一辺の長さ1.7m前後を測る。これは達第555号よりやや大型であるものの近い数値である。姫路は達第555号と厚さも近似する。中央支承の固定は、達第555号の中央支承は、4本のボルトで台石に固定しているが、現存する中央支承台にはすべて8本のボルトがあり、美作河井の中央支承も8本である。

40呎転車台は、桁の規模は大小があるものの、中央支承の形態・規模は官・私設問わず明治20~30年代で大きく変化していないといえる。

c) 円形軌条

転車台坑の床面には円形軌条が巡り桁端に付帯する車輪を受ける。側壁に沿う煉瓦敷の床面は円形軌条を設置するためのものであり、幅は $0.8 \sim 1\,\mathrm{m}$ を測る。円形軌条は床上に放射状に敷かれた枕木(横枕木)上に固定される例が多い。達第555号や新橋駅など転車台の古写真でも横枕木であり、少なくとも明治期の転車台の円形軌条は横枕木が主流であったと思われる。横枕木の固定は達第555号では内外にオフセット状に配置された2本1組のボルトにより床に固定され、七条でもそれを確認できる。

姫路は床面の幅が0.65mと調査された中では最も狭く、ボルトの並列がみられないことから横枕木であることは考えがたい。ボルト間の床面には枕木の痕跡が明確に確認できる部分があり、円形軌条と同じ方向に多角形に板あるいは角材を巡らせていたことが明らかである。このような形状の枕木を縦枕木という。痕跡から復元される枕木の寸法は、長さ $1.5 \sim 1.7$ m、幅約30cmである。床面に残るボルトは煉瓦上面より $18 \sim 19$ cm出て上面4.5cmにナットが付く。したがって枕木の厚さは15cm程度になるだろう。山陽鉄道の並枕木の寸法は、長さ7呎(2.133m)、幅9吋(22.8cm)、厚さ41/2吋(11.4cm)(註18)で

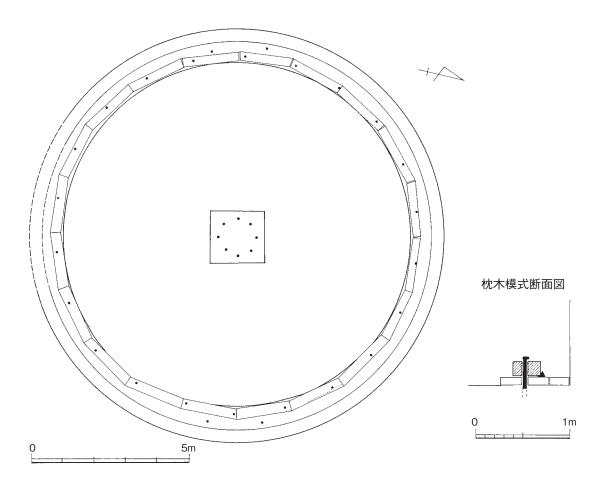


図 18 円形軌条枕木推定復元図

ある。円形軌条の縦枕木は普通枕木よりも幅が広く、厚さがあったことになる。枕木は少なくとも1本のボルトとモルタルにより床面に固定していた。痕跡から20本程度の枕木が煉瓦床面の内側沿いに多角形に周回し、この上に円形軌条が設置されたとみられる。なお、この枕木上に設置された円形軌条の推定径は $11.3 \sim 11.4$ mで定規とほぼ同じかやや小さい数値となる。

縦枕木は40呎転車台の桁上に用いられるが、円形軌条に用いた類例は知られていない。しかし概念として縦枕木が存在しないわけではなく(註19)、一部私設鉄道では縦枕木を採用していたと推定される。

d)鎖錠装置

桁を所定の位置に固定するための装置である。40呎転車台の場合、桁側の止め金具を転車台坑側の受け部へ押し込む簡単な構造とされる(註20)が、定規ではその形態や設置箇所は明確でない。

姫路の場合、受け部は壁面および床面に現存せず、その痕跡も確認できかったが、煉瓦床部分の側壁と推定円形軌条の間にある2組のボルト2が受け部を設置した場所の可能性がある。装置の形状は不明であるが、枕木を床面にボルト2で固定し、その上に鎖錠装置の受け部を設置したと推定する。このような形態の鎖錠装置は、時代が下がるが若桜転向所(鳥取県)(註21)、津和野機関区(山口県)(註22)に類例がある。1対しか鎖錠装置しかもたないことから、この転車台は機関車の転線には用いられず、転向のみに用いられたと推定する。

③小結

官設鉄道では新橋5 J -010を最古例とすれば、3 H -005築造までの約20年間に、長さが約2 呎増しているだけで形態的に大きな変化はない。これは転車台が完成した形態で日本に導入され、機関車の進化にのみ対応していたことを意味する。単純に桁が時代とともに長大化するとした場合、官・私設の違いがあるにしても明治20年代前半に築造されたであろう姫路はやや小型の、言い換えれば古い寸法を採用しているといえる。山陽鉄道は、幹線鉄道として道床、築堤、隧道などは官設鉄道に準拠して築造する一方で、路線の勾配など独自の基準で工事を行っている。転車台に関しては、基本的な形状は同じものの、類例の少ない縦枕木の採用など官設鉄道の新橋、七条とは異なる点もある。40呎転車台はその形態が多様であること、山陽鉄道はイギリスの鉄道を独自に研究していることなどから、官設鉄道を参考にしつつも社独自の定規によって転車台を築造したと推定する。

明治30年代における40呎転車台の建設費は、価格350磅とされ、これ以上・以下の場合直径1呎に付其価格約10磅の増減となるという(註23)。所有する機関車の規模とともに築造費用も転車台の規模を決定する要素といえ、私設鉄道のいくつかは所有する機関車の規模に応じて必要最小限の規模で築造したことが考えられる。後に旅客サービス面や会社経営など外向きには先進的とされる山陽鉄道だが、内向きには不要な支出を抑えるなど堅実な面も持ち合わせており、転車台も後者の一面が反映されているのかもしれない。

第6節 姫路機関庫の変遷と背景

調査地点は姫路停車場のうち姫路機関庫(後の姫路第2機関区)が所在した場所である。機関庫とは車両基地として機関車の整備・点検を行う施設であり、運転士や整備を行う職工などの人員からなる組織でもあった。機関庫の初代の転車台は、「改築後撤去その台桁を軍艦に見立てマストを建てワイヤーを曳いて油糸屑に点火満艦飾をして日露戦争の勇士を歓送した」(註24)とされる。この記述から初代の転車台は1904 (明治37)年頃にはすでに撤去されていたことになる。姫路機関庫の推移と転車台の終焉をみていきたい。

蒸気機関車は走行に石炭と水を必要とし、適宜供給する必要がある。そこで路線の要所に機関庫(機関区)が設置された。山陽鉄道の場合、終点の馬関(下関)まで概ね50哩(約80km)ごとに設置されている。山陽鉄道の起点兵庫停車場にも機関庫が設置され、姫路はそれに次ぐ。姫路は兵庫から32哩75鎖(約53km)、岡山までは55哩4鎖(約88.6km)である(註25)。姫路・岡山間は標準的な距離だが姫路・神戸間は距離が短い。神戸・姫路間は同鉄道の主要区間であり姫路機関庫はこの区間の列車運行を担っていたが、もう一つ兵庫・岡山県境の船坂峠越えにも対応する機能を有していたと思われる。船坂峠は西進する山陽鉄道の最初の難所であった。当初の計画通り緩い勾配で敷設したが勾配区間が長いため、列車によっては牽引する貨客車数に制約があったといわれる(註26)。姫路機関庫は船坂峠越えのための拠点でもあったのだろう。

機関庫関連の遺構としては、本報告の転車台坑の他にC区で扇形機関車庫、転車台坑、灰落場(引込み線と記述)が検出されている(註27)。また開業当初に建造された2線構造の矩形機関車庫が古写真で知られる(註28)。しかし山陽鉄道の営業報告において姫路機関庫に関する記述は乏しい。岡山停車場の

機関庫の施設は、車庫1棟、灰落場2箇所、石炭台2箇所、給水器台1箇所、転車台1箇所(註29)であり、姫路にも同規模の施設があったものと思われる。

転車台については、高橋秀吉氏は「あった」(註30)と記しているが、「営業報告書」には兵庫、岡山、三原、広島の停車場に転車台設置の記述があるものの、姫路に関しては記述がない。

兵庫停車場は、1888年度上半期に機関車庫の建築工事を急ぎ、「転車台給水器石炭台ノ建設モ大半ヲ竣ヘタリ」(註31)とある。山陽鉄道の機関車は、1888(明治21)年5月に最初の車両が到着した(註32)、兵庫駅構内の工場で組み立てられた後、7月から和田岬支線にて試験走行が行われていたという(註33)。兵庫機関庫は機関車の受け入れ施設として先行して工事が進められていたことがうかがえる。同時期に姫路では運転手及び火夫役宅の建築(註34)が記述されるのみである。一方、仮出物品の内訳に「金千七百六拾壱円拾六銭六厘 転車台其他製造中物件」(註35)とあり、工事の大半が竣工していた兵庫とは別に製造中の転車台があるともみえる。これが姫路に設置される転車台の可能性がある。明治21年度下半期には「一建築竣工 姫路停車場内機関車庫1棟(中略)当季中新築工ヲ竣ヘタリ」(註36)とある。姫路機関庫の施設建設は兵庫駅にやや遅れ、1888(明治21)年12月の開業時に間に合わせて工事が進められていたのかもしれない。

開業当初の山陽鉄道が保有していた機関車は、「タンク」機関車9両(註37)である。具体的には四輪連結八輪車(山陽鉄道1~6号)と六輪連結六輪車(山陽鉄道7~9号)(註38)である。前者は、当時としては標準的な規模の機関車であり、後者は主に構内の入れ換えに用いられた。この時期機関庫が置かれたのは兵庫・姫路のみであり保有車両を単純に2分すれば5両前後の機関車が各機関庫に配置されていたことになる。「大型で四輌、小型なら六輌」(註39)収納可能という機関車車庫の規模は開業時では十分であったと思われる。

山陽鉄道の機関車の大型化は岡山開業の頃から進む。「テンダー」機関車が山陽鉄道に最初に導入されたのは岡山開業の1890(明治24)年である(註40)。「テンダー」機関車は炭水車を牽引するため牽引力や長距離走行に優れるといわれる。最初のテンダー機関車である四輪連結八輪車(註41)の全軸距は11634mm (註42)である。この規模は転車台の桁よりも0.5m程短い。テンダー機関車は炭水車が空車の場合と石炭・水を積載している場合で重心が移動する。当時の転車台は中央支承の1点で桁と機関車の重量を支えるバランス式であり、重心の移動に対応するためには機関車よりも余裕を持った桁の長さが必要とされる(註43)。40呎転車台は少なくとも山陽鉄道ではタンク機関車に対応した大きさといえ、テンダー機関車を運用していくにはやや困難な規模になっているともいえる。山陽鉄道ではその後テンダー機関車を主体に増備が進み、1903 (明治36)年にはタンク機関車とテンダー機関車の比率は1:3前後(註44)となっている。

1890年の保有機関車数は25両(註45)となり、岡山延伸に伴い岡山機関庫が新設された。機関車の数字を兵庫・姫路・岡山の3機関庫で割ると配置数は各8両程度となる。さらに1897(明治30)年には姫路の機関車配置数は10両(註46)となり開業当初から倍増している。

山陽鉄道は西へ延伸するとともに貨客とも輸送量、列車の運転度数も増加する。これに関連してか姫路では給水用に新たに井戸を掘削(註47)し、1898(明治31)年には姫路機関庫事務室が1棟増築される(註48)。さらに1899(明治32)年には輸送力強化のため兵庫・姫路間が複線化される(註49)。明治30年前後は姫路機関庫の人員・組織が拡充された一方で、開業当初に設置された施設・機能が限界に達していたことが予想される。

播但鉄道は生野鉱山の鉱石を飾磨港まで輸送する目的で1895(明治28)年に生野・飾磨間が開業した(註50)。その結果姫路駅構内で山陽鉄道と播但鉄道の路線が交差することとなり、山陽鉄道の列車運行の支障となった。播但鉄道は姫路停車場に隣接する豆腐町停車場を設置(註51)して対応していたが、山陽鉄道の輸送量が増加するにつれ運行上の障害も増大する一方であった。鉄道建設規定上からも場内線路を改良する必要が生じたことから、1902(明治35)年から線路、建造物の補設・改築・移設が計画された(註52)。姫路機関庫は構内を南に拡張して設置され、1902(明治35)年11月7日付で機関車庫客車庫改築(註53)が逓信大臣より許可される。また1903(明治36)年には経営が悪化した播但鉄道を山陽鉄道が買収、施設、車両などが統合された(註54)。この時重複する施設の整理なども行われたと推測される。

明治36年度下半期には「姫路停車場及ヒ豆腐町停車場各種ノ規模拡張工事ハ全部竣了セリ」(註55)とあり、一連の事業は明治36年度内に終えていたと推定される。初代転車台は構内改築工事の中で用途廃止され、新築された扇形機関車庫に伴う転車台が機関車の転向と転線を担うことになったと思われる。

註

- 1 鈴木敬二「旧山陽鉄道(兵庫〜姫路間)開通時の煉瓦構造物」『兵庫県立歴史博物館紀要 塵界』第21号 兵庫県立歴史博物館 2010年
- 2 『豆腐町遺跡 I』兵庫県文化財調査報告第322冊 兵庫県教育委員会 2007年および前掲註1を参照 して作成。築造時期は「山陽鉄道営業報告」各期によった
- 3 『汐留遺跡 I』第1分冊 東京都埋蔵文化財センター 1997年および『汐留遺跡Ⅲ』第6分冊 東京都 埋蔵文化財センター 2003年 以下の記述はこれによる
- 4 「平安京左京八条二坊 2」『平成 8 年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究 所 1998年 以下の記述はこれによる
- 5 「平安京右京三条一坊1」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究 所 1999年 以下の記述はこれによる
- 6 『平城京左京四条四坊・四条五坊』 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第101冊 奈良県立橿原考 古学研究所 2007年 以下の記述はこれによる
- 7 工作局機械課『転車台状態調査』 1955年 記述に混乱が認められるが、大正14あるいは昭和4年設置とある
- 8 津山町並保存会『IR美作河井駅転車台実測調査』2008年 以下の記述はこれによる
- 9 明治28年5月3日付鉄工第555号(課長達)「転車台定規」『規定類聚』鉄道作業局工務部 国立国会図 書館近代デジタルライブラリー
- 10 小西純一「転車台のはなし」掲載表1『鉄道ファン』第49巻第9号 交友社 2009年
- 11 前掲註10掲載図7
- 12 内田録雄『鉄道工事設計参考図面』 定規之部 1893年 小西伸彦氏より資料提供を受けた
- 13 禾生子「講演第二章鐵道要具(六)」『鐵道時報』第221号 1903 (明治36)年12月12日
- 14 竹内季一『鐵道停車場 中編』 鐵道時報社 1916年
- 15 『明治の機関車コレクション』 機芸出版社 1968年
- 16 『日本鉄道請負業史 明治篇』 鉄道建設業協会 1967年
- 17 前掲註10
- 18 工学會『明治工業史 鐵道篇』 内外出版株式会社 1926年
- 19 時代は下がるが、前掲註14に「坑内円形軌条を支ふる枕木は従来檜材を用ふることが多けれど、混凝土にて縦枕木式に造る方が有利」との記述がある
- 20 稲葉権兵衛・大津 寛「機関車轉車臺ノ新設計ニ就テ」『業務研究資料』第23巻第26号 鐵道大臣官房 研究所 1935年
- 21 小西伸彦「因美線美作河井駅に残る40ft転車台」前掲註8収録
- 22 前掲註7
- 23 前掲註13

- 24 高橋秀吉『姫路の交通五十年』 高橋文庫 1963年
- 25 「第貳拾四回報告」(明治三十二年度上半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第4巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 26 長船友則『山陽鉄道物語』 JTBパブリッシング 2008年
- 27 『豆腐町遺跡 I』兵庫県文化財調査報告第322冊 兵庫県教育委員会 2007年
- 28 『高橋秀吉コレクション古写真 I』兵庫県立歴史博物館収蔵資料目録 4 1989年
- 29 「第七回報告」(明治二十三年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 30 前掲註24
- 31 「第貳回報告」(明治二十一年度上半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 32 「神戸又新日報」明治21年5月15日記事
- 33 「神戸又新日報」明治21年7月19日記事
- 34 前掲註31
- 35 前掲註31
- 36 「第参回報告」(明治二十一年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 37 前掲註36
- 38 「第拾六回報告」(明治二十八年度上半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第3巻『明治期私鉄営業報告書 集成(4)』日本経済評論社 2005年、車両の番号は前掲註26によった
- 39 前掲註24
- 40 「第七回報告」(明治二十三年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 41 前掲註38
- 42 前掲註15
- 43 小西純一「転車台のはなし | 『鉄道ファン』 第49巻第8号 交友社 2009年
- 44 「三十六年度期営業報告」(三十二回)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第6巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 45 「第九回報告」(明治二十四年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第2巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 46 前掲註26
- 47 「第二十一回報告」(明治三十年度下半期) 老川慶喜編「山陽鉄道会社」第3巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 48 「第貳十貳回報告」(明治三十一年度上半期) 老川慶喜編「山陽鉄道会社」第4巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 49 「第貳拾参回報告」(明治三十一年度下半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第4巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 50 前掲註18
- 51 前掲註48
- 52 前掲註44など
- 53 「第三十一回報告」(明治三十五年度下半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第5巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年
- 54 前掲註26
- 55 「第三十三回報告」(明治三十六年度下半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第5巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年

第Ⅳ章 Ⅱ区の調査結果

第1節 概要

調査区は平成10年度調査区の北側に位置する。豆腐町遺跡の東端になる。今回、報告のII-1区がA-2区の北側、II-2区がA-1区の北側にあたる。ただ、完全に接しているのではなく、1区同様8m前後の空白地が存在する。

また、今回調査区北側は姫路市教育委員会による本発掘調査が実施されている。Ⅱ - 1 区北側には官衙的な遺構・遺物が確認されている。倉庫と思われる総柱と側柱の掘立柱建物群で主軸は南北である。漆付着土器や奈良三彩・二彩など特殊な遺物が出土している。墨書土器・製塩土器が多いことや鍛冶関連遺物が出土していることも、今回調査区と共通しており、同一遺構群と思われる。井戸が多いことも共通点であり、和同開珎が出土している。北東調査区では、漆紙文書が出土した井戸と和同開珎を出土した井戸が検出されている。

Ⅱ - 1 区は406㎡で、旧線路部分にあたる。北側にはホーム断面や階段などの施設が残存しており、調査時には解体中であった。第1面は中世の水田跡を検出した。第2面で検出した遺構は掘立柱建物・柵跡・溝・井戸・石敷き遺構・土坑・落ち込み・旧河道・ピットと多彩で遺構の密度も高い。原則的にすべて奈良時代に含まれる遺構と思われる。包含層はほとんど残っておらず、中央部分の遺構覆土に限られる。大半の遺物は旧河道(SR01)から出土している。その埋土には前代の遺物も含まれている。日常雑器が多いが墨書土器・漆付着土器も少なからず含まれている。掘立柱建物から石敷遺構・井戸にかけて特殊遺物は多く出土している。

II-2 区は350㎡で、 II-1 区同様で元の線路部分にあたる。周辺の状況も同じである。旧ホームの階段や施設が残存していたことから、調査区が分離されている。検出した遺構は土坑・溝・落ち込みである。落ち込みの中には井戸の可能性の高い遺構も含まれている。西側にやや離れて位置しているSK01とSX01は時期不明であるが、それ以外は奈良時代の遺構である。井戸以外は性格がわかる遺構はなく、包含層もほとんど残存しておらず、出土遺物も寡少である。

第2節 Ⅱ-1区の遺構

遺構面は2面で調査したが、上面は中世末の水田跡だけであり西半だけを調査した。ほとんど第2面の調査に費やした。第2面は1面で調査したが、遺構の時期幅は多少あるように思われる。ただ、大きな時期差ではなく奈良時代の狭い幅に入る。検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟、柵跡2基、井戸3基、溝5条、土坑4基以上、石敷遺構2基と落ち込み・旧河道・ピットである。

水田跡

調査区西半だけで検出した。畦畔を確認した。調査区西端で直線に延びる大畦畔を、中央近くでは弧を描く畦畔と南北に延びる畦畔を検出した。西端の畦畔はN18°Eに主軸を有し、最大幅1.1mを測る。ほとんど痕跡だけで高さは数cmしか確認していない。中央付近の畦畔は最大幅2.3mある。明確な時期はわからないが、近世以前の水田跡と思われる。両者が同時期であるかも不明であるが、極端な時期差はないものと思われる。中世後半期でも新しいと考えている。

掘立柱建物

SB01は調査区中央で検出した側柱建物である。東西2間の南北棟で正方位(南北)を主軸としている。調査区内で3間確認しており、北側に延びている。現状で東西3.6m、南北4.6mを測る。2間×4間の建物と思われる。それは南から2間目の列に中央柱があることからで4間と想定しており、復元すると南北6.0mになる。柱穴は、現状では不定形になっているものもあるが、本来は方形プランの掘り方と思われる。調査した範囲の柱穴では、柱穴内での建て替えは認められない。また、明確な柱の抜き取り痕跡も確認出来なかった。南辺両側の隅柱では柱痕跡が確認出来なかったが、抜き取りの痕跡も認められなかったことから、柱穴底部の整地土と思われる。1時期の建て替えのない掘立柱建物と考えられる。柱穴の大きさは、南から2列目中央の柱穴(P30)が最も大きく、東西0.7m、南北0.6mを測る。柱径は32cmを測る。最も小さい柱は西側のP7で25cmである。深さは南辺中央の柱穴(P33)が深く、0.35mである。レベル的にも低く標高9.3mが底面になっている。隅柱が深くないのが本建物の特徴である。柱穴からは大きな土器片は出土していない。意識的に遺物は埋納していない。土師器・須恵器の破片が出土しているだけであるが、奈良時代の破片である。

SB02はSB01の南側に位置しており、主軸方向は僅かに西に振っておりN4°Wである。東西2間で南の調査区外に延びている。「豆腐町 I 」のA -2区では柱穴が確認されていないので、そこまで延びていないことになる。が今回調査部分でも残存状態が悪く断言は出来ない。今回調査した北辺も後の影響を受けていると想定しており、北西隅柱穴は柱痕跡部分だけを調査したと考えている。北辺は4.5mで南側に1.8mのところに 1 間目の柱列がある。隅円方形の掘り方をしていたものと思われる。遺物は須恵器・土師器の小片だけである。SA01に切られていることから、僅かに古い時期となる。SA01と主軸方向が同じSB01より古い可能性がある。

柵

調査区外に延びているものもあり、掘立柱建物の1辺である可能性も高い。SA01はSB01の南側に位置しており、主軸方向もSB01と同じ正方位を採っている。2間以上で西側に延びる可能性がある。柱間は4.0mで、現況では8mの長さになる。西側の柱穴だけ円形に近いが、他は隅円方形のプランで、中央の柱穴は径30cmの柱痕跡を示す。

SA02は北側石敷の南側に東西方向に並んでいる柱穴群である。主軸はN70°Wで東西から20°角度を変えている。3間検出しており、柱間は西側が2.6m、中央が2.8m、東側が5.4mの長さ10.8mである。柱穴は大きめで最大長65cm、深さ45cmを測る。プランは方形ではないが、やや角の取れた不定円形である。掘立柱建物の1辺のようにも見えるが、南北石敷の間にあり、いずれかを遮る意図があるように思える。そのことから柵跡とした。掘立柱建物であるとすれば、西側の2間であろうか。

それ以外にSB01南側にも柱穴は存在するが、確実に柵とは断定できないが、並んでいるかもしれない。

井戸

集中して検出されている。前回調査した南側や姫路市教育委員会調査の北側でも複数の井戸が確認されており、豆腐町遺跡の中で井戸の多い地域である。水脈によるものも当然あろうが、当地区周辺の遺跡の性格を示すものと思われる。井戸の上面には石敷遺構が築かれており、その間に多くの遺物が含まれている。炭を伴う層で火を使用した祭祀の可能性が高く、井戸の性格も表しているかもしれない。北側石敷遺構の下にSE01とSE03が、南側石敷遺構の下にSE02がある。

SE01は、3基の中で最も大きな井戸で縦板横桟式の方形井戸である。SE03の南側を切っているので新しいことになる。掘り方も方形で、南北1.17m、東西1.26mを測る。深さは残存する深さで0.6mである。掘り方中央より南西にずらして井側を築いている。四隅に角杭を打ち込み、枘穴によって横桟を接続して補強し、外側に幅30cm前後の縦板材を打ち込んでいる。横桟は下から30cmのところにあり、1辺6cmの角柱を使用している。井側の内法は0.6m四方であるが、土圧のため現状では歪んでいる。残存高は0.55mである。井側中央に残存していないが曲物を据えた痕跡があり、井筒である。径0.45mの曲物と思われ、現状で5cmの深さがある。井筒上面から底面に比較的多くの遺物が置かれていた。大型須恵器甕以外は精製の土師器高杯・皿・椀が出土している。精製品であるが、井側のような墨書土器は入れられていない。掘り方埋土は、井側が南西に偏っている短い部分は垂直方向に埋められているが、広い部分は水平方向に周辺を埋めてから垂直に南西部分と同じ埋土を入れている。遺物は比較的多く出土している。特に井戸底の井筒上面では墨書土器・刻書土器などがまとまって出土している。

SE02は南側石敷の下で検出されている。石敷は北側より南側の方が密集しており、稠密度が高い。 隅円方形の掘り方中央に井筒である曲物を据えるものであるが、曲物は僅かに残存するだけで痕跡に近い保存状態で取り上げ困難であった。掘り方は東西1.05m、南北0.9mで、深さ0.4mを、曲物は径0.7m、深さ0.2mを測る。土師器皿・椀・竈が出土しており、3基の井戸で最も新しいのではないかと思われる。

SE03は掘り方南側をSE01に切られている。不定の隅円方形の掘り方で、東西0.65mで南北の残存長が0.7mである。南側は極端に切られたとは思われないが、多少延びることは確実である。北側に寄せて井筒である曲物を据えている。南北に歪んで(延びて)トラック形の平面になっている。内法は現状で、東西0.35m、南北0.5m、高さ0.2mを測る。桜樹皮で結合している点は一般的である。須恵器杯Bや土師器皿が出土しているが、SE01より大きく遡ることはない。

溝

調査区西側で5条検出している。幅 $0.3 \sim 0.5$ mで、深さ $0.13 \sim 0.3$ mである。4条は平行しており、ほぼ正方位を採っている。SD05は直交方向に延びており、東西2.9mを測る。断面形状も底は丸みを持つ台形でしっかりしている。SD01 ~ SD04は北側端部が斜め方向に直線にほぼ揃っており、北側が削平されたかもしれない。SD01の東側の方が浅く、西側のSD04の方が深くなっている。南側は調査区外へ続いている。SD01が最も長く検出しており、4.5mを測る。SD04は南北に分断しており、北側だけ直線でない弧状になっていることから別遺構かもしれない。出土遺物はSD04南半だけかたまっているが、それ以外は須恵器・土師器など奈良時代の小片だけである。時期は確定しがたいが、すべて主軸方向からもSB01と同じ奈良時代の遺構と考えられる。

土坑

土坑は全体で検出しているが、遺構番号を与えたのは西側の2基だけである。北西部分や北東部分にも土坑があるが、自然の可能性が高いと判断し遺構番号を与えていない。SK01は西端中央で検出している溝状の土坑である。中央が広く最大幅0.7mを測り、長さ2.35mになり端部は両方ともに丸く納めている。断面形状は逆台形に近く底面は平坦ではない。深さは0.5mと比較的深く、中央が深く両端は浅い。下層には遺物はなく灰シルト質極細砂が堆積し、上層に同色の粘性のあるシルト層になっており、遺物が含まれる。

SK02は調査区南西隅の自然の可能性の高い落ち込みである。南西隅に向かう南北より45°近く振っている。旧河道などの最終段階の埋土かもしれない。比較的多めの礫を埋土に有している。ただ、肩部下

に一段平坦になっている部分があり、幅0.6m前後のテラス面となっている。そこから下に向かって完形に近い土器を納めていたので、最終段階の埋め立て時などの祭祀かと思われる。須恵器で肩の張る同タイプの壺を4個体以上据えている。深さは0.5m測る。土層は細かい層ではなく一気に埋めたような状態であり、底よりも中位の方が遺物は多かった。

石敷遺構

調査区中央の井戸上面にある遺構である。北側石敷がSE01・SE03の上部、南側石敷がSE02の上部に築かれている。両石敷の間には空閑地があり、そこにSA02が存在する。

北側石敷は2基の井戸の上部遺構であるが、南側石敷と比べると粗雑で部分的に抜けている。特にSE03の上部は疎らであった。SE01を中心に敷設していることが明らかで、北側は調査区外続く可能性もあるが、ほぼ終焉するものと思われる。南北3.0m余りで東西5.0mを測る。SE01上部には礫が集中し密度が高くなっている。その西側は少なくなり、すぐ西側はなくなり北西部に少量の礫が配されている。北東側も礫は多めに見られることから、未調査部に他の遺構があるかもしれない。礫は円礫を主体とする拳大からその倍程度の大きさである。少量ながら角礫も認められる。石敷は底面のレベルは比較的合わせているが、上部は均一でない。3段になっている部分が最高で、多くは2段か1段になっている。

南側石敷は礫の密度が高く、配石土坑のようである。SE02上面から北には広がっておらず南側に幅を同じくして延びている。北側石敷と異なる点は、掘り方を有し、一段下がった部分に礫を配置していることである。東西1.35mで南北に2.65mを測るが、南側はやや外に続いている。北辺は直線的で方形プランを呈し、南側は丸みを持つ形状である。それが接合した状態のプランとなっている。SE02上面が方形になり、その南側に不定円形が接続している。井戸南側の板材出土位置でくっついている。礫の大きさは北側と同じく拳大前後のもので、やはり円礫主体である。礫は坑内に詰まっているのではなく、上面中心に置かれている。1段か2段が大半である。井戸上面から0.1m上まで掘り方となっている。井戸掘り方南端から0.2mまで平坦となり、そこから低くなり始める。その変化点に板材が置かれている。また、井戸掘り方南端から1.05mのところまでが1段低くなっており、そこから上にベースは上がっている。掘り方の内外はあるが、礫の高さは同じで南へ延びていて一体感がある。が、ベースに付いている礫と上部にある礫は性格が番う可能性も高い。すなわちベースに付いている礫は井戸使用時にも配されていた礫で、上の礫は使用しなくなってからの廃棄後の行為と考えられる。

旧河道

調査区南西部で検出しており、「豆腐町遺跡 I」のA-2区で調査されているSRO1が延びているものである。旧河道全体が延びているのではなく、本調査区内で西側に曲がっている。北側に延び途中で向きを変え、西側に主体を振っている。そのことから上端を確認しただけで全体は検出していない。下端も調査区外に存在しており、肩部の緩斜面の状況を呈している。それでも遺物量は質量ともに豊富である。ベース面には植物痕跡が認められ、イネ科類が繁茂していたようである。有機質も多く認められる。その上層は凹凸が激しく炭が混じっている。シルト層・炭混じり層と堆積しており、すべての層に遺物を包含しているが、炭混じり層が傑出して濃密に包含している。墨書土器や稜椀などと日常具も多く含まれる。旧河道の底面は検出していない。

第3節 Ⅱ-2区の遺構

当初、II-1区と連続して調査する予定でII区としたが、旧駅舎の階段部分の撤去が種々の事情で残されたことから、間を開けて調査を実施した。

検出した遺構は落ち込み・土坑・溝である。多くは奈良時代の遺構でII-1区と同時期と思われる。 西側に離れているSX01とSK01だけが時期不明で後出の遺構である。

落ち込み

SX01は西側で検出しており、SK01に切られている。最大長2.2mのやや歪な円形をしている。北側が直線的で東側もやや直線的になり、南半が円形になっている。西側に細く続いているようだが、SK01によって切られている。底は平坦で浅い落ち込みである。深さは最大0.2m、最小0.1mで黄灰シルト質極細砂を単一の埋土にしている。有機質を含むシルトブロックと礫を含んでいる。礫は東側方向に限られており、西側には見られない。SX01周辺にピットが複数あり関連があるかもしれない。中世末から近世はじめにかけての遺構である。

SX02は不定形で、東西2.2m、南北1.75m、深さ0.8mを測る。底面に平たい円礫を敷き、壁に曲物の 痕跡があったことから、井戸と思われる。掘り方は東西に長い長円形で、東西2.2m、南北1.8mを測る。 深さは最大で0.45mと浅い。高い部分からの比高差でも0.7mと小さい数値であるが、豆腐町遺跡の他の 井戸も浅いことから矛盾しない。掘り方西端に寄せて中央に井筒部分を設置している。やはり長円形で 南北1.1m、東西1.5mを測る。

SX03~05も不定形で性格は明らかでない。SX03はSK02に南西隅を切られている。東西2.35m、南北2.0m、深さ0.15mである。隅の丸い三角形に近い形状で底面は平坦ではない。SX04はSX03の北東側、SX05の南側に位置しており、落ち込み間の切り合い関係はない。東西に長い溝状の落ち込みで、東西3.0m、南北1.1mである。SX05は調査区北側に延びる方形の落ち込みで東西2.6m、南北の残存長は0.8mである。南西は角張るが南東は丸みを持つ。

SX06は平面形が不定三角形で、内部に円礫を詰めていた。遺物が礫間に含まれていた。西側をSK03 によって切られている。今回の調査区ではすべて土坑が落ち込みを切っている。北辺が2.35m、南東辺が2.4m、南西辺が2.5mを測る三角形に近いが、南側に0.6mの一辺を設けている。東側に礫は集中しており、その部分だけは底は平坦である。礫のない西側は一段低くなっており、最大で0.2m深くなっている。底は中央が深くレンズ状になっている。礫は円礫を主体とするが角礫も含まれている。礫の間に奈良時代の須恵器・土師器を含んでいるが小片になっている。礫は底から0.15m上まであり、多い部分では3段になっている。上面はある程度揃えているように見えるが丁寧にはしていない。

土坑

土坑は6基検出している。楕円形のものと不定円形のものがあるが、すべて性格は不明である。 SK01には遺物は含まないが、SX01を切っていることから、中世末より新しい遺構であることが理解される。南北1.55m、東西0.7mを測り、北側は尖りぎみである。南側は丸みを持っており、深さは0.12m と浅く、底は平たい。埋土に地山や黒褐シルトのブロックを含んでおり、自然ではない。

SK01以外の土坑はすべて東半で検出している。SK02はSX03を切っている土坑である。南北1.05m、東西0.65m、深さ0.2mで底面は比較的平坦である。深さは余りなく肩部から緩斜面となり、南北に長い楕円形である。

SK03は東西に長い不定形の土坑でSX06を切っている。東西1.7m、南北0.9m、深さ0.2mを測る。東側は方形に近く、西側は丸くなっている。南北は直線的である。

SK04は東半西端で単独にある小土坑である。主軸は正方位を採り、南北0.55m、東西0.4m、深さ0.15 mを測る。

SK05・SK06は東端に位置する土坑である。SK05は南北0.75m、東西0.4m、深さ0.2mの不定円形である。主軸を南北から45°近く振っている不定形をしている。幅0.6mで長さ0.75m、深さ0.25mを測る。ともに埋土は1層である。断面形状は皿状で底は丸い。

溝

溝は1条検出している。東半中央に位置している。N25° Eの主軸方向になっている。幅 $0.15\sim0.2$ m と狭い溝で深さも最深で0.15mである。僅かに西側に湾曲ぎみだが、ほぽ直線に延びている。北側は丸みを持っており端部かもしれない。南側は調査区内で終息している。両端を検出しているなら、長さ4.7mになる。 $\Pi-2$ 区東半の遺構を東西に分けているように見える。

第4節 遺物

柵跡・ピット出土土器(1~6)

(1) はSA01出土の須恵器椀である。白っぽく胎土は緻密である。(2) は竈の把手部でSA02から出土している。(3)(4)(5) は製塩土器でピットから出土している。製塩土器の破片は今回の調査区でも多く、特に遺構から出土している。すべて丸底Ⅲ式のものである。(6) はSP42出土の土師器甕である。

溝出土遺物

- (7) は須恵器杯AでSD01から出土している。(8) ~ (16) はSD02出土で、製塩土器が多く出土している。奈良時代特有の厚手の土器で、布目は認められない、ユビ成形で端部周辺のみョコナデで仕上げている。(11) は土師器煮沸具把手部で細かいハケ整形を施している。(14) (15) は須恵器で、(14) は杯Aで底が極めて平坦である。(15) は甕で口縁部に波状文が認められる。SD03の土器は3点図化している。製塩土器 2点と須恵器壺底部 1点である。外に開く高台が付き、精製された胎土である。
- (21) ~ (29) はSD04出土土器で、やはり製塩土器が目に付く。図化した土器はすべて土師器で、須恵器の破片はあるものの確実に少ない。(29) は大型の竈の裾部で、端部は外反しユビ成形で安定を図り、ハケ整形している。竈以外に((23) の甕など煮沸具が多い。(21) は杯で((22) は皿で、ともに胎土は良好である。
- (30) ~ (40) はSD05から出土しており、やはり製塩土器・土師器煮沸具が多く含まれてものの、他の溝よりは少なく須恵器の量がやや多く認められる。(30) (32) は皿で細砂を含むものの比較的良好な胎土で丁寧に仕上げられている。ケズリで側面を整形しナデ仕上げで化粧土を塗布している。(31) は器高が高いことと体部が内湾することから椀になる。皿と比べて仕上げも粗く、ナデ整形であるがユビ痕跡が残っている。(33) (34) は甕でハケ整形で仕上げるくの字甕である。(37) ~ (40) は須恵器で、
- (37)はボタン状のつまみを有し、端部は垂下するように曲げている。天井部は平たく墨書が見られる。
- (38) は杯Aで底は平たく体部は内湾ぎみである。白っぽい色調で有機質が付着している。(39) は高台が大きく開くもので、壺の底部であろうか。(40)は杯Bで断面台形の低めの高台である。器壁は薄く、灰白を呈し胎土は緻密である。

土坑出土土器

土坑出土遺物は、土師器煮沸具・製塩土器がないわけではないが、量的に少なく溝出土土器とは大きく内容が変わっている。杯皿が多く、須恵器も通常の出土量である。瓦は1点も出土していない。(41) ~(44)はSK01出土土器で、(41)は球形の体部を持つ土師器小形甕である。底部を欠くが丸底である。ユビ成形からハケ整形し口縁部はヨコナデを施す短い頸部を持つ。(42) は土師器皿で屈曲する体部で端部は肥厚ぎみである。細砂を含むものの精製品でヨコナデで仕上げる。(43) は土師器甕で奈良時代の特徴を持つ口径が体部より大きいものである。ハケ整形で口縁部のみヨコナデ。(44) は須恵器甕の口縁部で、口径27.8cmを測る大型品である。口縁部は外反し端部は内外に肥厚する。タタキからナデ整形、ロクロケズリも見られる。肩が張るタイプで倒卵形になり丸底であろうか。

SK02出土土器は (45) ~ (52) で 9 点図化している。 1 点を除いてすべて須恵器であるが、土師器が極端に少ないわけではないが、他遺構と比較するとやはり寡少であろうか。 (45) は土師器甕で上向きの把手を有している。幅広の薄めのシャープな把手で断面方形になっている。最大腹径の上に付けており、体部は内湾しユビ成形から外面はハケ整形する。口縁部は外反しており、ハケ整形からヨコナデで仕上げる。 (46) は杯蓋で天井部は湾曲し、つまみ部も先端がまだ尖っている。杯Aと杯Bが混在しており、破片を含めても同量である。 (48) は口径18.7cmと大型で底は平たく底径14.7cmを測り、体部は直線的で端部近くで反っている。 (49) ~ (52) は似たタイプの壺である。 同が張り広口で器高の低いもので、精製品である。 (52) は他より大きく同部に刺突文が巡らされている。

(53) はSK03出土で浅い小型の椀である。丸底と思われ、細砂を含むが胎土は良好である。

井戸出土土器 (54~90)

(54) ~ (78) はSE01出土である。出土位置は井筒出土 (68) ~ (72) と井側底部となる井筒上面 (54) ~ (67) と井戸掘り方 (73) ~ (90) に分けられる。井筒上面は井戸廃棄時と考えられ、土師器・須恵器が出土している。墨書土器と刻書土器が出土しているのが特徴である。それ以外も精製の杯・皿・蓋で地元産と思われ、赤色粒・クサリ礫を胎土に含んでいる。化粧土を塗布しており、ハケの痕跡が明瞭である。口径8.0cm、器高2.1cmの小皿は余り見ない器種である。小皿と甕も出土していることは日常的な遺物も入っていたことになろうか。井筒内出土は5点である。(68) は黒色土器椀で、今回調査で唯一の黒色土器である。磨滅しており暗文は不明である。土師器杯は3点あるが、(71) は体部が屈曲しており金雲母を胎土に含み搬入品と思われる。(72) は須恵器甕口縁部で口径45.8cmと大型である。タタキ成形で口縁部は外反している。井戸掘り方からは日常雑器が多く出土している。竈・甕の破片が出土しており、意図したものとは思われないことから、前代のものであろうか。製塩土器なども含まれ、一般的な出土内容であることからも意識した遺物ではなく、周囲にあったものを埋土にした可能性が高い。(81) は須恵器杯であるが、強く被熱していることから坩堝であろうと考えている。豆腐町遺跡の性格を表す遺物である。

SE02出土遺物は 3 点(82) ~(84) 図化している。すべて土師器であるが、やはり竈など日常具が出土していることが遺跡の性格を示しているように思われる。(84)は竈で豆腐町遺跡に多く出土する裾部が棒状になっている。裾部が一段下がって突出するように成形しているのは、特徴的である。

SE03からは(85) \sim (90)の 6点の土器を図化している。(90)は遺構の時期ではなく弥生中期末の 甕である。短く外反する頸部で口縁部は外側に大きくつまみ出すように肥厚している。(85)は土師器 蓋で口径22.2cmと大きい。(88) は高台を有する土師器杯である。断面台形で端部が肥厚する高台で外 側に開いている。底径が18.4cmと大型になり、蓋とセットになる可能性があり、大きさから皿の可能性 も高い。(86)(87)は丁寧にミガキが施されている。(89)は須恵器椀で器高が高めである。

石敷出土土器 (91~162)

北側石敷の方が多く($91 \sim 152$)出土している。その中でも大半は下層となる石敷直上の炭混じり層からの出土である。石敷上層からは7点(91)~(97)図化している。遺構廃絶後の埋土で中世に下るもので、水田化する前の時期を示しているものと思われる。(91)の土師器小皿と(97)の須恵器椀が新しい時期を確実に示す資料である。12世紀末頃で、それ以外は奈良時代の遺物である。

- (98) ~ (110) は石敷上面の灰細砂出土の遺物で、墨書土器や暗文・ミガキのある杯が多く認められる。墨書は土師器・須恵器両方あり記号ではなく文字で、「大山」「柏」で前回出土例と同じである。径の大きい皿Bも出土している。転用硯も存在する。
- (111)~(152)は石敷直上の炭混じりシルト質層からの出土で大量の遺物が包含していた。墨書土器「大山」「佐太」や漆付着土器・墨の付いた土器が多く見られるのが特徴である。坩堝があるのも遺跡の性格を示しているものと思われる。暗文のある杯も多くミガキがなされているものが主体である。口縁端部は丸く肥厚するものと外側に反するものがあるが、古相を示している。須恵器にも「大山」「佐太」と同じ墨書が見られる。底部に高台を付ける際の工具痕や記号も見られる。杯は図化した中では杯Bが多いが、数量的には杯Aと杯Bの比率は余り変わらない。杯Bは体部が内湾するものより直線的に延びるシャープな作りのものが多い。底径の大きいタイプや深い杯、稜線が甘いものの稜椀に近い形状のものも出土している。平瓶・横瓶などの器種や甕などの大型品も出土している。石敷の上から小片となって出土していることから、意図的に破砕して置いたかもしれない。
- (153) ~ (162) は南側石敷出土の遺物である。(153) は土師器皿で上面出土である。稜線を持たないものでナデ仕上げである。(154) は製塩土器でユビ成形からナデ整形をしており器肉厚い。(155) は内湾する杯蓋で器高低い。端部角張り内面ミガキである。(156) は杯Aで底部丸みを持ち、(157) は杯Bで外側に開く高台を有する。杯には北側石敷同様やはり両者が混在する。(158) には底部に墨書が見られるが判読出来ない。(159) は漆付着した須恵器杯で、底部は残存していない。(160) は稜線が甘いものの稜椀である。外側に開く端部が肥厚した高台部を有する。底面に「志」の墨書が見られる。前回の調査例にも杯蓋に似た例がある。(161) は皿Bで高台周辺に刻み目状の工具痕が残っている。(162) は須恵器壺口縁部で、大きく外反して端部近くは水平に近くなり角張る。自然釉が付着している。

Ⅱ-2区落ち込み出土土器(163~188)

- (163) (164) はSX01出土で、(163) は備前焼擂鉢口縁部でⅡ区出土の図化した遺物で最も新しいものである。SX01の後に水田が認められることから、遺構は近世~近代のものである。擂り目上部がかろうじて残っている。端部は肥厚し内傾しており、色調が灰色を示すものである。(164) は外面に波状文が施された大型の口縁部である。
- $(165) \sim (174)$ はSX02の出土遺物である。井戸と考えられる遺構で製塩土器が多く見られる。杯A と杯Bが出土しており、杯Bは白っぽく胎土緻密で精製されている。(166)は口径27.6cmと大きめの皿B で丁寧な作りである。
- (175) は土師器皿でSX03出土である。多くの土師器と同様の色調・胎土をしている。底は平たく体部内湾し口縁部は外反し端部丸めている。ミガキで仕上げている。
 - (176) ~ (188) はSX06の出土遺物である。日常具が多いことが指摘できる。煮沸具である甕・竈の

破片が目立っている。ただ特徴的な遺物も出土している。(185)の須恵器壺と(188)の土馬脚部が出土しており興味深い。(185)は肩の張る広口になるものと思われ、SK02でも祭祀具として使用されている。

旧河道出土土器(189~251)

(189) \sim (192) (206) \sim (208) は土師器皿である。端部は肥厚ぎみに反っており丁寧な作りである。 (192) は稜線を明瞭に持ち底径は16.8cmと大きめで高台を有する皿Bである。 (213) も皿Bでさらに大きく、口径27.3cmを測り外反してから端部を肥厚させている。 (194) は稜椀蓋でつまみ部の低いものでつまみ部径10cmを測る。 (197) (200) (251) は須恵器甕である。 (197) (251) はタタキ成形で肩が張り口縁部は短く直立ぎみである。 製塩土器も多く含まれている。墨書土器も多く「大山」「左二」が判読できる。記号や漆付着土器も存在する。 面取りをした土師器高杯や杯蓋も出土している。杯Aと杯Bの比率はあまり変わらないと思われる。土師器甕・籠も少なからず出土している。

包含層出土土器 (252~502)

縄文土器から近世までの遺物が出土している。前回の調査に比べると弥生土器の量は極めて少ない。古墳時代の遺物も杯身と蓋が逆転する時期から増加するが、古いものは少ない。土師器の蓋は比較的多く出土している。暗文・ミガキが見られる。土師器皿・杯で高台を有するものも多く見られる。高台の高い椀も出土している。墨書土器・漆付着土器・製塩土器も多い。小皿かミニチュアの鉢と思われる小型品も存在している。鉢の中には取瓶の可能性があるものもある。面取りされた多角形の高杯も多く見られ、化粧土が塗布されている。煮沸具が多いのも問う町遺跡の特徴である。甕は長胴のものが多く、球形小型のものは少ない。口径が大きいのが多く、ハケ整形が主流である。(379)は竈蓋と思われる特殊な遺物である。ユビ成形で粗く仕上げナデ仕上げする。断面三角形の手捏ねの把手を付けている。土馬・紡錘車も特殊な出土品である。

瓦

軒丸瓦が1点と瓦当部の残っていない軒平瓦が1点出土している。軒丸瓦(T1)はSE01の井筒内から出土している。播磨国府系瓦で本町式のものである。瓦当径14.1 cm、厚さ3.15 cmを測る。平瓦は包み込んでおり、側面はケズリで裏面はナデで調整する。T11・T12だけII - 2区のSX06から出土している。それ以外はII - 1区包含層からの出土である。旧河道からも数点出土しているが、多くは石敷上面から出土している。

丸瓦は内面布目が残り、外面はナデで仕上げている。平瓦の凹面は布目が残り、コビキ痕が認められる破片もある。凸面はタタキが多く、縄目・格子・斜格子があり、それには精粗がある。端面は面取りしているものが多いが、ナデのものもある。

木器

W1はSE03の水溜めに使用されていた曲物である。土圧などで旧態を残していなかったので正確な形状は不明である。平面は円形であった可能性が高いが明らかでなく、楕円形であったかもしれない。高さはあるものの1枚の板材を曲げて作っている。板材の接合面は16cm重複させている。桜皮によって接合している。内面には通常よく見られる縦方向の刻みで曲げ易くしている。高さは18.4cmと高く、円形に復原すると直径50cmとやや大きめである。

 $W2 \sim W16$ はSE01の井戸枠である。 $W2 \sim W7$ は縦板で幅のある 4点は建築材の転用かと思われる。 W2は端部に近い長辺に両側から大きな繰り込みを入れており、確実に転用材である。幅23.2cmで厚さ

2 cmを測る。最大7 cmの平面三角形の繰り込みを入れている。W6・W7は幅11cmで下端を薄く加工している。縦板の継ぎ目の補強材である。縦板を据えた後に地山に突き刺したものと思われる。

W8・W9・W16は四隅に据えられた縦桟である。横木を差し込む枘穴が穿たれている。下端から22cm のところに枘穴を設け、その上に直交する横木を据える段を設けている。やせ細っているが、本来は1辺9cmの方柱であったと思われる。

 $W10 \sim W15$ は横木である。枘穴や繰り込みが見られる。残存状態が悪いものが多く割れている。 $W14 \cdot W15$ は縦桟との接合部で接合部分を薄く仕上げている。 W17は杭状になっている。

W18はSX02から出土しているが、SE03の井戸枠が流れたものと思われる。横木と思われ、枘穴か繰り込みがあり、加工痕が残っている。

W19は枘状に突出した柱材である。柱根部分かと思われる。

W20~W23は祭祀具であろうと考えられる。W20はSE03から出土しており、斎串である。先端側を 折り取っている。W21は板材でなく厚みのある角材に近い製品で、鳥形の可能性を考えている。W22・ W23は馬形ではないかと思われる。W22は鞍部分を表し、W23は上半部を表している。長めの製品にな る。

No.	実測	地区	出土遺構	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
W1	1	Π区	SE03	容器	曲物		61.0		
W2	19	II区	SE01	建築材	井戸枠 (縦板)	(55.6)	23.7	2.2	
W3	20	II区	SE01	建築材	井戸枠 (縦板)	(45.6)	25.8	2.3	
W4	22	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠 (縦板)	(37.4)	27.0	3.0	
W5	25	II区	SE01	建築材	井戸枠 (縦板)	(37.2)	19.0	2.5	
W6	53	II区	SE01	建築材	井戸枠 (縦板)	(63.0)	10.0	2.0	
W7	54	II区	SE01	建築材	井戸枠 (縦板)	(62.3)	9.2	2.0	
W8		Π区	SE01	建築材	井戸枠 (縦桟)	(48.7)	8.0	6.7	
W9	7	II区	SE01	建築材	井戸枠(縦桟)	53.6	8.2	5.6	
W10	10	II区	SE01	建築材	井戸枠 (横桟)	(41.7)	5.7	4.2	
W11	13	II区	SE01	建築材	井戸枠 (横桟)	(17.9)	4.7	4.0	
W12	14	IΙ区	SE01	建築材	井戸枠(横桟)	(9.0)	4.1	2.9	
W13	11	II区	SE01	建築材	井戸枠 (横桟)	(32.3)	4.3	2.3	
W14	9	II区	SE01	建築材	井戸枠 (横桟)	(27.5)	5.1	3.9	
W15	9	IΙ区	SE01	建築材	井戸枠(横桟)	(28.7)	6.1	3.9	
W16		IΙ区	SE01	建築材	井戸枠(横桟)	25.3	7.2	6.1	
W17	17	IΙ区	SE01	建築材	井戸枠 (横桟)	34.0	4.6	3.1	
W18	47	IΙ区	SX02	建築材	井戸枠 (横桟)	(52.5)	3.4	2.6	SE03 横
W19	52	IΙ区	包含層	建築材	柱根	(17.2)	7.7	6.2	
W20	56	IΙ区	SE03	祭祀具	斎串	(11.3)	0.9	0.45	
W21	2	IΙ区	SE01	祭祀具	鳥形	(12.5)	2.1	1.9	
W22	3	IΙ区	SE01	祭祀具	馬形	(15.2)	3.8	0.6	
W23		Π区	SE01	祭祀具	馬形	(35.7)	4.5	1.5	

表7 出土木器計測表

鉄器

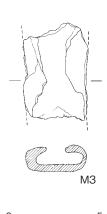
鉄斧が1点出土している。小型品で鍛造である。幅3.2cmで厚さ1.4cm、 残存長5.2cmを測る。両側を曲げており、刃先は明瞭でなく磨滅してい る。使用による磨耗であろうか。

石器

石器は3点出土している。S 1 · S 2 はII – 1 区の石敷上面の包含層からの出土である。層位は奈良時代である。S 3 はP10から出土している。

S 1 は平基式の石鏃である。重さ1.1 g と小さく両面ともに両側から丁寧に加工している。対称でなく、片側が鋭くなっている。長さ2.5 cm、厚さ0.35 cm、幅1.3 cmを測る。

鉄器



S $2 \cdot S$ 3 は砥石である。地元山塊で採取される凝灰岩質の石材であり、ともに 1 面だけ使用している。S 2 は高さがあり使用面が狭く、割れたものと思われる。残存長9.0cm、残存幅3.7cm、残存厚6.8cmで、重さは154.6 g である。S 3 は残存長4.2cm、幅4.4cm、残存厚2.0cmを測る。

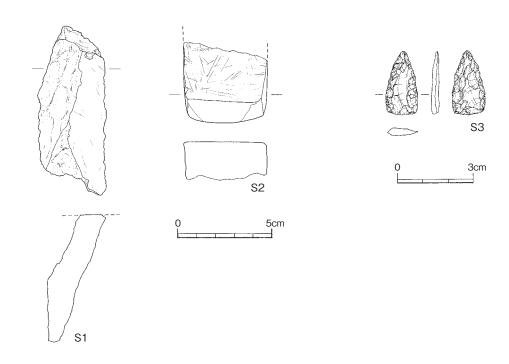


図 19 石器・鉄器実測図

表8 豆腐町遺跡 工遺物観察表 (1)

備考																								
n) 底径	(10.40)	2.00	,	,	-	ı	-	-		-	_	1	1	(14.40)	-	-	(8.40)	1	-		(7.20)	15.80	-	
法量 (cm 图 器高	(3.70)	(6.30)	(8.20)	(4.80)	(10.30)	(8.10)	(3.20)	(7.30)	(6.40)	(5.70)	(10.50)	(5.80)	(3.80)	(4.00)	(5.10)	(2.30)	(4.60)	(5.60)	(7.00)	2.20	(3.60)	3.10	(3.70)	(9.10)
四径	(14.80)	(09.60)	(11.00)	(10.00)	(12.30)	(35.40)	(13.60)	(12.40)	(11.00)	(13.60)		(11.20)	(12.40)	,	_	(23.60)	,	(11.20)	(13.00)	12.80	(11.70)	17.20	(24.80)	(12.20)
		石英	石英	東石		細砂、石英、 赤色粒	長石	雲母 、	長石、	長石、						争		辰石	長石			クサ	長石、	展石、
胎上	獭	粗砂、	粗砂、	粗砂、	粗砂	組砂、 赤色乳		粗砂、長石	粗砂 石 英	粗砂、 石英	組砂	粗砂	粗砂	組砂	細砂	細砂、	細砂	粗砂、	粗砂、	組砂	細砂	上 額 線 線 系	編 標 中 文	無 中 文
調外面	N6/0)系	にぶい橙~楢	明褐灰~ 黒	橙~灰黄 褐	黄橙~褐 灰	褐灰~に ぶい黄橙	2.5Y7/3浅 黄	明赤褐~ 黒褐	5YR4/6赤 褐	黄灰~黄 橙	橙~灰褐	2.5YR6/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/1灰 白	N6/0灰	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	2.5YR6/8 橙	橙~赤橙	N5/0)丞	2.5Y7/2灰 黄	2.5Y7/2灰 黄	褐灰~黒褐	7.5YR7/4 にぶい楢
色調 内面	N7/0)及白	7.5YR4/1 褐灰	褐灰~黒 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	明黄褐~ 褐灰		2.5Y7/3浅 黄	5YR4/4に ぶい赤褐	5YR5/6明 赤褐	2.5Y6/1~ 5/1黄灰	10YR4/1 褐灰	2.5Y6/6橙	2.5Y7/2灰 黄	2.5Y8/2灰 白		10YR7/2に ぶい黄橙			2.5YR6/6 橙	N5/0)沃	2.5Y7/2灰 黄	2.5Y8/2灰 白	10YR6/3に ぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい楢
形態の特徴	平底から内湾する体部、端 部尖りぎみ	直線的	屈曲して立ち上がり端部角 張り変形している	屈曲ぎみに外傾し端部丸い	屈曲ぎみに外傾し端部角張 る、強く焼け灰色に変化	反する	内湾し端部外側につまみ出 2 す	屈曲して内湾し端部角張る	端部厚く角張る	し端部薄く	内湾する体部、把手は下に 向く	僅かに湾曲して開く 2	内湾する口縁部で端部薄い	平たい底から外傾する体部	5、波状文	内湾する体部で端部属曲し 丸い	内湾する体部、高台短く外 反	屈曲して外傾する	屈曲して開き端部内傾ぎみ で角張る で角張る	平坦な天井部にボタン状の つまみ付く、端部内傾に折り曲げる	内湾する体部で端部丸く肥 厚する	平底ぎみで体部外傾し薄い	外反する、煤付着	屈曲して開き、端部内湾ぎ7 みで角張る
技法 他	ロクロナデ、底部ヘラ切 り	ナデからハケ整形、面取 り	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ハケ整形からナデ・ヨコ ナデ	ヨコナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ハケ整形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切りからケズリ	ロクロナデ	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ロクロナデ、高台貼り付 けナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ	ヨコナデ、ミガキ	ョコナデ、ミガキ、底面 ヘラ記号	ヨコナデ	ユビ成形からナデ
遺構	SP15	P41	SP20	P41	P42	P42	SD01	SD02	SD02	SD02	SD02	SD02	SD02	SD02	SD02	SD02	SD03	SD03	SD03	90XS	SD04	SD04	SD04	SD04
超区	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	П-1	I-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-I	II-1	II-1	П-1	II-1	П-1	II-1	II-1	I-1	II-1
器種	施	疆	製塩土器	製塩土器	製塩土器	ෂ	杯	製塩土器	製塩土器	製塩土器	把手付甕	製塩土器	製塩土器	杯	獲	拇	邸	製塩土器	製塩土器	湘	杯	≡	毈	製塩土器
種別	須恵器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	土師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	上師器	須恵器	上師器	上師器	須恵器	上師器	上師器	上師器	上師器
(五) (五) (五) (五)	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	44	4	44	4	44	44	44	45
図版	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	26	27	27	27	27
海市	П	2	က	4	5	9	2	8	6	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(2)

										1										
備考																				
) 底径	1	ı	1	ı	(11.20) (46.80)	12.80	1	(11.60)	,	,				(10.80)	(10.00)	9.00	1	ı	ı	
法量 (cm)	(11.10)	(7.40)	(00.9)	(11.20)	(11.20)	3.10	(5.40)	(3.30)	(4.00)	(00.6)	(4.90)	(7.90)	2.70	(4.20)	(2.50)	3.90	(14.00)	(4.00)	(8.00)	(24.70)
法口径	(10.70)	(14.60)	(13.90)	(10.70)	_	21.30	(17.20)	(16.60)	(23.80)	(25.70)	(11.20)	(15.40)	(18.60)	(14.20)		(12.50)	(15.60)	(16.40)	(23.80)	27.80
胎士	粗砂	粗砂	粗砂	粗砂	砂粒	組砂	細砂	組砂	細砂	細砂	粗砂	粗砂	緻密	細砂	類 級 級	緻密	細砂、石英、 赤色粒	細砂、雲母	粗砂、石英、 赤色粒	石英、長石、 チャートの 砂粒
色調 外面	にぶい黄 橙~灰黄	7.5YR7/4 ~ 6/4にぶ い楢	10YR5/3に ぶい黄褐	灭□~に 必い츕~ 明褐灰	10YR8/3 浅黄橙	に ぷい 黄	10YR4/1 褐灰	2.5Y7/2灰 黄	にぶい 一 に が ず が が が が が が が が が が が が が	にぶい黄裔~灰	5YR7/4に ぶい楢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5Y8/1灰 白		N6/0)系	灰~灰白	にぶい黄 橙~褐灰	10YR7/2に ぶい黄橙	にぶい黄橙~褐灰	灰白~黒褐~ オリーブ黒
(A)	にぶい黄 橙~黄灰	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3に ぶい黄褐	明黄褐~に ぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	にぶい橙~黒	2.5Y7/2灰 黄	 	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR5/3に ぶい黄褐	2.5Y8/1灰 首	10YR8/1 灰白	10YR6/1 褐灰	N7/0灰白	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	10YR7/2に ぶい黄橙	N5/0派~ N7/0派自
形態の特徴	外傾し端部近くで厚くなる	外傾し端部丸い	内湾し端部丸みを持つ	内湾ぎみに外傾し端部角張 る	外反し端部反る	上げ底になり体部内湾し端 部肥厚して尖る	内湾し端部丸い、煤付着	平たい底から稜を持たずに内 湾する体部、端部内に尖る	外反し端部丸く尖る、煤付 着	内湾する体部から外反する 口縁部で端部丸い、黒斑	内傾し端部内に曲げる	外傾し端部やや内傾し角張 る		湾し端部尖りぎ 寸着	内湾する、高台外に開き角 張る	平底から僅かに内湾する体 部で薄く丸い、高台台形	球形の体部に外反する口縁 部、端部尖る	屈曲しながら内湾する、端 部丸い	4湾する体部から外反する 1縁部、端部上方につまみ 8寸	胃の張った内湾する体部から外反する口縁部、端部内外に肥厚
技法 他	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からハケ整形、 ナデ	ョコナデ、ケズリ、ミガ キ (暗文)、化粧土塗布	ユビ成形からヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ、ミガキ	ハケ整形、ヨコナデ	ユビ成形からハケ、ナ デ、口縁部ョコナデ	松	ユビ成形からナデ	ロクロナデ、貼り付けナデ	、ヘラ切りか	デ、貼り付けナ	ロクロナデ、ヘラ切り、 貼り付けナデ	ュビ成形からハケ整形、 ナデ、口縁部はハケ、ョ コナデ	ヨコナデ	ュビ成形から外面ハケ整 形、内面板ナデと絞り目状 痕跡、口縁部ハケ整形から ョコナデ	タタキからナデ、口縁部 ロクロケズリ、ロクロナ デ
遺構	SD04	SD04	SD04	SD04	SD04	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SD05	SK01	SK01	SK01	SK01
超区	Π-1	II-1	Π-1	II-1	II-1	П-1	П-1	П-1	П-1	II-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	II-1	П-1	П-1	П-1	П-1
器種	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	疆	Ħ	碗?	Ħ	網	州	製塩土器	製塩土器	湘	茶	龃	杯	鯏	Ħ	州	概
種別	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	上師器	上部器	須恵器
写真図版	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	46	45	45	46
図版	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	78	28	28	28
番号	25	56	22	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44

表8 豆腐町遺跡 I 遺物観察表 (3)

備考																			
底径			(8.80)	14.70	(10.00)		8.20	10.10						13.70					
量 (cm) 器高	(23.00) -	(2.20)	(3.10)	5.50	(4.40)	(10.30)	14.55 8	17.40 1	(3.00)	(1.60)	3.20	3.80	- 09:5	4.30 1	2.10	(5.10)	(8.70)	(10.50) -	(4.10)
	(32.00)	1	(12.00)	(18.70)	ı	1	14.75	(18.40)	(13.00)	(17.80)	(19.20)	18.20	(19.20)	17.50	8.00	(17.00)	(30.00)	(22.20)	(16.90) (4.10)
		僅か			、長石、一トの	、長石、一トの	ا م ا	、長石、一トの	海	、長石、	、長石、	、赤色	、赤色	、赤色	、赤色 長石	、長石	、赤色 長石	、 表石 長石	、赤色
	報砂	長石僅)	綾	後	石子砂 英ヶ街	石ナ砂 英ヶ松 、一		石チ砂英ヤ粒	組砂	造 多 東	番石 砂 東	組砂粒	新 松 木	組砂,	着砂 村	細砂	潜砂、対	と を を が が	推 游 游
調外面	浅黄橙~ 褐灰	灰~灰黄 褐	2.5Y7/1灰 白	N5/0)系	N6/0)承	灰~灰オリーブ	黄灰~オリーブ 黒~灰オリーブ	灰褐~灰 白~灰	10YR7/3 にぶい黄 袴	に必ら黄裔~梅	灰黄~に ぶい橙	にぶい黄 橙~にぶ い橙	5YR7/6橙	灰白~浅 黄橙	浅黄橙~ にぶい橙	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2)灰 首	灰白~橙
内面	10YR8/2 	N7/0) 医自	2.5Y8/1灰 白	N7/0)系白	2.5Y7/1灰 白	N7/0灰白	灰オリー ブ~灰	明褐灰~ 褐灰	にぶい黄橙~橙	にぶい黄橙~橙~橙	灰黄~に ぶい橙	浅黄橙~ にぶい橙	浅黄橙~ 橙	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR8/2 灰白	2.5Y8/3淡 黄	灰白~橙
形態の特徴	ポから外反する 引きの断面方形	天井部平坦で扁平な宝珠つ まみ	いに内湾する口 い	平底から外反気味で端部角 張る、低く方形の高台	平底から外傾する体部、外 に開く高台	肩部に稜線を有する体部、 平底から外傾する	平たい底から肩の張る体部、 外反する口縁部で端部肥厚、 高台は肥厚し踏ん張る	\sim $\stackrel{\checkmark}{\sim}$	内湾する体部から口縁部で 端部丸い	直線的に開く天井部で端部近くで水平に、端部丸い	内湾する体部から短く外反する口縁部、端部肥厚し丸い		丸底から内湾する体部、口 縁部近くで直立し端部丸い、 内面に凹線	不安定な平底から内湾し口 縁部外反、端部内側に尖る	丸底から内湾する口縁部に、 端部丸い	内湾する体部から外反する口 縁部、端部肥厚ぎみで丸い	内湾する体部から外傾する 口縁部、端部角張る	内湾する体部から外反する 口縁部、端部丸く強いヨコ ナデによる凹みあり	平底から内湾し口縁部外反 ぎみで端部丸い
技法 他	ユビ成形からナデ、外面 ハケ整形、口縁部ハケか らヨコナデ	ロナデ、貼り付けナ	ロクロナデ、底部ヘラ切り、仕上げナデ	ナデ、仕上げナデ	ロクロナデ、仕上げナ デ、自然釉	ロクロナデ、ナデ、自然和	ロクロナデ、ナデ、自然 釉の釉垂れ顕著、口縁部 器表に焼成時の凹凸あり	ロクロナデ、ロクロケズリ、貼り付けナデ	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、底面ケズリ、内面暗文	ヨコナデ、底面ナデ、内 面ミガキ	ナデからミガキ、ヨコナ デ、化粧土塗布	ガキ、ヨコナ 上塗布、墨書	ユビ成形からナデ、ミガキ、ヨコナデ	ナデ	外面は縦方向のハケ整形、内面ナデ、口縁部ョ コナデ	外面は縦方向のハケ整形、内面板ナデ、口縁部 ヨコナデ	コナデ、
遺構	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK02	SK03	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01
型区	П-1	II-1	П-1	П-1	II-1	II-1	II-1	II-1	П-1	II-1	П-1	II-1	II-1	II-1	П-1	II-1	П-1	П-1	II-1
器種	把手付魙	湘垣	林	杯	쏌	쏌	쏌	脚	宛	湘	杯	桥	桥	桥	一三个	網	鯏	選出	杯(墨書)
種別	上前器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	上部器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
阿阿阿阿	46	45	45	45	45	46	46	46	45	47	47	46	46	47	46	47	47	47	47
図版	78	28	28	28	78	28	78	78	28	29	29	59	59	29	29	29	29	29	59
希	45	46	47	48	49	20	51	52	53	54	22	99	57	28	59	09	61	62	63

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(4)

備考																			
m) 底径	$\overline{}$	1	(8.80)	- (1	- ((11.40) (13.80)		1	1	- (- ((1	1	1
法量 (cm) E 器高	-	(6.50)	(3.80)	(10.45)	(12.40) (4.60)	(4.00)	(13.80) (5.20)	(3.50)	(45.80) (12.30)	(11.40	2.30	(3.10)	(6.50)	(16.70)	(20.00)	2.95	2.60	(3.95)	(3.10)
口径	ı		(12.40)		(12.40)	(12.30) (4.00)	(13.80)	(16.40) (3.50)	(45.80)		(14.80) 2.30	(13.20)	(15.00)	(13.00)	(15.00)	(15.45)	(15.50) 2.60	(10.40) (3.95)	(11.70) (3.10)
		、長石	沙量 数 密	石英、長石、 チャートの 砂粒		長石		金	長石,	長石、一トの	領	領	. 石英			、長石、 - トの	石英、長石、 チャートの 砂粒	、長石、一トの	長石
一胎上	細砂	機分	長石少量になる一般を	石子砂英ヤ粒	粗砂	組砂、	粗砂	中製金	石英、	石子砂 英ヶ粒	無 ゆ を か	中製金	粗砂、	細砂	組砂	対チを数を持って	石子砂 英ヤ粒	石チ砂英や粒	細砂、
色調 外面	5YR7/6橙	灰黄~黄 灰	N8/0)	N7/0)系自	10YR8/3 浅黄橙	 	灰白~黄 灰	に必い橙~苺	<u> </u>	N6/0)系~ N7/0)系白	浅黄橙~ 橙	に ぶい 黄 橋 ~ に 必 い 楂	10YR7/3に ぶい黄橙	灰白~褐 灰~楢	10YR7/2 にぶい黄 橙	2.5Y6/1黄 灰	N7/0~ 5Y7/1 灰白~ 5Y6/1灰	2.5Y6/1黄 灰	10YR7/2 にぶい黄 橙
A 内面	灰白~橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	N7/0) 及自	N7/0灰白	灰白~黒	2.5Y7/2灰 黄	灰白~黒	灰白~にぶい楢	N5/0灰~ N7/0灰白	N6/0)瓦	10YR7/3 にぶい黄 橙	に ぷい 黄巻 こと 数 こと 数 こと が が かい が が かい が が かん ひ が が か が が か が が が か が か か か か か か か か	にぶい黄橙 ~灰黄褐	褐灰~黒 褐		2.5Y7/1灰 首		2.5Y6/1黄 灰	10YR7/3 にぶい黄 橙
形態の特徴	平底	平底から内湾する体部	平底から外傾し端部丸い	裾広がりに外反する脚部	内湾する体部で端部内傾	内湾し端部丸く厚い	不安定な平底から内湾し口 縁部やや外反し丸い	内湾する体部から外傾する 口縁部、端部肥厚	内傾し口縁部外反し角張る	裾部外反し端部折り曲げて 垂下する	底部から体部に稜線持たず に内湾し端部付近で屈曲し 尖る	内湾し端部下で屈曲し内側 につまみ出す	外反ぎみに延び端部角張り ぎみに内側に尖らす	外反しており、鍔は下向き に内反	内傾する体部で端部は角張 灰黄橋~り外側に開く、把手は下向 褐灰~にき	内湾する天井部から垂下す る端部、平たいつまみ	平たい天井部から外傾し斜 N7/0~ め下方に尖った端部、平た 5Y7/1灰 いつまみ	内湾し端部丸い	内湾し端部丸く肥厚ぎみ
技法 他	ナデ、ミガキ、刻書		ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ、内面絞り目 ヘラケズリ、ナデ	デ ナ	ナデ、ヨコナデ、内面ミ ガキ	ナデ、ヨコナデ、2次焼 成	Ш	体部タタキ、口縁部ロク ロナデ	ロクロナデ、ケズリ、ナデ	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	H T T T T T	ユビ成形からナデ、ヨコ ナデ	ユビ成形からハケ、ナデ、ヨコナデ	ユビ成形からハケ整形、 ナデ、板ナデ、ヨコナデ、 有機質付着	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ、仕上 げナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ、仕上 げナデ、転用硯	ロクロナデ、ロクロケズリ、ナデ	ナデ、ヨコナデ
遺構	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE01	SE02
型区	II-1	П-1	I-1	П-1	П-1	II-1	П-1	II-1	II-1	П-1	П-1	П-1	: II-1	I-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1
器種	杯	学?	杯	高杯(脚)	椀	杯	杯	杯	毈	高杯(脚)	目	茶	製塩土器	쁿	疆	湘	湘	祖報:	極
	上師器	上師器	須恵器	須恵器	黑色 器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器
(五)	47	47	47	47	47	47	48	47	47	47	48	48	48	48	48	48	48	48	48
図版	59	29	59	29	53	53	53	53	29	53	30	30	30	30	30	30	30	30	30
番号	64	65	99	29	89	69	02	71	72	73	74	75	92	77	78	62	80	81	82

表8 豆腐町遺跡 I 遺物観察表 (5)

備考																		
底径				20	(15.30)	(18.40)			C	C		(0:			(0;		(11.40)	
	-	(0	-	11.50	(15.		-	-	00.9	5.80	-	(3.60)	-	-	(5.20)			-
井 器 器	(16.20) (2.70)	(19.10)	(22.20) (3.30)	4.30	(4.10	(1.50)	(3.90)	(7.20)	1.20	1.70	(12.20) (3.60)	3.90	(1.80)	(1.60)	4.70	(2.60)	(13.70) (2.70)	(16.80) (3.30)
八径	(16.20)		(22.20)	16.30	(18.30) 4.10		(15.80)	(16.80)	7.90	9.60	(12.20)	(12.00) 3.90	14.90		(15.00) 4.70	(14.80)	(13.70)	(16.80)
	赤色	石英		赤色		赤色									長石、 - トの			
	組砂、 粒	細砂、	組砂	性 数 数	細砂	性 性 性 体	坂石、チャー	粗砂	細砂	組砂	組砂	細砂	細砂	組砂	石英、長石、 チャートの 砂粒	細砂	細砂	細砂
色調 外面	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR8/3 浅黄橙	<u> </u>	10YR8/2)灰 白	10YR7/2 にぶい黄 橙	5YR7/6橙	黄灰~に ぶい褐	10YR7/3に ぶい黄橙	浅黄橙~ 灰白~に ぷい橙	浅黄橙~にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	にぶい橙 ~にぶい 黄橙~灰 黄褐	<u></u>	N7/0灰白	 	10YR7/3 にぶい黄 橙	2.5Y7/2灰 黄	7.5YR7/3 にぶい楢
色 内面	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	5Y6/2灰 オリーブ	1	10YR8/2 灰白	にぶい橋~黒	2.5Y5/2暗 灰黄	10YR7/3に ぶい黄橙	2.5Y8/2 ~ 2.5Y7/1)承 首	7.5YR7/6 橙	7.5YR5/4 にぶい褐	橙~灰白	N7/0)承白	10Y7/1灰 白	灰白~黄 灰	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y7/2灰 黄	7.5YR7/3 にぶい橙
形態の特徴	平底から外傾し端部丸い	直線的で鍔は厚く方形	内湾し端部肥厚する	不安定な平底から外反し端 部上につまむ	平底から内湾する体部で屈曲して外傾する、端部上方につまむ	こ外側に	内湾する体部で端部外に尖りぎみに延ばす	内湾する体部から短く外反する口縁部、端部外側に肥厚	不安定な平底から外傾し端 部丸い	上げ底で内湾し端部丸い	内湾し端部直立ぎみで尖る	内湾し端部肥厚ぎみ	緩やかに湾曲し端部直立	平坦な天井部に中央窪むボ タン状のつまみ付く、端部	平底から外傾し端部丸く肥 厚する	不安定な平底から内湾し端 部屈曲し肥厚する	外傾する口縁部で端部丸い	底部から体部に稜線持たず に外反、強いナデで端部肥 厚
技法 他	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ユビ成形からハケ、ナ デ、煤	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	ヨコナデ、板ナデ、ミガキ	ョコナデ、ナデ、ミガキ	ナデ、	ロクロナデ、ロクロケズ リ、重ね焼き痕	タタキから縦ハケ、内面 は板ナデ、口縁部ヨコナ デ	ョコナデ、底部ヘラ切り、仕上げナデ、内面仕上げナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ、2次焼成、黒斑	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ	ク、熊口内を	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ミガキ (暗文)、 化粧土	ヨコナデ、ミガキ、暗文
遺構	SE02	SE02	SE03	SE03	SE03	SE03	SE03	SE03	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側石敷	北 石 敷	北側 石敷	岩石 製 製	北 石 屋 屬 屬	北石下侧幾層	十 石 屋 層
地区	II-1	I-1	II-1	I-1	П-1	П-1	II-1	I-1	II-1	I-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	П-1	I-1	II-1
器種	柝	調	湘	杯	杯	杯	椀	罴	■小	小皿	辫	椀	搁	湘	宛	目	目	⊞
種別	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	弥生	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	上師器	上師器
写真図版	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	49	49	49
図版	30	30	30	30	30	30	30	30	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31
番号	83	84	85	98	87	88	89	06	91	92	93	94	92	96	26	86	66	100

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(6)

備考																			
底径	1	1	1	1	(19.60)	1	(11.00)	(10.80)	8.75	(13.10)	-	(12.50)	(15.60)	(0.40)	09.0	(08.30)	-		(11.60)
法量 (cm) E 器高	(3.20)	(3.30)	(3.00)	(4.20)	(1.30)	(6.70)		(3.50)	(2.20)	2.45	(2.10)	2.10	(2.40)	(3.60)	(3.60)		(3.00)	(2.60)	
法 口径	(15.10)	(17.80)	(16.20)	(11.20)	ı	(25.20) (6.70)	(14.20) (4.90)	(14.20)		(16.00)	(12.30)	(15.30)	(18.80)	(2.70)	(7.30)	(17.60) (3.10)	(18.20)	(18.80)	(17.20) 4.10
胎土	細砂、長石	細砂、赤色 粒	細砂、赤色 粒	細砂、長石、 赤色粒	細砂、長石、 赤色粒	細砂	緻密	汝	石英、長石	石英、長石	一般映	秘 映	細砂、赤色 粒	秘 映	他聯	秘 映	細砂、長石、 赤色粒	細砂	細砂
色調 外面	10YR8/2 	浅黄橙~ 橙	浅黄橙~ 橙	10YR8/2 	浅黄橙~ 橙	2.5Y8/2)永 首	N7/0)承肖 ~ N6/0)承	N6/0~ N5/0)系	N6/0灰~ 2.5Y8/1灰 白	2.5Y8/1灰白 ~ 2.5Y6/1 黄灰	にぶい橙一灰褐	10YR8/2 灰白		10YR7/3に ぶい黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	にぶい黄橙 ~にぶい橙		7.5YR7/3 にぶい楢	2.5Y8/2灰 首
内面	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	灰白~橙	10YR8/2 灰白	灰白~橙	2.5Y8/2)承 白	N7/0灰白	N6/0)系	5Y7/1)原 首	2.5Y8/1 ~ [2.5Y7/1]灰 白	褐灰〜に ぶい黄橙	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい楢	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR7/2に ぶい黄橙	灰白~橙	7.5YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2灰 白
形態の特徴	平底から外傾し端部丸い	丸底から内湾し端部近くで 屈曲し端部丸い	不安定な平底から稜線を持 たずに内湾し端部内側につ まむ	平底から外傾し端部内側に 尖る	平たい底に幅狭い高台が付く く	内傾する体部に外反する口 縁部で端部角張る	平底から内湾し端部下から 外反し端部丸い、体部は器 壁薄い	平底に低い台形の高台付く、 体部内湾し端部反って丸い	平底から外傾する体部、外 に開く高台	平底から外傾する体部で端 部尖る	平たい天井部から外傾し端 部短く垂下し丸い	平底から外傾し端部丸い	平坦な底から稜線持たずに 内湾し端部下で屈曲し丸い	平たい	平たい	不安定な底部から内湾する	稜線を持たずに内湾し端部 下で外反し丸くおさめる	端部丸く強いナデで内面凹 む、稜線持たずに内湾する	不安定な平底から稜を持た 2.5Y8/2灰ずに内湾し端部付近で外区 白
技法 他	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、暗文	ョコナデ、ナデ、墨書 「大」	ユビ成形からハケ整形、 ナデ	ナデ	外面ハケ整形、内面ナ デ、口縁部ヨコナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り、内面1方向仕上げナデ、墨書「大山」	ロクロナデ、貼り付けナ デ・爪跡、墨書「柏」	ロクロナデ、底部ヘラ切。 り、貼り付けナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ナデ、墨痕あり、転 用硯か	ヨコナデ、ロクロケズリ	ョコナデ、ミガキ、化粧 土、有機質付着	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ミガキ、墨書「大山?」	ナデ、墨書「佐太」	ョコナデ、ミガキ、ナデ、 暗文	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	ョコナデ、ケズリ、ナデ
遺構	十 石 屋 瀬	北石下側機圖	北石下 國數圖	ポープ 単単 単単 単単 単 単 単 単 単 単 単 単 単 単 重 単 画 ま 田 か 田 ま 田 ま 田 ま 田 ま 田 ま 田 ま 田 ま 田 ま 田	ポロ 国 圏	北石下側敷層	北 石 層 屬	北石下侧粼層	北石下)	北石下)	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側石敷
型区	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	II-1	П-1	П-1	II-1	II-1	П-1	II-1	П-1	II-1
器種		(書書)皿	(書書)Ⅲ	椀	聯	鯏	杯(墨書)	杯(墨書)	茶	目	捌	11	≡	底(墨書)	底(墨書)	111111111111111111111111111111111111111	111111111111111111111111111111111111111	Ħ	杯
種別	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
写 図 版	49	48	49	49	49	49	49	49	49	49	49	67	49	65	49	67	65	49	49
図版	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31
無	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119

表8 豆腐町遺跡 I 遺物観察表 (7)

																1			
備考																			
1) 底径	(13.50)	(16.80)	(8.50)	8.00	1				1	1	1	9.50	(11.40)	(08.60)	(12.20)	(00.6)	(12.60)	(00.6)	(7.20)
量 (cm) 器高	(2.60)	4.40	4.65	4.10	1.60	(9.30)	(8.20)	(1.00)	3.20	1.90	(3.00)	3.75	3.25	3.80	(2.85)	(1.20)	2.00	3.60	(3.80)
	(16.50) (2.60)	(20.60)	(13.40)	(13.00)		(23.60)	(27.00)	(15.00)	(17.80)	(14.20)	(22.20)	(13.50)	(14.40)	(15.00)	(15.10) (2.85)		(16.20)	(11.70)	
		赤色 (2	-4		'						33	石英、(長石 (3			1		石英、([石英、
胎土	細砂	組砂、海粒粒	石英、 チャー	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	後	組砂、A 長石	石英、	石英	細砂	細砂	細砂	細砂、4 長石	細砂、4 長石
外面		に ぶい黄 楢~灰黄 褐		5Y7/1灰 白	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙	灰白~に ぶい黄橙	2.5Y8/1灰 首	N5/0)永	5Y8/1~ 7/1)承自	7.5YR5/1 褐灰	2.5Y7/1 厥自~ 5Y5/1)厥	2.5Y6/1黄 灰~ N5/0 灰	2.5Y8/1)灰 首	2.5Y6/1黄 灰~ N5/0 灰	2.5Y8/3淡 黄	N8/0~ N7/0)系白	黄灰~黒 褐	7.5Y5/1)灰
11	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/2 灰白	10YR8/2 	5Y7/1灰 白	褐灰~黒 褐	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR8/2 	2.5Y8/1灰 白	N5/0)永	5Y8/1~ 7/1) 灰 自	灰白~褐 灰	N6/0~ 5Y4/1灰~ 2.5Y6/2灰黄	5Y6/1~ N5/0)系	2.5Y8/1灰 首	5Y6/1灰 ~ 2.5Y7/1 灰白	2.5Y8/3淡 黄	N8/0) 社	黄灰~黒 褐	5Y7/1)灰 白
形態の特徴	平底から外傾、端部肥厚し 丸い	内湾する体部から口縁部で 端部外反し端部丸い	内湾する体部で端部尖る、 尖りぎみの高台	平底から内湾し端部丸い	内湾する	10 to 1m1	角	平たい天井部から外反し僅 かに垂下する	内湾する天井部から内湾のまま端部垂下、平たい宝珠つまみ	平たい天井部から外傾し端部三角に垂下、小さな平たいつまみ		凹凸のある平底から内湾し 端部尖りぎみ	平底から外傾し端部丸い	平底から内湾し端部付近で やや反り尖りぎみ	平底から外傾し端部尖る	平底から外反気味に延びる	平底から外傾し端部丸い	不安定な平底から外傾し端 部反って尖る、台形の高台	平底から内湾する、高台方 形でやや外に開く
技法 他	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	+	ョコナデ、ナデ、2次焼 成なし	ヨコナデ、ミガキ、漆付 着	ハケ整形、ヨコナデ内面 板ナデ	外面縦ハケ、内面ナデ、 ヨコナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、墨書	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼り付けナデ、内面 墨付着	ロクロナデ、重ね焼き	ざ、底部ヘラ切 自然釉	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面仕上げナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面仕上げナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面仕上げナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、墨書	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ミガキ、墨書「大山」、 重ね焼き	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面・高台仕 上げナデ、重ね焼き	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面・高台仕 上げナデ
遺構	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	七 人 機	七 村 東	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側石敷	流東付路順近	北側石敷	北側石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷		北側石敷	北側石敷
超区	II-1	II-1	П-1	I-1	II-1	П-1	II-1	II-1	I-1	II-1	II-1	II-1	II-1	I-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1
器種	Ⅲ	杯	椀	杯(坩堝)	垣	粼	毈	業(墨書)	湘	州相	湘	杯	杯	杯	杯	杯(墨書)	(皇晉)Ⅲ	杯	中
種別	上師器	上節器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
写真図版	49	49	20	49	20	20	20	20	49	20	49	49	49	20	20	20	20	20	20
図版	31	31	31	31	31	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32
番号	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(8)

備考																				
) 底径	(9.40)	(7.30)	(02.6)	8.50	(11.80)	(13.60)	(11.80)	(11.50)	(27.00)	13.40	14.00	(14.00)	,	,		-		(10.00)	11.10	(6.50)
法量 (cm)	3.75	(4.90)	4.80	5.00	(00.9)	6.85	(09:2)	5.55	(6.20)	(15.90)	(15.30)	(13.90)	(10.70)	(37.50)	(3.00)	(4.00)	(2.60)	(3.70)	(1.80)	(06:0)
法口径	(13.30)	(14.30)	(13.30)	13.10	(16.80)	(19.40)	(17.40)	(18.00)	(31.70)				(14.10)		(16.60)	(10.80)	(17.80)	(13.50)	-	
胎士	細砂、石英、 長石	石英、長石	精良	石英、長石、 チャートの 砂粒	緻密	石英、長石粒 含むが緻密	瀬	組砂	瀬	緻密	組砂	細砂	長石含むが 緻密	長石含むが 緻密	組砂	粗砂	細砂	緻密	細砂	細砂
色調 外面	灰~灰白 ~黒	2.5Y5/1 ~ 4/1黄灰	7.5⊻6/1压		N7/0灰台 ~ 6/0灰	5Y5/1)承	5YR6/1褐 灰	7.5⊻6/1)层	N8/0)承白	5 <u>Y</u> 7/1灰 白	<u>灰白~明</u> オリーブ 灰	N6/0)系	N4/0)系	N5/0)系	10YR7/3 にぶい黄 橙	にぶい黄褐~褐灰	2.5Y7/1灰 白	灰白~灰 黄褐	$N6/0 \sim N4/0$	N6/0)系
(大型) (大型) (大型) (大型) (大型) (大型) (大型) (大型)	N6/0)系~ 7.5Y7/1)承白	5Y7/1灰 白	7.5⊻6/1)承	5Y7/1灰 自	N7/0)承白	$5Y5/1\overline{\mathbb{M}}$	5YR7/1明 褐灰	5Y7/1)版 自	N7/0)承白	5Y7/1灰 白	5Y7/2) 自	N6/0)系	N4/0)系	N6/0)系	10YR8/3 浅黄橙	10YR4/1 褐灰	2.5Y7/1灰 白	10YR8/2 灰白	N7/0灰白 ~ 4/0灰	N6/0)系
形態の特徴	不安定な平底から外傾し端 部丸い、外に開く高台	内湾し端部反る	平底から外傾し端部近くで 反る方形の高台	F安定な平底から僅かに外 えし端部尖る、高台端部内 小に肥厚	平底から外傾し端部丸い、 高台は端部肥厚する	平底から内湾ぎみになり端部丸い、高台外に開く	平底から屈曲しながら外傾 し端部丸い、高台低くやや 肥厚	体部内湾し途中から外反し端部丸い、細長い端部肥厚する高台	不安定な平底から内湾ぎみ に開く、端部尖る、高台低 N7/0灰白 く逆台形	肩の張る扁平な球形の体部 に外に踏ん張る高台		平底から内湾ぎみに外傾す る	口縁部外傾し端部内外に肥厚、体部内湾する	肩の張らない内湾する倒卵 形	稜線を持たずに内湾し端部 下で外反し丸くおさめる	内湾し端部角張りぎみ	内湾し端部肥厚し角張る	不安定な底部から内湾し端 部丸い	不安定な平底から外傾する、 高台方形で低く外に開く	平底から外に開く体部
技法 他	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面・高台仕 上げナデ	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、高台貼付ナデ、墨書	ロクロナデ、底部ヘラ切 7 り後ナデ、高台貼付ナ F デ、ヘラ記号	ロクロナデ、ロクロケズ リ、底部ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ、 ナデ、底面工具痕、内面仕 上げナデ	ロクロナデ、高台貼付ナ デ	ロクロナデ、高台貼付ナデ	ロクロナデ、高台貼付ナ デ、墨痕	ロクロナデ、高台貼付ナ デ	ロクロナデ、ケズリ、ナ デ、自然釉	からナデ、板ナデ	タタキからナデ、口縁部 ロクロナデ	タタキから板ナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	ユビ成形からナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ミガキ	ナデ	クロナデ、底部へ 後ナデ、高台貼付	ロクロナデ、ロクロケズリ
遺構	北 石 敷	北側 石敷	北側 石敷	北側石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北 石敷	北側 石敷	北側 石敷	北側 石敷	声 石 型 面 面	南側 石敷	南側石 敷下	南側石 敷下	南側石 敷下	南側石敷
型区	П-1	П-1	П-1	П-1	II-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	II -1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1
器種	茶	鳌	杯(墨書)	杯	杯	椀	林	施	林	쏌	平瓶	甕(底)	横瓶?	鯏	I	製塩土器	湘	杯	杯	杯(墨書)
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
区域域	20	20	50	20	20	51	51	51	51	51	51	51	51	52	51	51	51	51	51	51
図版	32	32	32	32	32	32	32	32	32	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33
番号	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158

表8 豆腐町遺跡 I 遺物観察表 (9)

50 50 50 50 50 50 50 50	庫径 備考		(12.00)	(17.80)					(23.10)		(9.00)	(9.00)	(7.00)						(10.50)	(9.50)	(13.80)			
5月 種類 器種 地区 遠接 地区 地区 地区 連起 連起 連起 連起 地区 連出 地区 地区 地区 地区 地区 地区 地区 地	(Cm)	(5.10)	(2.60)	(2.00)	(5.90)	(2.00) -	(4.00) -	3.10 -	3.20	(6.20) -				(7.00)	- (08.3)	(4.00) -	(3.30) -	2.70 -			3.40	(6.50)	(5.40) -	
写真 種類 報告 技法 他 形態の特徴 内面 小面	1 15	(13.00)	(17.80)	(19.60)	(18.70)	(29.20)		(14.80)	(27.60)	(09.60)	(12.00)	(12.20)	(10.80)	(10.40)	(11.40)	(17.00)	(13.20)	(17.80)	(13.70)	(12.80)	(16.40)	(10.00) (6.50)	(27.50) (5.40)	
5月 種別 器値 地区 遺構 技法 他	- 開	組砂	細砂	細砂	細砂	徽 稅	細砂	細砂	細砂	粗砂	緻密	類 粉	愛	粗砂	粗砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	粗砂	細砂	
5月 種別 器値 地区 遺構 技法 他	1 1	N5/0)系	灰白~灰	N7/0灰白	5Y7/1)压 自	<u>~</u>	7	10YR8/4 浅黄橙	浅黄橙~ 橙	5YR5/4に ぶい赤褐	N6/0)瓦台	N7/0灰白 ~ 6/0灰	2.5Y6/1黄 灰	5YR6/8橙	7.5YR7/4 にぶい橙	にぶい橙~褐灰	10YR8/2 灰白	橙~浅黄 橙	5YR7/6橙	5YR7/6橙	5YR7/6~ 6/6橙	5YR7/6橙	10YR6/2 灰黄褐	
写真 権別 器種 技法 他 形態の特徴 51 須恵器 年 1. 百數 リ、内面漆 ロクロナデ、ロクロケズ 内湾し端部細へなり丸い、外に 51 須恵器 面 1. 百數 リ、内面漆 ア・島書「走」 内湾し端部細へなり丸い、外に 51 須恵器 面 1. 1 百數 アクロナデ、高台貼付す 原語から体部で海部角 52 須恵器 面 1. 1 百數 アクロナデ、高台貼付す 開く高台連台形で細い 52 須恵器 面 1. 1 百數 アクロナデ、海体方 外値する機能で細い 52 土師器 面 1. 2 5X02 ロフロナデ、海状文 内湾し端部内の大きく広 52 土師器 面 1. 2 5X02 コンデ、ナデ、2水焼 大のからが高部を 52 土師器 車 1. 2 5X02 コンデ、ナデ、カル 五たから内湾し端部丸い 52 土師器 極 1. 2 5X02 コンナデ、ナデ 五たから内湾・2を 大原部のの高台 52 土師器 施 1. 2 5X02 コンナデ、キデ カール道台を 大の道台を 大の道台を 大の道台を 52 土師器 地 1. 2 5X02 コンナデ、高台 サル道台を 大の道台を 52	⑪	○	2.5Y7/3浅 黄	N7/0)承白		N5/0灰	N8/0)及白		}	l	N7/0灰白	N7/0灰白		10YR7/3に ぶい黄橙					5YR7/6橙	10YR8/2 灰白		にぶい橙~にぶい黄橙	10YR8/1 灰白	
写真 図版 種別 器種 地区 遺構 り、内面漆 技法 他 51 須恵器 坏 11-1 南側 丁、内面漆 ロクロナデ、ロク ランロナデ、高台 ランロナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、カテ 52 須恵器 土師器 11-2 SX02 ロクロナデ、高台 東上 品器 ロクロナデ、高台 東塩土器 11-2 SX02 ロクロナデ、海ボ 東塩土器 11-2 SX02 ロクロナデ、技術 カーナデ、ナデ 52 红恵器 杯 11-2 SX02 ロクロナデ、技術 カーナデ、カデ、高台 ランローナデ、カーデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、ランローナデ、カーデ 52 土師器 種土品 11-2 SX02 ロクロナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、高台 ランローナデ、ランローナデ、ランローナデ、カー ランローナデ、ナデ 52 土師器 11-2 SX02 大面からナデ ランローナデ、テガキ 52 土師器 11-2 SX02 大面からナデ、テガキ ランローナデ、ナデ 53 土 新来 11-2 SX06 ココナデ、ナデ 52 土師器 11-2 SX02 大田・ディディディディディディディディディディディディディディディディディディディ	形態の特徴	端部組入	本部へ内湾し口縁 外反し丸い、外に		ま マ 下 下	内湾し端部大きく肥厚		底部から体部にかけて稜線 なく口縁部外反し端部丸い	_	龙		平成から湾曲し端部下で外傾、端部丸く高台小さく外に開く	る体部で端部尖る、 角形の高台	緩いS字状に屈曲し端部丸い		10		平底から屈曲し外反してか ら端部丸くおさめる	平底から内湾し端部付近で 外傾し端部丸い			7	内傾する体部から大きく外 反する、端部尖る	
写真 種別 器種 地区 51 須恵器 杯 II-1 51 須恵器 極(農書) II-1 52 須恵器 面 II-1 52 五年 II-2 52 五年 II-2 52 土師器 II-2 52 土師器 II-2 52 土師器 II-2 52 五年 II-2 52 五年 II-2 52 土師器 II-2 <tr< td=""><td>洪</td><td>クロナデ、ロクロケ 、内面漆</td><td>クロナデ、</td><td>ロナデ、高台貼f 底面刻み目状の_</td><td>ロナデ、</td><td>クロナデ、</td><td>クロナデ、</td><td>コナデ、ナデ、</td><td>コナデ、</td><td>ビ成形</td><td>クロナデ、底部ヘラ</td><td>クロナデ、</td><td>クロナデ、自然釉、</td><td>ビ成形からナ</td><td>ビ成形からナ</td><td>、内面<i>ナ</i>デ、 ナデ</td><td>クロナ</td><td>コナデ、ミガ</td><td>コナデ、ナテ</td><td>Į, E</td><td>ョコナデ、ミガキ</td><td>ユビ成形からナデ</td><td>外面ハケ、内面ナデ、口 縁部ヨコナデ、2次焼成</td><td></td></tr<>	洪	クロナデ、ロクロケ 、内面漆	クロナデ、	ロナデ、高台貼f 底面刻み目状の_	ロナデ、	クロナデ、	クロナデ、	コナデ、ナデ、	コナデ、	ビ成形	クロナデ、底部ヘラ	クロナデ、	クロナデ、自然釉、	ビ成形からナ	ビ成形からナ	、内面 <i>ナ</i> デ、 ナデ	クロナ	コナデ、ミガ	コナデ、ナテ	Į, E	ョコナデ、ミガキ	ユビ成形からナデ	外面ハケ、内面ナデ、口 縁部ヨコナデ、2次焼成	
(五) (五) </td <td></td> <td>極石</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1 1</td> <td></td> <td>90XS 7</td> <td>90XS 3</td> <td>90XS 3</td> <td>90XS 7</td> <td></td>		極石				1 1														90XS 7	90XS 3	90XS 3	90XS 7	
Max Max		H	H	Ħ		前擂鉢	П	Ħ		十器工	П	П			土器	П		Ħ	П	7-II III	ш п-2	製塩土器 II-2	蹇 П-2	
M M <	種別			須恵器		П		上師器	上師器					上師器				上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	
M K K K K K K K K K		51	-			\vdash				52	52	52			52					52	52	52	52	
# 中 159 160 160 161 163 164 165 166 169 169 170 170 171 171 172 173 174 175 177 177 177 177 177 177 177 177 177						\vdash														177 34	178 34	179 34	180 34	

表 8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 (10)

備考																					
1) 底径	ı	$\frac{1.0}{1.3}$	1.10	(8.70)	(8.70)	(11.00)	2.40		ı	1	(16.80)			8.80	13.20	1	1	(23.60)	1	1	(8.40)
法量 (cm 图 器高	(5.30)	(2.60)	(00.6)	(7.90)	(4.30)	(4.10)	2.40	(2.60)	(2.30)	(3.10)	(3.10)	(27.40) (12.00)	3.90	5.00	14.10	(35.20)	(7.40)	1.70	(5.20)	(2.05)	3.40
江径	(32.10)	(13.00)	(6.30)		(10.60)	(14.60)	(7.30)	(17.40)	(18.00)	(17.60)	(22.60)	(27.40)	20.75	12.90	(10.55)	(51.60)	(13.00)	(27.60)	(56.40)	(24.40)	(14.00) 3.40
								赤色	赤色	赤色	赤色	赤色			・石英・ - トの					石英・ チャート・ 雲母の砂粒	
	組砂	細砂	細砂	組砂	組砂	細砂	粗砂		新 数 数	潜 数 数	数 数 次	組砂、 粒長石	組砂	組砂	長子砂石や粒	酸	粗砂	組砂	組砂		細砂
色調 外面	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR8/2 灰白	灰白~灰 黄褐	N7/0灰白	N8/0~ N7/0)反白	N7/0灰白	灰白~浅 黄橙	にぶい黄橙 ~にぶい橙	10YR7/3に ぶい黄橙	に ぶい 黄 橙 ~ 楢	7.5YR7/4 にぶい橙	にぶい 楢~灰黄 褐	5Y7/1)灰 白	5 <u>Y</u> 7/1灰 白	N7/0灰白 ~ 7.5Y5/1 灰	灰~灰白	7.5YR7/3 にぶい楢	N7/0灰白	N7/0灰白	10YR7/2に ぶい黄橙	橙~にぶ い黄橙
倒	10YR8/2 灰白	01	10YR5/2 灰黄褐	N7/0灰白	N8/0~ N7/0)医自	N7/0灰白	灰白~浅 黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙	にがい黄橙~橙	にぶい黄 橙~橙	10YR8/2 灰白	長黄橙~ 曷灰	.5Y7/1)承	一番~日と	N7/0灰台 ~ 7.5Y5/1 灰	灰白~灰 黄	5YR7/41こ ぶい橙	N7/0)及白	N7/0灰白		橙~にぶ い黄橙
形態の特徴	玄	直線的に広がり端部肥厚す る	内湾し端部タガ状に角張る			内湾する底部から体部で口 縁部外傾、端部丸い、歪		帯部付近で	体部と底部は稜線なく内湾し 口縁部反りぎみで端部丸い	平底から内湾し端部丸い	平底から外反する口縁部で 端部肥厚ぎみ、高台台形で 開く	内湾する体部から外反する 口縁部、端部角張る	内湾する天井部からS字状 に屈曲し端部薄く丸い、つ まみ低く開く	,端部尖2	平底から内湾し肩が張る体1 部で口縁部直立し端部角張 る	倒卵形の体部から広い頸部 となり短く厚く外傾し端部 角張る	外傾する		反りぎみに外傾し端部内側 につまみあげる	内湾し端部付近で変化し水 10YR7/2に平になり端部丸い ぶい黄橙	不安定な平底から内湾し端 部丸い
技法 他	ハケ整形からヨコナデ	ユビ成形からハケ、ナデ	ユビ成形からハケ、ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ、火欅	ロクロナデ	ユビ成形、ナデ	ョコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ、高台貼 付ナデ	ユビ成形、外面総ハケ、 ナデ、口縁部ョコナデ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、1方向の仕上げナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ、貼付ナデ	デ、ロクロケズ 、底部ヘラ切り	タタキ (横から縦方向の) 平行、内面同心円)、ロ クロナデ	太形から板ナデ、ナ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヨコナデ、ナボ	ョコナデ、ナデ
遺構	90XS	90XS	90XS	90XS	90XS	90XS	90XS	流路	流路	流路	流路	消路	流路	流路	消路	消路	売 田 昭	売 田 路 国	売 州 画		清路 東 河
超区	Π-2	1-2	Π-2	Π-2	Π-2	1-2	Π-2	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	I-1	I-1	I-1	II-1	II-1	II-1	II-1
器種	쎎		温	脚	杯	杯	土馬(脚)	⊞	Ħ	Ħ	Ħ	粼	稜椀蓋	丼	桕	槲	製塩土器	Ħ	毈	湘	林
種別	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	上師質	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	須恵器	須恵器	上師器	上師器
9年 図版	52	52	52	52	52	52	52	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53	53
図版	34	34	34	34	34	34	34	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	36	36
無	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202

表8 豆腐町遺跡 工遺物観察表 (11)

備考																					
() 底径	1	(3.00)	1	1	(13.50)	(16.30)	1		(6.40)	(8.90)	(18.90)	-	ı	1	(11.80)	1	1	1	ı	1	
法量 (cm)	2.80	3.80	(4.00)	2.70	1.80	2.55	(0.65)	4.30	4.60	4.40	(4.00)	(8.40)	(8.00)	(08.6)	(8.30)	(14.60)	38.50	(09.9)	(6.50)	(2.50)	(25.40) (6.30)
日径	(13.10)	(14.80)	(18.70)	(21.20)	(21.70)	(21.60)	,	(11.70)	(12.70)	(14.80)	(27.30)	(10.40)	(11.00)	(11.60)		(16.90)	(13.00)	(20.60)	(23.30)	(26.80)	(25.40)
	細砂	石英の砂粒	細砂	細砂	細砂	石英·長石 の砂粒	細砂		石英・ チャート・ 長石の砂粒	石英・ チャート・ 長石の砂粒	細砂	粗砂	粗砂	粗砂	細砂	細砂	組砂	細砂	細砂	粗砂	細砂
色調外面	10YR7/2に ぶい黄橙	2.5Y7/2灰 黄	灰白~橙	灰白~橙	樹~ に 黄 が	10YR7/2 にぶい黄 橙		にぶい黄橙 ~灰黄褐	浅黄~黒 褐	10YR8/2 灰白	7.5YR8/3~ 8/4浅黄橙	10YR6/4に ぶい黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙	浅黄橙~ 褐灰	2.5Y8/2灰 首	に必い黄裔~褐灰	10YR8/2 	10YR7/2に ぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	10YR7/3に ぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐
1 ' 1	107	2.5Y7/3浅 黄	浅黄橙~ 橙	灰白~橙	5YR6/6橙	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y8/2灰 白	にぶい黄橙 ~灰黄褐	2.5Y6/1~ 4/1黄灰	灰白~灰 黄褐	7.5YR8/3~ 8/6浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2灰 白	褐灰~に ぶい黄橙	灰白~ 阪~灰歯 馤	にぶい黄橙~褐灰	にぶい黄橙~褐灰	2.5Y7/2灰 黄	にぶい黄橙~褐灰
形態の特徴	不安定な平底から内湾し緩 やかに屈曲し端部丸い	丸みのある底から内湾し口縁部外反、端部上につまみあげる	平底から内湾し端部付近で 外反し丸い	不安定な平底から外傾し端 部丸い	歪な平底から緩やかに内湾 し端部丸くつまみ出す	歪な底部から内湾し端部下 で外傾する、端部角張る	本担	内湾し浅く端部丸い	内湾する体部から口縁部も 内湾し端部尖る	不安定な平底から内湾し端 部丸い	平底から内湾し口縁部外反する、 端部肥厚、高台台形で開く	緩やかに広がり端部内に角 張る	外反し口縁部直立し角張る	外傾する体部から直立ぎみ になり丸い端部	裾部に向かって外反し端部 角張りぎみに肥厚	球形の体部に外反する口縁 部が付き端部丸い	内湾する体部で口縁部短く 外反し端部角張る、鍔は低く角張る	外反する口縁部から屈曲し て底部になる、端部丸い		内湾する体部に外反する口 縁部端部角張り肥厚する	内湾する体部に外傾する口 緑部端部肥厚ぎみに丸く稜 線強い
技法 他	ョコナデ、ナデ	ョコナデ、ケズリ、ナデ	ョコナデ、ナデ、化粧土	ョコナデ、化粧土	ョコナデ、ナデ、ミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ、 ナデ	ナナ	ユビ成形からナデ	ヨコナデ、ナデ	ナナ	ョコナデ、ナデ、貼付ナ デ、ミガキ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	コビ成形からナデ、外面 吹き零れ	ナデ、絞り目、ヨコナデ、 ケズリ	外面ハケ、内面ナデ、口 縁部ヨコナデ	ユビ成形からハケ・板ナ デ、ナデ	ユビ成形からハケ・板ナ デ、ナデ	ハケ整形、ナデ、口縁部 強いヨコナデ	ハケ・板ナデ、ヨコナデ	ユビ成形からハケ、ヨコナデ
遺構	流 東肩	消 東 河	消 軍 帰 同	消 軍 帰 軍	消 軍 帰 軍	東 三 二	消 軍 帰 軍	流路 東肩	流路 東肩	東 三 馬	流路 東肩	流路 東肩	流路 東肩	斯 斯 河 河	斯 斯 斯	消 東 河 河	東 三 軍	消 軍 軍	消 屋 屋	流路 東肩	流路
型区	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II -1	II-1	II-1	II-1	: II-I	i II-1	I -1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	II-1	П-1
器種	≡	鳌	Ħ	Ħ	Ħ	Ħ	杯(墨書)	椀	椀	椀	≡	製塩土器	製塩土器	製塩土器	高 杯	쎎		≉	串	邂	灍
種別	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	器嶼干	器嶼干	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
区域	53	54	54	54	54	54	54	54	54	54	53	54	54	54	54	54	53	54	54	54	54
図版	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	37	37	37	37
番号	203	204	202	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223

表 8 豆腐町遺跡 II 遺物観察表 (12)

備考																		
底径	ı	ı	ı	ı	ı	ı	ı	1		(8.60)	(11.60)	(8.80)	8.50	(08.60)	(11.10)	(11.60)	9.50	(12.00)
量 (cm 器高	1.10	2.45	(1.10)	1.95	(1.70)	(1.35)	(2.80)	(2.65)	(2.85)	(3.60)	3.50	3.60	4.70	(2.20)	4.25	(4.55)	4.30	
法量口径 器	(16.20) 1.10	15.05	19.30	(13.90) 1.95	(14.80) (1.70)	(12.80) (1.35)	(15.15) (2.80)	(17.95)	(13.80)		(15.20)		坂 23.3 13.3 10.3	-	(13.80) 4.25	(17.00) (4.55)	(12.70) 4.30	(16.80) (5.20)
開土	組砂	組砂	細砂	細砂	鍛	細砂	細砂	組砂	細砂	細砂	類的	緻密	細砂多い	緻密	石英・長石	細砂	組砂	組砂
色調 外面	N6/0)承	5Y8/1灰 首~ 6/1灰	N7/0)承白	5Y7/1)医 自	N6/0)承	N5/0)系	N7/0)系白	N5/0)承白	N5/0)系	灰白~灰	$\frac{5Y6/1}{5/1 \%}$	N5/0)系	N7/0)承自	2.5Y7/1)承 首	黄灰~黒	N7/0)承白	2.5Y5/1黄 灰	N6/0)系~ 7/0)及自
人面面	5Y6/1)压	5Y8/1灰 首~6/1灰	N7/0)灭白	5Y7/1灰 自	N6/0)K	N5/0)系	2.5Y6/1黄 灰	N5/0)灭白	N5/0)系	N7/0) 百五百	2.5Y6/1黄 灰	N6/0压	灰白~黒 (ウルシ)	2.5Y7/1灰 首	2.5Y7/1压 首	5Y7/1灰 白)
形態の特徴	平坦な天井部で端部肥厚し 下につまみ出す、平たい宝 珠つまみ	やかに湾曲し端部下につみ出す、ボタン状つまみ	平たい天井部から緩やかに 丸く折り曲げる、つまみ欠	湾する天井部から下に丸 つまみ出す、ボタン状つ み	平たい天井部から外傾し端 部下につまみ出す	平坦な天井部から垂下する 口縁部で短く外反し尖る	坦な天井部から直立名口 部端部角張る	内湾ぎみの天井部から直立 する口縁部	内湾し端部角張る	平底から内湾する	平底から外傾し端部尖る	平底から外反気味で端部尖 る	ズ 大きく歪んでおり平底から 灰白~黒 外頃	歪んだ平底から外傾する	平底から外傾し端部尖る	内湾する体部で端部角張る	平底から内湾する体部、端部尖る、方形の外に踏ん張る高台	歪んだ平底から薄く外傾す N6/0灰る、端部尖る、外に開く高 7/0灰白
技法 他	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面不定方向のナデ	ロクロナデ、ロクロケズ 綴り、内面不定方向のナ 譲ず、重ね焼き	ロクロナデ、内面1方向 仕上げナデ、自然釉	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面不定方向のナデ ヘラ記号 「×	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面墨痕、外面墨書 「大山」	ロクロナデ、ロクロケズリ、内面不定方向のナデ	ロクロナデ、内面1方向 仕上げナデ、自然釉、転 用硯	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面不定方向のナデ	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、底部ヘラ切り、ナデ	ロクロナデ、仕上げナ デ、火櫓痕	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ナデ	1707	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面1方向ナデ、場書「左二」	ロナ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面仕上げナデ	デ、ロクロケズ 貼付ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ、内面不定方向ナデ
遺構	東 東 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国 国	東 東 原	流 東 河	東 東 東	東 東 南	流 東 河 河	東 東 三 三 三		流 東 河	消 東 河 河 河	消 東 河 河 河	流路 東肩	東 東 三 三	東 肩	東 東 東	流 東 肩	斯斯 東 河	東海東東
型区	II-1	II-1	II-1	II-1	П-1	II-1	II-1	II-1	II-1	I-1	I-1	II-1	П-1	II-1	II-1	II-1	П-1	П-1
器種	湘	湘	撇	(記号)	業(墨書)	抛	湘	抛	杯	杯(墨書)	杯	杯	桥	杯(墨書)	杯(記号)	杯	桥	茶
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
区域区	54	54	54	22	22	22	22	22	22	22	54	22	54	22	54	54	54	22
図版	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37
無	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 (13)

a 表																			
底径	(13.40)	(10.20)		(21.00)	10.50			1			(9.80)	(8.80)	_			(9.40)	(06:2)	(11.60)	(19.00)
法量 (cm)	6.30	2.30	(2.20)	2.30	7.20	(8.20)	(3.40)	(12.70)	(9.50)	(25.30)		(2.10)	(7.80)	(1.90)	(3.60)	(2.10)	(3.50)	5.60	
八径	(19.00)	(16.30)	(17.80)	(23.60)	20.60	(0.50)	(15.60)	(14.60)	(27.20)	(19.10)	(12.00) (3.00)		-	(15.80)	(16.20)			(16.40)	(21.00) (2.50)
41												*	· •				♠		
吊出	女 独	組織	鍛	組砂	組砂	一	一	一	組砂	組砂	組砂	組砂	細砂	組砂	組砂 :	組砂	組砂	組砂	細砂
色調 外面	N7/0)承白	N8/0)系台	灰白~灰	N6/0)系	N7/0)承白	N6/0~ N4/0)系	2.5Y6/1黄 灰	N7/0)灰白 ~ N6/0)灰	N5/0~ 6/0)系~ N7/0)函白	5Y8/1灰 白	7.5YR7/3 にぶい楢	7.5YR7/4 にぶい楢	7.5YR7/4 にぶい橙	N7/0) 反白	N8/0灰白 ~ N5/0灰	N7/0)	N7/0) 反白	N6/0压	N8/0)系
(A)	7.5YR7/1 明褐灰	N8/0灰白	N7/0灰白	N6/0)系	N6/0)系	N6/0)系	N7/0灰白	N6/0)系	N6/0)还	2.5Y8/1灰 首	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/2 灰白	5YR7/6橙	N7/0) 医自	N7/0灰白	N7/0灰白	灰白~黒 (ウドシ)	N6/0灰	N8/0灰
形態の特徴	湾曲する底から内湾する体, 部、端部薄くなり丸い、方形の高台	不安定な平底から外傾する、 端部丸い	平底から外傾する、端部丸」 い	平底から湾曲ぎみに外傾し」 端部丸い	丸底から内湾し稜線を持って外反する、端部下で水平 に開く、高台高く方形	肩の張る扁平に内湾する体 部から短く直立する口縁部、] 端部丸い		直立ぎみの体部で肩張り内湾する、外反する口縁部で] 内側につまみ上げる	内湾する体部から外反し端 部内外に肥厚する	倒卵形の体部から外反し端 部外側に肥厚	内湾する底部から体部で口、縁部外値、端部反りぎみに分える	平底に外反する高い高台	外反する、面取り(11面)	内湾し口縁部近くで屈曲し 端部下に肥厚し丸い	頃し端部 〈開く	計部肥	平底から内湾、方形の高台	平底から外傾し尖る、高台 方形	平底から外傾し端部尖る
技法 他	ロクロナデ、貼付ナデ、 内面不定方向ナデ、転用 観	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ナデ、ミガキ、墨書 「大山」	ロクロナデ、ケズリ、ナ デ	ロクロナデ、ロクロケズ リ	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ミガキ、高台貼付ナ デ	ロクロナデ、沈線、重ね 焼き、自然釉	ロクロナデ、自然釉	ユビ成形、ロクロナデ	体部タタキ、口縁部ロク ロナデ、自然釉	内面2種の同心円タタキ、 外面格子状タタキ、カキ メ、ロクロナデ	ョコナデ、化粧土	ョコナデ、高台貼付ナデ	ユビ成形、絞り目、ケズ リ	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、仕上げ貼付 ナデ	ロクロナデ、貼付ナデ、 漆付着	ロクロナデ、貼付ナデ	ロクロナデ
遺構	東 東 三 三	東 東 東 原	流路 東肩	流 東 京 原 記 記	流東付路順近	清 本 所 所 所	流 東 海 原 近	流東 住路 原近	流東 住路 原近	法 基 证 证 证		人声出	人力 掘削	人 掘削	大型型	人力超過	大型石河	人为当	人力 掘削
超区	П-1	П-1	Π -1 $\frac{?}{3}$	I-I	П-1	II-1	I-1	П-1	П-1	П-1	н Н	Н	Į	H	П	Н	Н	Н	I
器種	落	(霍暈)	≡	I	稜椀	础	础	脚	鯏	鯏	Ħ	斑	高杯	捕	稜椀蓋	杯	杯(漆)	鉢	Ħ
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器	上師器	工師器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
(五) (五) (五) (五) (五)	54	55	22	22	55	22	55	55	55	55	26	99	99	99	99	99	26	99	26
図版	37	37	37	37	37	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38	38
番号	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(14)

備考																						
底径							(00.9)		(5.70)						(17.00)	(12.70)	(19.40)	11.70			(10.25)	
(Cm) 電	3.90)	4.60)	(10.20)	(00.9)	(3.70)	(6.20)	(3.00)	15.40) -	4.20 ((2.10)	(2.20)	1.90) -	(2.40) -	(2.70)	2.00		(4.05)	3.30	(3.80)	3.90	3.25	3.40) -
	(12.60) (3.90)	(11.00) (4.60))	(40.00) (15.40)	(12.70)	(17.50)	(24.70)	(24.50) (1.90)	(29.40)	(30.00)	-	(17.60) (4.40)	(24.20)	14.40	(14.60)	(14.50)	(15.00)	(13.90) (3.40)
胎土	細砂	細砂	細砂	細砂	粗砂	細砂	細砂	粗砂含む	細砂	細砂	細砂	細砂	組砂	細砂	クサリ礫	細砂	組砂	クサリ礫	細砂	細砂	長石、 チャート、 母のむ、	細砂
色調 外面	7.5Y7/1灰 台	N7/0) 医自	灰~灰白	灰白~灰	10YR5/4に ぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5Y8/2 灰白~ 5Y5/1 灰	浅黄橙~ 黄灰~黒	N6/0)系	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8/2灰 首	2.5 Y8/2灰 白	2.5Y8/2灰 首	2.5Y7/2灰 黄	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	2.5Y7/2灰 黄	2.5Y7/3浅 黄	橙~灰白	10YR8/2 灰白	2.5Y7/3浅 黄	灰白~暗 灰
内面 内面	7.5Y7/1灰 自	N7/0) 医自	5Y6/1)系	N7/0) 医自	10YR4/4 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5Y8/2压 首	10YR7/2 にぶい黄 橙	5PB4/1暗 青灰	2.5Y8/2灰 白	2.5Y6/2灰 黄	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8/2灰 首	2.5Y7/2灰 黄	10YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	2.5Y7/3浅 黄	2.5Y7/3浅 黄	橙~灰白	10YR8/2 灰白		10YR7/2に ぶい黄橙
形態の	外反し端部近くで水平になる る	外反し端部内外に肥厚	杯部底平たい、裾外反する	外傾し端部面になり肥厚	内湾し端部丸い	外反する	上げ底から外反する	部屋	内湾する底部体部で受部短く 開き尖る、反りは外反し尖る	THT	内湾し端部付近で水平に屈曲	内湾し端部付近で水平に屈曲	内湾し端部やや下に向く	内湾し口縁部外反し端部上 に丸い	内湾する、高台尖りぎみの 逆台形	内湾する底部から体部で口 縁部外反する、端部丸い	平底から内湾し屈曲して口 縁部外質、端部肥厚、高台 丸く低い	平底から外傾し端部反って尖る	内湾する体部から緩やかに 外反し端部丸い	湾曲する底部から体部で口縁部外反、端部肥厚	平底から内湾し直立ぎみに なる端部外側につまみ出す	平底から内湾し端部内側に 10YR7/2に 肥厚ぎみにつまみ出す ぶい黄橙
技法 他	ロクロナデ、自然釉	ロクロナデ、自然釉	ロクロナデ	ロクロナデ、沈線、波状 文	ナデ、沈線	ョコナデ、ハケ、凹線	ナデ、底面葉脈痕	ユビ成形からハケ整形、 直線文、刻み目、黒斑	ロクロナデ、ロクロケズ リ、ナデ	ナデ、ミガキ、化粧土	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、 化粧土	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、 化粧土	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ、ヨコナデ、 暗文	ナデ、ヨコナデ、高台貼 付ナデ	ナデ、ヨコナデ、高台貼 付ナデ	ナデ、ケズリ、ヨコナデ、 高台貼付ナデ、ミガキ	ケズリ、ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ、化粧土	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ナデ、ヨコナデ
遺構	人力 掘削	人力 掘削	人为超三	人力 掘削	集 行 近 近	SE01	炭混じ り層	SE03	黒ツア	沢湖に 圏間	示説 国間に	受領国別	受海に 国間に	沢湖に 圏間に	派遣 の 圏 に	炭混じ り層	労働に	沢海 に 画	示説で 圏間	炭混じ り層	労働に	炭海にり層
型区	I	I	Н	Ι	I-1	I-1	II -1 西半	П-1	I-1	四 田 瑞-1		П-1	П-1	田田 十二	H -1 图 瑞型	II -1 西端	II-1	田田 十二	日 田 十 二	口 一1 西	П-1	H -1 西端
器種	中	亜	高杯	鯏	鉢	壺(頸部)	邂	鰕	杯	湘	湘	湘	湘	湘	≡	杯	I	杯	杯	杯	林	杯
種別	須恵器	須恵器	須恵器	맞는	器之上	\mathbb{H}	弥生土器	弥生士 器	須恵器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上節器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
阿阿阿斯	99	99	99	99	26	99	99	99	22	99	99	99	99	99	99	99	22	99	99	99	99	99
図版	38	38	38	38	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39
番号	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 (15)

□ □ 1	写真 種別		=	器種	型区	遺構		技法 他	形態の特徴	内面	調外面外面	- 開土	法量口径 器	(Cm)	底径	備考
11 熱語 ナデ、ココナデ、化粧土 等度から外類し端部反り 10.788/3 床積 編砂 (12.70) (2.90) 11 接護 ナデ、ココナデ、ミガキ 万を元を元がら 48.80 (2.78 × 10.80 13.80 13.90 13.	26 上師器	器	⊨			炭綿にり層の	ĨK.	17	平底から内湾し端部丸い	にぶい黄橙~にぶい橙	10YR7/3に ぶい黄橙			1		
II 影響と ナデ、ヨコナデ、ミガキ 不安元学成立 端部丸い 15 影響と ナデ、ヨコナデ、ミガキ 不安元学の 端がない 15 影響と ナデ、ヨコナデ 電な平成から内湾と端部丸い 15 15 15 15 15 15 15 1	26 上師器	器			7	大岩岩	ĨK.	コナデ、	平底から外傾し端部反り みで丸い	10YR8/3 浅黄橙	灰白~明 赤褐		(12.70)	- (06:		
正 正 55 57 57 52 57 52 57 52 57 57	26 上師器	開			-	炭湖にの層に	Ĩ,	コナデ、ミガ	_	2.5Y8/2灰 台	2.5Y8/2灰 首		(13.85) 3.		1.50	
	26 上師器	開				沢湖に 回屋に	Ĩ,	1 1	歪な平底から内湾し端部肥 厚	10YR7/3に ぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい楢		(13.30) 3.		(26:01	
施(後) 11-1	26 上師器	野		(書書)		炭湖にり層の	15 ===	切り、ヨコ	平底から外傾し端部尖りぎみ	2.5Y8/2灰 首			(14.80) (3		(00:01	
加震者	26 上師器	中		i(漆)		大当当当	Ĩh		内湾する	黒~暗褐	5YR6/6橙	~	-	.10) -		
	26 上師器	□/□		(量量)		2	,	ふっ切り、			2.5Y8/1灰 首	細砂	-0	- 05.		
小皿 II-1 上部 19 下の ココナデ、ヘラ切 平底から外傾し端部丸い 75VR76 縮砂 (780) (110) 桁 II-1 炭混じ ナデ、ヨコナデ 子底から外傾し端部原厚し IOYR/32 25YR8/2 細砂 - (280) 析 II-1 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ヘラ切 平底から外傾し端部取厚し IOYR/33 上点が遺稿 子であり (1350) 3.85 析 II-1 炭温じ ナデ、ヨコナデ 常加して底から体部、口線 IOYR/33 IOYR/34 海佐山 (1350) (345) 杯 II-1 炭温じ ナデ、ヨコナデ 常からり (138) 大のする 大のする 大のする 大のはの (150) (340) 杯 II-1 炭温じ ナデ、ヨコナデ 平底から内湾し口縁部外 (25) (25) (25) 大のり (150) (340) (440) 杯 II-1 砂層 (25) (25) (25) (25) (25) (25) (25) (25)	26 上師器	□/□		(書書)	-	派記 の 圏 に	ĨĽ.	3ヘラ切り、	平底から内湾す	2.5Y8/1灰 首	2.5Y8/2灰 首	細砂	- (1	- (05		
検 11-1 核混じ ナデ、ヨコナデ	26 上師器	ūΜ		□ I		集 上砂石	Ĭ,	コナデ、ヘラ			7.5YR7/6 橙				.30	
杯 II.1 炭混と 方デ、ヨコナデ、ヘラ切 平底から外質し端部肥厚し Sv.黄橙 つたぶい物 砂粒 マートの (13.50) 3.85 杯 II.1 炭混と カデ、ヨコナデ、ヘラ切 平底から外質し端部丸い DOYR8/2 IOVR/31	57 上師器	μVπ		Pert.		炭混じ り層	Ĭ,		外反する	2.5YR8/2 灰白	I .	細砂	- (2		3.70)	
杯 II.1	26 上師器	-14-				炭混じり層	Ĭ,	コナデ、ヘラ	平底から外傾し端部肥厚 丸い	10YR7/3に ぶい黄橙	燈褐	石英、長石、 チャートの 砂粒			(02:21)	
体 II-1 炭湿じ ナデ、ヨコナデ、ヨコナ 平底から体部、口縁 10YR7/3に 5YR7/6档 存む一トの (17.65) 370 体 II-1 炭湿じ コビ成形、ナデ、ヨコナ 平底から外反する口縁部で 2.5Y8/2床 (10YR8/3) 細砂 (15.90) (340) 体 II-1 炭湿じ コナ・カー デ、ガキ TEから内湾し口縁部外反 (5YR8/4) (10YR/3) (440) 体 II-1 炭湿じ ナデ、ヨコナデ 平底から内湾し口縁部外反 (5YR8/4) (5YR7/6档 細砂 (16.30) (440) 体 II-1 炭湿じ ナデ、ヨコナデ ・ 工・ (14.8)の (14.0) (14.0) (16.30) (4.40) 体 II-1 炭湿じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ (14.0) (14.0) (14.0) (14.0) (16.30) (4.40) (16.30) (4.40) 体 II-1 炭湿じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ (14.0) (14.0) (14.0) (14.0) (14.0) (16.30) (4.40) (16.30) (4.40) 体 II-1 炭湿じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ (14.0) (14.0) (14.0) (14.0) (14.0) (16.20) (14.0) (14.0) (14.0) (16.20) (14.0) (14	27 工師器	71-		16	-1	炭海じ り層	デ	77	平底から外反し端部丸い		10YR8/2 灰白		(16.30)		(02:21	
杯 II-I 炭混じ ユビ皮形、ナデ、ヨコナ 平底から外反する口縁部で 2578/2灰 10YR8/3 細砂 (15.90) (3.40) 杯 II-I 炭混じ オデ、ヨコナデ 平底から内湾し口縁部外反 (25YR8/4 5YR7/6燈 細砂 (16.70) (3.40) 杯 II-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ 上端部地厚し丸い 機会表達盤 (10YR7/3) 細砂 (16.30) (4.40) 杯 II-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ 上端部地厚し丸い (16.30) (4.40) (4.00) 杯 II-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ 口縁部外反し (25Y8/2) (25Y8/2) (25Y8/2) (18.20) (3.80) 杯 II-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ 口縁部外反し 平底から外反し端部尖る 25Y8/2) (25Y8/2) (18.20) (3.80) 杯 II-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ヘラ切 歪な底部から外傾し端部丸 (25Y8/2) 麻砂 (19.60) 5.20 III-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ヘラ切 歪な底部から外傾し端部丸 (25Y8/2) ボウー管 (25Y8/2) (19.60) 5.20 III-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ヘラ切 歪な底部から外傾し端部丸 (25Y8/2) ボウード (25Y8/2) (19.60) 5.20 III-I 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ (258からりがしい (250) (25Y8/2) (25Y8/2) III-I 炭混じ (25Y8/2) (25Y8/2) (25Y8/2) III-I 炭混じ (25Y8/2) (25Y8/2) III-I 炭混じ (25Y8/2) (25Y8/2) III-I 炭混じ (25Y8/2) (25Y8/2) III-I 炭混じ (25Y8/2) (25Y8/2) III-I 炭混砂 (25Y8/2) (25Y8/2) <	22 上師器			10	-1	炭混じり層	ĨĹ	T T	一一	10YR7/3に ぶい黄橙		、長石、 - トの	(17.65) 3.		(13.80)	
杯 II-1 人力 ナデ、ヨコナデ 平底から内湾し口縁部外反 (支責権) 7.5 YR8/4 5 YR7/6檣 細砂 (16.70) (3.40) 杯 II-1 炭混じ ナデ、チズリ、ヨコナデ 平底から内湾し口縁部外反 (支責権) (10 YR7/3) 細砂 (16.30) (4.40) 杯 II-1 炭混じ ナデ、ヨコナデ 平底から内湾し口縁部外区 (支責権) (15.70) (4.20) 杯 II-1 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ (政部外反し端部状る) 15 YR/2/2 (フェン・黄色) 18.45 4.70 杯 II-1 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ミガキ 平底から外度し端部状る 15 YR/2/2 (フェン・ヴェート) 18.20 (18.20) 5.20 本 III-1 炭混じ ナデ、ヨコナデ、ヘラ切 至を底部から外傾し端部丸 (ではっ端 (大力・管理を) 10 YR/8/3 7.5 YR/4 オキート、 (19.60) 5.20 III 原端 ナデ、ヨコナデ、ミガキ 至な底部から外傾し端部丸 (セニニ (マン・増) (ロントボ (ロン・ヴェード・ヴェード・ヴェード・ガキ (ロード・ヴェード・ウェード・ヴェード・ウェード・ウェード・ウェード・ウェード・ウェード・ウェード・ウェード・ウ	57 上師器			16	-1			, ナデ、ヨコ キ		2.5Y8/2灰 首	10YR8/3 浅黄橙		(15.90) (3	.40) -		
杯 II-1	27 工師器	71-		14		人力 掘削	Ĭ,		平底から内湾し口縁部外反 し端部丸い	7.5YR8/4 浅黄橙	5YR7/6橙		(16.70)		(4.50)	
杯 II-1	57 上師器	7''		16	-1	炭混じ り層	Ĭ,	ズリ、ヨコナ		橙~浅黄橙	10YR7/3に ぶい黄橙		(16.30)	-(01)		
杯 II-I	57 上師器			10	-	沢海に 回屋に	Ĩ,	コナ	平底から内湾し口縁部外反 し端部肥厚し丸い	浅黄橙~ 橙	浅黄橙~ 橙		(17.70)	.20) -		
杯 II-1	57 上師器			16		炭湿り 層	Ĭ,	コナデ、ミガ	_	にぶい黄 橙~灰白	にぶい黄橙~黒	サリ礫			4.50	
杯 II-1	57 上師器			10			Ĩ,	77	平底から外反し端部尖る		2.5Y8/2灰 首		(18.20)		(4.70)	
皿II - 1 決視じ 西端 り層 面 : 1 大元、ヨコナデ、ヘラ切 の : 2次焼成 面 : 1 決視じ の : 2 かま : 3 カナデ、ミガキ 	57 上師器	-11		10		別部 り 圏 に	ĨĹ	T T	平底から内湾し僅かに屈曲 しながら外傾、端部内側に つまむ		灰白~橙		(19.60) 5.	-20		
$oxed{ $	22 上師器	- I/-				影画	ナデ、 り、2巻	ナデ、ヘ		10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	, #K	(15.75) 2.		(3.00)	
	57 上師器	-14-				炭混 り層	Ĭ,	コナデ、ミガ	歪な底部から外傾し端部丸 い	橙~にぶ い黄橙			(14.60)	.50) -		

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(16)

表8 豆腐町遺跡 II 遺物観察表 (17)

備水																				
n) 底径	1	(10.90)	1	,	(11.60)	1	-			ı		-	-	-	1	ı	1	-	ı	
法量 (cm)	(00.9)	(9.00)	(8.00)	(8.70)	(3.30)	(14.00)	(14.00)	(3.90)	(3.30)	(5.40)	(8.10)	(4.10)	(2.00)	(4.50)	(6.30)	(5.20)	(4.00)	(8.00)	(00.6)	(5.20)
江径		1	1		-	(15.30) (14.00)	(16.60)	(14.70)	(12.80)	(15.20)	(15.80)	(15.20)	(17.00)	(17.60)	(17.00)	(16.70) (5.20)	(0.00)	-	(21.00) (9.00)	(25.70) (5.20)
十十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	粗砂	細砂	粗砂	細砂	細砂	粗砂	細砂	細砂	石英、長石、 チャート	細砂	石英、長石、 チャート
色調 外面	2.5Y8/2灰 首	2.5Y8/2)灰 首	2.5Y8/2)灰 白	2.5Y8/2灰 首	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8/2)承 首	10YR8/3 浅黄橙	にぶい褐一灰褐	10R5/6赤	橙~赤灰	にぶい黄	10R6/6赤 橙	灰白~灰 黄褐	10YR6/1 褐灰	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR6/2 灭褐	10YR5/1 褐灰	灰黄褐~ 褐灰	にぶい橙 ~橙	10YR7/3 にぶい黄 橙
(A)	2.5Y8/2灰 白	灰白~灰 黄褐	2.5Y8/2)灰 首	5YR6/4に ぶい橙	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8// É	10YR8/2 灰白	7.5YR4/1 褐灰	にぶい赤橙~灰褐	灰白~褐 灰白~褐	7.5YR8/3 浅黄橙	淡橙~褐 灰	にぶい黄橙~褐灰		7.5YR6/2 ~5/2灰褐	に ぷい黄 楢~ 灰歯	黄灰~灰 白	10YR4/1 褐灰	10YR7/2 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙
形態の特徴	外反し裾広がる、面取り	水平な杯底、僅かに外反す る脚部、外反する裾部で端 部丸い	直立から裾部広がる、内面 凹凸	杯部底平たい、裾外反し筒 部反り気味	裾部外反し端部肥厚ぎみに 丸い	球形の体部に短く外反する 口縁部が付き端部尖りぎみ	球形の体部から短く外反し 端部丸い	外傾する頸部から屈曲して 外反する口縁部で端部尖る	内湾する体部から短く外反 し端部肥厚する	直立ぎみの体部から短く外 反し端部丸い、頸部厚い	内湾する体部から大きく外 反する口縁部、稜線強い	内湾する体部、口縁部外反 し端部丸い	体部内湾し口縁部外反、端 部丸い	内傾する体部から反りぎみ に外傾する口縁部	内傾する体部から外反する 口縁部で端部丸い	直立ざみの体部から短く外 反し端部丸い、頸部厚い	内傾する体部から外反する 口縁部で端部角張る、器壁 厚い	僅かに内湾する体部から大 きく外反する	内湾する体部から外反し端 部丸くややつまみ上げる	内傾する体部から外反し端 部丸い
技法 他	絞り目、ナデ、ケズリ、 ョコナデ	絞り目、ナデ、ケズリ、 ヨコナデ、ミガキ、化粧 土	絞り目、ナデ、ケズリ、 ハケ整形、12面取り、化 粧土	ナデ、ケズリ、面取り、 粘土紐痕跡	ナデ、ケズリ、ヨコナデ、 化粧土	ユビ成形からナデ・板ナ デ、ハケ整形からヨコナ デ	じュビ成形からナデ、ハ ケ、口縁部ョコナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ	ナデ、ヨコナデ、強く被 熱 (赤変)	ハケ整形、ナデ、口縁部 ヨコナデ	板ナデ、ハケ、ナデ、ヨ コナデ	ハケ、ナデ、ヨコナデ	ハケ整形、板ナデ、ナデ、 ヨコナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ、2次焼成	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ、2次焼成、内面有 機質、蓋痕跡	ナデ、ヨコナデ、2次焼成、煤	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ	ハケ整形からナデ、ケズ リ、ヨコナデ、凹線
遺構	炭混じ の層	受職 に	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層		炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	う 配 に	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	労削の副門に	労働に	炭混じ り層	労譲に	労譲 り 圏
型区	I-1	口 四 端	II-1	H - 1 西端	I-1	I-1	器-7	T -1 西端	マ非		マ非		I-1	II - 1 西半	II -1 西半	I-1	П-1	II - 1 西半	日二十二日 十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	П-1
器種	高杯	高杯	高杯	高杯	高杯	鯸	網	網	쎎	鯏	毈	魙	邂	魙	魙	剰	幺	魙	氎	邂
種別	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
区域区	28	28	28	28	28	29	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
図版	40	40	40	40	40	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
番号	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(18)

備考																		
(cm) 草 库径	'	- (0	- (0	- (00)	- (0	- (0	- (0	- (0	- (02	- (0	- (0	- (00	- (09	- (0	40) -	- (0	- (9	- (0
	$+\stackrel{\smile}{=}$	(28.50) (9.00)	(24.50) (2.50)	(27.80) (14.00)	(28.10) (7.00)	(25.80) (7.10)	(23.00) (7.60)	(24.40) (4.50)	(22.70) (14.70)	(26.80) (7.60)	(24.70) (4.30)	(27.90) (11.00)	(28.40) (10.50)	(30.00) (6.10)	(30.00) (10.40)	(27.30) (5.10)	(26.70) (5.65)	(28.20) (4.50)
胎士	クサリ礫 (2	細砂	石英、長石、(グチャート)	(2) 必服	(2) 必服	細砂 (2	石英、長石、(2	粗砂 (2	クサリ礫 (2	クサリ礫 (2	(2)	知砂 (2)	細砂 (2)	石英、長石、(3チャート)	石英、長石、(6		石英、長石、 チャート (2	粗砂 (2
色調	10YR7/2 にぶい黄 橙	10YR6/1 ~5/1褐灰	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/1 <u>1</u> 0YR4/1 褐灰	10YR6/1 0 10YR4/1 褐灰	10YR8/2 灰白		10YR8/1 灰白	褐灰~黒 ~褐灰	浅黄~にぶい黄	10YR7/3 にぶい黄 橙	7.5YR7/3 にぶい楢	灰黄褐~ 黒褐	に ぷい 楢~灰黄		灰黄~黄 灰	灰黄褐~ 黒~褐	10YR7/2 にぶい黄 橙
内面		10YR6/1 ~5/1褐灰	灰黄褐~ 黒褐	10YR6/1 	10YR5/1 0 10YR4/1 褐灰	灰白~黄 橙	10YR6/2 灰黄褐	10YR8/2 灰白	灰黄褐~ 黒	10YR4/2 ~ 6/2灰黄 褐	10YR7/2 にぶい黄 橙	明褐灰~ 灰褐	にぶい黄橙~褐灰	にぶい黄橙~黒褐		浅黄~黄 灰	10YR5/2 灰黄褐	10YR8/1 灰白
形態の特徴	内傾する体部から外反し端 部丸い	直立する体部から外反する 口縁部、端部丸い	外反し端部角張る	僅かに内湾するが直立ぎみ の体部から外反し端部角張 る	内傾する体部から反りぎみ に外傾する口縁部で端部角 張る	内湾する厚い体部から外反 し端部薄く角張る	√傾する体部から外反し端 №角張る	でりぎみに外傾する口縁部 ご端部角張る	内湾する体部から外傾する 口縁部、頸部稜線甘い	内湾する体部から外反する 口縁部、端部角張る	内湾する体部から外反する 口縁部で端部角張る	内湾する体部から外反する 口縁部、端部丸い	体部内湾し外反する口縁部	内値する体部から外反する 口縁部、端部上に尖らす、 稜線強い	内傾する体部からやや外反 する口縁部、端部角張る	内傾する体部からやや外反 する口縁部、端部角張る	内傾する体部からやや外反する口縁部、端部角張りぎみ	外反する口縁部で端部内外 に肥厚する端部尖りぎみに 角張る
技法 他	ハケ整形から板ナデ、ナ デ、ヨコナデ	ユビ成形からナデ、板ナ デ、ヨコナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ、口唇部沈線状	ユビ成形からハケ整形、 ナデ、ヨコナデ	からハケ整形、コナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ、黒斑	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ、口縁部折り曲げ時 ユビ押さえ	ユビ成形からナデ、ヨコ ナデ	ユビ成形からハケ整形、 ナデ、ヨコナデ、内面有 機質付着	ナデ、板ナデ、ハケ整形 から口縁部ヨコナデ	ハケ整形、ナデ、ヨコナ デ頸部強いヨコナデ	細かいハケ整形、ナデ、ヨコナデ	ハケ整形、ナデ、板ナデ、	ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ	ハケ整形、ナデ、ヨコナ デ、沈線 内外面煤付着	ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ	ハケ整形、ナデ、ヨコナ デ、ユビオサエ	ハケ整形、ナデ、ヨコナデ
遺構	影響に関	示説に画覧に	大型	が混り配配	労譲 の 圏 に	炭混じ り層	人为超三	炭混じ り層	炭海 り層	派 で配り	発記の 国際 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	2	2	派配に	炭海じ り層	炭混じ り層	炭油 に 9 層	の耐の配置に
型区	I-1	四日 十二		田二 井	日 十 二 十	II - 1 西端		H -1 西端		H -1	日日 出	日田	II-1	П-1	日十-1		I-1	II-1
器種	欄	難	鯏	鰕	鯏	邂	邂	邂	毈	鯏	쎎	鯏	黑	쎎	邂	毈	邂	邂
種別	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
(本) 国 国 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田		59	59	59	59	29	59	59	29	59	59	59	29	59	59	69	29	59
図版	41	41	41	41	41	41	41	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42	42
番号	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(19)

備考																		
() 底径		1				-		1	1	1	1	1	1	1.00	-	1	1	(32.00) (58.80)
法量 (cm)	(8.50)	(5.50)	(8.50)	(20.90)	(00.9)	(6.50)	(09:9)	(7.70)	(06.90)	(5.30)	(10.50)	(8.30)	(8.60)	(19.70)	(14.60)	(32.00)	(17.40)	(32.00)
口径	(27.40) (8.50)	(21.60)	(27.20)	(30.00)	(29.90) (6.00)	(29.80)	(29.80)	(27.00)	(27.60) (6.90)	(21.00)	(22.10)	(12.00)	(21.90) (8.60)	(21.80)	-	25.50	(25.40) (17.40)	
			リ礫					長石			7 礫							
船上	組砂	細砂	クサリ礫	細砂	粗砂	粗砂	組砂	石英、	組砂	粗砂	クサリ礫	粗砂	粗砂	細砂	細砂	粗砂	粗砂	粗砂
色調 外面	灰白~褐 灰~黒褐	灰白~褐 灰	灰黄褐~ 黒褐	灰白~褐 灰	にぶい橙 ~褐灰	褐灰~橙	7.5YR7/3 にぶい橙	黒褐~黒	灰白~にぶい楢	2.5Y8/3淡 黄	にぶい黄 橙~橙	7.5YR7/2 明褐灰	10YR7/3 にぶい黄 橙	浅黄橙~ 褐灰	灰白~に ぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白
内面 色	$\frac{2.5 \text{Y7/1}}{8/1 $ 版自	灰白~褐 灰	にぶい黄 橙~黒	灰白~褐 灰	浅黄橙~ 灰黄褐	灰白~明 褐灰	7.5YR8/2 灰白	く外 灰黄褐~ 黒	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2灰 首	に ぶい 黄 橋 ~ 灰 黄 褐	7.5YR8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄 橙		にぶい黄 橙~灰黄 褐			褐灰~灰 白~黄灰
形態の特徴	内湾する体部から外傾する。 口縁部で端部丸い	翡	内湾する体部から外反する 口縁部で端部肥厚し丸い		内湾する体部から外反し角。 張る	直立する体部から外反する 口縁部、端部上につまみ上 げる	内湾する体部から外反する 口縁部で端部角張る	直立ぎみの体部から短く外 傾し端部角張り厚い	内湾する体部から外反し端 部丸い、器壁厚く凹凸あり		内湾する体部に外反する口線部端部角張りした方につきまむ。	内湾し端部厚く角張る	内湾し端部尖り厚くなる	粘土紐明瞭で外反する、断 面三角形の突帯貼付把手に する	僅かに湾曲する体部、把手 部分を貼付、庇は直線的	内傾する体部で端部は肥厚し尖るく、把手は下向き、 たよると、把手は下向き、 庇は方形に開く	外反する口縁部で端部肥厚 し角張る、庇は直線に延び 端部丸い、	湾曲ぎみの裾部から直線的な口縁部に端部角張り肥厚 する、庇は直線的に延び端 部角張る
技法 他	ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ	ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ端部強いヨコナ デ	ハケ整形、ナデ、ヨコナ デ	ユビ成形からハケ整形、 板ナデ、ナデ、ヨコナデ	ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ		ハケ整形からナデ、ヨコ ナデ	ユビ成形からハケ整形、 ナデ、ヨコナデ	ハケ整形、ヨコナデ、頸 部強いヨコナデで凹む	, ナデ、ヨコナ	ハケ整形から板ナデ、ナ デ、ヨコナデ	ユビ成形からナデ、ハケ	ユビ成形からハケ、ナ デ、ヨコナデ	ユビ成形、ナデ	ユビ成形からハケ整形、 ナデ、貼付ナデ	ユビ成形からハケ整形、 ナデ、貼付ナデ、ヨコナ デ	ユビ成形からナデ、ハケ 整形、粘土紐痕跡明瞭	ユビ成形からナデ、ハケ 整形、板ナデ、粘土紐痕 跡明瞭
遺構	炭混じ り層	沢 海に の 圏 回	炭混じ り層	別題 に 圏	炭混じ り層	炭海じり層	で 配 で 層	派記 回園	沢湖 ご 圏	う 層 じ	派遣 い層	派海 り層	で 同 で	炭混じ り層	炭海じ り層	決 福 い り 層	別に り 圏 に	が開いる関係に
型区	H-1 西半	II-1	H-1 四 卡	H - 1 西端	II-1	II-1	四日 -1	7	II-1	II-1	H -1	II-1	I-1	II-1	II - 1 西端	T -1 西端	I-1	四 一 十
器種	剿	邂	槲	罴	粼	毈	쎎	쎎	쎎	搬	鯏	製塩土器	梅	電蓋?		疆	# <u></u>	
種別	上師器	上節器	上師器	上師器	上師器	上節器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	二師器
区域	29	29	29	29	29	09	09	09	09	09	09	09	09	09	09	09	61	09
図版	42	42	42	42	42	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	44	44	45
番号	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383

表 8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(20)

備考															
n) 底径	1	1	1	-	ı	1	1	1	1	1	1	1	1	1	ı
 	(2.55)	2.45	3.20	3.00	2.90	2.50	2.20	2.50	2.20	3.75	2.50	3.80	(1.80)	(2.30)	2.25
口径	(14.20) (2.55)	14.50	(15.80)	14.50	13.60	15.00	(14.05)	14.00	(13.80)	(18.60)	19.35	(18.65) 3.80	(19.50)	(19.80)	20.85
船士	細砂	細砂	組砂	細砂	細砂	組砂	細砂	組砂	組砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂
色調 外面	2.5Y8/1)灰 白	$\frac{\mathrm{N6/0}}{5/0\%}$	5Y6/1灰	N6/0)对	2.5Y6/1黄 灰	5Y8/1灰 首	5Y7/1灰 白	2.5Y6/1黄 灰	$\begin{array}{c} 5Y8/1\overline{K} \\ \dot{\mathbb{H}} \sim N5/0 \\ \overline{K} \end{array}$	N7/0)	N7/0灰台 ~ N6/0灰	N7/0)承台	N8/0)承白	N7/0灰白	2.5Y7/1灰 首~ N5/0 厥
(大型) (大型) (大型) (大型) (大型) (大型) (大型) (大型)	2.5Y8/1)灰 首	N6/0~ 5/0 <u>沃</u>	10YR7/1 灰白	N7/0)	2.5Y6/1黄 灰	2.5Y8/1)灰 首	5Y7/1灰 白	灰白~灰 褐	N5/0)系	N7/0)⊼自	N7/0)系白	N7/0)及自 ~ N5/0)及	N8/0)承台	10YR6/1 褐灰	2.5Y6/2灰 黄
技法 他 形態の特徴	ロクロナデ、ロクロケズ 平たい天井部から内湾し端り、内面1方向の仕上げ 部下方につまみ出す、端部(ナデ、貼付ナデ、墨書 尖る、平たいボタン状つま 十]	デ、ロクロケズ 1方向の仕上げ 付ナデ、重ね焼	ロナデ、ロクロケズ 平たい天井部から内湾し端 内面多方向の仕上げ 部内外に肥厚し角張る、平、貼付ナデ	デ、ロクロケズ ナデ、重ね焼き	ロナデ、ロクロケズ 平坦な天井部から内湾し端内面多方向の仕上げ 部下につまみ出し丸い、扁、貼付ナデ、重ね焼 平な宝珠つまみ	コナデ、ロクロケズ 平たい天井部から外傾端部站付ナデ 内面墨付 下につまみ出す、扁平な宝料付ナデ 内面墨付 下にっまみ出す、扁平な宝	ロナデ、ロクロケズ 緩やかに湾曲する体部で端内面多方向の仕上げ 部斜め下につまみ出す、平、 貼付ナデ	1クロケズ 自然釉	デ、ロクロケズ ナデ、重ね焼き 着	ロクロナデ、ロクロケズ 平たい天井部から内湾し端り、内面多方向の仕上げ 部内側に肥厚、平たい宝珠]ナデ、貼付ナデ	デ、ロクロケズ 1方向の仕上げ サナデ、自然釉、	²たい天井部から内湾し端スG屈曲し肥厚する、宝珠つ;み	k傾し大きく屈曲する体部 >ら口縁部で水平になり端3肥厚	デ、ロクロケズ 屈曲しながら広がり端部催 桶 かに垂下し丸い	デ、ロクロケズ 水平に広がり端部付近で催多方向の仕上げ かに上がり下方につまみ出けナデ、重ね焼したい、宝珠つまみ
遺構	の影画に	が で の 層 に	炭縄にり層の	炭混じり層り	大力 岩河 三	大力を開	別題に 回	炭縄にり層の	炭混じり層の	炭混じり層の		の履じる層で	炭縄にり層を	炭混じ」 り層	の顧問に
型区	日 二 二 二 十 三	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	П-1	二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	H -1 加	Ⅱ - 1 西半	H - 1	П-1	П-1	□ - 1 ½ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □
器種	- (搁	湘	選	捌	湘	搁	湘	蓋(漆)	掃	蓋(硯)	捌	蓋(硯)	捕	搁
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
写 阿版	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61	61
図版	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46
番号	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(21)

備老																				
底径	ı	ı	ı	ı	(10.80)	ı	7.80	ı	(2.60)	ı	1	(09:2)	(8.80)	(7.80)	ı	(9.20)	ı	1	(12.20)	(11.45)
法量 (cm 器高	3.30	(2.90)	2.75	4.05	(4.60)	(4.80)	4.30	4.30	2.90	(4.10)	(3.55)	(4.00)	4.36	(3.60)	3.80	(08:0)	(4.30)	(4.30)	(3.15)	
口径	(19.10) 3.30	(19.60) (2.90)	(20.65)	(21.40)	(18.70) (4.60)	(12.50) (4.80)	(12.00)	12.60	(12.00)	(13.00)	(12.30) (3.55)	(10.30) (4.00)	(12.55)	(10.40) (3.60)	(13.20)	,	(13.20) (4.30)	(14.20)	(15.10)	(14.75) (3.20)
- 胎士	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	組砂	組砂	細砂	細砂	組砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	緻密	細砂	細砂
色調 外面	N5/0)系~ N7/0)系自	N7/0)承白	N7/0)	7.5Y5/1)承	2.5Y6/1黄 灰	灰白~灰	灰白~黒	2.5Y8/1灰 白	10YR6/1 褐灰	5Y8/1灰 白	2.5Y8/3淡 黄	灰白~灰	N6/0压	N7/0~ 7.5Y7/1)原 台	$\frac{2.5 Y8/2}{5 Y7/1 \%}$	5Y8/1灰 白	灰白~灰	灰白~灰	N6/0压	5Y8/1~ 7/1灰白
内面	N6,	N7/0)	N7/0)承白	7.5⊻6/1)炁	2.5Y7/1)灰 白	灰白~灰	灰白~黒	2.5Y8/1灰 首	10YR6/1 褐灰	5Y8/1灰 白	2.5Y8/3淡 黄	N7/0~ 7.5Y7/1灰 台	N6/0压	N7/0~ 7.5Y7/1)灰 白	灰白~灰	5Y8/1灰 白	N7/0)及白	灰白~灰	N6/0压	5Y8/1~ 7/1灰自
形態の特徴	平たい天井部から外値し端 部下につまみ出す、断面三 角の突帯状つまみ	内湾する天井部から屈曲し外値し端部垂下、台形高台状のつまみ	内湾する天井部から屈曲し 外傾し端部垂下、台形高台1 状のつまみ	内湾する天井部から屈曲し 外傾し端部垂下、台形高台 状のつまみ	湾曲する底部から外傾し端 部外側に尖る、外側に開く 高台で端部内側に肥厚	底部から体部内湾し口縁部 外傾する、端部反り気味で 丸い	旬け	不安定な平底から外傾し端 部丸い	紫	平底から内湾する体部、端部丸い	平底から外傾し端部丸く薄い	平底から外傾し端部尖る	平底から外傾し端部反りぎ みで丸い	平底から外傾し端部尖る	不安定な平底から内湾ぎみ に延び端部丸い	平底から外傾	凹凸ある平底から外傾し端 部丸い	不安定な平底から外傾し端 部丸い	ど	デ、ヘラ切り後 軍不定方向ナデ 平底から外傾し端部尖る
技法 他	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面多方向の仕上げ ナデ、貼付ナデ		ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼付ナデ、自然釉、 重ね焼き、硯に転用	ロクロナデ、ロクロケズ リ、貼付ナデ、硯に転用	ロクロナデ、ロクロケズリ、貼付ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ	クロナ調整	ロクロナデ、ヘラ切り後ナデ、内面仕上げナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ、土器片付着	ロクロナデ、ヘラ切り後 未調整	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ、内面仕上げナデ、 墨書	ロクロナデ、ヘラ切り後 未調整、ヘラ記号、火櫓 (ジロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ、墨書「左二」	ヘラ切り後	ヘラ切り後 自然釉	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ、内面不定方向ナデ
遺構	派剛で	派剛に	派剛に	派配で層に	派配で層に	炭油にり層の	炭湖 じり層	2		予部間に	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じ り層	う 層		炭混 り層		労強に
超区	口 一 日 一 日	П-1	日 日 二 十	П-1	日 日 二 十	II-1	II-1	II-1	II-1	田二十二年	II -1 西	П-1	II -1 西端	Π-1	口-1	II-1	II-1	II - 1 西端	II -1 西半	H -1 西半
器種	稜椀蓋	稜椀蓋	稜椀蓋	稜椀蓋	林	茶	杯	杯	杯	杯	柝	林	杯	杯(墨書)	杯(記号)	杯(墨書)	杯	杯	杯	杯
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
阿阿蒙	62	62	62	62	62	29	62	62	62	62	62	62	62	79	62	62	62	62	62	63
図版	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46
番号	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418

表 8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 (22)

備考																		
() 底径	1	(10.50)	(11.40)	(12.60)	0.70	-		$\sim (0.5 \sim 0.6)$	(10.00)	1	(00.6)	1	11.40	(08.6)	(08.6)	(9.30)	10.05	(8.80)
法量 (cm を 器高	4.70	(5.05)	4.20	3.00	-	(0.70)	0.50		(09:0)	4.35	(3.90)	(4.40)	3.90	(4.00)	(4.15)	4.20	4.70	5.40
法口径	(14.90) 4.70	(13.70) (5.05)	(14.00) 4.20	(16.00) 3.00	ı	-	,	,	1	15.80	(15.20) (3.90)	(15.50) (4.40)	14.70	(13.40) (4.00)	(13.90)	(12.80)	13.45	(13.30) 5.40
胎士	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂	緻 密	細砂	類 級	細砂	細砂	細砂	細砂	細砂多い	細砂	細砂多い
色調 外面	$N6/0 \sim 4/0 \overline{\mathrm{K}}$	灰白~灰	灰白~灰	<u> </u>	N7/0)承白	5Y7/1灰 白	2.5Y7/1灰 首	2.5Y8/2灰 台	2.5Y7/1)灰 白	 	<u></u>	N7/0)及自 ~ N5/0)及	N7/0)承白	暗灰~灰 白	N5/0)还	N5/0)系	灰白~灰	5Y7/1)医 首
色 内面	N6/0~ 4/0)系	5Y7/1灰 白	2.5Y7/1灰 首	灰白~灰 黄~黄灰	灰~灰白	5Y7/1灰 白	2.5Y8/1灰 首	2.5Y8/2灰 白	2.5Y7/1)灰 白	灰白~に ぶい橙	灰白~黄 灰	N7/0)承肖 ~ N5/0)承	N8/0~ N7/0)系白	10YR8/1 灰白	N5/0压	灰~黒褐 (ウルシ)	N7/0灰白	N8/0灰肖
形態の特徴	不安定な平底から外傾し端 部内側に尖る	不安定な平底から外傾し端 部外に尖る	平底から外傾し端部丸い	平底から湾曲ぎみに外傾し 端部外に尖る	平底	平底、高台はずれる	平底	不安定な平底	平底から外傾	不安定な平底から外傾し端 部丸い	食部から体部へ内湾し端部 れい	F安定な平底から外傾し端 部尖る	F底から外傾し端部丸い、 高台少し肥厚した台形	平底から外傾し端部反って 尖る逆台形の高台	平底から外傾し端部丸い、 方形の高台	平底から外傾し端部反る、 端部肥厚する方形の高台	不安定な平底から外傾し端 部反りぎみで丸い、方形の 高台	平底から外傾し端部尖りぎ よみ、内側に肥厚する方形高 N8/0灰白 台
技法 他	ナデ、ロクロケズ 杰釉、火櫓、重ね	ロナデ、ヘラ切り、 (仕上げナデ、墨痕、 (釉	ナデ、ヘラ切り後	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ、墨書	ロナデ、墨書	ロクロナデ、ヘラ切り、 高台貼付ナデ、墨書	ロナデ、ヘラ切り、	ロクロナデ、ヘラ切り、 墨書	ロクロナデ、ヘラ切り、 墨痕	ロナデ、ロクロケズ 内面1方向の仕上げ	デ、内面仕上げ 部へラ切り、内	ロナデ、ロクロケズ 内面不定方向の仕上 デ、火櫓	芸部ヘラ切トデ、内面		ま部ヘラ切 トデ	1クロケズ 5外面漆付	クロナデ、底部ヘラ切後一部ナデ、高台貼付デ、歪	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、高台貼付ナデ
遺構	炭混じ り層		炭混じ り層	炭混じ り層	炭海にり層の	炭混じ り層	別を の 層で	沢海に	沢湖に	炭混じり層	派を配ける	炭混じり層	機械掘削	炭縄にり層	沢湖に	2	影観に	うを通びる
超区	I-1	口 二 二 二	I-1	I-1	II-1	I-1	П-1	田田 +1	-	H - 1 西端	I-1	H 日 二 十	I-1	П-1	日 日 十 十	田田 計	H H H H H H H H H H H H H H H H H H H	II-1
器種	桥	桥	杯(墨書)	坏	杯(墨書)	杯(墨書)	杯(墨書)	杯(墨書)	杯	桥	杯(漆)	杯	杯	杯	杯	杯(漆)	桥	茶
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
写真 図版	63	63	62	62	62	62	62	62	62	63	63	63	63	63	63	63	63	63
図版	46	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47
番号	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436

表 8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 (23)

備考															
() 底径	(8.90)	09:6	(09.60)	(10.00)	(00.6)	(10.00)	(12.70)	(12.30)	(14.00)	(12.20)	(14.40)	(09.60)	(11.20)		1
法量 (cm)	(4.40)	4.90	4.10	4.40	4.80	(4.10)	6.20	(09:9)	(6.45)	(08.9)	6.10	(4.35)	(2.60)	(2.90)	(2.10)
八径	(13.40)	12.00	(13.40)	(13.90) 4.40	(12.60)	(14.00)	(16.60)	(16.80) (6.60)	(18.70)	(18.00) (6.80)	19.65	(12.70)	(16.00) (5.60)	(17.80)	(13.10) (2.10)
										~					
一胎上	一	報砂	鍛船	組砂	組砂	女	組砂	組砂	組砂	細砂	細砂	細砂	組砂	細砂	後
色調 外面	N7/0)承白	N6/0~ 5/0)丞	灰~灰黄 褐	N8/0)	N8/0)承白	N5/0)系	N7/0灰白	N5/0)还	N7/0灰白	灰白~灰	N6/0)还	N7/0灰白	N7/0)承白	N7/0灰白	N8/0~ N7/0压自
0 田	N7/0)承自	N5/0灰	N6/0)系	N8/0)承白	V8/0)系白	N7/0)	トる、 く内 N6/0灰白	灭白~灰	N7/0)承白	N8/0)系白	N6/0)承	N7/0灰白	N7/0)承白	N7/0灰白	N8/0)
形態の特徴	平底から湾曲ぎみに延び端 部外に尖る、方形の高台	平底から内湾ざみに延び端 部尖る、方形の高台	平底から内湾し端部尖る、 外に開く低い高台	不安定な平底から外傾し端 部丸い、外に開く高台		ら湾曲し屈 部丸い、方	人湾·人 (氏)	不安定な平底から内湾し端 部内側に尖る、逆台形の高 灰白〜灰 合	歪な平底から湾曲ぎみに外 質し端部尖る、方形の低い 高台	平底から外傾し端部外側に 尖る 高台幅の狭い方形	平底から外傾し端部外側に 尖る 高台端部肥厚する方 形	平底から湾曲し口縁部外反、 端部丸い、高台低い方形	P底から外反気味に延びる、 島台歪な三角形	菫かに湾曲する体部から外 烎し端部丸い	平底から外傾し端部外側に つまみ出す
技法 他	ロクロナデ、底部ヘラ切り後未調整、内面不定方: 向仕上げナデ、高台貼付: ナデ	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面1方向仕 ³ 上げナデ、高台貼付ナ デ、内外面漆	トデ、高台	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、ロクロケズリ、内面仕上げナデ、高 台貼付ナデ、墨書「十」	、底部ヘラ切内面仕上げナ付ナディーが	、内面仕上げ 貼付ナデ、墨	デ、ナデ、高台	ロクロナデ、底部ヘラ切り後ケズリ・ナデ、ロクコケズリ・ナデ、ロクコケズリ、内面多方向仕上げナデ、高台貼付ナデ	11		ロクロナデ、底部ヘラ切り後ナデ、内面不定方向 仕上げナデ、高台貼付ナ デ	ナデ、 デ、高	ロクロナデ、底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ ^ュ デ、高台貼付ナデ、ヘラ [『] 記号(刻書かも)	,	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面仕上げナデ、重 ね焼き
遺構	労産に	労譲 り 圏	派海に 画	が帰る層で	の混画に	集石 付近	の限制に関係し	の耐に	が開びる関	炭湿じ り層	で 層 で	炭混じ り層	別別 と 国別 に 国間 に	炭混じ り層	が混る層
超区	日 日 十 二 十	I-1	П-1	I-1	I-1	П-1	I-1	H - 1	五-1]	五-1	TI - 11 j	II - 1 西半	п-1	П-1	H -1
器種	桥	杯(漆)	茶	杯(墨書)	杯(墨書)	桥	桥	茶	桥	桥	桥	杯	杯(記号)	杯	
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器
区域	63	63	63	63	63	63	63	63	64	64	63	64	64	64	64
図版	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	47	48	48	48	48
番号	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(24)

備考																			
1) 底径	(17.00)	17.35			(12.00)	(9.40)	-	5.30	(6.30)	,	1		9.90			ı	ı	1	(00.9)
法量 (cm を 器高	(1.75)	2.15	(3.20)	(2.70)	(2.65)	(4.05)	(2.20)	(7.20)	(10.40)	(11.90)	(9.30)	(17.60)	(7.45)	(8.10)	(25.50)	(10.30)	(00.9)	(02.6)	1.20
江谷	(19.70) (1.75)	20.20	(12.65)	(13.00)	(9.10)	(11.00) (4.05)	(4.00)	-	(4.80)		(17.30) (9.30)		,	(11.60)	-	(40.80)	(16.10)	(29.20)	(8.40)
上開土	細砂	組砂	組砂	細砂	緻密	細砂	細砂	細砂	緻密	細砂	組砂	細砂多い	組砂	細砂	細砂	組砂	組砂	細砂	組砂
色調外面	灰~灰白	2.5Y8/1灰 首	5Y6/1)承	灰~褐灰	灰~暗灰 黄	月 <u>米</u> 0/2N	N5/0)系	□ №/0万台	2.5Y6/1~ 5/1黄灰	灰白~灰	灰白~オ リーブ灰	灰~オ リーブ黒	》 例0/9N	灰~灰白	浅黄橙~ 灰白	N6/0)系	5Y7/1灰 白	2.5Y8/1灰 首	7.5YR8/2 灰白
角向面	N7/0)承白	2.5Y8/1灰 白	5Y6/1)承	N5/0)死	灰~灰オ リーブ	N7/0)承白	N7/0灰白	N8/0灰白	2.5Y6/1 ~ 5/1黄灰	N6/0~ 7.5Y6/1灰	灰白~オ リーブ灰	N6/0)承	灰~灰オリーブ	N8/0~ N7/0)医白	10YR8/3 浅黄橙	N7/0) 百五日	5Y7/1灰 白	2.5Y8/1灰 白	7.5YR8/2 灰白
形態の特徴	不安定な平底から短く内湾 する端部丸い	平底から外傾し端部尖る	内傾する天井部から直立ぎみに下がる体部から口縁部に端部内側につまみ出す	湾曲する天井部から外傾し 端部内側につまみ出す	線ぎ		外反し端部丸い	平底から球形に内湾し頸部 直立外側に開く高台	丸底から内湾する体部、高 台は外に開き肥厚する	内湾する肩部から外反する	外領する体部で稜線を持つ肩から内領し外反する口縁部、端部は内側上につまみ上げる	外傾する体部が鋭利な稜線 を持って内湾し緩やかに長 く外反する頸部に続く	平底から外傾し稜線を持つ 肩部、外に広がる方形高台	内湾する体部に外傾する口 縁部で端部外に肥厚ぎみに 角張る	俵状に扁平で湾曲する	僅かに内湾する体部から短 く外反し端部角張る	外反する口縁部で端部面状 に肥厚	内湾する体部から外反し端 部角張る	平底から外傾し端部丸い
大 他	ロクロナデ、ロクロケズ リ、内面仕上げナデ、ナ デ	ロクロナデ、ヘラ切り後 ナデ、内面仕上げナデ	ロナデ、自然釉	ロクロナデ、内面多方向 ナデ	ロクロナデ、自然釉	ロクロナデ、底部ヘラ切り、高台貼付ナデ			ロクロナデ、底部ヘラ切 り後ナデ、高台貼付ナ デ、自然釉	ロクロナデ、ユビオサ エ、ケズリ、ナデ	ロクロナデ、沈線、自然 釉	ロクロナデ、ケズリ、沈 線、自然釉、口縁部意図 的に破砕か	ロクロナデ、内面工具 痕、貼付ナデ	1	N 1	ロクロナデ、タタキ (格 子・同心円)、ナデ	1	タタキ (平行・同心円)、 ロクロナデ、ナデ	ョコナデ、ナデ
遺構	で で 層	示記 り層に	派配で層に	別題 で 層	人力超影	受職 ご 圏間	炭混じ り層	炭混じ り層	炭混じり層	沢湖に 圏	別題に	派配に	示説で 層に	炭油 じゅ 層 に	炭混じ り層	人力超過	示説で 層に	炭混じ り層	
型区	II - 1 西半	田田 -1	器-1	II - 1 西端		H - 1 西端	II - 1 西端	- 1 響		Ⅱ - 1 函端	П-1	口 日 十 1	日 日 日 市	-	II - I 西端	マ#		II - 1 西端	2トレンチ
器種	Ш	Ħ	湘	捕	短頸壺	串	小形壺	亞	臣	中国	桕	桕	間	韬	横瓶	毈	灣(口)	魙	Ⅲ小
種別	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	須恵器	上師器
区域照	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	64	9	9	9	9	9
図版	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	48	49	49	49	49
無	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表 (25)

備考																					
n) 底径	(8.00)	(5.70)	1	,	(13.80)	-017-P16	08.0		1	1	-	1	1	1	-	1	1	1	1	-	
法量 (cm を 器高	3.10	5.30	(4.60)	(7.00)	5.40	(2.00)	4.30	(08.9)	(6.30)	(7.10)	(2.60)	(06.90)	(0.40)	(7.70)	(06:2)		(8.40)	(02.9)	(6.30)	(2.80)	(2.80)
法 口径	(14.80)	(15.60)	(29.40)	(19.50)	(18.80)	全 (10.8)	4.40	(10.40)	(11.30)	(11.00)	(12.10)	(11.10)	(13.30)	(16.60)	(10.20)	1	(10.80)	(12.00)	(08.6)	(12.30)	(14.60)
胎士	細砂	細砂	細砂多い	細砂	細砂	細砂	細砂	粗砂	粗砂	組砂	細砂	細砂	粗砂	細砂	細砂	細砂	粗砂	粗砂	細砂	細砂	粗砂
色調 外面	7.5YR7/3 ~ 5YR6/4 にぶい橙	N7/0) 医自	にぶい黄 橙~褐灰	5Y7/1)灰 白	N7/0灰白	10Y6/4に ぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	5YR6/6橙	10YR7/2 ~7/3にぶ い黄橙	にぶい黄 橙~黄灰	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/1)灰 首	にぶい黄橙~灰白	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5Y7/1)灰 首	5YR6/3に ぶい橙	に <u>ぷい</u> 橋 ~ 醯	2.5YR7/3 淡赤橙	10YR8/3 浅黄橙	5YR5/4に ぶい赤褐
色 内面	明褐灰~ にぶい橙	N7/0)承白	に ぶい 黄木 でん でん でん でん でん い がっこ がん しん かん	N8/0)系白	N7/0)承白	2.5Y7/3浅 黄		5YR6/3に ぶい橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	にぶい褐一灰黄褐	2.5Y6/1黄 灰	10YR8/3 浅黄橙	浅黄橙~ にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y7/1灰 首	7.5YR7/3 にぶい楢	7.5YR7/4 にぶい楢	2.5Y8/1灰 白	10YR8/3 浅黄橙	5YR5/6明 赤褐
形態の特徴	平底から外傾し端部肥厚ぎ みに丸い	平底から内湾し端部肥厚する る	内傾する体部から厚く外反 する口縁部で端部尖る	内湾する体部から外反し端 部肥厚する	平底から湾曲ぎみに開き端 部近くで反り尖る、方形の開く高台	体部の破片で尾・脚・頭部 欠失、断面楕円形	周囲打ち欠き円形にする	外傾し端部角張る	外傾する体部で端部近くで 直立ぎみになり端部角張る	外傾し端部内側につまみ上げる	外傾し端部肥厚ぎみに丸い	屈曲ぎみに外傾し端部丸い	外傾しやや屈曲する	外傾し端部下が厚くなり端 部尖りぎみ	端部角張	外傾し端部角張りぎみに丸 い	屈曲ぎみに外傾し端部角張 りぎみ	屈曲ぎみに外傾し端部丸い	外傾し端部付近厚くなり端 部丸い	器壁厚く内湾し端部角張る 坩堝かもしれない	浅く内湾し端部内側に曲げる
技法 他	ヨコナデ、底部ヘラ切り 後ナデ	ロクロナデ、糸切り底	ハケ整形、ナデ、ヨコナ デ、2次焼成	ロクロナデ、カキメ、自 然釉	ロクロナデ、内面多方向 仕上げナデ、貼付ナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形、転用	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ、内面 布目	ユビ成形からナデ、内面 布目	ユビ成形からナデ、板ナ デ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ
遺構		人力 掘削	東省名名	東 知 名 路 層		炭混じ り層	黒シルト	炭混じ り層	炭混じり層	炭縄にり層	う 層 り	労漁 の 圏 に	で 関 の	炭混じ り層	渋海に り層	派海に 画画に	2)	2)	で 海道に	で 海道に	労譲 り層
型区	2トレンチン	I-1	II-2	II-2	II-2	H -1 西端	п-1	H - 1 西端	II -1 西半	П-П	H - 1 西 +	П-1	口 一 二 二 十	II -1 西端		田二十二十十二十十二十十二十十十二十十十二十十二十二十二十二十二十二十二十二十	回 中 二 十	日 日 十 二 十	田田-1-#	1	H -1 西端
器種	桥	落	粼	桕	茶	土馬	紡錘車	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器
種別	上節器	須恵器	上前器	須恵器	須恵器	上製品	上製品	上師器	上節器	上前器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器
写真図版	92	92	65	65	65	9	9	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99
図版	49	49	49	49	49	49	49	99	20	20	20	20	20	99	20	20	20	20	20	20	20
無吊	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491

表8 豆腐町遺跡Ⅱ遺物観察表(26)

年	軍の											
法量 (cm)	口径 器高 底径	(13.80) (8.10) -	(12.50) 7.30 -	細砂、小礫 (11.00) (16.00) -	(11.00) (8.70) -	(11.60) (7.30) -	(13.20) (7.60) -	(15.80) (6.40) -	(12.00) (8.00) -	(12.40) 7.10 -	(12.80) (11.20) -	細砂、小礫 (12.30) (10.30) -
H/s. L.		粗砂	細砂	組砂、小礫	粗砂	粗砂	粗砂、金雲 母	粗砂	粗砂	細砂	細砂	組砂、小礫
色調	外面	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄 橙	7.5YR7/3 にぶい楢	浅黄橙~ 橙	5YR6/6橙	7.5YR5/3 にぶい褐	にがい癌~癌	にぶい 暦~明赤 褐	2.5Y8/2灰 2.5Y8/2灰 白	灰白~に ぶい黄橙	10YR8/2 灰白
1	内面	10YR8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄 橙	7.5YR6/4 にぶい楢	におい樹一一番	7.5YR7/3 にぶい楢	- 褐灰~にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい楢	10YR8/2 灰白	2.5Y8/2灰 首	灰白~灰黄褐	2.5 Y8/2灰 首
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	一一の影の特徴	内湾ぎみに延び端部上につ 10YR8/2 まみ上げ尖る 灰白	内湾し端部丸く直立する	小さな平底、体部外傾し端 1.5 X R 6 / 4 部近くで内湾する にぶい橙	屈曲しながら外傾し、端部 にぶい橙 付近厚く角張る	屈曲しながら外傾し、端部 7.5 X K 7/3 付近で直立し端部丸い にぶい橙	屈曲しながら外傾し端部付 褐灰~に 近厚く内側につまみ出す ぶい褐	屈曲ぎみに外傾し端部厚く 7.57R7/4 失る	外傾から屈曲して内湾する、10YR8/2 端部内側に尖らす 原白	屈曲して外傾し端部角張る	ユビ成形からナデ、ハケ 内湾する体部下半から外値 灰白~灰 灰白~に 整形	ユビ成形からナデ、布目 外傾し端部付近厚くなり端 2.578/2灰 10YR8/2 10
	校法 他	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ	ユビ成形からナデ		
東	喧闹	黒シル ト	深海で 画	示る 関語 に	示る 動詞	示 の層 ご		示る 関語 回過ご	労福 に り 圏 に	示 る 配 に	沢海に の層に	炭海に り層
12	<u>N</u>	ļ II-1	四日 十二	L T - 1 西端	-i- 山田 -i- 計	I-1	日田 十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	-i- 円田 十二	L 田 二 田 千	- <u>i</u> -i 田田 十	1.1 田子二	<u> </u>
品	配配	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器	製塩土器
华田	(重別)	器嶼干	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	上師器	工師器	上師器	上師器
_	図版	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99	99
	<u>N</u>	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20
片	(世) (ア)	492	493	494	495	496	497	498	499	200	501	502

第V章 科学分析

第1節 豆腐町遺跡Ⅱ出土遺物の自然科学分析

はじめに

今回の分析調査では、豆腐町遺跡 II から出土した、井戸枠とされた材についてその種類を同定し、当時の植物利用について検討する。また、奈良時代後半の遺物包含層より出土した土師器について、その材質(胎土)の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。特に、今回の土師器試料には、坏、椀、甕、竈および製塩土器という用途の異なる各器種が揃えられており、これら器種と胎土との関係の有無から、それぞれにおける事情の違いについて考察する。

I.井戸枠材の樹種同定

1.試料

試料は、奈良時代の遺構とされるSE01を構成する井戸枠材5点(W4、W7、W8、W18、W19)である。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やRichter他(2006)を参考にする。

3.結果

樹種同定結果を表9に示す。井戸枠は、針葉樹2分類群(スギ・ヒノキ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

表 9 樹種同定結果

遺構名	試料名	樹種
井戸枠(SE01)	W4	スギ
井戸枠(SE01)	W7	スギ
井戸枠(SE01)	W8	ヒノキ
井戸枠(SE01)	W18	スギ
井戸枠(SE01)	W19	スギ

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・ヒノキ(Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.)Endlcher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~10細胞高。

4.考察

奈良時代後半と考えられる井戸(SE01)を構成する井戸枠は、スギを中心にヒノキが混じる組成が確認された。スギとヒノキは、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。スギとヒノキを比較すると、ヒノキの方がより木目が均質で耐水性も高い。加工性や耐水性から井戸枠材に利用されたことが推定さ

れる。

兵庫県内では、地域が離れているが、摂津地域の上沢遺跡で多数の井戸枠材について樹種同定が行われており、ヒノキやスギが比較的多い結果が得られている(神戸市教育委員会,2002)。播磨地域では、奈良時代の井戸枠材に関する調査事例が無いが、柱材などの建築部材ではヒノキやコウヤマキが利用されており、スギの利用はほとんど見られない(伊東,1998;神戸市教育委員会,2002)。今回の結果は、奈良時代の本地域におけるスギ材の利用状況を考える上で重要な資料である。

Ⅱ.土器の胎土分析

1.試料

試料は、奈良時代後半とされる遺物包含層から出土した土師器片20点である。器種の内訳は、坏が10点、 $(No.1 \sim 10)$ 、椀が1点(No.11)、甕と竈が2点ずつ(No.12、13とNo.14、15)、製塩土器が5点 $(No.16 \sim 20)$ である。各試料の実測No.などは一覧表にして表10に示す。

2.分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内

胎土分類 実測 ネーミング 器種 備考 鉱物・岩石組成 粒径組成 砕屑物 No. 種別 No. No. C1 | C2 | F1 | F2 | K1 | K2 | L | M | c | m | f | vf | cs | I | II 1 土師器 杯 107 2 土師器 136 杯 3 土師器 杯 440 4 土師器 杯 351 5 土師器 杯 116 435 6 土師器 杯 155 32 7 土師器 杯 442 8 土師器 杯 201 9 土師器 杯 233 480 10 土師器 杯 116 435 11 土師器 椀 232 12 土師器 甕 353 漆付着 13 土師器 甕 169 14 | 土師器 421 竈 15 土師器 竈 361 16 | 土師器 製塩土器 289 17 | 土師器 製塩土器 410 18 | 土師器 製塩土器 432 19 土師器 製塩土器 432

表 10 胎土分析試料一覧および胎土分類

鉱物・岩石組成の各分類内容は本文を参照されたい。

432

砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径: c; 粗粒砂 m; 中粒砂 f; 細粒砂 vf, 極細粒砂 cs; 粗粒シルト \bullet : 第二のピーク

砕屑物の割合 I:15%未満 II:15%以上

20 土師器 製塩土器

にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類の みを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られ た土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫~中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3.結果

観察結果を表10、図1~3に示す。鉱物片と岩石片の種類構成をみると、斜長石の鉱物片が多い組成、 火山ガラスが多い組成、凝灰岩の岩石片が多い組成、花崗岩類の岩石片が多い組成、さらに流紋岩・デ イサイトの岩石片が多い組成などが認められる。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において 設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からK類までの種類が設定され、さ らに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類により細分もしている。今回の結果も、その基準に 従って分類してみると以下のようになる。

No.1、No.2、No.5は斜長石の鉱物片と火山ガラスの多いこと、角閃石の鉱物片を少量または微量含み、さらに多結晶石英以外の岩石片をほとんど含まないことが特徴である。これまでの分類でも、斜長石の多い組成や火山ガラスの多い組成は認められているが、同時に含まれる岩石片の種類構成が分類の基準となっていた。しかし、No.1、No.2、No.5の3点は、岩石片をほとんど含まないことから、これまでの分類には当てはまらない。したがって、これら3点は新たな分類であるL類とする。

岩石片の種類構成と量比に着目すれば、No.3、4、6~11、13~15の各試料は共通して、チャートや 頁岩などの堆積岩類と凝灰岩および流紋岩・デイサイトを少量ずつ含んでいる。このような特徴を有す る胎土は、これまでの分析例におけるK類に相当する。さらにK類については、火山ガラスを多く含む 組成を特にK2類とし、そうでないものをK1類とした。今回の試料でも、火山ガラスの多い組成が認められており、K2類に分類される試料は、No.3、6、9、11、13~15であり、それ以外のNo.4、7、8、10 はK1類に分類される。

No.12とNo.18は、ともに岩石片の種類構成では花崗岩類を主体とする組成となる。このような組成は、これまでの分類のC類に相当する。C類については、供伴する鉱物片のうち、角閃石の多いものをC1類とし、黒雲母の多いものをC2類としている。今回の試料では、No.12は黒雲母を比較的多く含むことからC2類に分類される。No.18は酸化角閃石の多いことが特徴であるが、酸化角閃石は、角閃石が800℃程度の高温により酸化して生成される鉱物である。したがって土器の焼成により生じた可能性があり、すなわち焼成前の素地土の状態では角閃石を多く含む組成であったことが推定される。このことから、No.18はC1類に分類することができる。

No.16とNo.17は、凝灰岩を主体とする組成であることから、これまでの分類のF類に相当する。F類は、これまでのところ、F1類からF5類まで細分されているが、No.16とNo.17の組成は、凝灰岩が突出して多いことが特徴であるF1類に分類される。なお、F類の凝灰岩は結晶質であることも重要な特徴で

表 11 薄片観察結果 (1)

						鉱	力	勿	片		砂	,)	粒	0)	利		類	 岩	石	成 片	L.					7	- Ø	他	-
No.		砂粒区分	石英	カリ長石	斜長石	角閃石		緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	泥質片岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	合計
		細礫															<u> </u>												
		極粗粒砂																											
		粗粒砂																											
	砂	中粒砂			2																			1		2			
	_	細粒砂			7	3													1							4]
		極細粒砂	1		2																								
		粗粒シルト中粒シルト	4		5																								H
		基質			1																								33
		五 孔隙																											٥٠
		細礫																										Ι	
		極粗粒砂															_												
		粗粒砂																											
	T.I.	中粒砂	2		4	1																							
	砂	細粒砂	2		11	2						1														3			
		極細粒砂	4		3	2																				3			
		粗粒シルト	5	1	8			2																		1		5	
L		中粒シルト	3		1																								
		基質																											5
		孔隙																											
		細礫																											
		極粗粒砂																											
		粗粒砂	_																_							_			L
	砂	中粒砂	5					-					1			2			2						1	1			
,		細粒砂	6	1	1			1					1			1			1							8			-
		極細粒砂	9		1			1					1													7		0	
		粗粒シルト中粒シルト	5 2					1					1													3		2	
		基質																											3
		 孔隙																											J.
		組礫																											
		極粗粒砂																											
		粗粒砂	1																										
	7.1.	中粒砂	1	1	1								1						2										
	砂	細粒砂	4	2	3											1			1					1		1			
		極細粒砂	4	1	2														1									1	
		粗粒シルト	11	2	7			1																					1
		中粒シルト	5		1																								
		基質																											4
		孔隙		1			1		ı		1	1																	
		細礫																											
		極粗粒砂																											L
		粗粒砂	0		0																					1			
	砂	中粒砂	2		3	n										\vdash	_		0						1	1			<u> </u>
)		細粒砂 極細粒砂	8		9	2													2						1	5			4
		型型型が	7		6	1										\vdash	_		1							4		1	
		性粒シルト	5		4												_											1	H
-		基質	J		4																								4
	<u> </u>	孔隙																											40

表 11 薄片観察結果 (2)

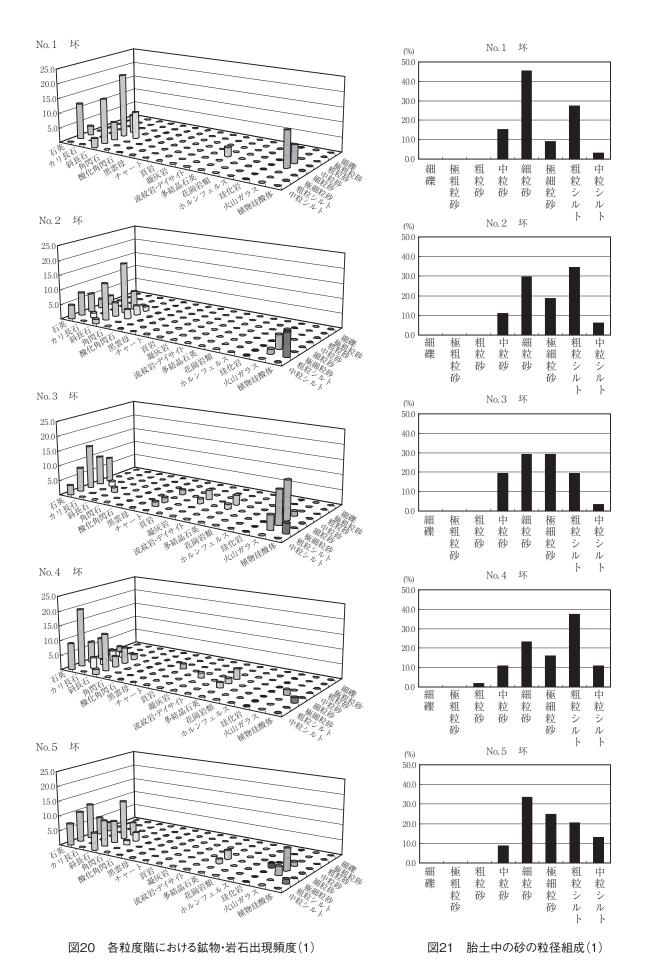
						鉱	4	勿	片		砂	,)	拉	0)	利		類		石	成 片	L.					7	· Ø)	他	
No.		砂粒区分	石英	カリ長石	斜長石	角閃石		緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	泥質片岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	合計
		細礫															1												
		極粗粒砂	2													1	1												
		粗粒砂	1										1	1		4				1					1				
	砂	中粒砂																								4			
6	119	細粒砂	3													1										20			2
U		極細粒砂	2		2																					30			3
		粗粒シルト	5		1								1													10		1	1
		中粒シルト	1																										
		基質																											40
		孔隙																											2
		細礫																											
		極粗粒砂	1																										
		粗粒砂	1	1														_						1	1				
	砂	中粒砂			1														4										
7	'	細粒砂	1																										
		極細粒砂	3	1	_								1	1														_	L.
		粗粒シルト	7		3																							1]
		中粒シルト	2																										00
		基質																											22
		孔隙				ı			I	I	I																		
		細礫																											
		極粗粒砂 粗粒砂	0																							1			
		中粒砂	3		2	1													3						1	1]
	砂	細粒砂	9		3	2							2						1						1	1]
8		極細粒砂	12		3														1							1]
		粗粒シルト	12		5	2		1																				3	6
		中粒シルト	4		1			1																				3	_ 4
		基質	4		1																								50
		孔隙		-]
		細礫																											-
		極粗粒砂														3	2	1	1						1				
		粗粒砂	1													4	Ë	+	1						1				
	_,,	中粒砂	_		1											1									_	5			
_	砂	細粒砂	1		1		1						1			1										7]
)		極細粒砂			1	1																				9			
		粗粒シルト				_																				9		8	
		中粒シルト																											
		基質					1			1	1	1	l					-											28
		孔隙																											
		細礫																											
		極粗粒砂																											
		粗粒砂																							1				
	T.J.	中粒砂	1		4											2										2			
Λ	砂	細粒砂	4		5											1			2							2			
0		極細粒砂	4		4														1							2			
		粗粒シルト	9		5																					1		2]
		中粒シルト	1																										
		基質						•											•			-	-	•					44
		孔隙																											

表 11 薄片観察結果 (3)

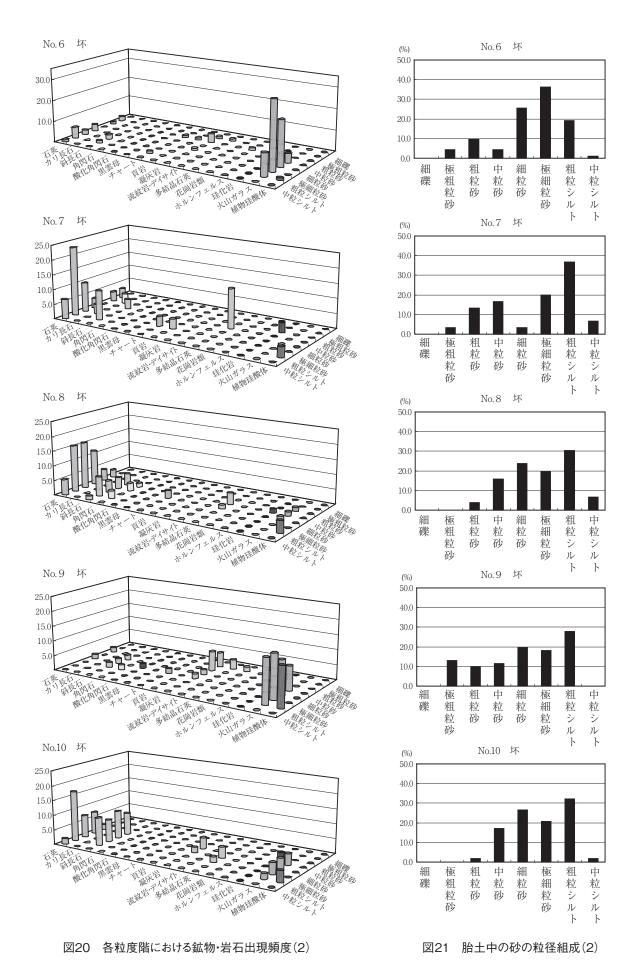
						ζı÷	μL	lm	止		砂	; ;	垃	0)	看	重	類	- 樟 山		成口	L					7	- 0	(1h	
No.		砂粒区分	 石 英	カリ長石	斜長石	鉱角閃石	酸化角閃石	緑簾石	片白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサ	岩安山岩	石多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェ	泥質片岩	脈石英	亦	珪化岩	そ火山ガラス	を植物片	他植物珪酸体	合計
		Δ111 Tέδδ															イト				ルス								
		細礫 極粗粒砂																											(
		粗粒砂	1																						1				2
		中粒砂	5		1												3							1		2			12
11	砂	細粒砂	8		1											2			2							5			18
11		極細粒砂	5		1								1													4			11
		粗粒シルト	5																							1		2	8
		中粒シルト	1																									1	2
		基質																											280
		孔隙 細礫		1															9										3
		極粗粒砂	7	2															2										Ç
		粗粒砂	22	12															1	1									36
	_,	中粒砂	17	11						5									1										33
10	砂	細粒砂	17	2						8																			27
12		極細粒砂	5	1	1					1																			5
		粗粒シルト	2	3																									
		中粒シルト																											(
		基質																											352
		孔隙																											10
		細礫	1										1										1		1				(
		極粗粒砂 粗粒砂	1										1	1		2							1		1				3
		中粒砂												1		1										7			
	砂	細粒砂	1		1											1								1		13			16
13		極細粒砂	_			1			1			1														21			24
		粗粒シルト																								6		4	10
		中粒シルト																											(
		基質																											317
		孔隙					1							1	_														15
		細礫																											(
		極粗粒砂	3											1	3	4	3	1	1		1		1		2	1			19
		粗粒砂 中粒砂	3		3									2		4		1					1		2	1 12			13 21
	砂	細粒砂	4	1	1									1		1							1		3	28			37
14		極細粒砂	3	1	5	1																			1	42			52
		粗粒シルト	6			_																				13		7	26
		中粒シルト																											C
		基質																											625
		孔隙		,			,		,	,		,																	30
		細礫																											0
		極粗粒砂	4		1		-							-1		1	4												1
		粗粒砂	1		1								1	1		2	1								0	1			14
	砂	中粒砂細粒砂	7 8	2	1								1	2		3	2		2						2	1 18			14
15			8 11		1		1	1			1	1				O										18			41 26
		粗粒シルト	1				1	1			1	1			_											11			12
		中粒シルト	1																							1			1
	Н	基質		<u> </u>					<u> </u>	<u> </u>		<u> </u>		<u> </u>															322
	\vdash	孔隙																											21

表 11 薄片観察結果 (4)

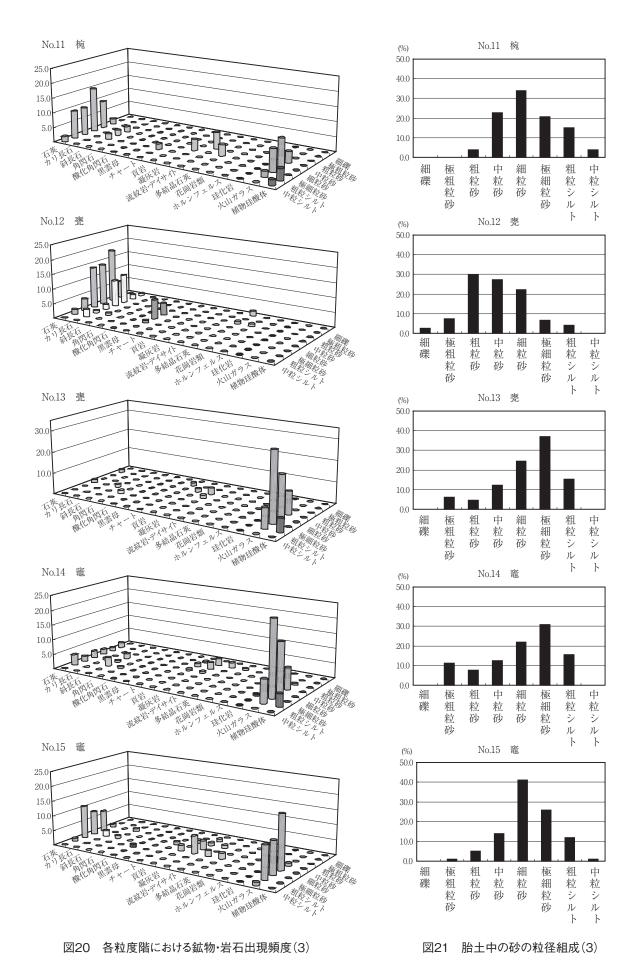
						鉱	4	У П	片		砂	,)	粒	0)	租		類	 桿 岩	石	成 片	<u>-</u>					7	· 10)	他	
No.	砂粒区分		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	ホルンフェルス	泥質片岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	合計
		細礫								1											- 1								
		極粗粒砂	3											1		5	1												1
		粗粒砂	6											1		15	3								5				3
	砂	中粒砂	4	3	_											15			2						4				2
6	-	細粒砂	9	1	2											6			2						2				2
		極細粒砂	10	1	2																				1				1
		粗粒シルト 中粒シルト	4		1																								
-		基質	4																										35
ŀ		孔隙																											2
	砂	細礫																											_
		極粗粒砂														4													
		粗粒砂	7	1	1									1		49	1								2				6
		中粒砂	12		3											31	1								4	1			5
7		細粒砂	4		1											6			2]
'		極細粒砂	9		1														1						1]
			17]
-		中粒シルト	2																										
-		基質																											60
	1	孔隙					I	I				I							I	2		Ι	Ι						3
	砂	細礫		1									_	_	_				1	3				0					
		極粗粒砂 粗粒砂	1	1 4	2		2			1		1				1			5	3				2					3
		中粒砂	5	1	7		11			2		1				1	1		2	11	_						1		4
		細粒砂	8	3	9		22										1		6	11							4		-
8		極細粒砂	4		8		17			1		1																	3
		粗粒シルト	2		1		1																						
		中粒シルト																											
Ì		基質																											70
\Box		孔隙																											,
	砂	細礫												1		1								1	2				
		極粗粒砂												1	1	3	1				2	1	1	1	4				
		粗粒砂	2	_	1									_		5			3		2	2		1	14				;
		中粒砂	4	2	8					1				2		4	1		4		1	1		1	7				
9		細粒砂	9	2	4					1				2		1			4						2				4
			10 11		5 7														1						3]
		中粒シルト	3		1																								-
ŀ		基質	J																										62
ł		孔隙]
\dashv		細礫																											Ť
		極粗粒砂	4		1												6								1]
			18	1	4												24		1		4				3				-
	砂	中粒砂	15	2	7												20		3	1	1				1				5
		細粒砂			1																				1				
0		極細粒砂	1	1	2																								
		粗粒シルト	8		1							1																	
		中粒シルト	2																										L
		基質																											44

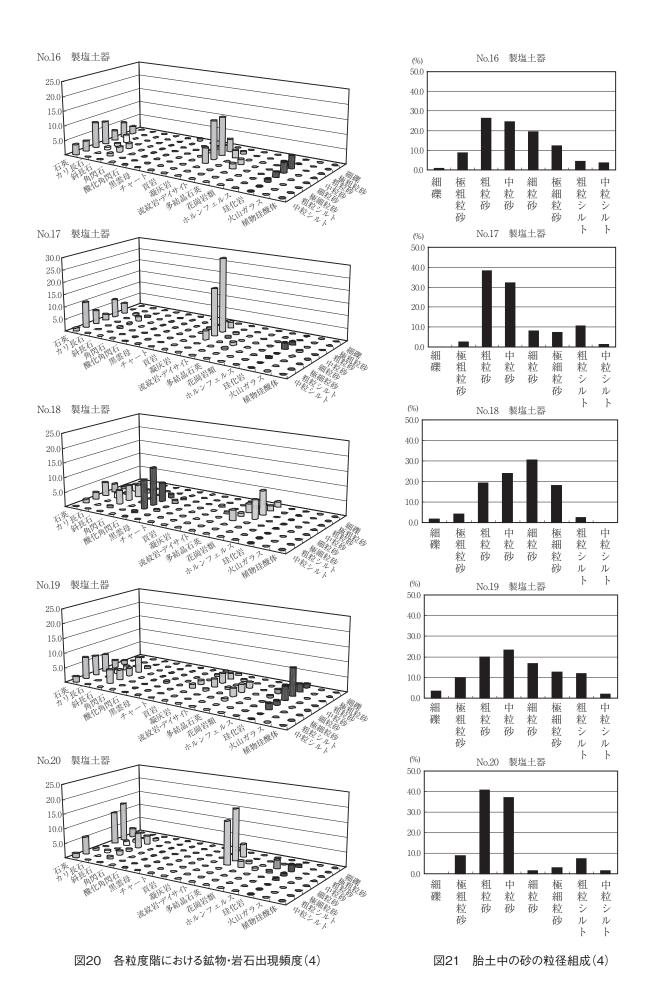


- 79 -



- 80 -





- 82 -

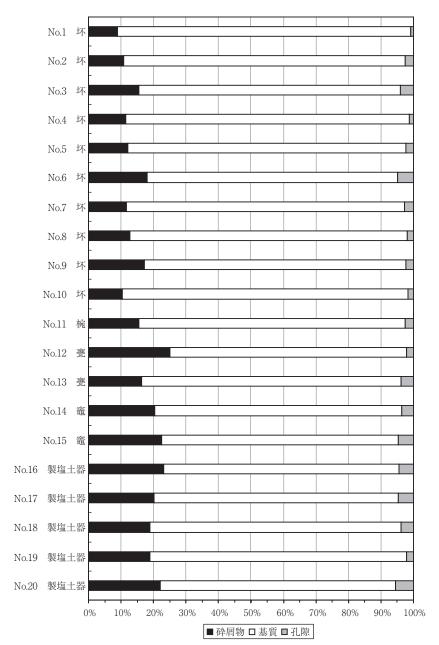


図22 砕屑物・基質・孔隙の割合

ある。

No.19は、岩石片の量比から見れば珪化岩が多いが、この珪化岩は、鏡下の観察から、凝灰岩または流紋岩が起源と見られる。このことから、No.19の分類としては、比較的凝灰岩が多く、堆積岩類やホルンフェルス、変質岩、珪化岩など他種類の岩石片が供伴するF2類に分類することができる。

No.20は、流紋岩が突出して多い岩石片組成を示す。このような組成は、これまでの分析例では認められなかったことから、新たにM類とする。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料によりことなり、2つのピークを持つ双峰性のヒストグラムを示す試料も認められる。ここでは、モードを示す粒径とモードに次いで多い粒径の2つの粒径の組み合わせを示すことで各試料の特徴とすると、以下のような状況が認められる。

極細粒砂と粗粒シルト:No.7

細粒砂と粗粒シルト:No.1、2、4、8 \sim 10

細粒砂と極細粒砂: No.3、5、6、13~15

中粒砂と細粒砂: No.11、18

粗粒砂と中粒砂: No.12、16、17、19、20

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が15%未満と15%以上で2分することができる。前者 を I 類とし、後者を II 類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

I類: No.1、2、4、5、7、8、10

Ⅱ類: No.3、6、9、11 ~ 20

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物の量比における各分類結果は、一覧にして表10に併記する。

4.考察

(1)胎土の由来

土器胎土の材料となった砂や粘土の採取地を推定する場合、その指標の一つとなるのは、胎土中に含まれている鉱物片や岩石片の種類構成である。今回の試料の場合、細分類も含めれば、9種類もの組成を認めることができた。その9種類の組成の中でも、F1類やK2類、L類およびM類のように、ある一種類の岩石片または火山ガラスの量比が突出して多いという組成が、今回の試料では多く認められた。

これらのうち、K2類とL類については、火山ガラスが突出して多いことが特徴であった。この火山ガ ラスは、薄手平板状のいわゆるバブル型の外形を呈するものが大部分を占め、鏡下の観察では、変質や 粘土化などはほとんど認められない新鮮なものであった。このことから、K2類とL類の火山ガラスは、 第四紀の更新世あるいは完新世に降下堆積した未固結のテフラ層に由来する可能性が高い。豆腐町遺跡 の位置する沖積低地は、市川のような比較的流量の大きい河川とその他の複数の小河川による氾濫堆積 により形成された地形であるから、このような場では、火山ガラスからなるような細粒のテフラ層は降 下堆積後に撹乱や削剥を受けることにより地層中に保存され難い。一方、播磨平野西部におけるテフラ の産状の例として、田中(2001)が、御津町の碇岩付近の丘陵の谷間に形成された緩斜面を構成する堆積 物中から、姶良Tn火山灰(AT:町田・新井.1976)や三瓶山起源のテフラ層を確認している。この緩斜面は 麓層面とよばれており、氷期に生産された岩層が移動、堆積したと考えられている。さらに、その後の 温暖期の降水量の増加による麓屑面の浸食と再堆積により、麓屑面下流側に扇状地も形成されることが 述べられている。そして、この扇状地堆積物中には鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井,1978)が確認 されている。山元ほか(2000)による地質図(以下地質記載名は、特に断らない場合は本文献から引用)で は、姫路市および周辺域に広がる丘陵や山地の縁辺にも山麓緩斜面堆積物としてその分布が記載されて いることから、今回の試料におけるK2類とL類の火山ガラスは、豆腐町遺跡の位置する姫路市中心市街 地を取り囲む丘陵の縁辺に形成された山麓緩斜面堆積物に由来すると考えられる。

なお、K2類とL類では、火山ガラスの特徴は共通するものの、それ以外の鉱物片および岩石片の産状は比較的明瞭に異なっている。L類については、多量に含まれる斜長石は、新鮮であることや自形のものが多いことから火山ガラスと同様に第四紀のテフラに由来すると考えられる。したがって、土器胎土中の砂分のほとんどはテフラ層から由来するものとなり、L類は、山麓緩斜面堆積物中で認められたテ

フラ層自体が土器材料の一つとして選択されたことを示唆する胎土であると言える。K2類については、 供伴する岩石片が、堆積岩のチャートと結晶質の凝灰岩および流紋岩という姫路市背後の地質に由来す る種類構成であることから、テフラ層を含む山麓緩斜面堆積物と沖積低地堆積物とが混在している可能 性がある。現時点では、L類もK2類も、その土の採取地を具体的に推定することはできないが、それぞ れある特定の場所から採取された土が使用されていたという状況が推定される。

F1類とM類については、特定の種類の岩石片が突出して多く含まれるという状況から、様々な種類の岩石片が適度に混在する沖積低地の堆積物に由来するというよりは、特定の岩石片の種類からなる岩体がすぐ背後にある場所の堆積物に由来すると考えることができる。F1類の凝灰岩もM類の流紋岩もともに結晶質であることといずれの胎土も珪化岩を伴うことも考慮すると、上述した丘陵縁辺に堆積する山麓緩斜面堆積物は、この場合にもその由来する堆積物として考えることができる。すなわち、姫路市北西部の大津茂川上流両岸域に分布する丘陵や姫路市南部の夢前川下流両岸域に分布する丘陵は、白亜紀の伊勢層と呼ばれる流紋岩火山礫凝灰岩および凝灰角礫岩からなる地質により構成されており、これらの丘陵縁辺の山麓緩斜面堆積物はF1類の由来する堆積物と考えられる。一方、太子町や揖保川町、龍野市には白亜紀-古第三紀の流紋岩からなる丘陵が分布しており、これらの丘陵縁辺の山麓緩斜面堆積物は、M類の由来する堆積物と考えられる。

F2類とK1類のうち、K1類は岩石片では突出して多いものはないが、鉱物片では石英が比較的多いことが特徴の一つとして指摘できる。石英は、物理的および化学的に風化に対する抵抗力が高いから、河川下流域の堆積物などでは、上流から流されてきた砕屑物の中で最終的に残る割合が高いから、含有量も相対的に高い割合となる。K1類の岩石片には、チャートや頁岩などの堆積岩類とともに結晶質の凝灰岩や珪化岩および火山ガラスなども認められることから、姫路市南部の諸河川下流域に広がる沖積低地の堆積物に由来する可能性がある。F2類は、鉱物片も含めて突出して多い砕屑物は認められないが、頁岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、珪化岩という主な岩石の種類に加えてホルンフェルスや泥質片岩といった変成岩まで含まれている。このような多種類の構成から、やはり姫路市および周辺域の沖積低地堆積物に由来すると考えられる。

C1類については、鉱物片組成をみると、カリ長石よりも斜長石が多く、また黒雲母より角閃石が多いことから、花崗岩類とした岩石片は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩などの岩質が推定される。また、微量ながらも凝灰岩および流紋岩・デイサイトを伴うことも併せて考えれば、C1類の由来する土は、姫路市南部に位置する桜山岩体と呼ばれる斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる丘陵縁辺の山麓緩斜面堆積物である可能性があると考えられる。

C2類については、C1類と同様に花崗岩類を主体とする岩石片組成ではあるが、C1類とは異なり、カリ長石が斜長石よりも遙かに多く、他に伴われる鉱物は黒雲母であることから、花崗岩類とした岩石片は、黒雲母花崗岩であることが推定される。黒雲母花崗岩の分布は、姫路市周辺域の地質では認められず、最も近い分布域としては、東方では六甲山地、西方では岡山県の瀬戸内沿岸域をあげることができる(日本の地質「近畿地方」編集委員会編,1987;日本の地質「中国地方」編集委員会編,1987)。現時点では、いずれの地域かを特定することはできないが、いずれにしても姫路市からは数10km以上も離れた地域の土に由来する可能性が高いと言える。

(2)胎土と器種との対応関係

上述した鉱物・岩石組成の由来とさらに粒径組成および砕屑物の割合を器種に対応させてみると、今

回の試料では、高い相関性を見出すことができた。以下に器種ごとに述べる。

1)坏

鉱物・岩石組成では、K1類が4点、K2類とL類がそれぞれ3点ずつという結果であった。この結果から、 豆腐町遺跡出土の奈良時代後半の坏においては、すべて姫路市周辺の土が材料とされてはいるが、3種 類の異なる材質が併存しており、それぞれの材質は、背後にそれぞれ異なる地質を有する採取地の土に 由来していることが考えられる。この材質の違いは、生産者の違いを示している可能性もあると考えら れる。

粒径組成では、モードの粒径と2番目に多い粒径の組み合わせ(以下粒径組み合わせとする)をみると、細粒砂-粗粒シルトが最も多く、6点であり、細粒砂-極細粒砂が3点、極細粒砂-粗粒シルトが1点となる。後述する他の器種に比べると、全体的に細粒の傾向にあることが看取される。また、砕屑物の割合も、後述する他の器種が全てⅡ類であるのに対して、Ⅰ類の試料が7点あり、Ⅱ類の試料は3点しかない。以上のことから、坏の胎土の特徴としては、採取地の異なる土が3種類以上あるが、含有される砂分は、椀や甕などに比べるとほぼ共通して細粒かつ少量であると言える。

2)椀

今回の試料では1点のみである。土の採取地は、姫路市周辺であり、坏の一部の土(K2類)と同様の場所であるが、砂分の粒径組み合わせは中粒砂-細粒砂であり、砕屑物の割合はⅡ類である。すなわち、胎土の特徴として、坏に比べると砂分はやや粗粒であり、また砂分量も多いことが指摘される。

3)甕

2点の試料のうち、漆付着とされたNo.12は、鉱物・岩石組成がC2類であることから、最も近い場合でも六甲山地周辺かあるいは岡山県瀬戸内沿岸域からの搬入品の可能性があると考えられる。一方のNo.13は、姫路市周辺の土であり、坏や椀にも認められたK2類の土を胎土とする。両試料は、粒径組み合わせも異なり、No.12は粗粒砂・中粒砂、No.13は細粒砂・極細粒砂であり、No.12の粗粒傾向が明瞭である。なお、砕屑物の量比は両試料ともにⅡ類である。

4)竈

2点の試料はともに、姫路市周辺の土であり、坏や椀にも認められたK2類の土を胎土とする。粒径組み合わせは2点ともに細粒砂-極細粒砂であり、坏の少数の試料やK2類の甕と同様である。また、砕屑物の量比は両試料ともにII類である。

5)製塩土器

鉱物・岩石組成では、5点の試料のうち、F1類が2点であり、残り3点はC1類、F2類、M類に分かれる。この結果は、少なくとも4種類の異なる土が併存している状況を示しており、前述したように、いずれの胎土も姫路市および周辺域で採取された土ではあるが、土の採取場所はそれぞれ異なった地質を背後に有する場所である。このことから、材質の違いは、製作者の違いを示唆している可能性があると考えられる。すなわち、4者以上の製作者による製塩土器が併存していた状況があったと考えられる。さらに、製塩土器の胎土の鉱物・岩石組成は、上述した坏や椀、甕および竈とも異なることから、それらの器種の製作者とも異なっていた可能性がある。

粒径組成では、粒径組み合わせが4点は粗粒砂-中粒砂であり、1点は中粒砂-細粒砂である。粗粒砂-中 粒砂という粒径組み合わせは、搬入品とされた甕に認められたのみであることから、粒径組成において も他の器種との材質の違い(粗粒傾向にある)は明瞭である。なお、砕屑物の量比は全試料ともにⅡ類で あり、これについては坏の一部や椀、甕、竈と同様である。

当社では、これまでにも豆腐町遺跡から出土した奈良時代の製塩土器について10点の分析事例があ る。既報告では、今回のような分類を行わずに、凝灰岩または流紋岩を含む胎土の試料を播磨平野産、 それらを含まずに花崗岩類を多く含む胎土の試料を播磨平野以外の近畿地方かあるいは中国地方の花崗 岩分布域に由来すると考えた。前者の試料は3点、後者の試料は7点であり、その時点では播磨平野外の ものが多いとされた。これらの試料について、今回の分析と同様の分類基準を当てはめてみると、F1 類とF2類が1点ずつ、C1類が3点、C2類が2点であり、残る3点は、花崗岩類を多く含むC類であるが、 角閃石も黒雲母も極めて微量しか含まないために、C1類ともC2類とも分類されない。これら3点につい て、これまでの分類基準を適用すれば、微量ながらも花崗岩類以外の岩石片を多種類含むC5類に2点が 分類され、花崗岩類以外の岩石片が認められないC6類に1点が分類された。そのうち、C5類ではカリ長 石よりも斜長石の多い傾向が認められ、極めて微量ながらも角閃石または酸化角閃石および凝灰岩が認 められたことから、その由来は、今回のC1類と同様に桜山岩体周縁である可能性がある。したがって、 前回の10点をここで見直してみると、10点のうち、C2類の2点とC6類の1点の合計3点が、今回のC2類 の甕の試料と同様の搬入品であると考えられ、他の分類の7点は姫路市周辺域産ということになる。す なわち、前回および今回の分析を通じては、豆腐町遺跡出土の奈良時代の製塩土器については、同時期 の坏や甕などと土の採取地や砂の粒径は異なるものの、姫路市周辺域で作られたものの方が多く、少数 の播磨平野以外の地域から搬入されたものが混入するという状況が考えられる。

引用文献

猪木幸男, 1981, 20万分の1地質図幅「姫路」. 地質調査所.

伊東隆夫, 1998, 八反田遺跡出土木材の樹種. 「兵庫県佐用町所在 八反田遺跡」, 兵庫県文化財調査報告第180冊, 兵庫県教育委員会, 54-55.

神戸市教育委員会, 2002, 平成11年度神戸市埋蔵文化財年報. 416p.

町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰 - 姶良Tn火山灰の発見とその意義 - . 科学, 46, 330 347

町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察 - 岩石学的・堆積学的による - . 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.

日本の地質「中国地方」編集委員会, 1987, 日本の地質7 中国地方, 共立出版, 290p.

日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質6 近畿地方. 共立出版, 297p.

Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地 謙·伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.

田中眞吾,2001,御津町とその周辺の自然.御津町史編集専門部委員会編 御津町史第一巻,御津町,2-76.

山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和, 2000, 龍野地域の地質. 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 66p.

第2節 豆腐町遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

1. 測定対象試料

豆腐町遺跡は、兵庫県姫路市飯田に所在する。測定対象試料は、奈良時代後半の遺構面を覆う包含層から出土した木炭(No.1: IAAA-101168、No.2: IAAA-101169) 2点である(表12)。

2. 測定の意義

材の絶対年代を明らかにする。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表12に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_o)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、 測定装置に装着する。

4. 測定方法

3MVタンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2)をベースとした14C-AMS専用装置を使用し、 14 Cの計数、 13 C濃度(13 C/ 12 C)、 14 C濃度(14 C/ 12 C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(14 Cの計算に実施する。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) δ^{13} C は、試料炭素の 13 C 濃度(13 C/ 12 C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表12)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) 14 C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中 14 C濃度が一定であったと仮定して測定され、 1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 14 C年代は δ^{13} Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表12に、補正していない値を参考値として表13に示した。 14 C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 14 C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の 14 C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14 C濃度の割合である。 pMCが小さい(14 Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが 100 以上(14 Cの量が標準現代炭素と 同等以上)の場合Modernとする。この値も δ 13 Cによって補正する必要があるため、補正した値を表 12 に、補正していない値を参考値として表 13 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14 C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14 C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 14 C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が 14 C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 δ^{13} C補正を行い、下一桁を丸めない 14 C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Reimer et al. 2009) を用い、Reimer では、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表Reimer した。暦年較正年代は、Reimer であることを明示するために Reimer 「Reimer et al. Reimer et al.

6. 測定結果

包含層出土木炭の 14 C年代は、No.1が $1,560 \pm 30$ yrBP、No.2が $1,370 \pm 20$ yrBPである。暦年較正年代は、 1σ でNo.1が5世紀中葉から6世紀前半頃、No.2が7世紀中葉頃の範囲となり、 2σ で見ると各々これらより若干広い範囲が示される。試料が出土した包含層に覆われる遺構面の時期よりも古い年代値となった。

試料の炭素含有率は50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 12 試料一覧

Mark 1. 25 13		10000	試料 形態	処理	δ ¹³ C (‰)	δ ¹³ C補正あり			
測定番号	試料名	採取場所		方法	(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)		
IAAA-101168	No.1	遺構:包含層	木炭	AAA	-26.57 ± 0.62	$1,560 \pm 30$	82.30 ± 0.28		
IAAA-101169	No.2	遺構:包含層	木炭	AAA	-26.76 ± 0.53	$1,370 \pm 20$	84.33 ± 0.26		

[#3756]

表 13 暦年較正年代

X 10 /A 1 /A 1 / 1 / 1										
測定番号	δ ¹³ C補 Age (yrBP)	i正なし pMC (%)	暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲					
IAAA-101168	1,590 ± 30	82.03 ± 0.26	1,564 ± 27	435calAD - 493calAD (47.4%) 507calAD - 520calAD (10.1%) 527calAD - 540calAD (10.6%)	425calAD - 557calAD (95.4%)					
IAAA-101169	1,400 ± 20	84.03 ± 0.24	1,369 ± 24	647calAD - 667calAD (68.2%)	620calAD - 627calAD (1.4%) 632calAD - 683calAD (94.0%)					

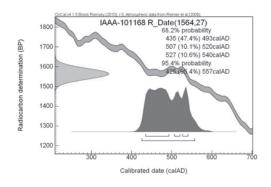
[参考值]

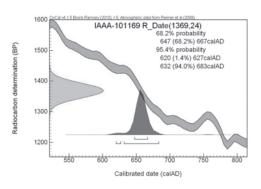
文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150





[参考] 図 23 歴年較正年代グラフ

第Ⅵ章 おわりに

豆腐町遺跡は姫路駅構内に所在する遺跡である。6ヵ年にわたる発掘調査で多くの成果を挙げている。弥生時代から近代に至る複合遺跡である。弥生時代の溝などからは縄文土器も少数ながら出土している。弥生時代は各時代の遺構が僅かに検出されている。周辺には市野郷遺跡・北条遺跡・千代田遺跡など著名な遺跡が広がっている。船場川沿いにも多くの遺跡が存在するが、それらと比較すると小規模な集落ではあるが、広範囲に各時代にわたって遺構が認められる。古墳時代前中期の遺構は認められず、遺物もほとんど存在しない。遺構が確認されるのは古墳時代末頃から奈良時代にかけてで、豆腐町遺跡の盛行期である。平安時代から鎌倉・室町時代には小規模な集落だったようで、掘立柱建物・土坑・溝などが調査されている。室町時代後半から近世そして鉄道敷設される明治20年代までは耕作地であった。耕作痕が検出されている以外に農業作業場や倉庫と考えられる小規模建物も検出されている。近代の鉄道関連遺構は特徴的な遺構であり、豆腐町遺跡を代表する時代である。長期間にわたる複合遺跡であるが、奈良時代と近代が遺跡を代表する2つの画期である。

本報告の「豆腐町遺跡 II」の調査は単年度で実施したもので、前回は山陽本線高架部分が対象であったのに対して、姫新線高架部分が対象であった。「豆腐町遺跡 I」の北側隣接地である。調査は残暑厳しい8月末から調査をはじめ晩秋の気配が高まりはじめる11月中旬まで調査を行った。旧線路敷の下で山陽本線の下りホームに接した部分の調査であった。ホームなど解体作業と平行して行った。調査後半は兵庫国体が開催され、例年以上に昇降客が多かったように思える。今まで通行していた高架通路や地下通路も閉鎖され、新(高架)駅からに一元化されたことにより、さらに人が多い印象を受けた。 I 区の北側には未だ地上に位置する姫新線が走っていた。そこにはハバタン列車も走り、国体気分をさらに盛り上げていた。調査状況は西側の通路や駅北のビルなどからも見られ、興味深く線路越しやフェンス越しに見る姿も見られた。姫新線のホームから一生懸命見る姿や降りて近くまで来られる方もあった。工事区域内の調査で線路敷きであることから、一般の立ち入りが困難で現地説明会を実施できなかったことは仕方ないこととはいえ、残念であった。その代わりとしての展示や報告会も実施できず、初代機関車転車台を保存できなかったことを含めて心残りである。僅かにその後担当者の長濱が姫路市埋蔵文化財センターや兵庫県立考古博物館で講演したにとどまっている。報告書刊行後に資料が活用されることをさらに願うものである。

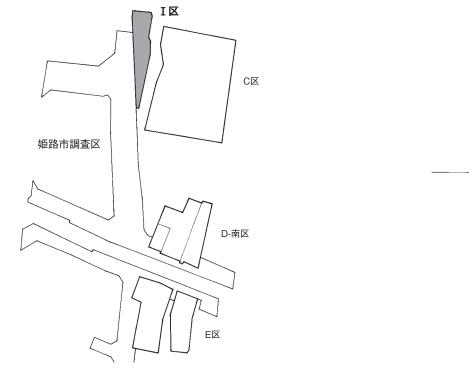
今回の調査は3地区合わせて1500㎡余りと小面積である。その割には成果が高かったと思われる。大筋では前回の結果を追認するものであるが、細かく見ると新たな事実もつかめた。

I区では初代転車台が検出されたことが大きい成果である。前回(豆腐町遺跡 I)では2代転車台と 扇形車庫が検出されている。兵庫県の近代遺跡でも鉄道遺産を代表する遺跡といえよう。過去のものと 思っていた明治期の遺産が今回の調査や区画整理によって徐々に失われつつある。逆に現在まで生きて いる市川橋橋脚など現役のものもあることは新たな驚きであった。現状でも同じ煉瓦が使用されていたことは感動させられた。今回の調査では短期間しか使用されなかった初代機関車転車台であった。明治 20年代に構築され明治37年頃には撤去された短命の転車台であった。機関車の大型化に伴う2代転車台へのバトンタッチが行われたと考えられているが、当然初代の位置付けは重要である。今回、調査できたことは幸いであったと思われ、代表例となることを願うものである。

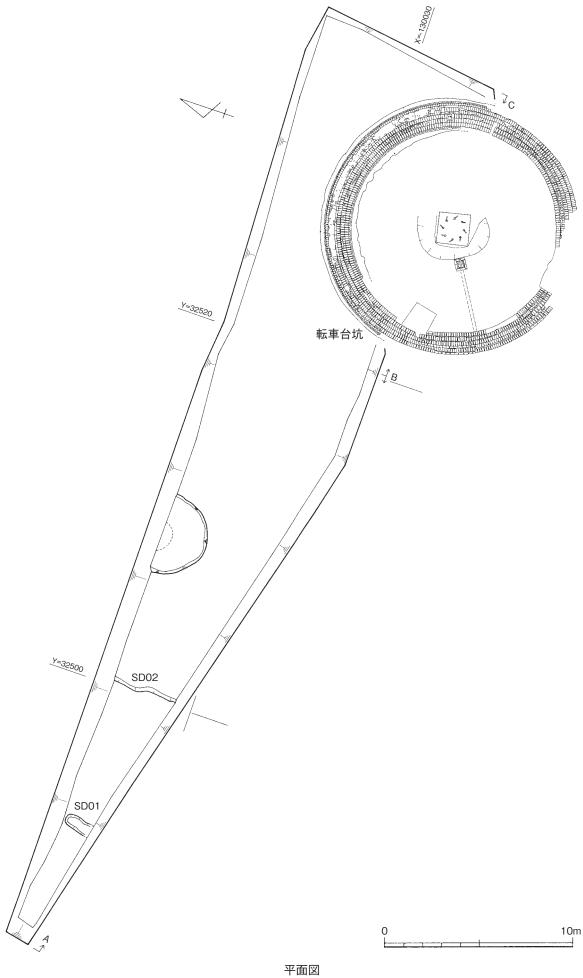
Ⅱ区の大きな調査結果は、奈良時代の官衙遺構を調査したことである。国府関連遺構の可能性が高い 遺跡もしくは飾磨郡衙の一部と考えられている。前回の調査成果に資料を追加したことになるが、今回 の調査成果を加えれば、豆腐町遺跡の評価がさらに高まるものと思われる。検出した遺構は掘立柱建 物・柵・井戸・石敷遺構・土坑・落ち込み・ピットである。掘立柱建物・柵の主軸方向は3種類あり、 時期差があることはもちろん、地割り方向を変えていることが理解できる。SB01をはじめ溝は正方位 を採っているが、石敷遺構やそれに伴う柵SA02は主軸を変えている。前回の調査では正方位を有する ものはなく、今回の調査は時期差のある遺構を検出したことになる。掘立柱建物・柵の切り合い関係か ら3時期に分けられる。N4°Wに主軸を有するSB02から正方位を採るSB01・SA01になり、さらにN25 °Eの主軸を有するSA02に変化している。前回の調査では主軸方向は3時期の前後に限られている。 SB01は特殊な時期か方位を採用していることになる。豆腐町遺跡の主流は正方位を持たない遺構で、 石敷遺構などが主体となる盛期の遺構と言える。それを示すように特徴的な遺物は南北石敷遺構から多 く出土している。墨書土器や刻書土器・漆付着土器・坩堝などが出土している。製塩土器は万遍なく出 土している。厚手の砲丸形となるタイプで、布目が残るものも数点あるが大半はユビ成形のものであ る。出土遺物の質量から判断して官衙的性格を有していることは確実である。飾磨郡衙との関係を説か れているが播磨国府関連遺構でも構わないのではないかと思われる。工房を主とする雑所と考えられな いだろうか。

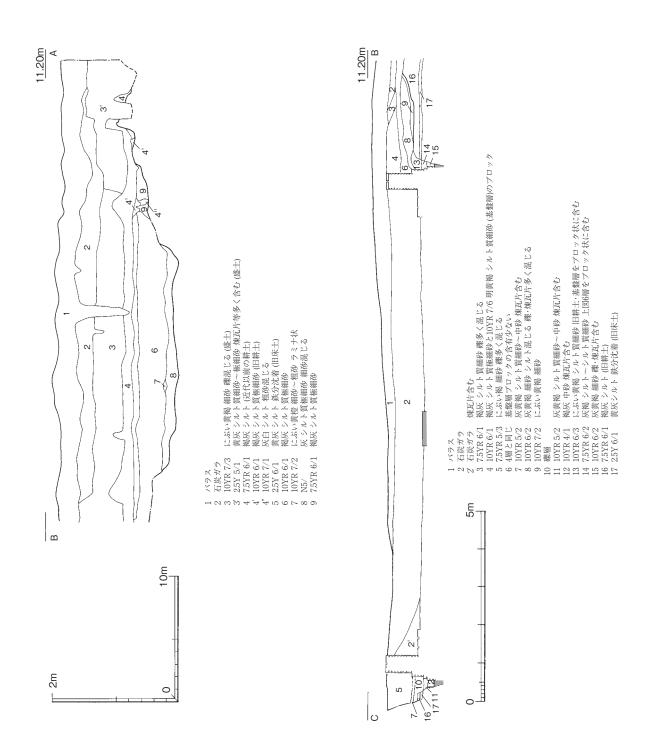
<u>Y=32800</u>

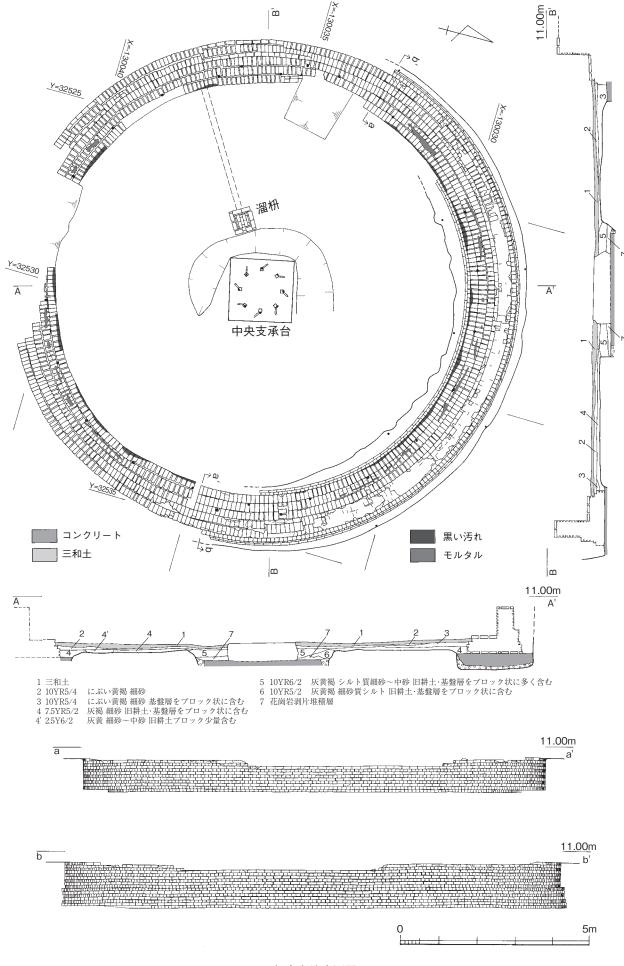
Y=32700



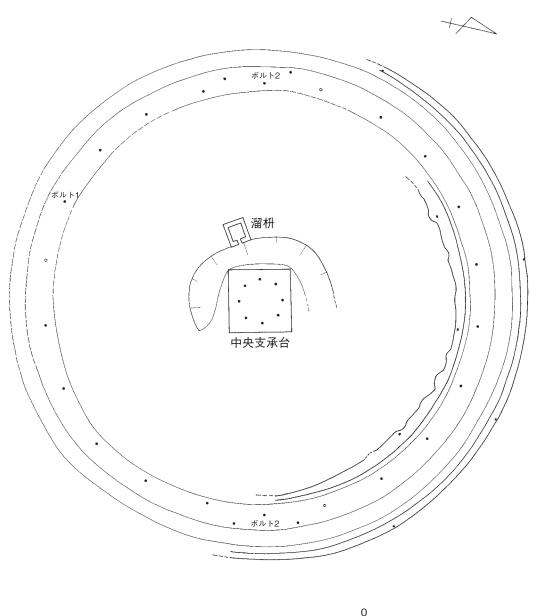
調査区配置図(1:2000)

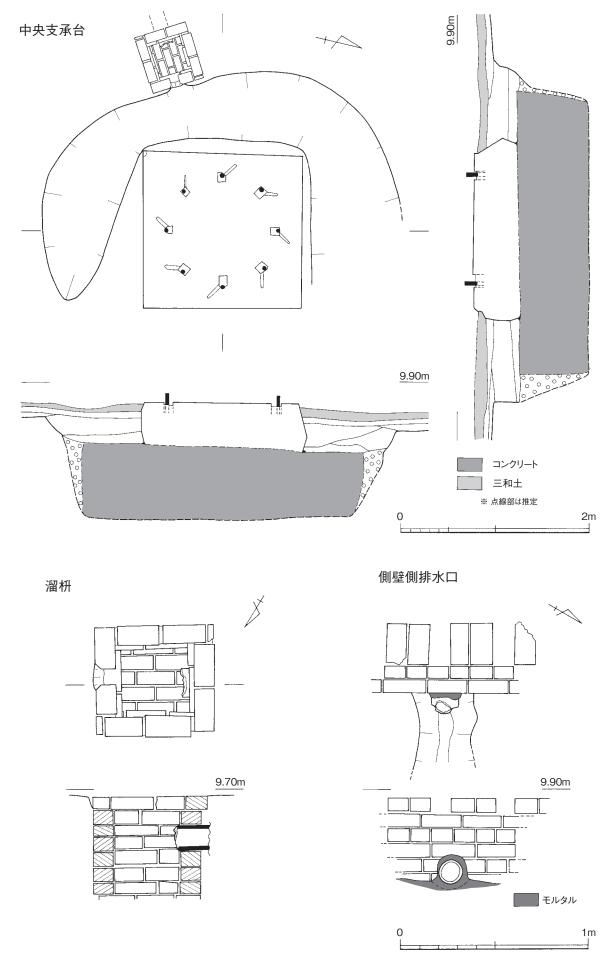




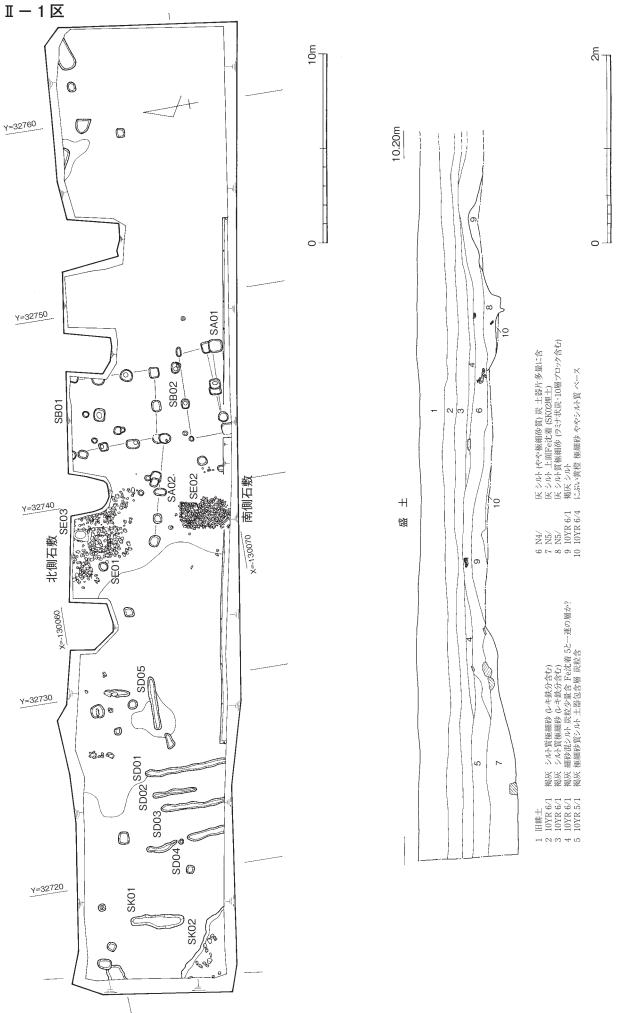


転車台坑実測図

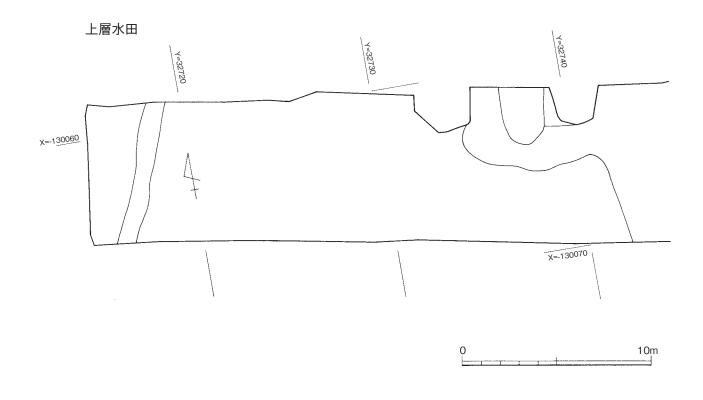


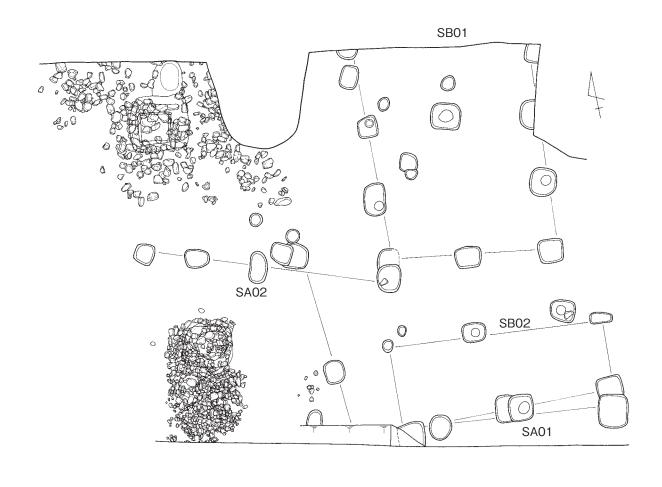


転車台坑中央支承台・集水枡実測図



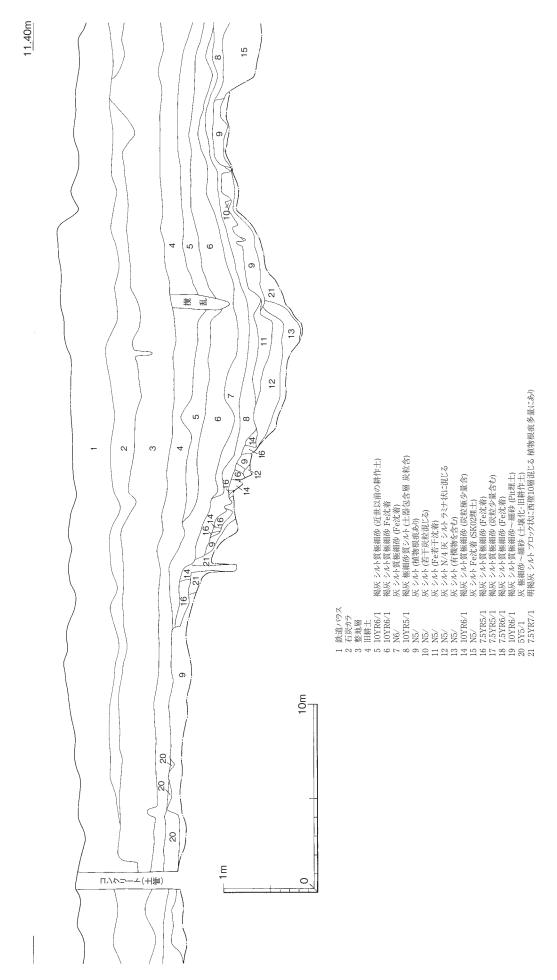
平面図・西壁土層断面図





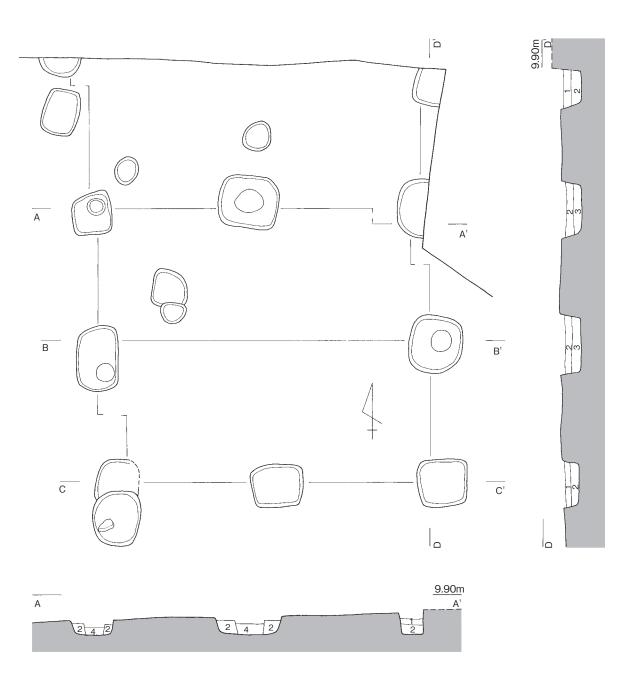


上層水田実測図・中央部平面図

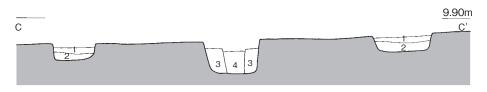


南壁土層断面図

図版 10 $II - 1 \boxtimes$



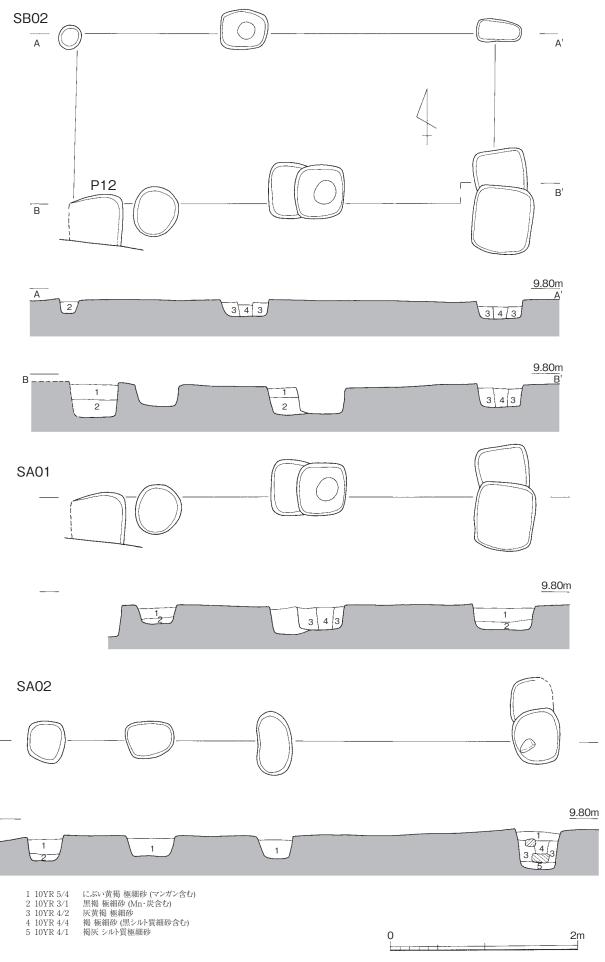




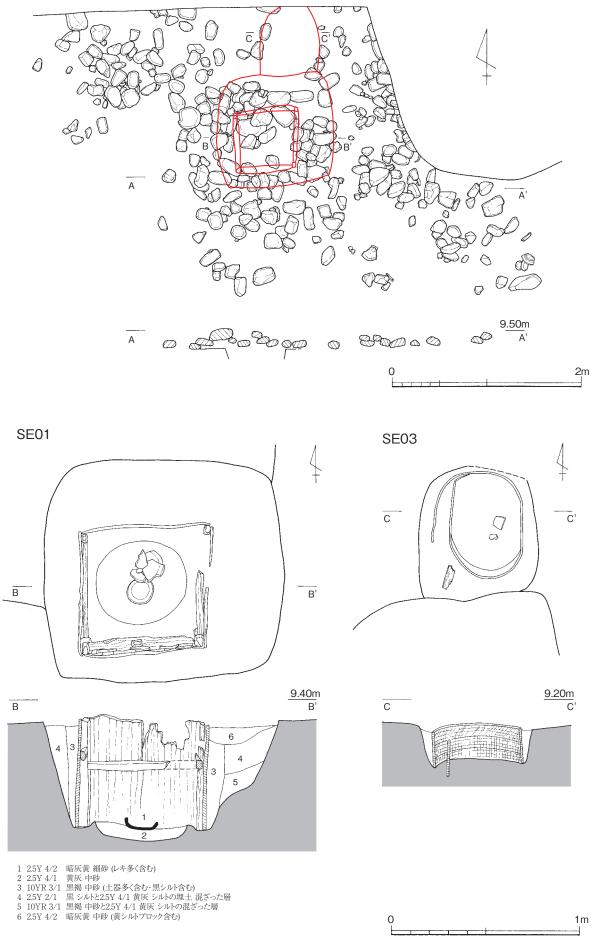
- 1 10YR 5/4 にぶい黄褐 極細砂 (マンガン含む) 2 10YR 3/1 黒褐 極細砂 (Mn・炭含む) 3 10YR 4/2 灰黄褐 極細砂 4 10YR 4/4 褐 極細砂 (黒シルト質細砂含む)



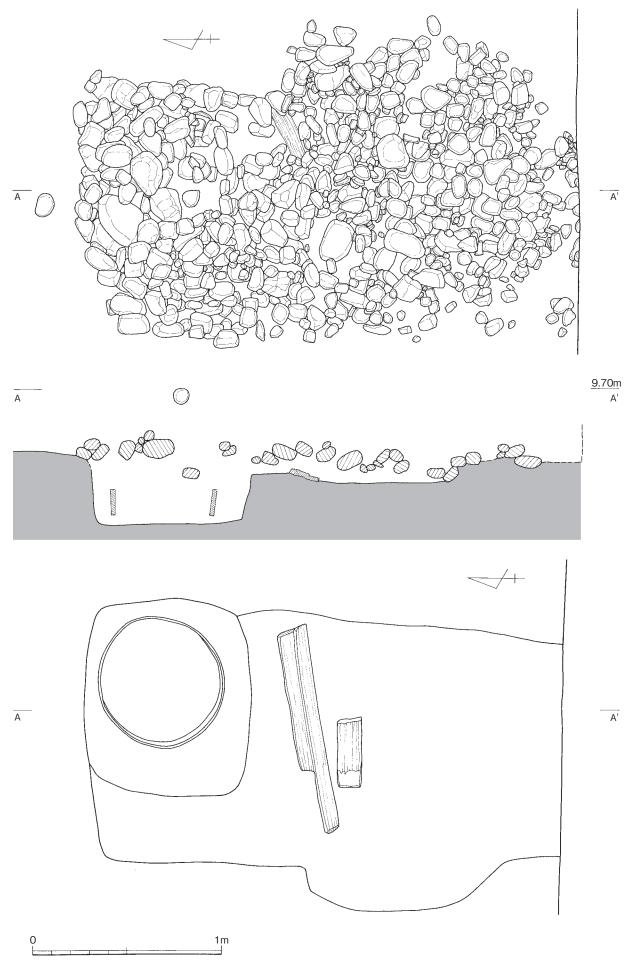
SB01 実測図



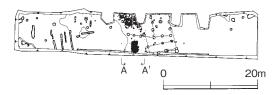
SB02・SA01・SA02 実測図



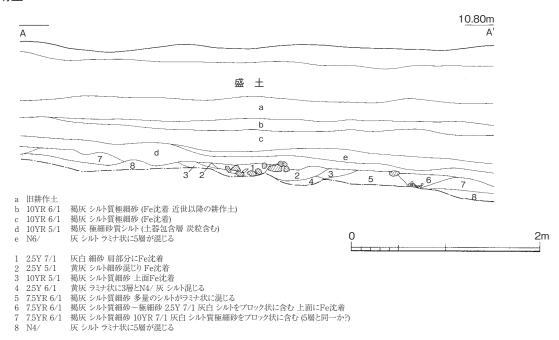
北側石敷・SE01・SE03 実測図



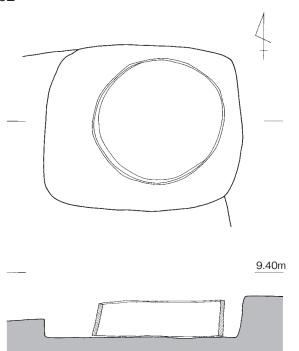
南側石敷・SE02 実測図



南壁

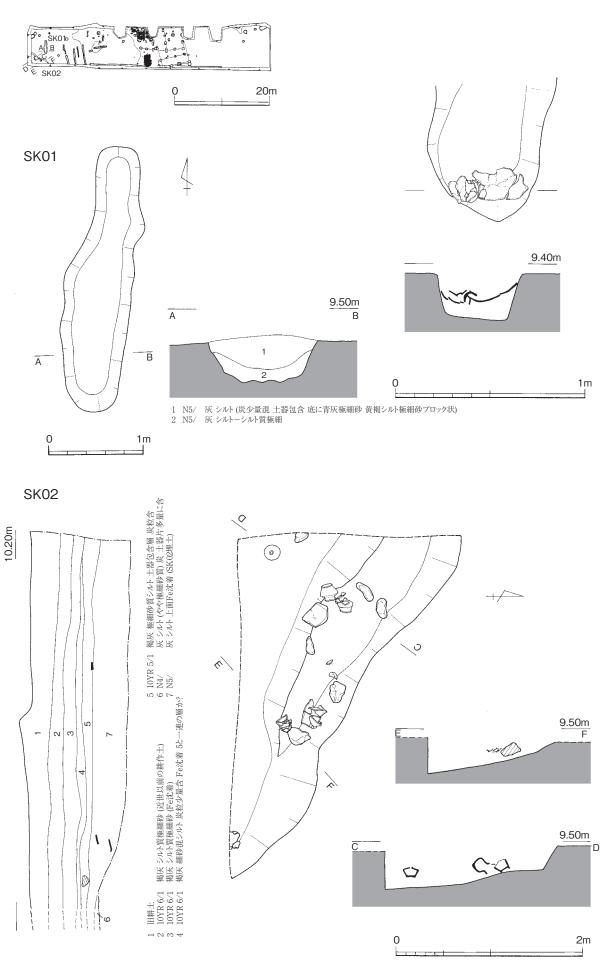


SE02



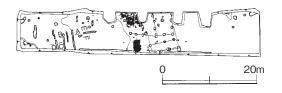


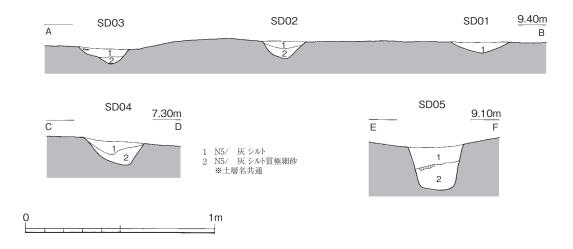
南側石敷南壁土層断面図・SE02 実測図

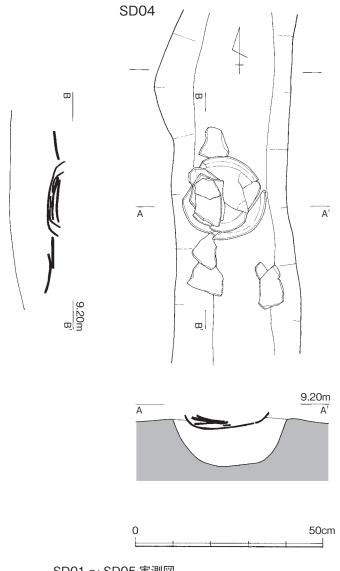


SK01 · SK02

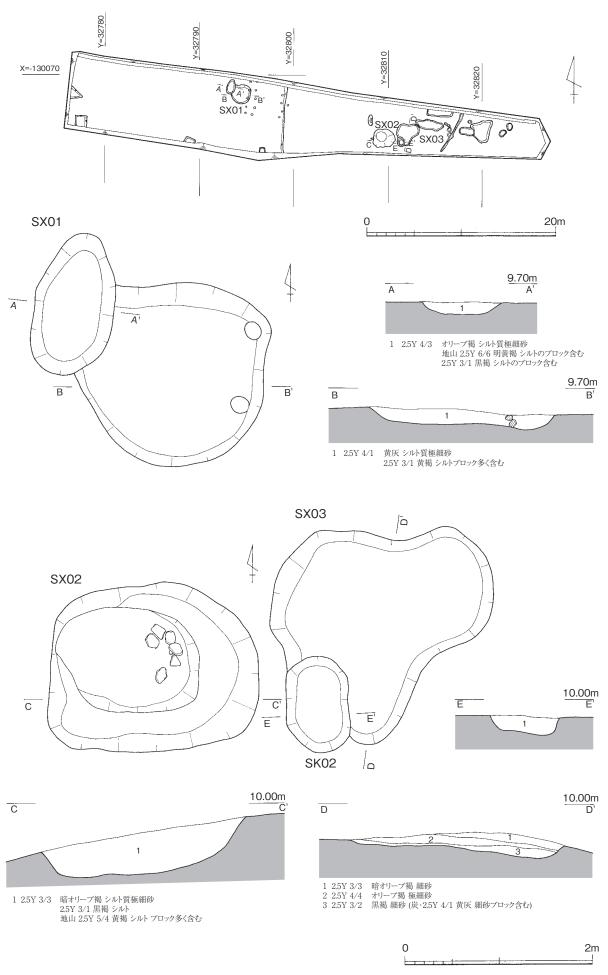
図版 16 $II - 1 \boxtimes$



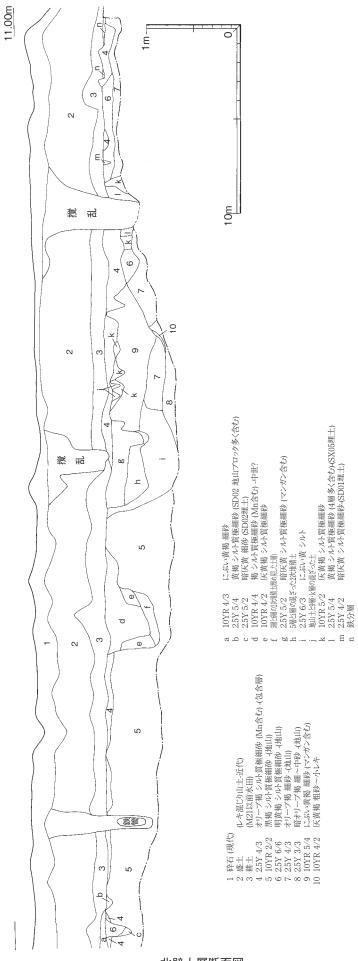




SD01 ~ SD05 実測図

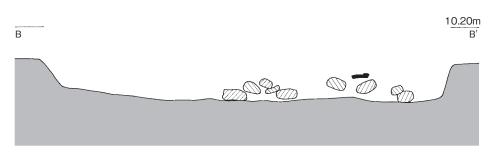


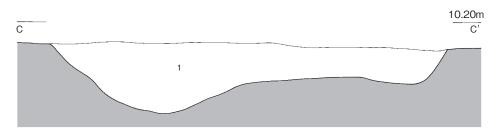
平面図・遺構実測図 (1)



北壁土層断面図





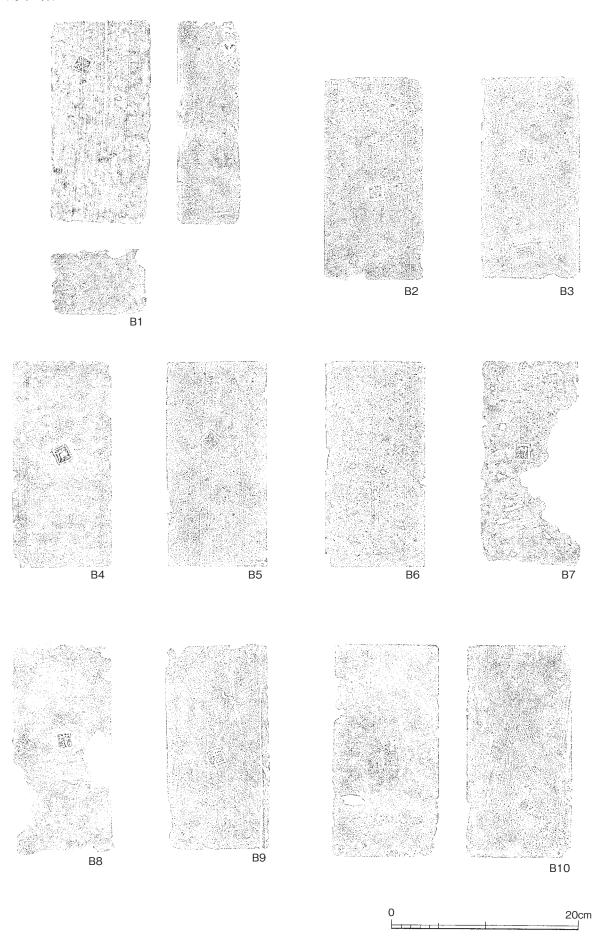


1 2.5Y 4/3 オリーブ褐 細砂~極細砂 (2.5Y 4/1 黄灰 シルト質極細砂多く含む)



SX06 実測図

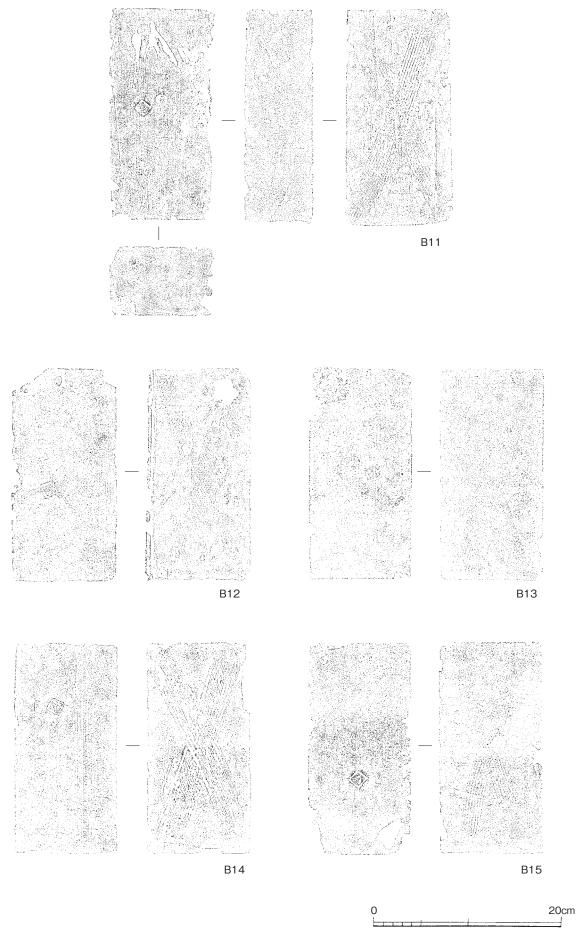
刻印1類



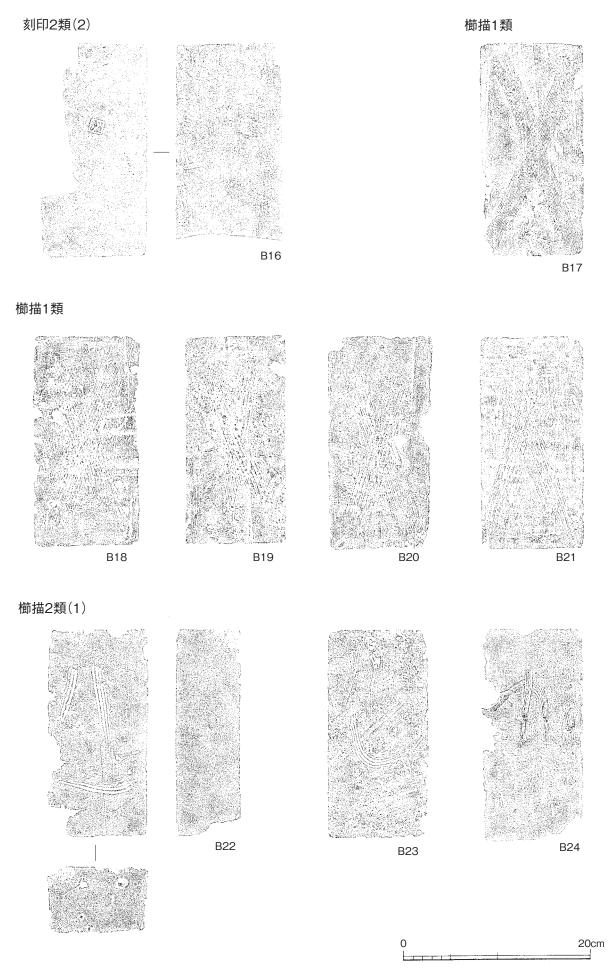
出土煉瓦 (1)

I 区 図版 21

刻印2類(1)

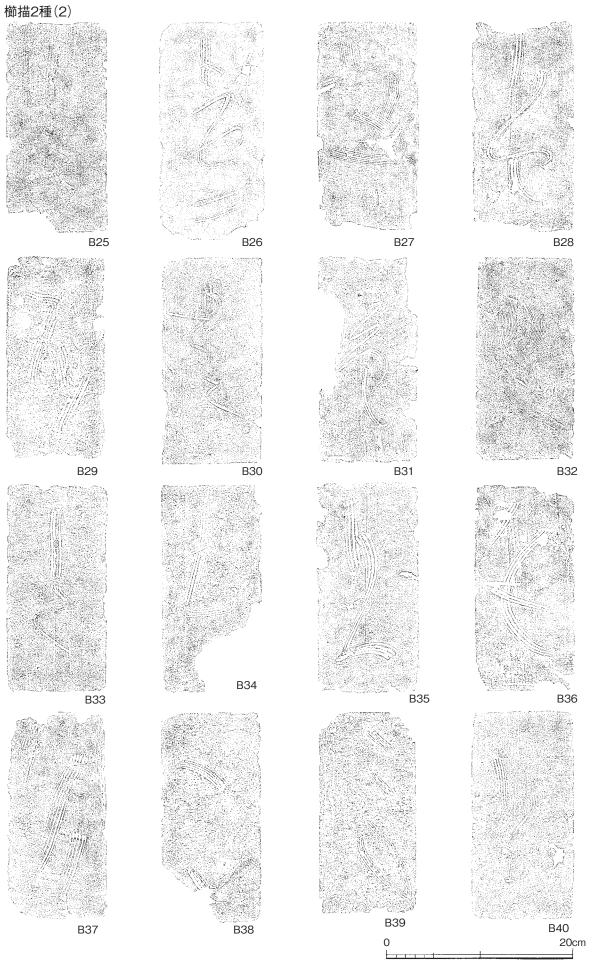


出土煉瓦 (2)



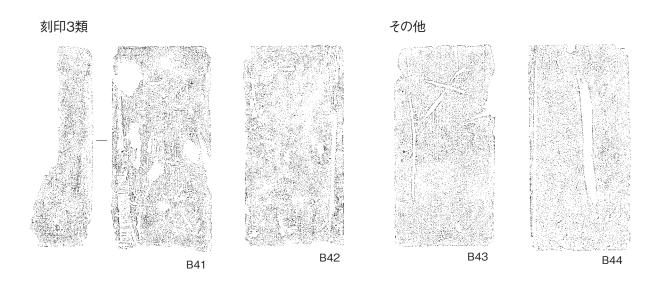
出土煉瓦 (3)

I 区 図版 23

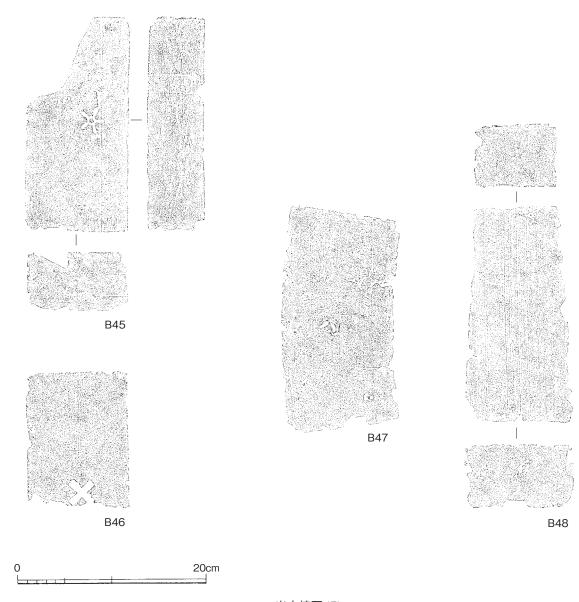


出土煉瓦 (4)

図版 24 I 区

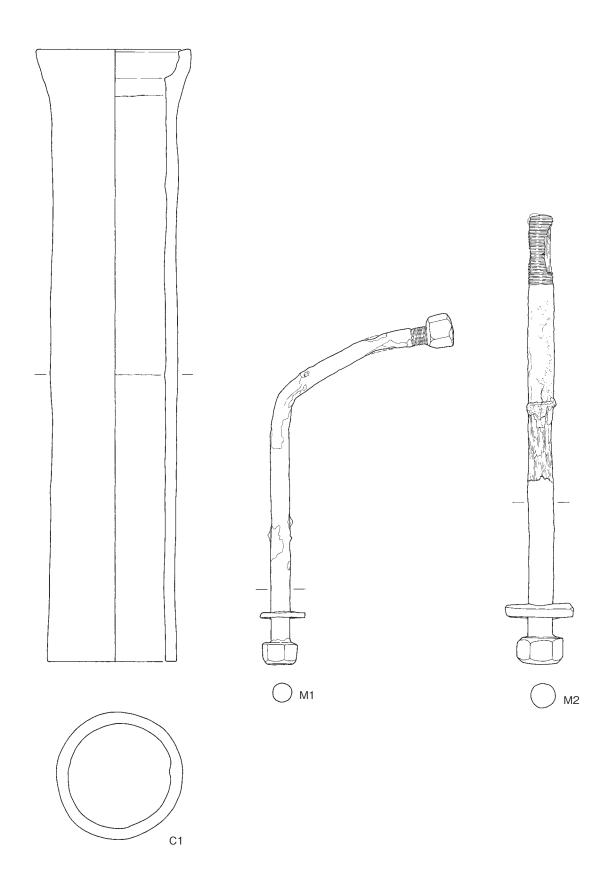


調査区周辺採集煉瓦



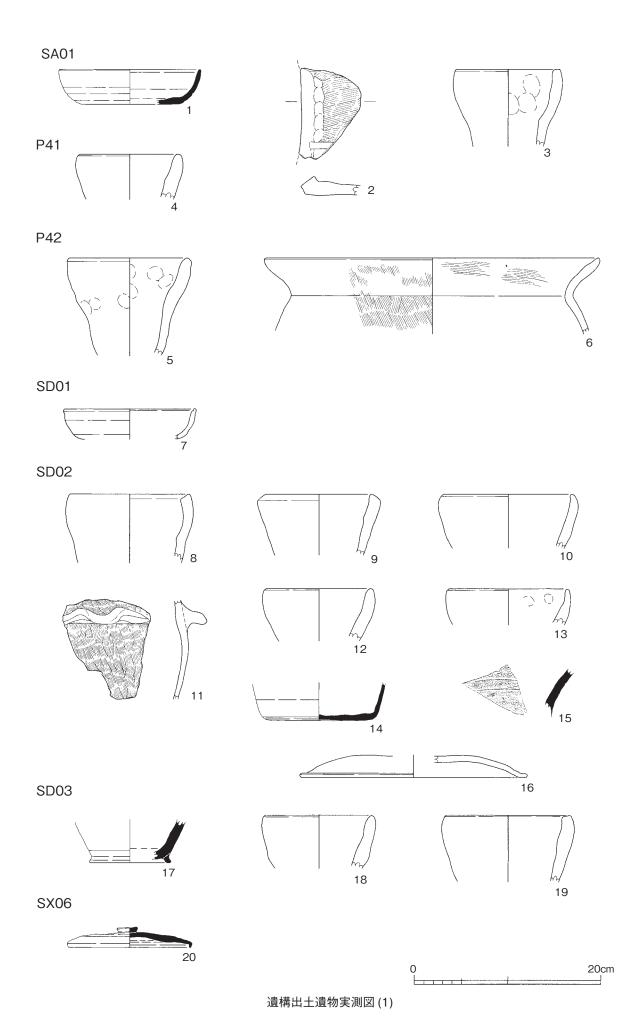
出土煉瓦 (5)

ΙX

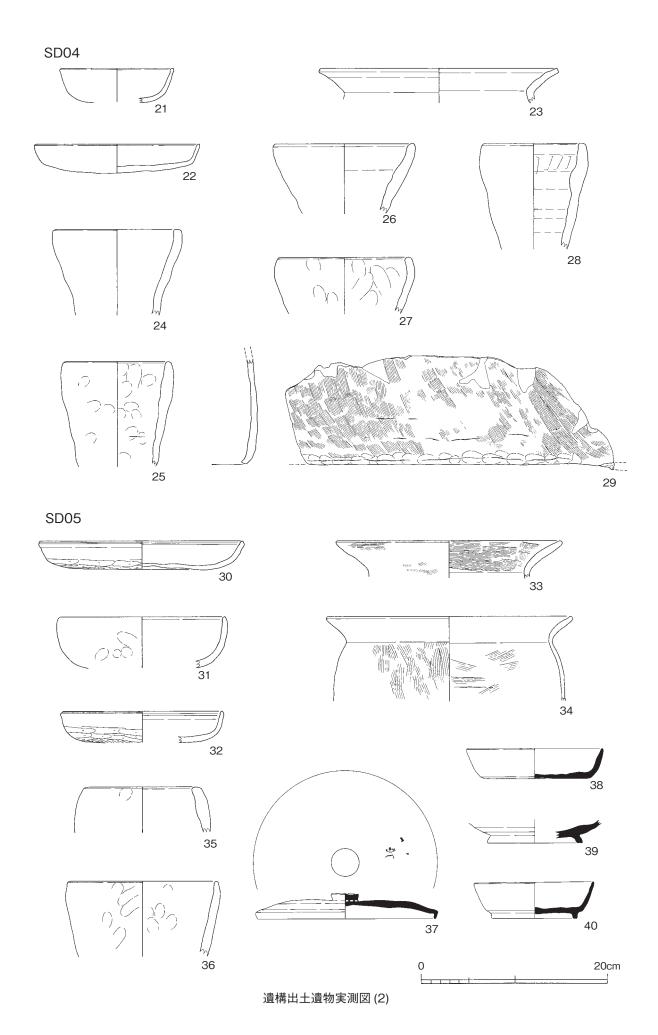


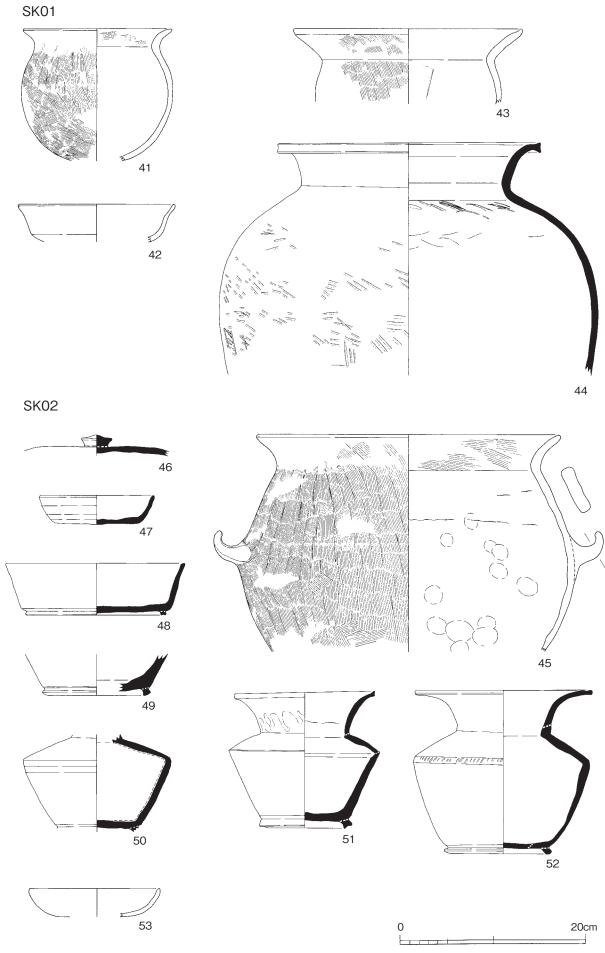


出土土管・鉄器実測図

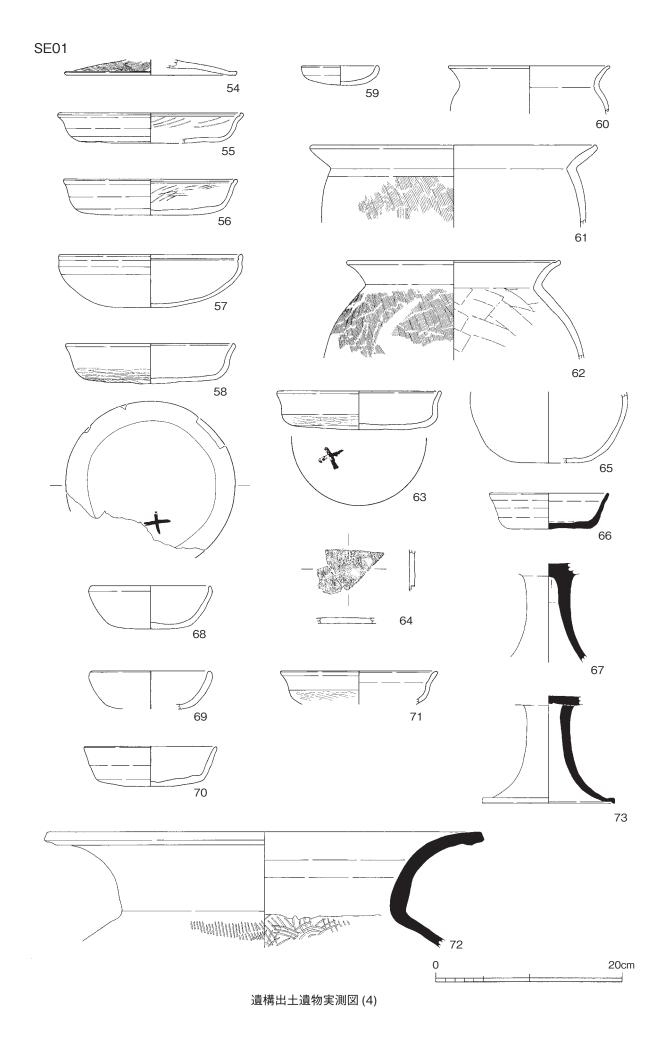


Ⅱ — 1 区 図版 27

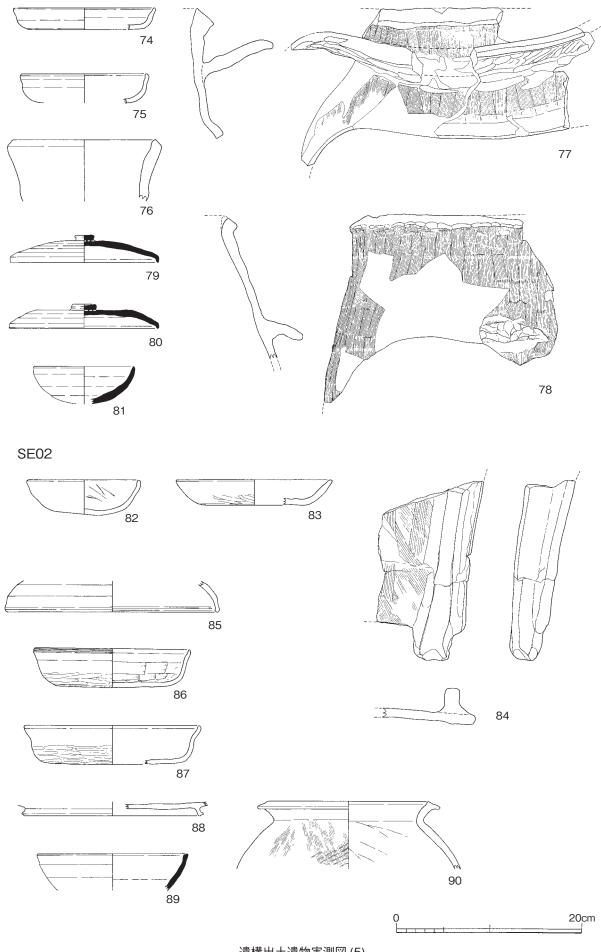




遺構出土遺物実測図 (3)

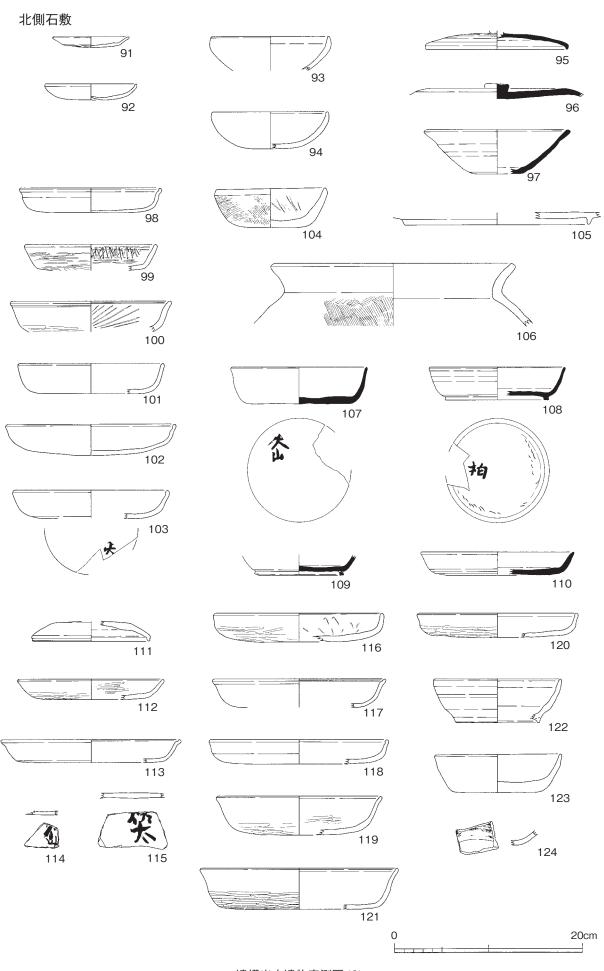


図版 30 **I** − 1 🗵

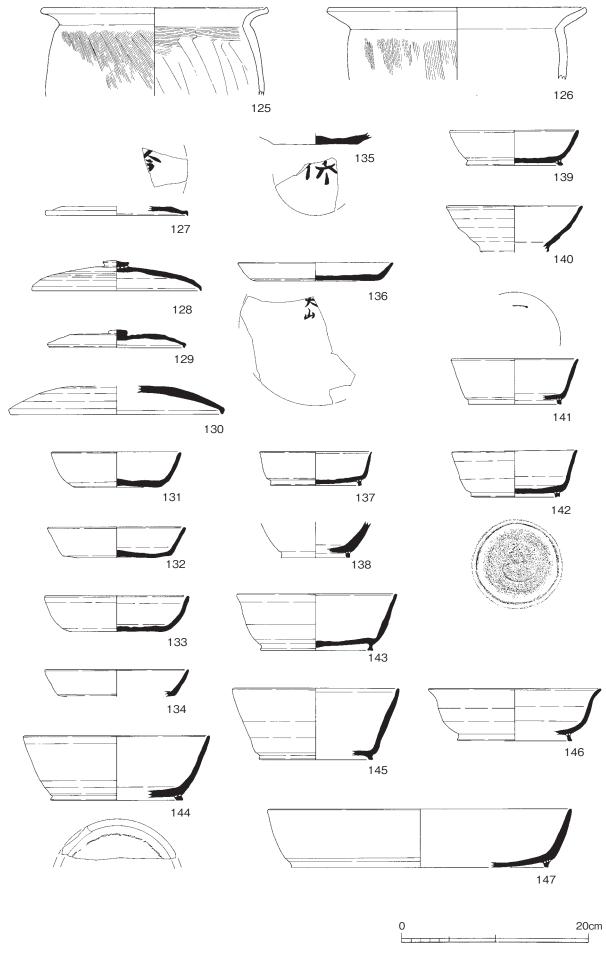


遺構出土遺物実測図 (5)

Ⅱ — 1 区 図版 31

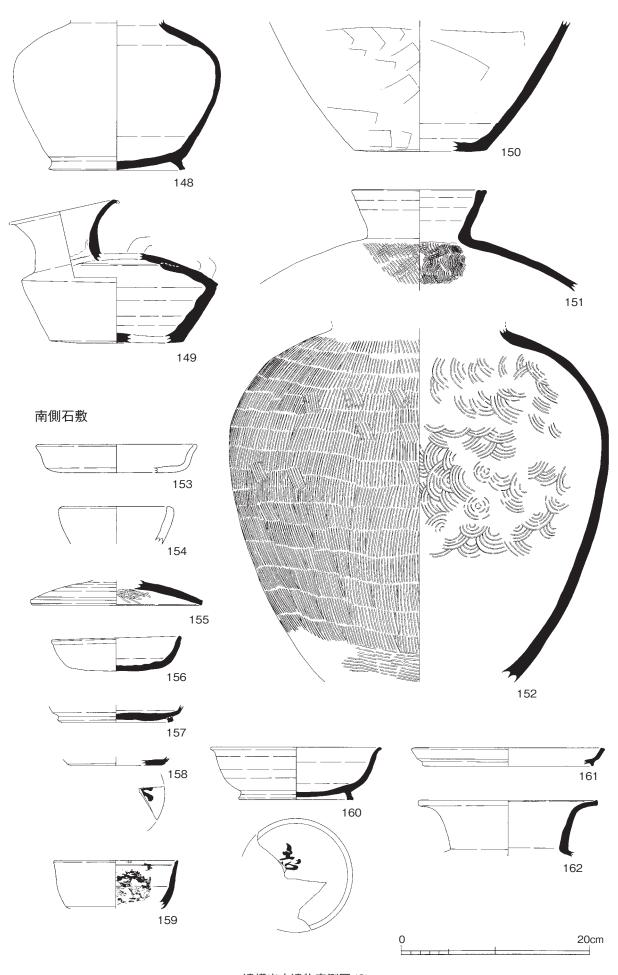


遺構出土遺物実測図 (6)

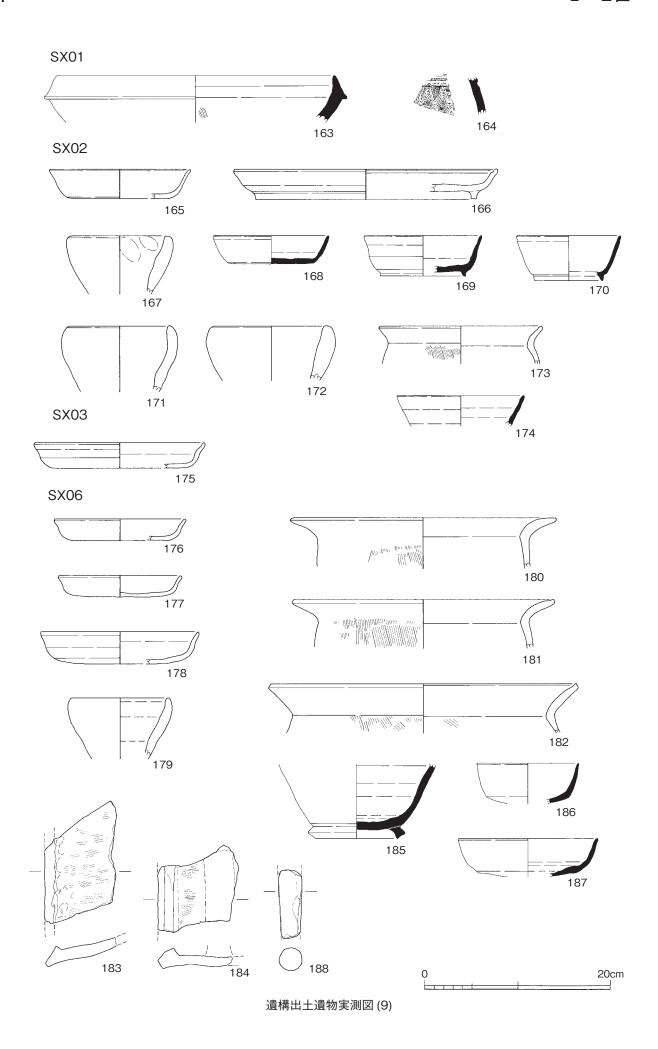


遺構出土遺物実測図 (7)

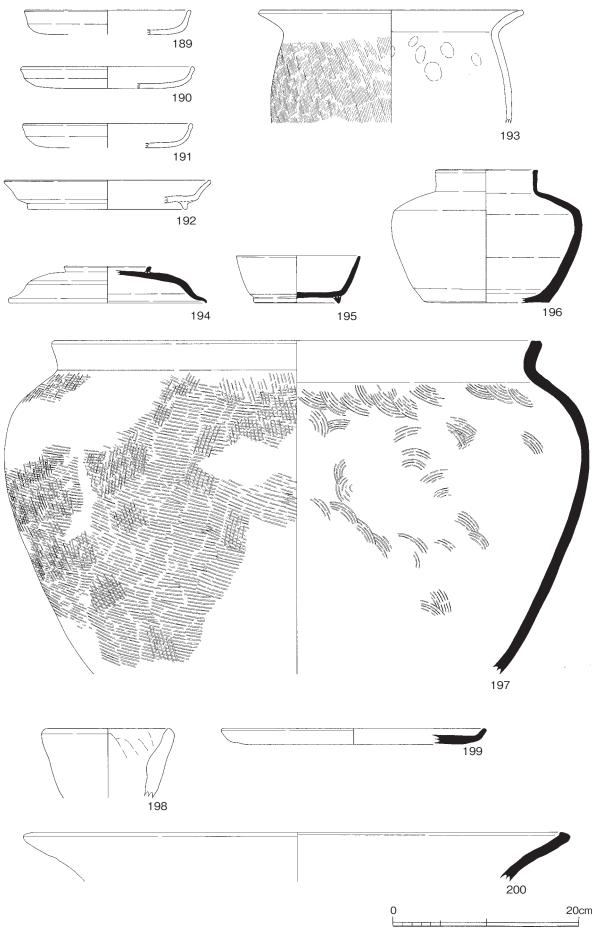
Ⅱ − 1 区 図版 33



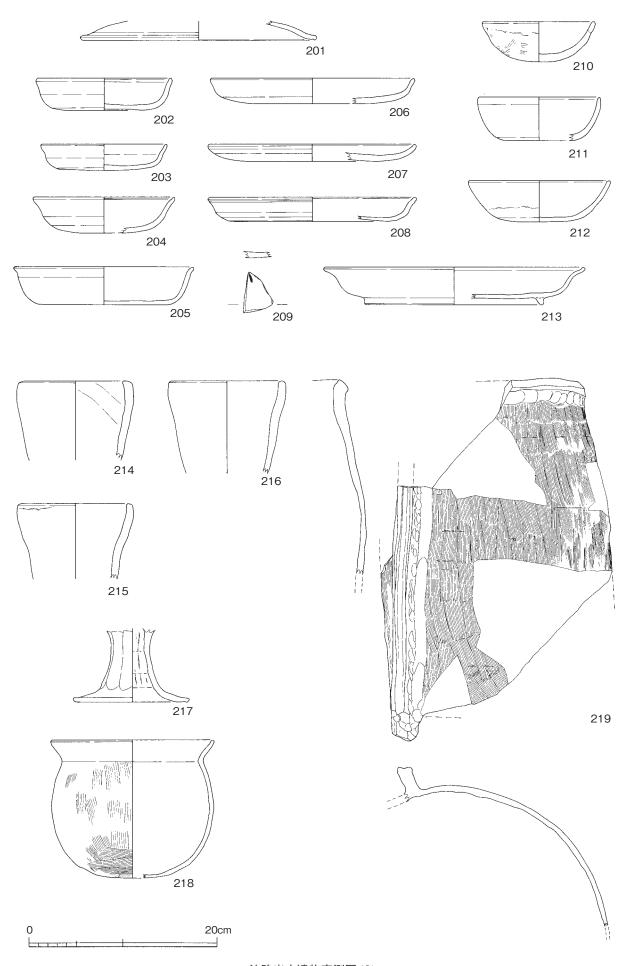
遺構出土遺物実測図 (8)



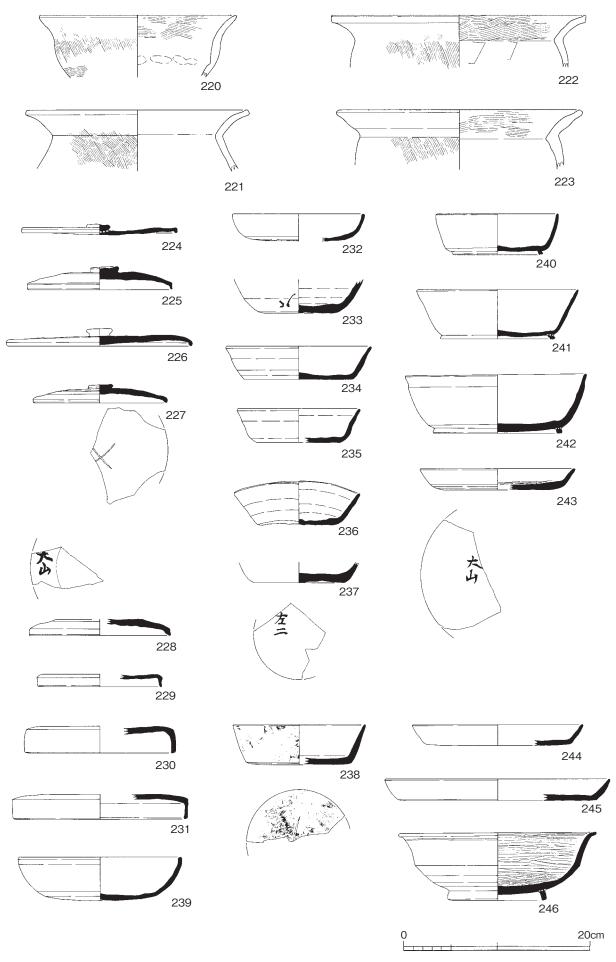
Ⅱ — 1 区 図版 35



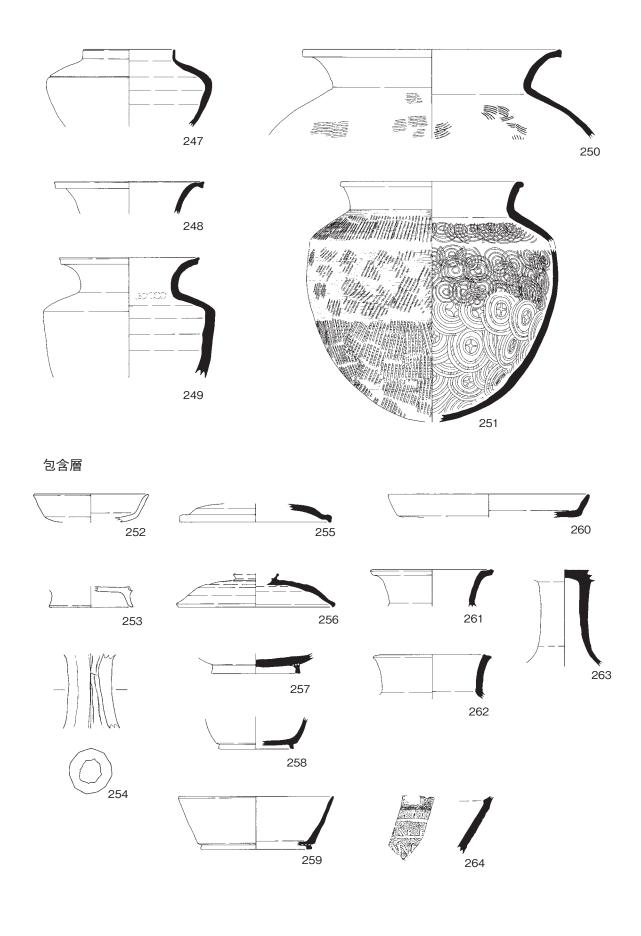
流路出土遺物実測図 (1)



流路出土遺物実測図 (2)

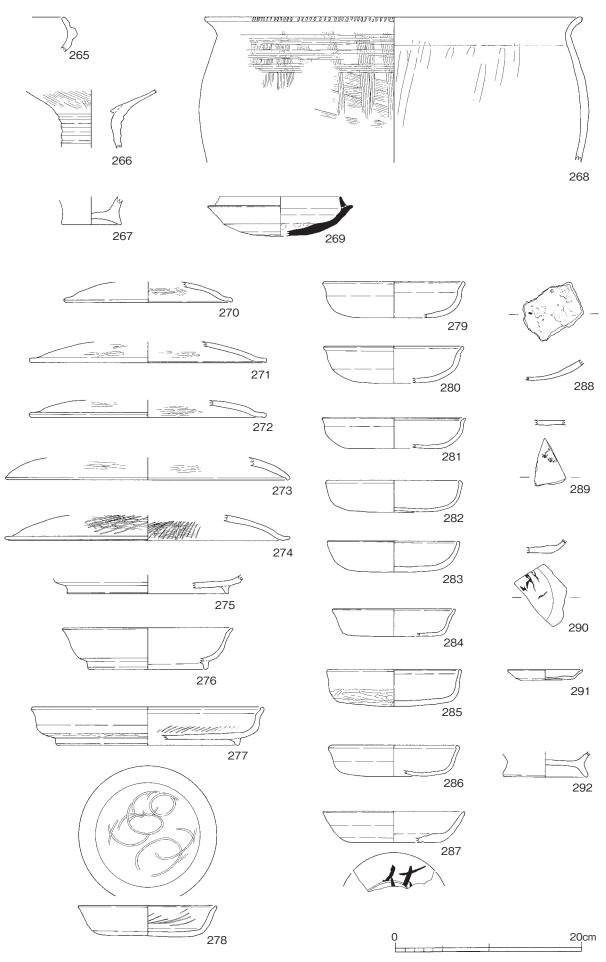


流路出土遺物実測図 (3)

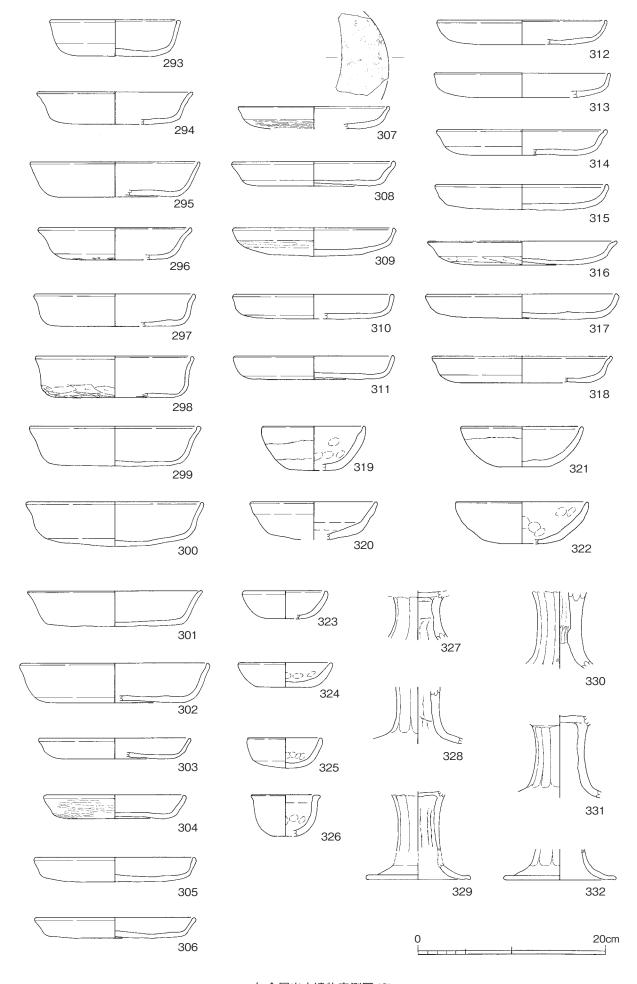




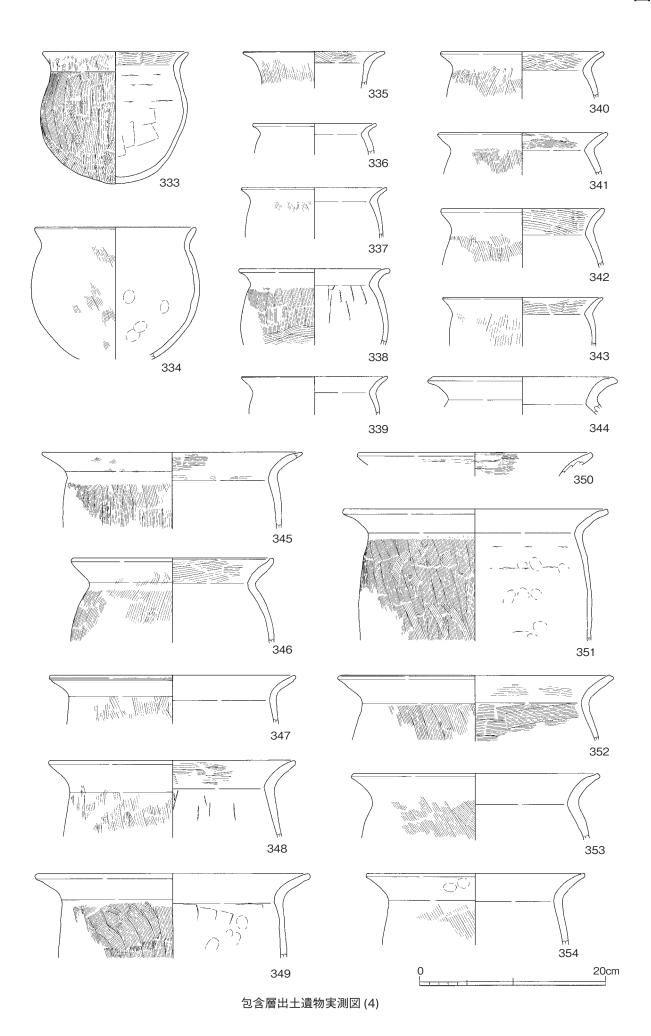
流路出土遺物実測図 (4)・包含層出土遺物実測図 (1)

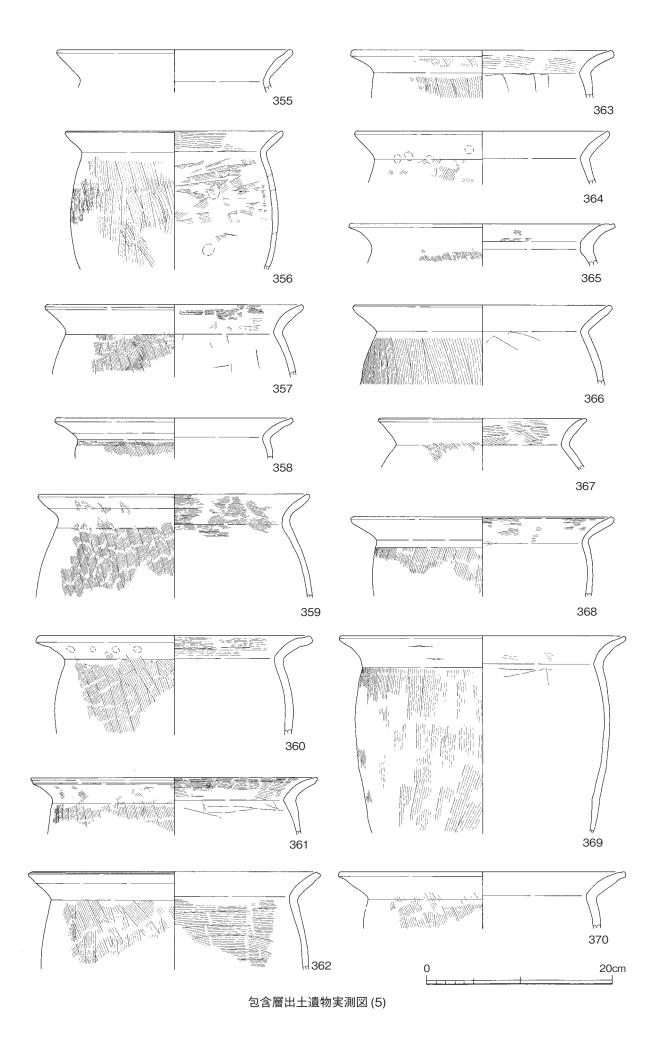


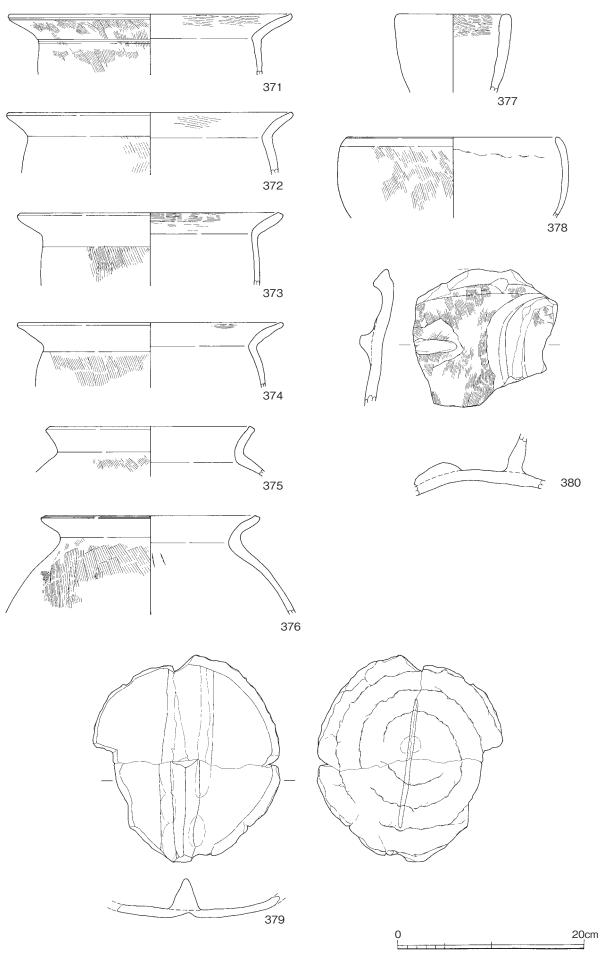
包含層出土遺物実測図 (2)



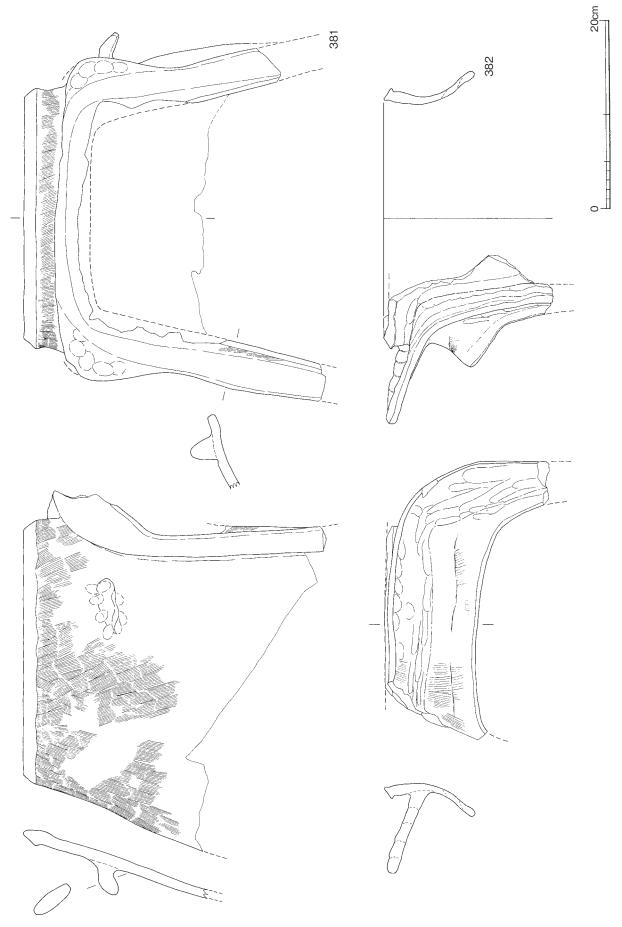
包含層出土遺物実測図 (3)



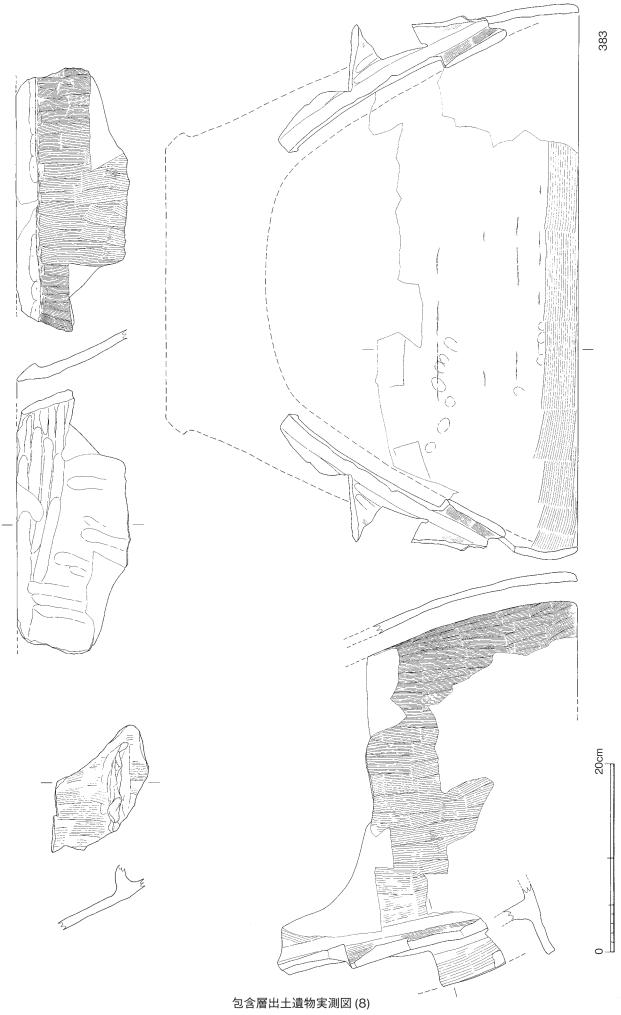


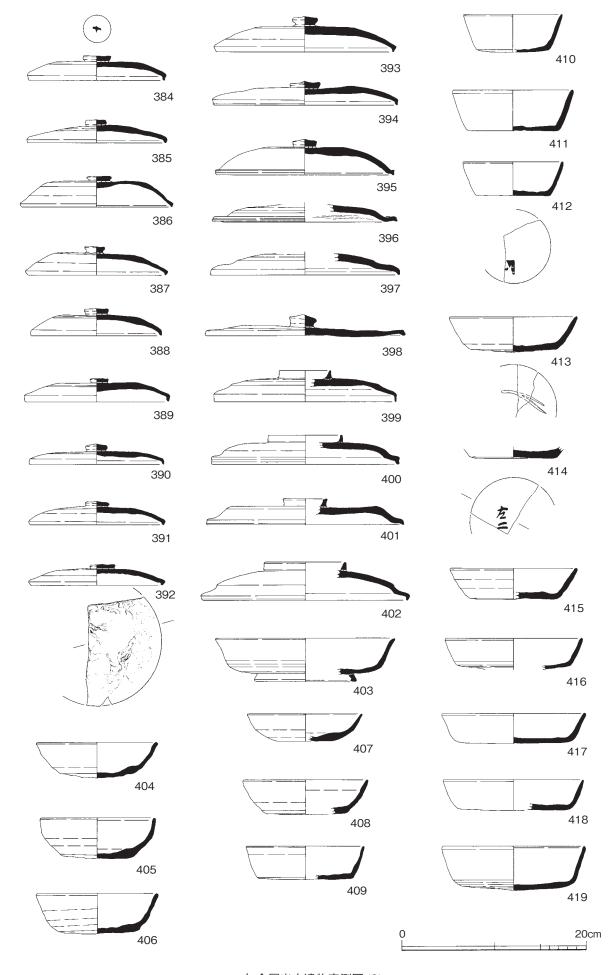


包含層出土遺物実測図 (6)

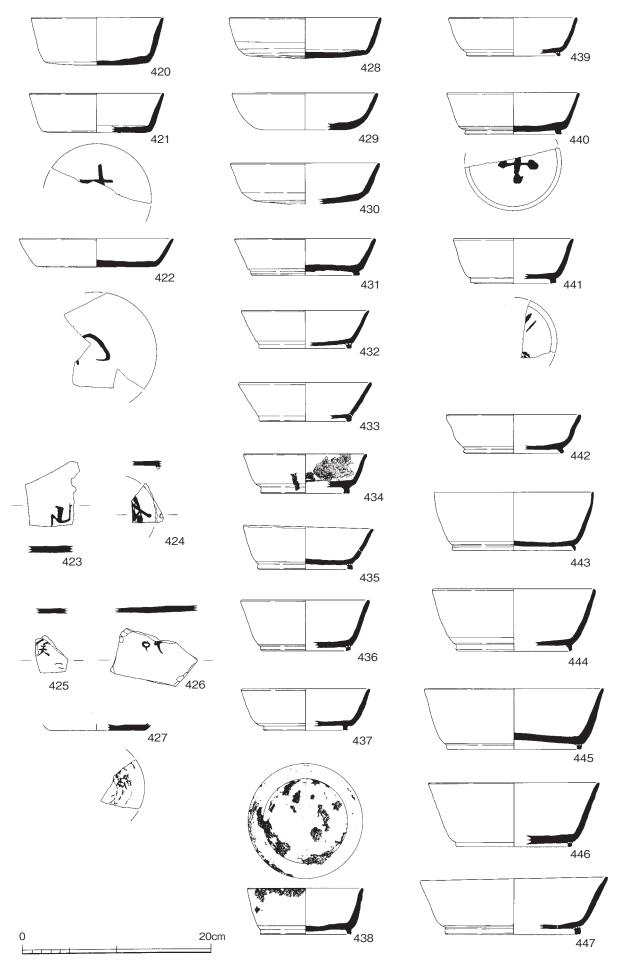


包含層出土遺物実測図 (7)

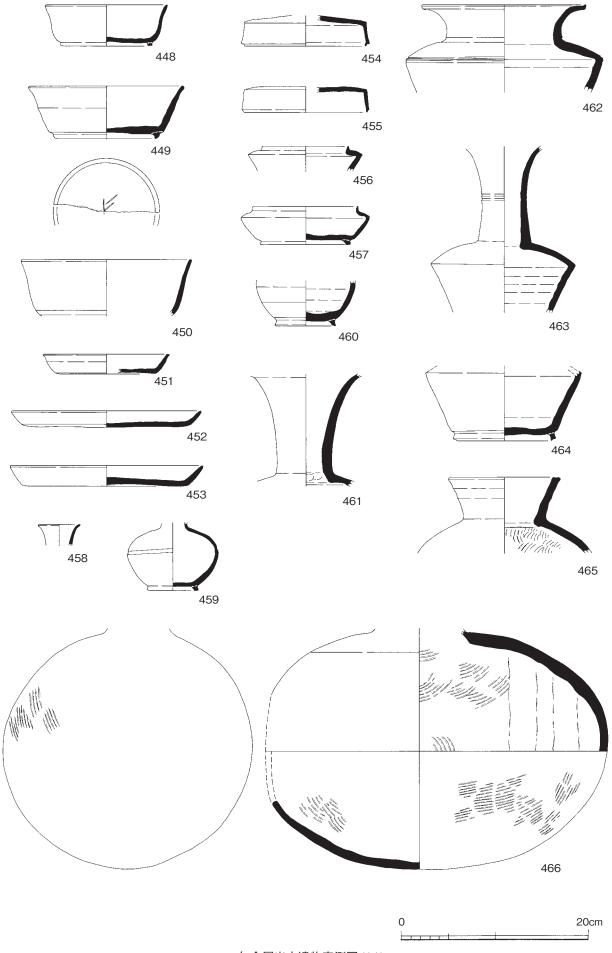




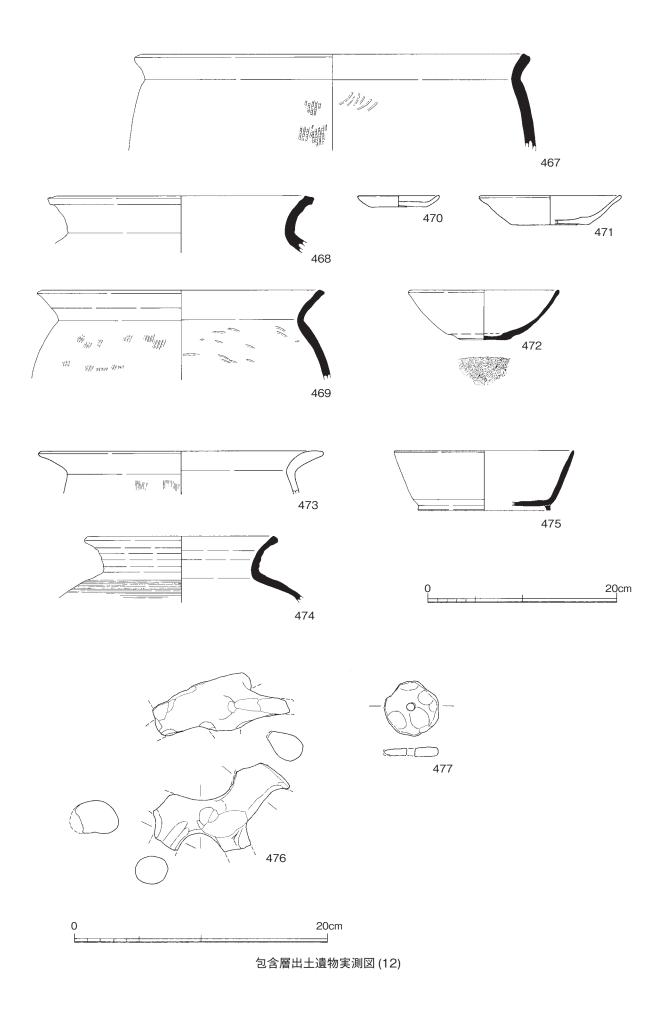
包含層出土遺物実測図 (9)

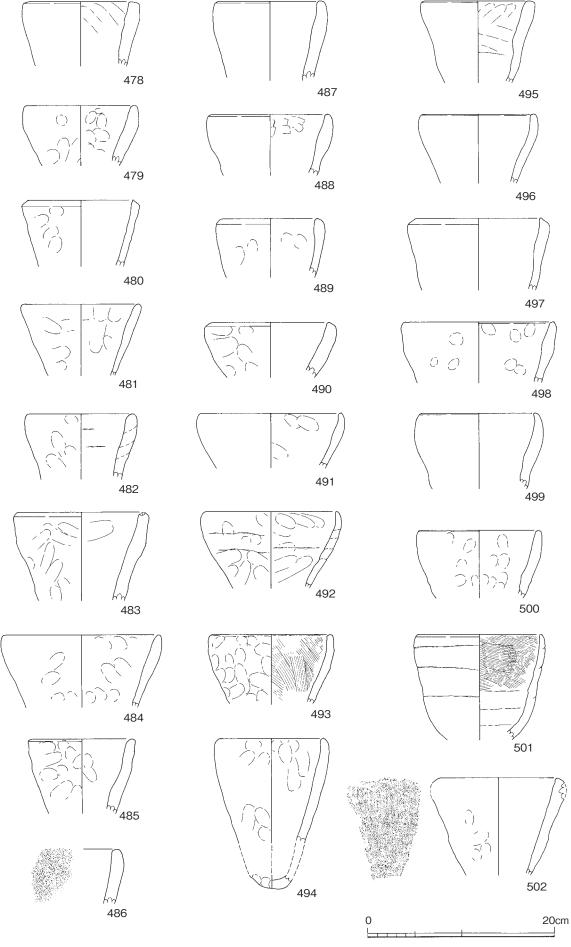


包含層出土遺物実測図 (10)

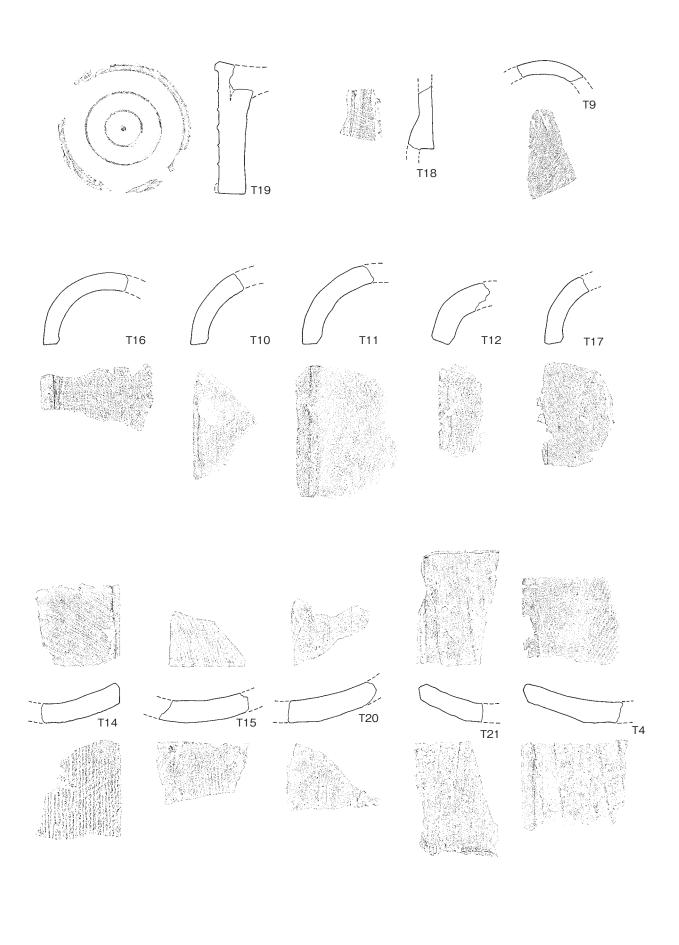


包含層出土遺物実測図 (11)



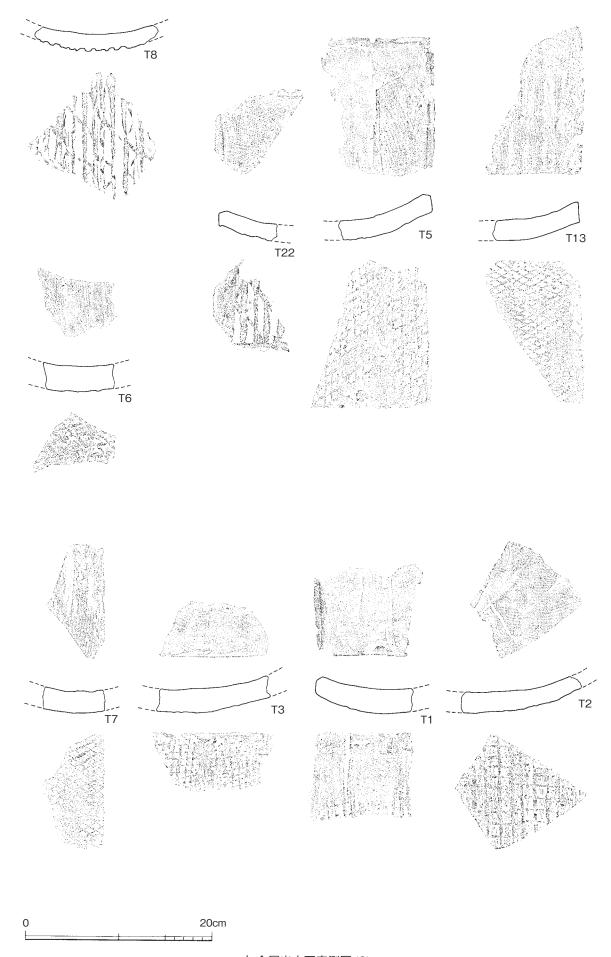


包含層出土製塩土器実測図

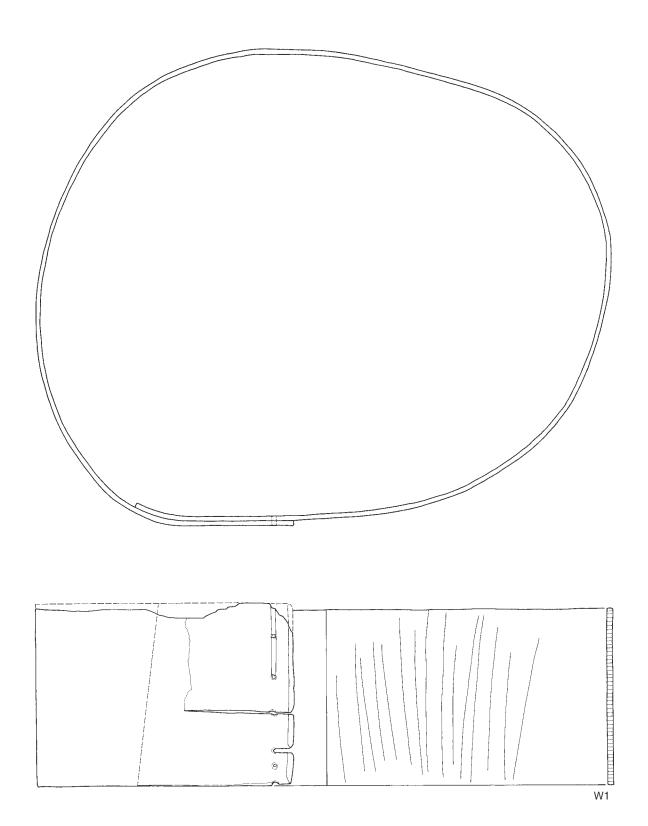


0 20cm

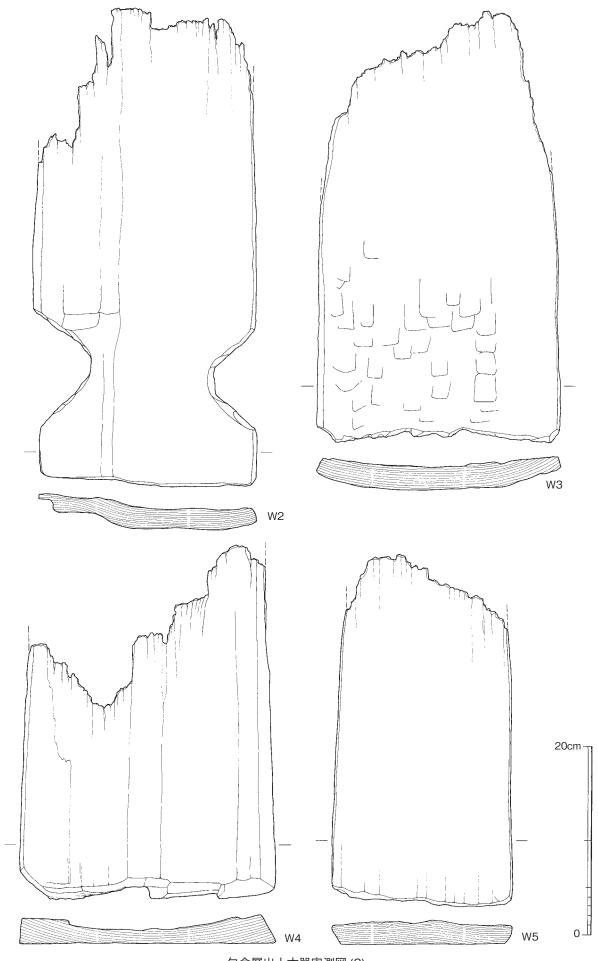
包含層出土瓦実測図 (1)



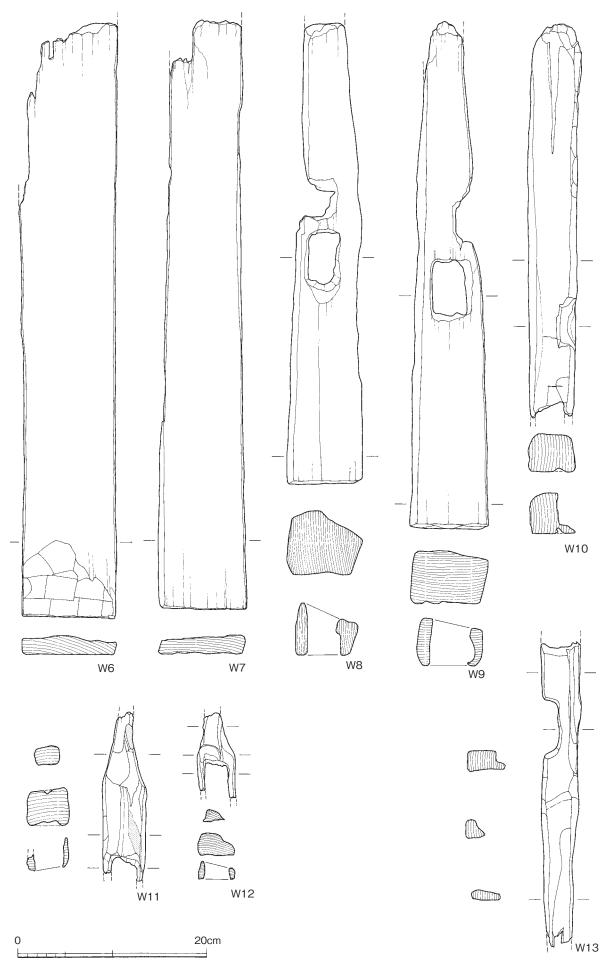
包含層出土瓦実測図 (2)



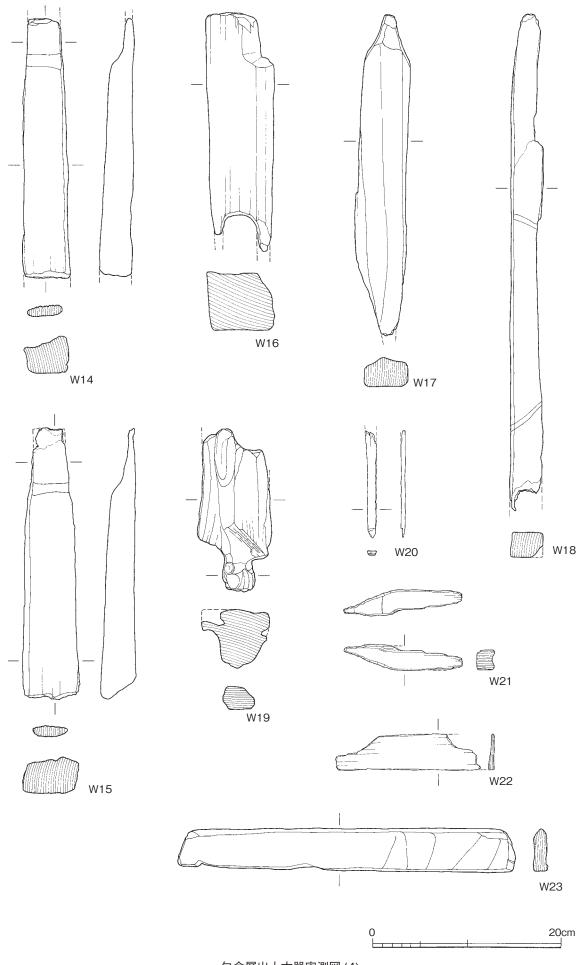
0 20cm



包含層出土木器実測図 (2)



包含層出土木器実測図 (3)



包含層出土木器実測図 (4)

写真図版



I区 写真図版 1



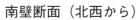
姫路駅と調査区

写真図版 2 [区



全景(西から)







SD02(西から)

I区 写真図版 3



転車台坑 北半部(1)(東から)



転車台坑 北半部(2)(西から)

写真図版 4



転車台坑 北半部(3)(北から)



転車台坑 完掘状況(東から)

I区 写真図版 5







転車台坑 側壁掘方断面(南半部)(東から)



転車台坑 側壁掘方断面(北半部)(東から)



転車台坑 側壁掘方断面(東半部)(南から)



転車台坑 側壁掘方断面(西半部)(北から)



転車台坑 側壁基礎の杭痕(1)



転車台坑 側壁基礎の杭痕(2)

写真図版 6 I 区



転車台坑 側壁内面(西から)



転車台坑 側壁組積の状況(北から)



転車台坑 側壁内面の煉瓦組積(南から)



転車台坑 側壁外面の煉瓦組積(東から)



転車台坑 側壁最下段の煉瓦積(1)



転車台坑 側壁外面の加工された煉瓦





転車台坑 側壁最下段の煉瓦積(2)



転車台坑 煉瓦平面加工の状況

I区 写真図版 7



転車台坑 東側床面ボルト検出状況(北から)



転車台坑 西側床面ボルト検出状況(東から)



転車台坑 北東部床面ボルト検出状況(南から)



転車台坑 ボルト1設置状況



転車台坑 ボルト1固定状況(1)



転車台坑 ボルト1固定状況(2)



転車台坑 東側ボルト2設置状況(1)



転車台坑 東側ボルト2設置状況(2)

写真図版 8



転車台坑 床面北西部枕木の痕跡(南から)

転車台坑 床面南東部枕木の痕跡(南から)



転車台坑 枕木の痕跡とボルト1(東から)

I区 写真図版 9



転車台坑 中央支承台 検出状況(1)(東から)



転車台坑 中央支承台(2)



転車台坑 中央支承台上面(東から)



転車台坑 中央支承台基礎検出状況(北から)



転車台坑 中央支承台西側掘方断面(北から)



転車台坑 中央支承台上面加工の状況



転車台坑 中央支承台基礎(台石除去後)

写真図版 10 [区



転車台坑 溜枡の位置(東から)



転車台坑 溜枡全景(北東から)



転車台坑 溜枡排水口(北東から)



転車台坑 側壁部土管設置状況(北東から)



転車台坑 床面断割断面(北半部)(西から)



転車台坑 床面断割断面(西半部)(北から)

I区 写真図版 11





転車台坑 刻印煉瓦(刻印 1 類)





転車台坑 刻印煉瓦(刻印3類)



転車台坑 櫛描煉瓦





転車台坑 調査風景



全景(西から)



全景(東から)

II − 1 区 写真図版 13



西半全景 (東から)



第1面水田(西から)



第1面水田(西から)







調査風景



中央部全景(南東から)



SB01 (南東から)

Ⅱ − 1 区 写真図版 15



中央部(SB01・02、SA01・北から)

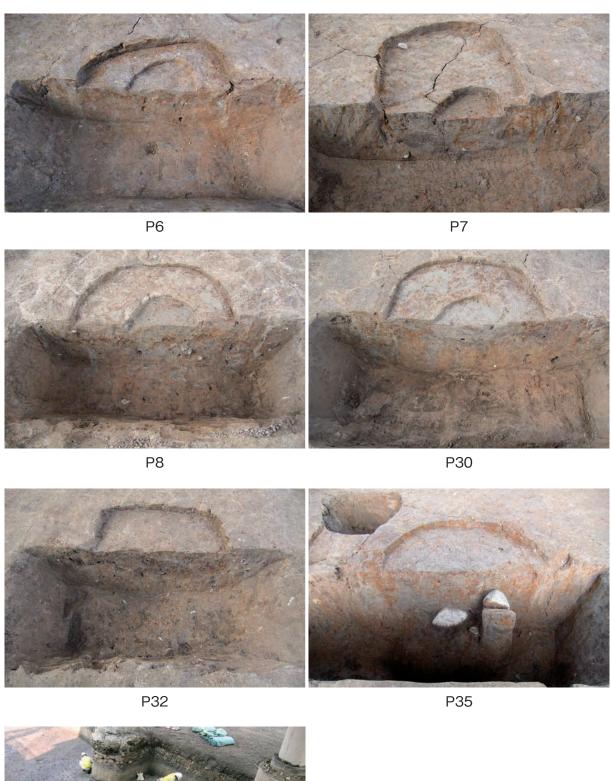


SB01 (南から)



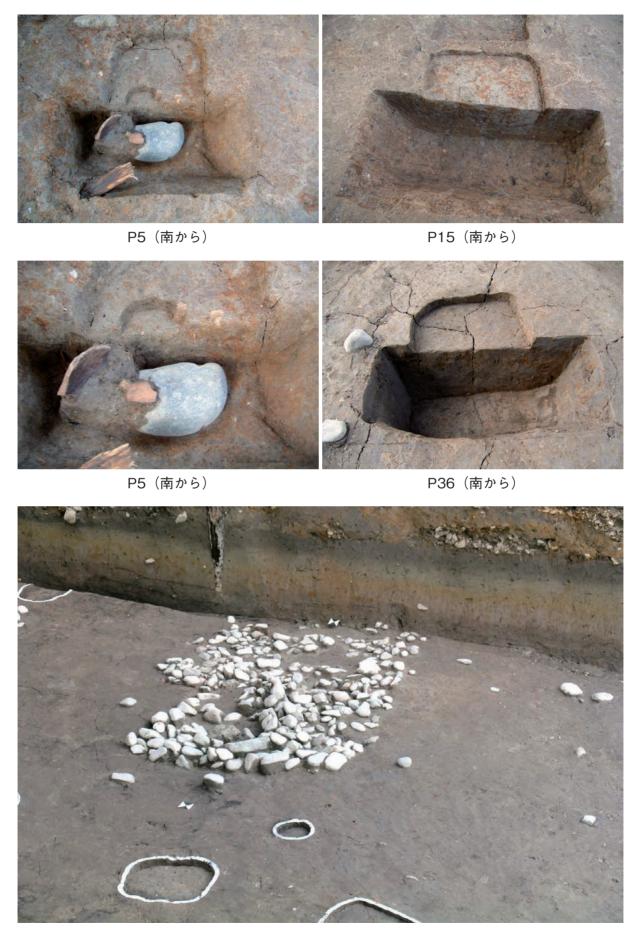
SB01・SB02 (北から)

Ⅱ − 1 区 写真図版 17





調査風景



南壁と南側石敷

I − 1 区 写真図版 19



南側石敷と北側石敷・SAO2(北から)



南側石敷と北側石敷・SAO2(南から)



南壁と南側石敷



南側石敷(南から)



南側石敷(北から)

Ⅱ - 1 区 写真図版 21



南側石敷(東から)



南側石敷(北から)



SE02 上面



SE02(東から)



SE02 (北から)



SE02 (北から)

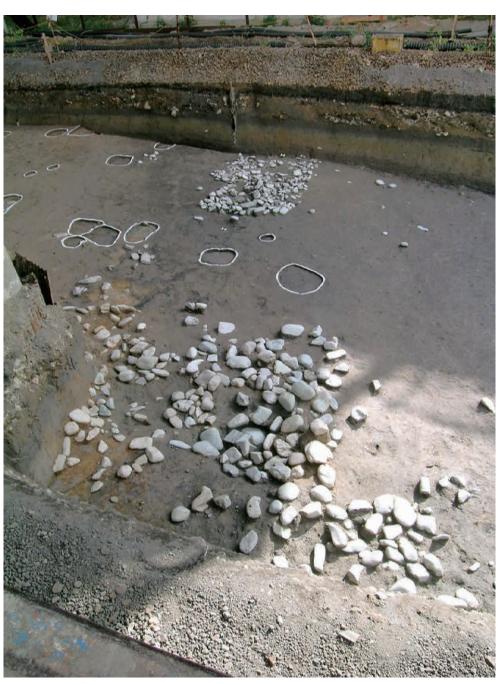
I - 1 区 写真図版 23





SE02 下層集石

SE02 噴砂



北側石敷(北から)



SE01 検出状況(南から)



SE01 全景と SE03 検出状況(南から)

II − 1 区 写真図版 25



SE01 (南から)



SE01 (北から)



SE01 土器出土状態



SE01 断ち割り



SE01 断ち割り



SE01 調査風景

Ⅱ − 1 区 写真図版 27



SE03 (南から)



SE03 (南から)



SE03 断ち割り







調査風景



SD01~SD04 (北から)



SD02 アゼ(北から)

SD03 アゼ (北から)



SD05 アゼ(東から)

SD03 土器出土状態(東から)

II − 1 区 写真図版 29







SD04 土器出土状態(北から)



SD05 土器出土状態(西から)



SK01 (北から)



SK01 上層土器出土状態



SK01 アゼ(北から)



SK01 土器出土状態(南から)



SK01・02 (北から)



SK02 (北から)

SK02 土器出土状態



SK02 (北西から)



SK02 断面(東から)

 $\mathbb{I}-1\boxtimes$ 写真図版 31





SK03・04 (北から)

調査風景

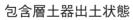




SK03 断面(東から)

調査風景







包含層土器出土状態



包含層土器出土状態

I − 2 **区** 写真図版 32



全景 (東から)

II - 2区 写真図版 33



全景 (東から)



全景 (西から)



北壁(南東から)



調査区から北東方向



調査区から東方向



調査区から北東方向



調査風景

II - 2区 写真図版 35



東端遺構(南西から)



SD01 (南から)



SK01 (南から)



SK03 (東から)



SK03・SX06 (南から)



調査区西半(南東から)



SX01 (南から)



SX02(南から)



SX01 (南から)



SX02(南から)

II - 2区 写真図版 37





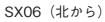
SX03 (南から)

SX05 (南から)



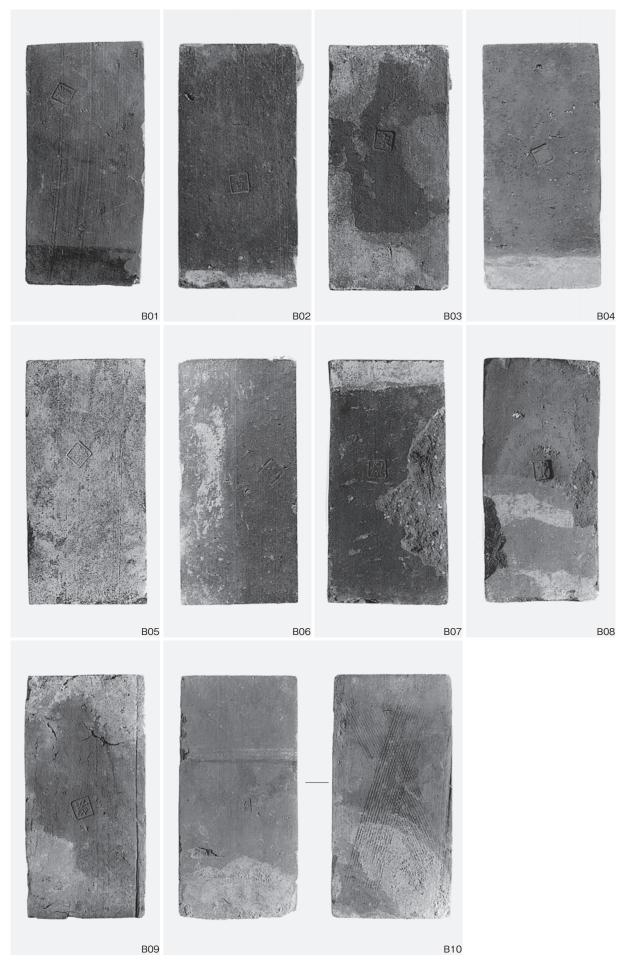
SX06 (北から)



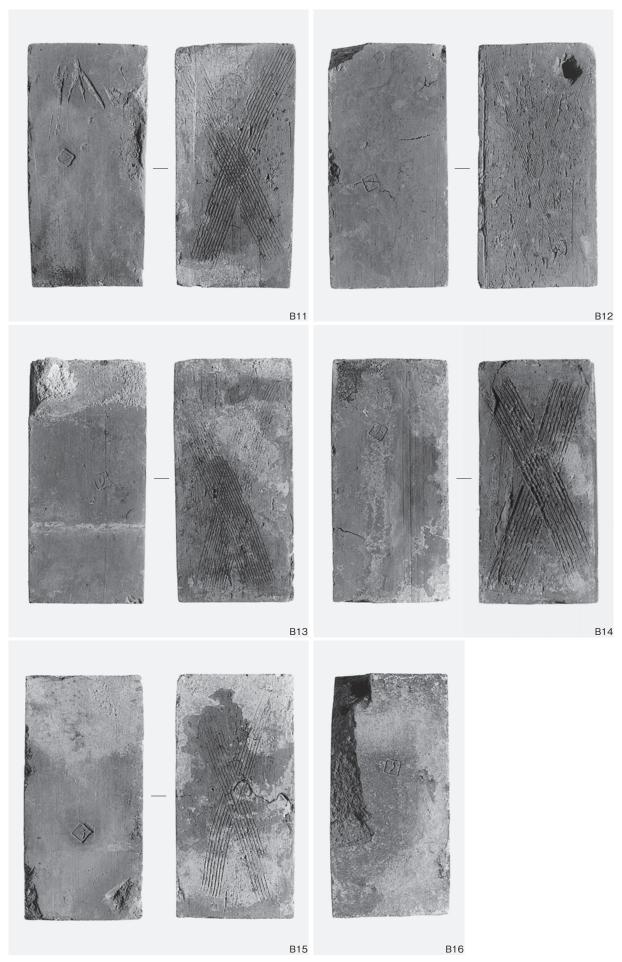




SX06(南から)



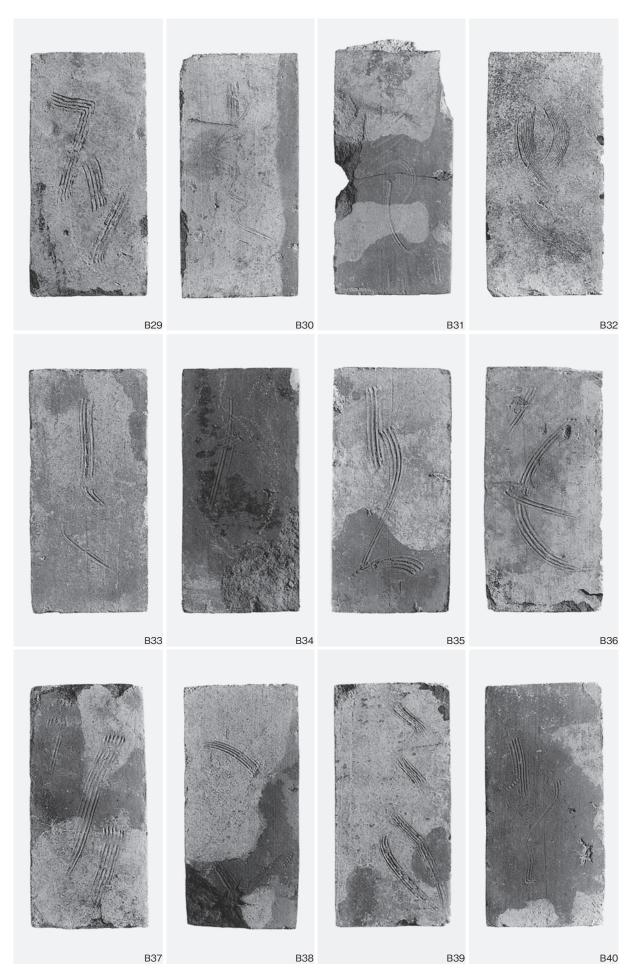
I区 転車台 煉瓦(刻印1類)



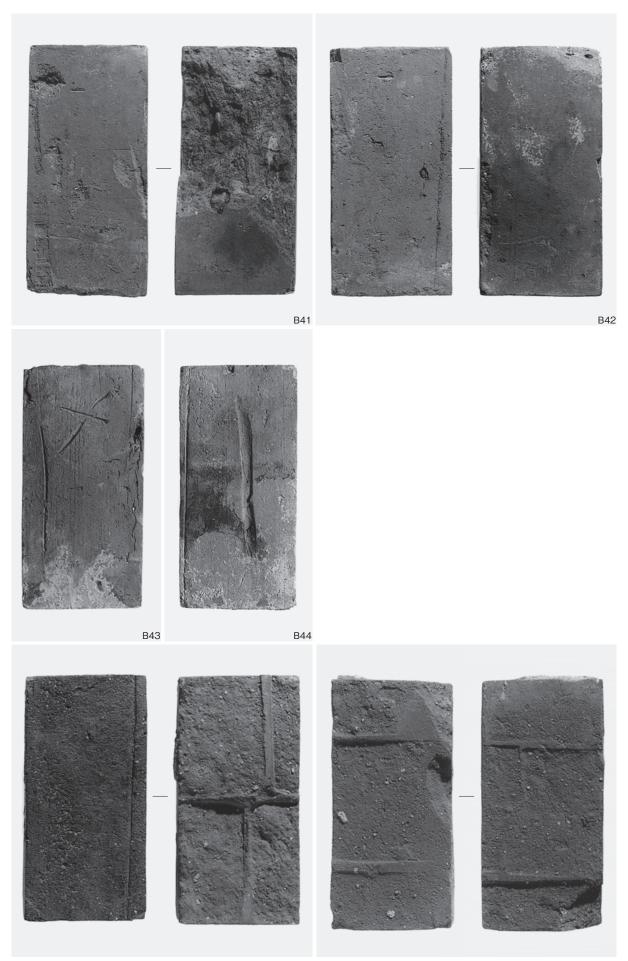
I区 転車台 煉瓦 (刻印2類・櫛描1類)



I区 転車台 煉瓦(櫛描1・2類)

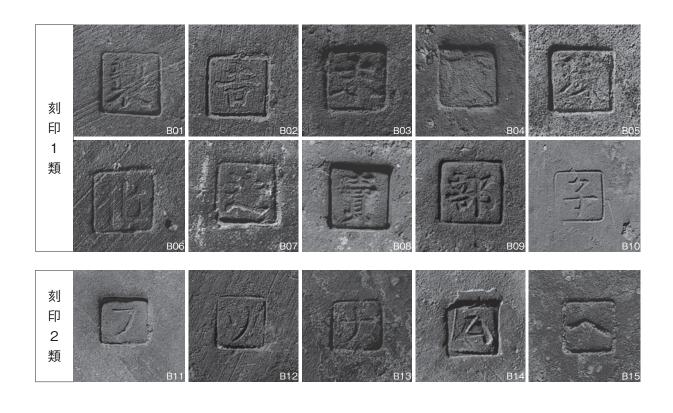


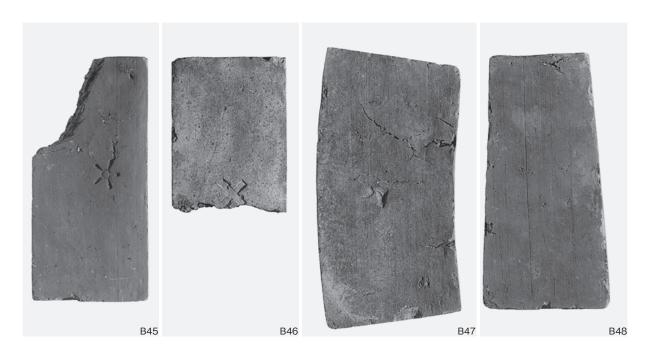
I区 転車台 煉瓦(櫛描2類)

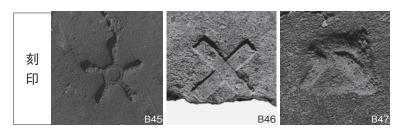


I区 転車台 煉瓦(刻印3類・その他)

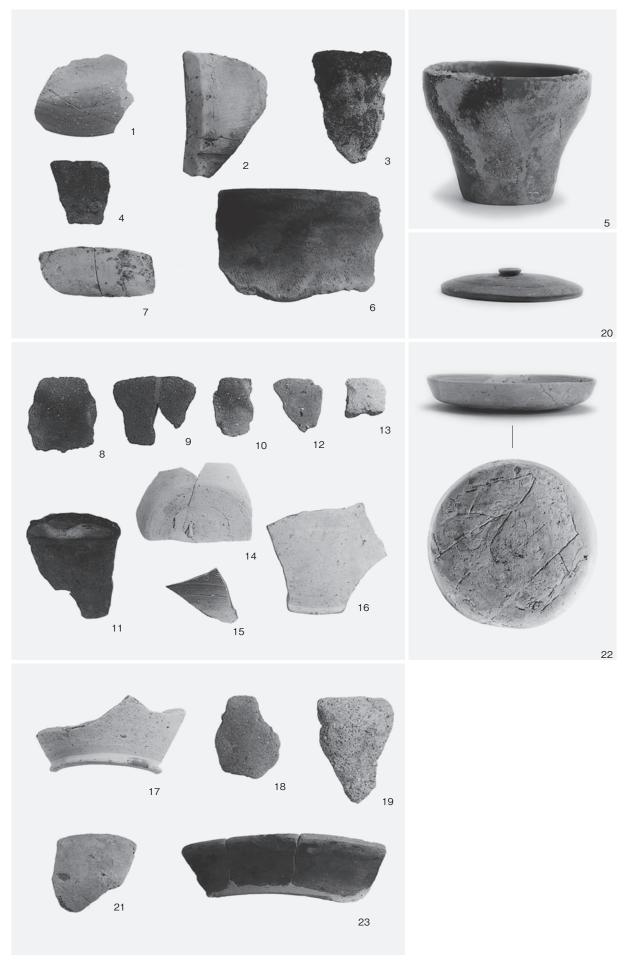
1区 写真図版 43



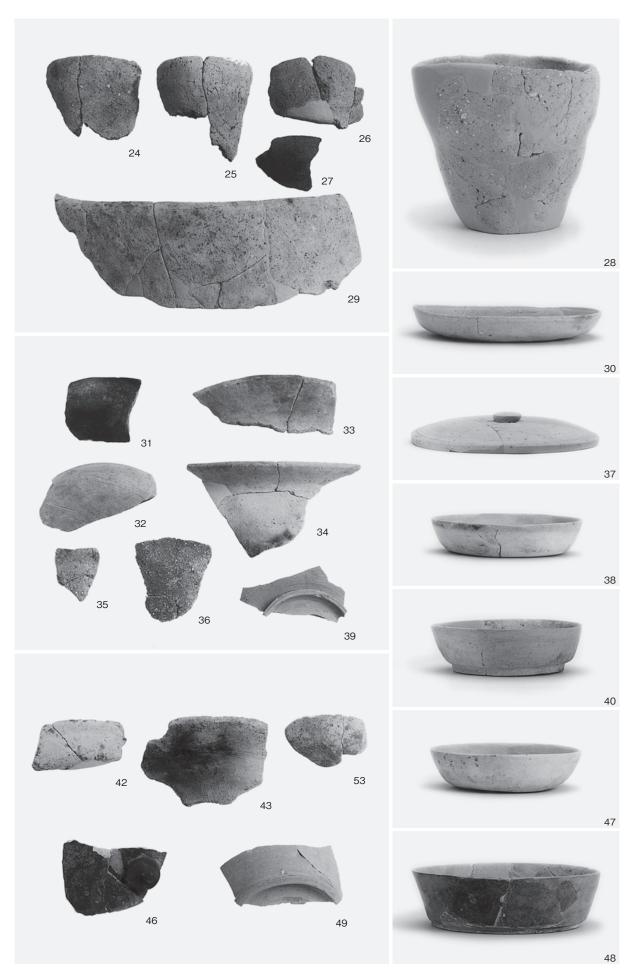




周辺採集煉瓦 刻印



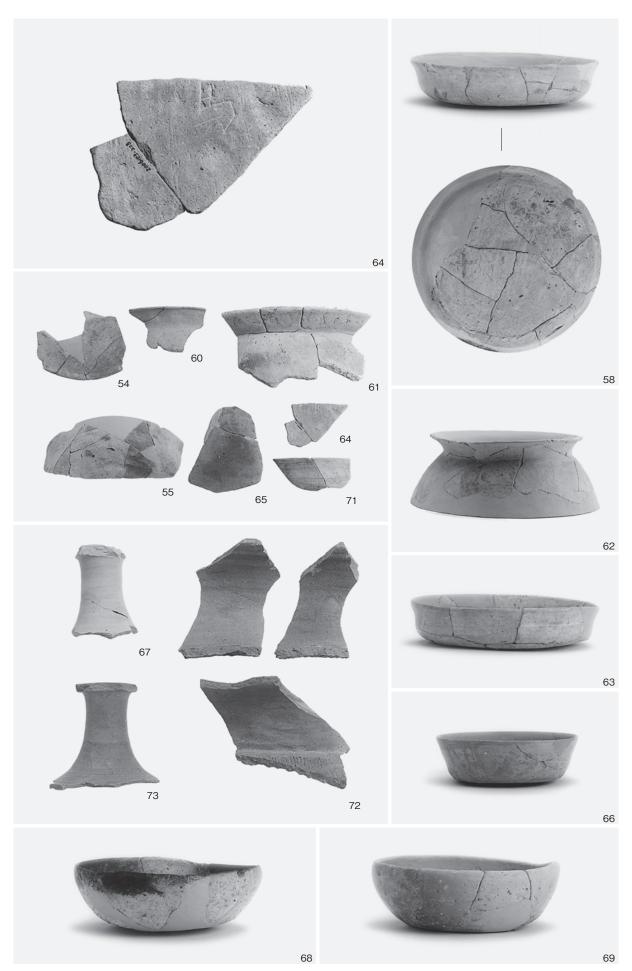
SA・SP・SD01 ~ 04・SX06 出土遺物



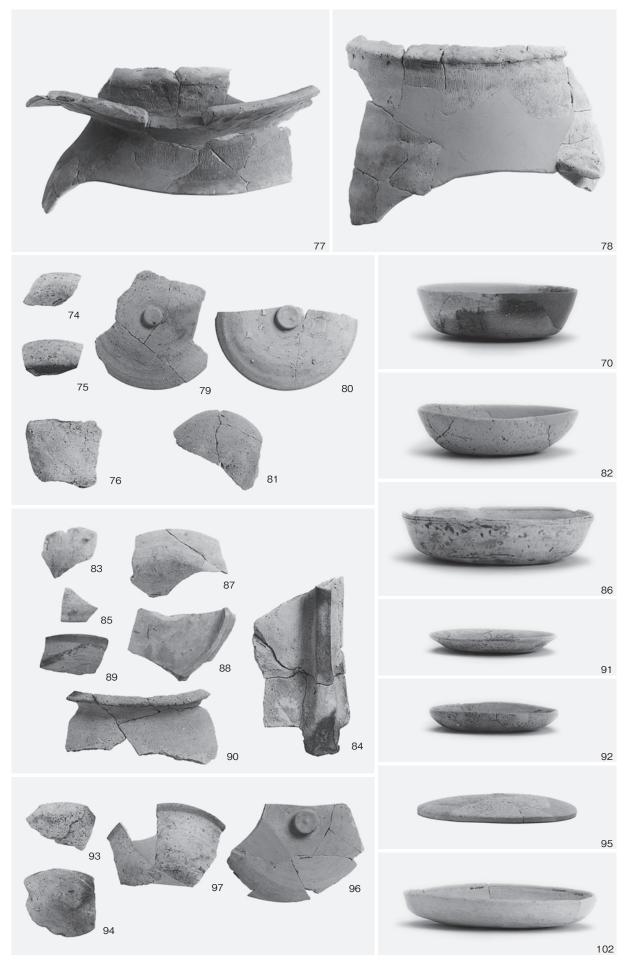
SD04・05、SK01・02 出土遺物



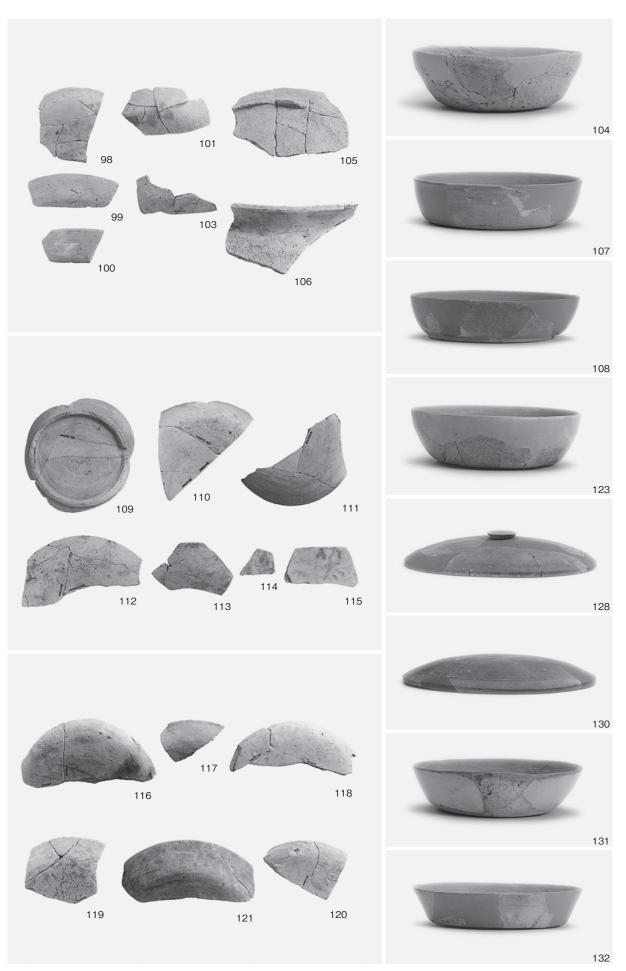
SK01・02 出土遺物



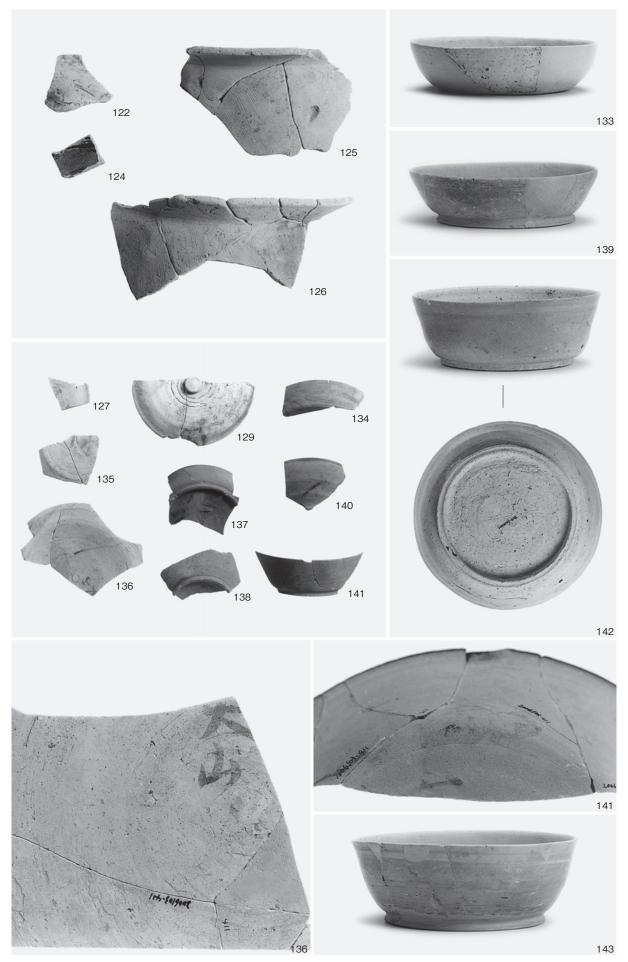
SE01 出土遺物



SE01 ~ 03・北側石敷出土遺物



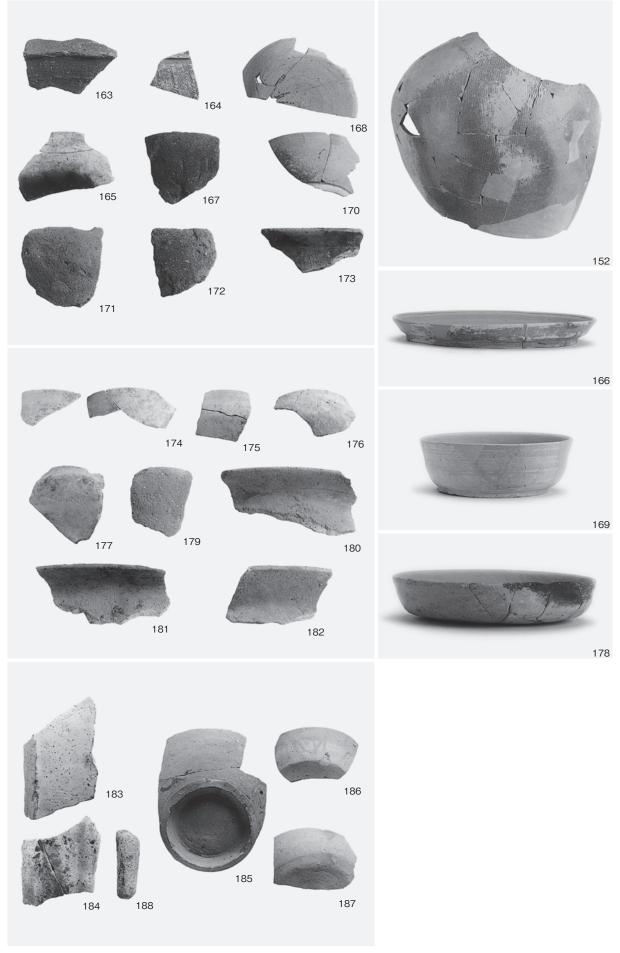
北側石敷出土遺物



北側石敷出土遺物



北側石敷・南側石敷出土遺物



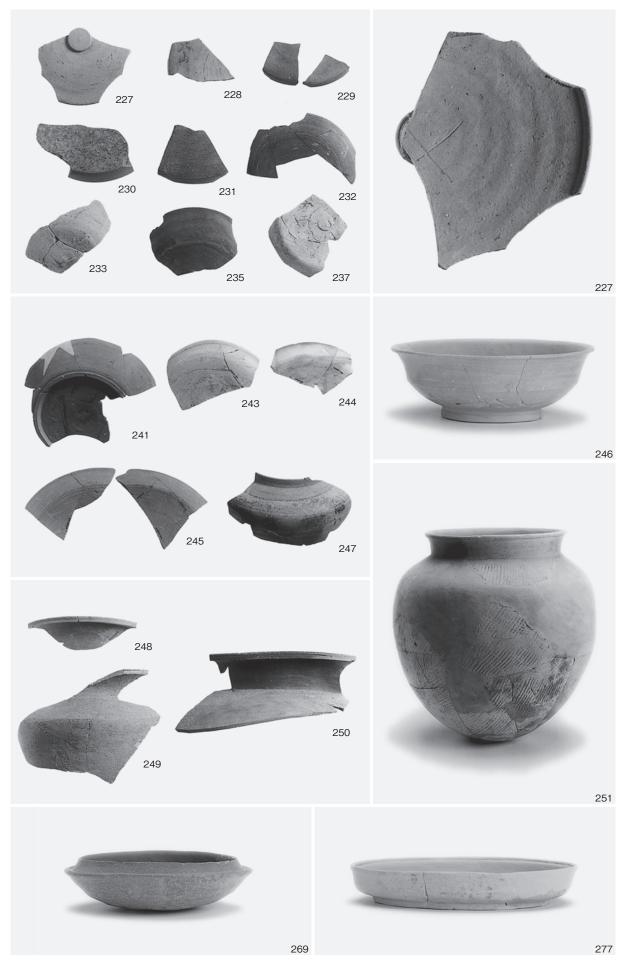
SX01 ~ 03 出土遺物



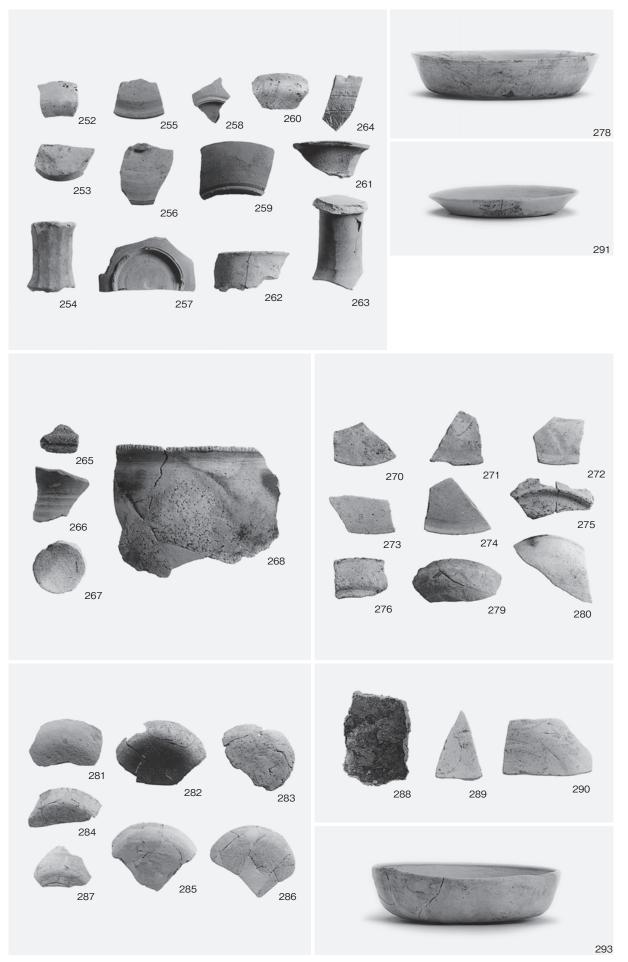
流路出土遺物(1)



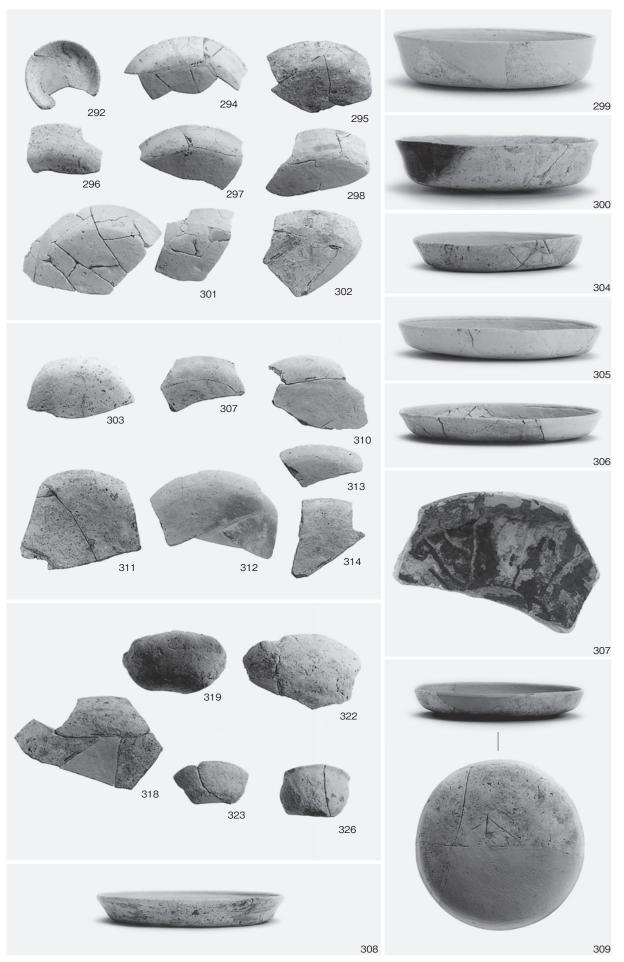
流路出土遺物(2)



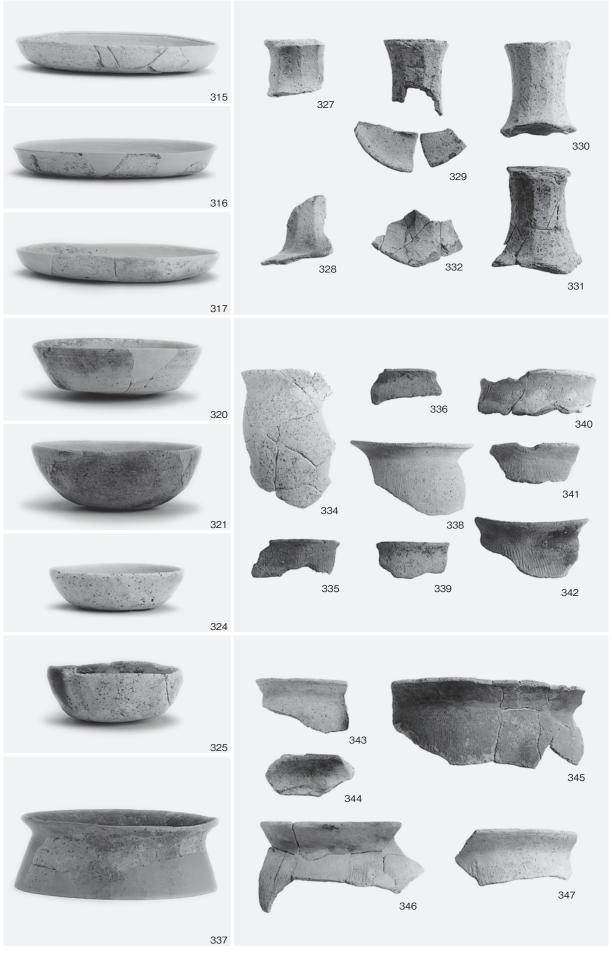
流路出土遺物(3)・包含層出土遺物(1)



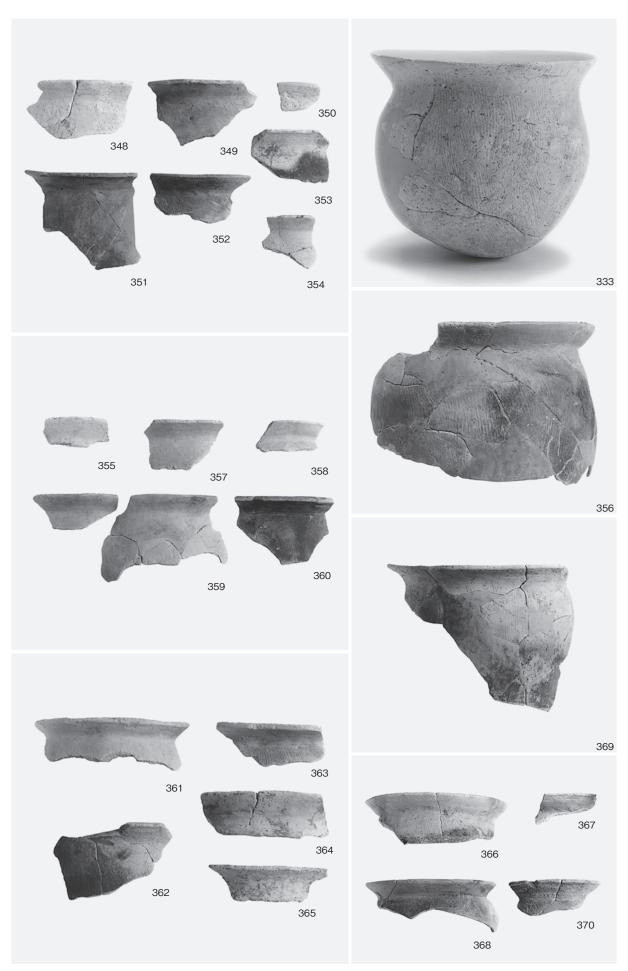
包含層出土遺物(2)



包含層出土遺物(3)



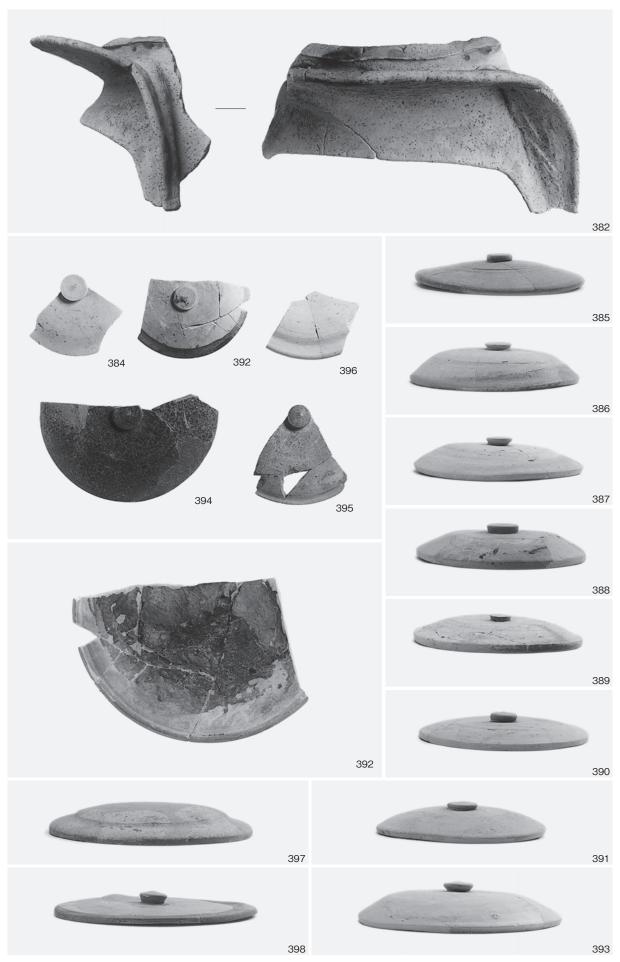
包含層出土遺物(4)



包含層出土遺物(5)



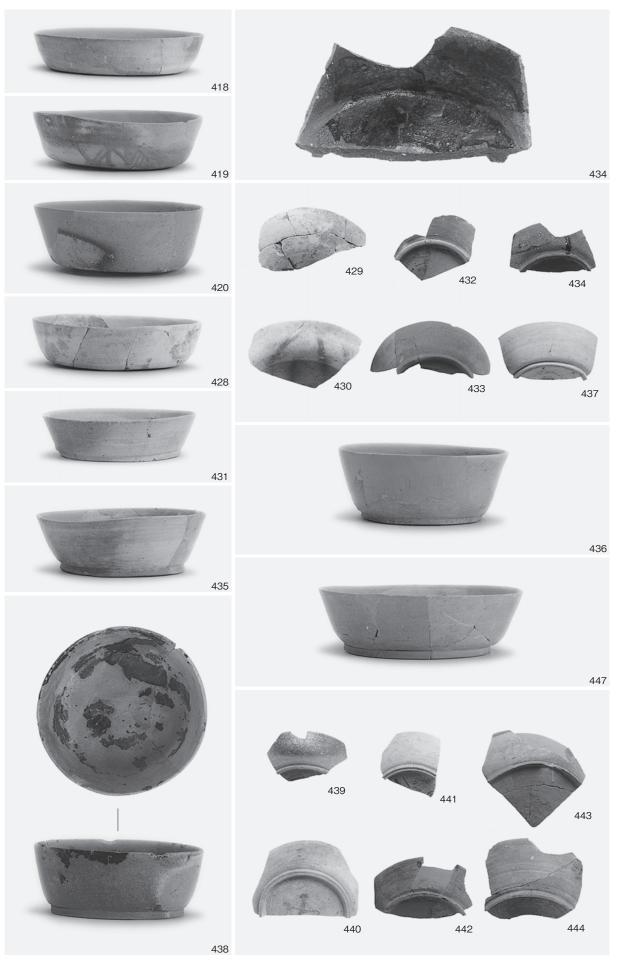
包含層出土遺物(6)



包含層出土遺物(7)



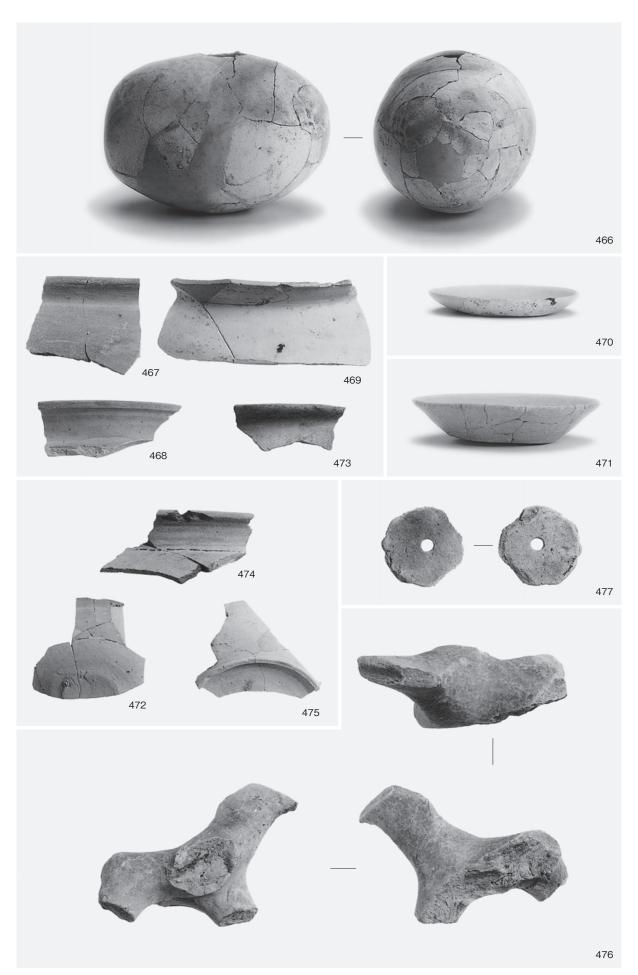
包含層出土遺物(8)



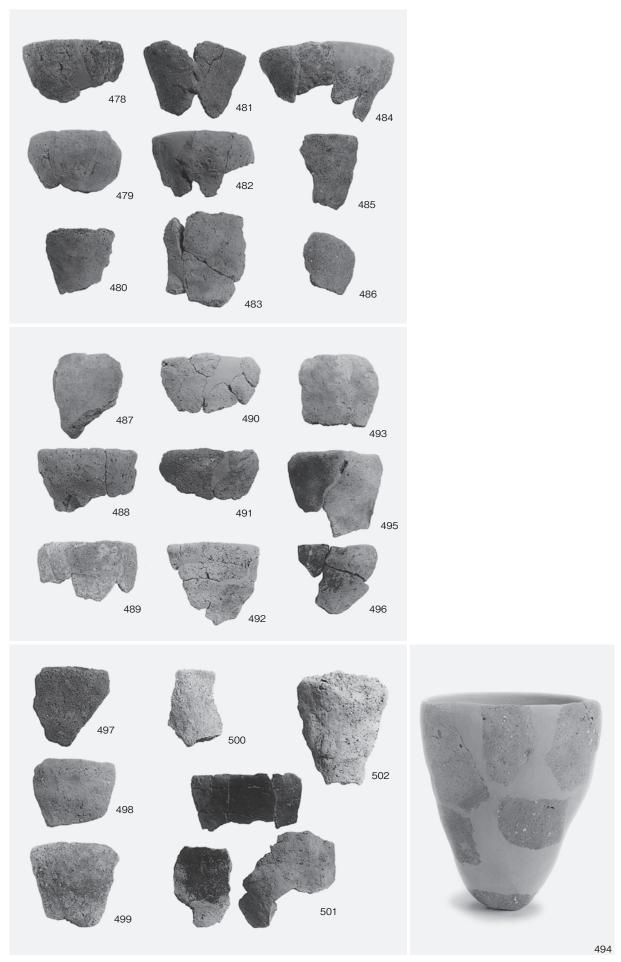
包含層出土遺物(9)



包含層出土遺物(10)



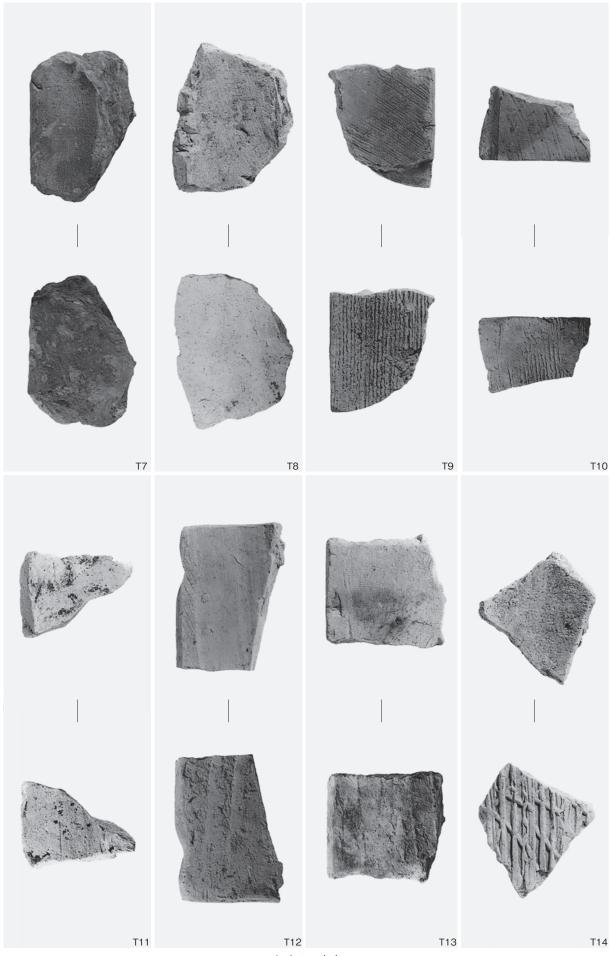
包含層出土遺物(11)



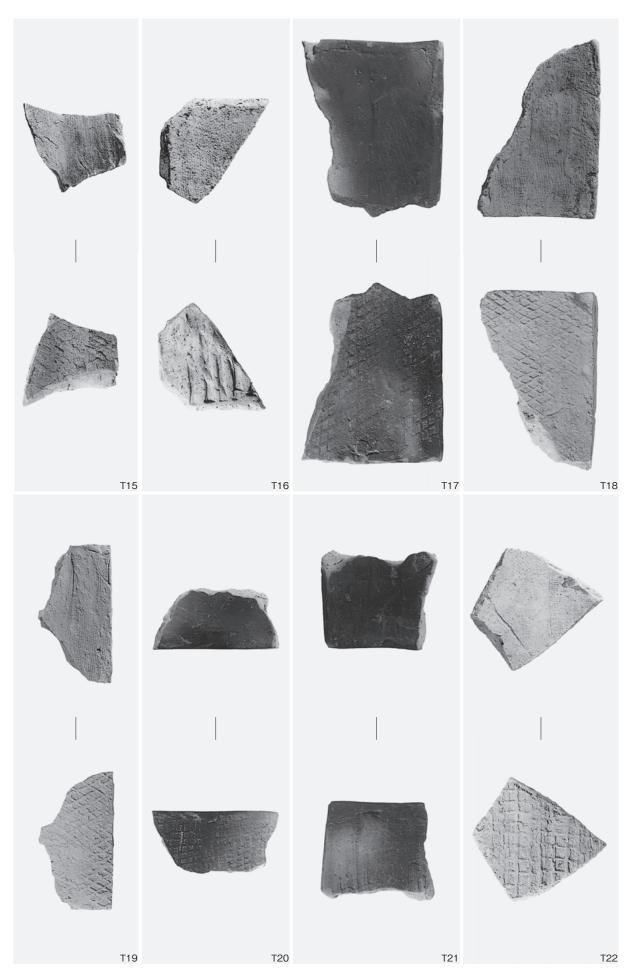
包含層出土製塩土器



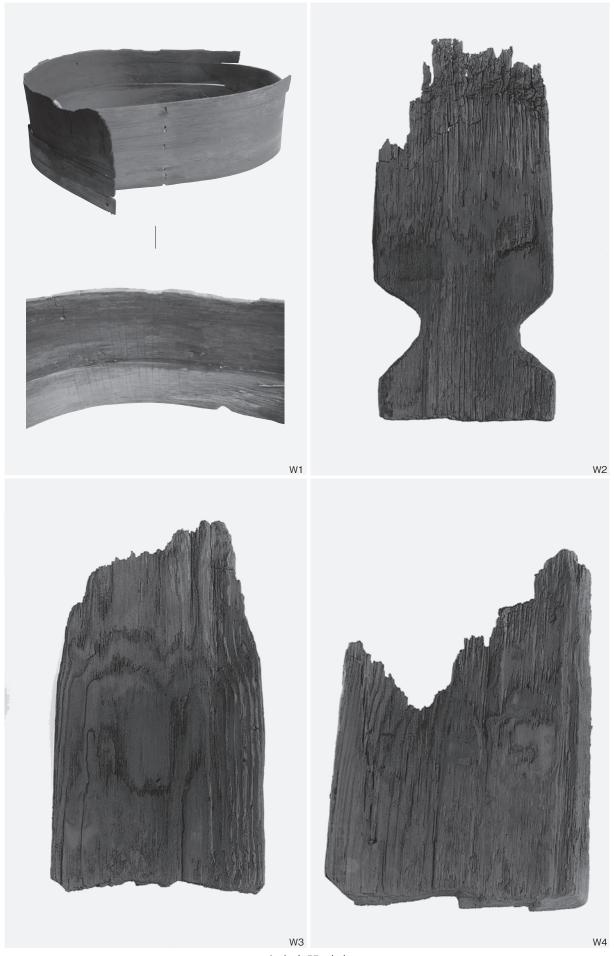
出土瓦(1)



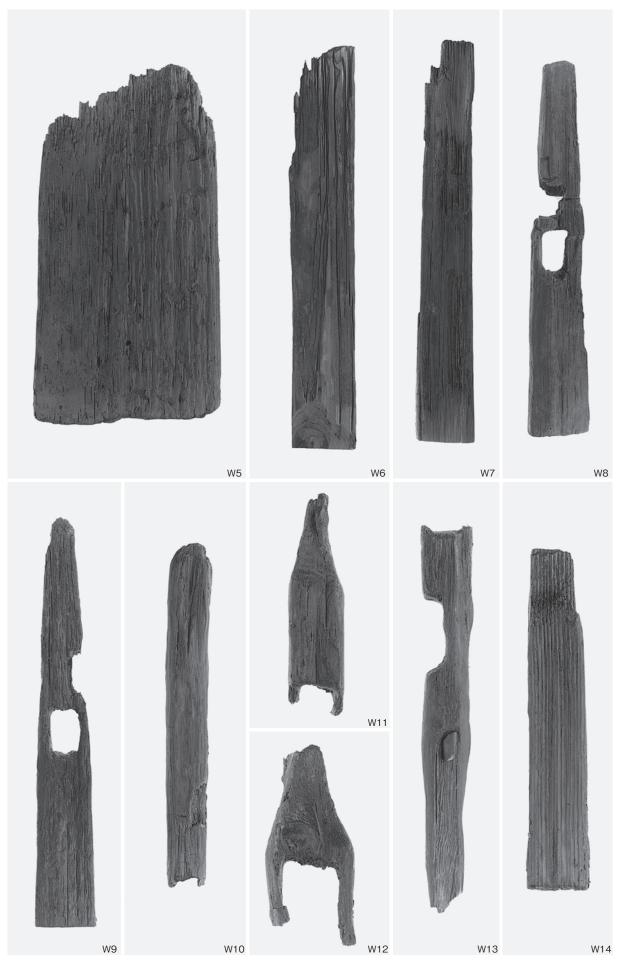
出土瓦 (2)



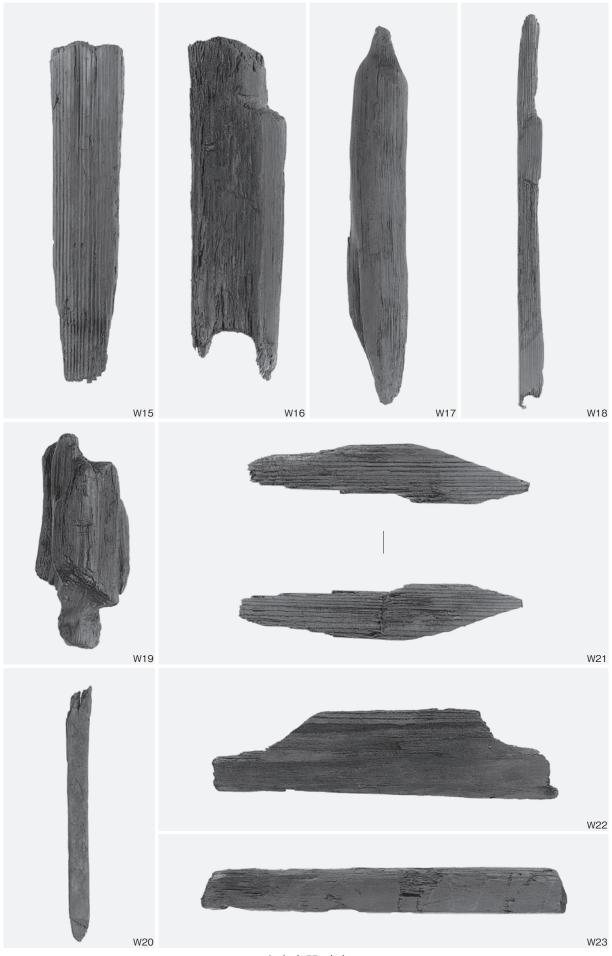
出土瓦 (3)



出土木器(1)



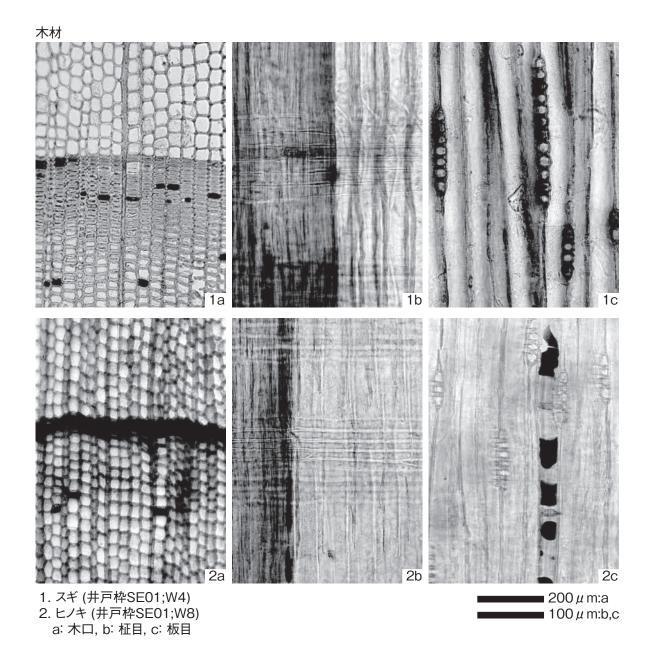
出土木器(2)



出土木器(3)



出土石器・鉄器・土管



報告書抄録

ふりがな	とうふまちいせきに								
書 名	豆腐町遺跡Ⅱ								
副 書 名	JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告								
卷次	V								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第 403 冊								
編著者名	渡辺 昇・長濱誠司・パリノ・サーヴェイ㈱・㈱加速器分析研究所								
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部								
所 在 地	〒 652-0032	〒 652-0032 兵庫県加古郡播磨町大中 1-1-1				Tel 078(437)5589			
発 行 機 関	兵庫県教育委員会								
所 在 地	〒 650-8567 神戸市中央区下山手通 5 丁目 10-1 Tell 078-341-7711								
発行年月日	2011 (平成 23) 年 3 月 24 日								
所収遺跡名	所在地	コー	- F	- 北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	調査番号						
確認調査	調査 兵庫県姫路 市豆腐町	28301	210036	39 度 49 分 36 秒	134 度 41 分 27 秒	2004.9.13~ 11.26	2,263 m²	□ JR 山陽本 線等連続立 □ 体交差事業	
			210036			2006.1.24~ 3.13	783m²		
			遺跡番号				本発掘		
							1,809		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
豆腐町遺跡	集落跡	奈良時代	掘立柱建物跡・井戸		須恵器・土師器・墨 書土器・瓦・漆付着 土器・製塩土器・馬 形		なし		
豆腐町遺跡	鉄道関連	近代	転車台		煉瓦・ボルト		なし		
要約	奈良時代の遺構は官衙的な遺構群で播磨国府の工房かと思われる。漆付着土器や鉄鎖委・ 羽口などが出土している。他に墨書土器・製塩土器も多数出土している。近代の機関車転車 台は初代のものと思われ重要である。煉瓦刻印も豊富である。								

兵庫県文化財調査報告 第 403 冊 姫路市

豆腐町遺跡Ⅱ

一JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書V-

平成 23 年 (2011) 3 月 24 日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号